都城市文化財調査報告書　第72集

横市地区遺跡群

星　原　遺　跡

—横市地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書—

2006年3月

宮崎県都城市教育委員会

正誤表

	誤	正
例言	大盛裕子	大盛祐子
写真図版目次 図版 14	0-8 区畝状遺構と SD06	0-8 区畝状遺構と SD03
写真図版目次 図版 14	SD06	SD03
2 頁 11 行	横市町	南横市町
11～12 頁 第 6 図	SD06	SD03
32 頁 24 行	掻き揚げ	掻き上げ
43 頁 24 行	ナデ画	ナデが
90 頁 14 行	集めの	厚めの
124 頁 7 行	ミガキ？	もの
148 頁 4 行	652	653
152 頁 4 行	653	652
161 頁 3 行	？形	椀形
204 頁図版 14	0-8 区畝状遺構と SD06	0-8 区畝状遺構と SD03
204 頁図版 14	SD06	SD03

追加

第 26・28・32・35 図：青線は掘り込みの際の掘削痕

第 28・32 図：赤線は壁帯溝

星原遺跡遠景（南から高千穂峰を望む）

古代遺構検出状況（北から）

弥生時代中期脚台付壷（226）

弥生時代後期埋設壷（76）

序　文

本書は「横市地区県営ほ場整備事業」に伴い、受託事業として都城市教育委員会が発掘調査を実施した星原遺跡の報告書であります。

都城市の横市地区では、県営担い手育成基盤整備事業（現在は県営経営体育成基盤整備事業に移行）に先立つ埋蔵文化財の発掘調査が平成8年度より実施されており、これまでも数々の成果が報告されております。

本書に収載いたしました星原遺跡では、縄文時代の集石、古墳時代の竪穴住居跡、平安時代の集落跡や畠跡など、縄文時代から江戸時代まで、長きにわたる当地での人々の痕跡が見つかりました。

本書の刊行によって、都城市の文化財に対する理解と認識が高まることを願うとともに、今後の学術研究の発展に少しでも寄与できれば幸いです。

また、発掘調査に従事していただいた市民の皆様や周辺住民の皆様をはじめ、関係各機関の方々には多大なご理解とご協力をいただきました。心より感謝の意を表します。

2006年3月27日

都城市教育委員会
教育長　**玉　利　　譲**

例　　言

1．本書は「横市地区県営ほ場整備事業」に伴い都城市教育委員会が平成14年度に実施した横市地区遺跡群の星原遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書で使用したレベル数値は海抜絶対高で、座標は旧国土座標を用い基準方位は真北である。

3．本書の遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・図版の番号は一致する。

4．土層と遺物の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財団法人日本色彩研究所監修の『新版　標準土色帖』に準拠した。

5．現場における遺構実測は、作業員の協力を得て栗山葉子・津曲千賀子が行い、市文化財課の矢部喜多夫・久松亮・外山亜紀子の協力を得た。なお、遺構実測図及び遺物出土分布図の一部を有限会社ジパング・サーベイに委託した。

6．遺構の写真撮影は栗山・津曲が行った。また、空中写真撮影は九州航空株式会社に委託した。

7．植物珪酸体分析等の各種自然科学分析については、株式会社古環境研究所に委託した。

8．出土した鉄器については株式会社九州テクノリサーチ、および愛媛大学村上恭通教授に鑑定・ご教授いただいた。

9．本書に掲載した遺構実測図の縮尺は、基本的に竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝状遺構が1/80、道路状遺構が1/200、畠跡が1/250とした。遺物実測図は、土器・土師器・陶磁器類が1/3、須恵器・土師甕を1/4、石器を1/3及び2/3、大型の石器を1/4とし、各図面に示してある。

10. 本書に掲載した遺構の実測・製図は栗山・津曲が行い、遺物の実測・製図は整理作業員・栗山・山下大輔・加覧淳一・津曲が行った。

11. 本書に掲載した遺物の写真は矢部・栗山が撮影した。

12. 本書の執筆は第2章第1節を津曲が、その他を栗山が行い、編集は山下・加覧の協力を得て栗山が行った。

13. 発掘調査および報告書作成にあたり下記の方々よりご助言・ご協力をいただいた。
伊藤　晃（岡山県古代吉備文化財センター）、井上　弦（宮崎大学）、宇田津徹朗（宮崎大学）、大西智和（鹿児島国際大学）、宍戸　章（宍戸地質研究所）、柴田博子（宮崎産業経営大学）、高橋照彦（大阪大学）、田崎博之（愛媛大学）、中園聡（鹿児島国際大学）、中村直子（鹿児島大学）、永山修一（ラ・サール学園）、流田勝夫（宮崎大学）、本田道輝（鹿児島大学）、村上恭通（愛媛大学）、柳沢一男（宮崎大学）、山村信榮（太宰府市教育委員会）、山本信夫（山本考古学研究所）、石川悦雄・飯田博之・松林豊樹（宮崎県教育委員会文化課）、立神勇志（宮崎県埋蔵文化財センター）、大盛裕子・外山亜紀子（都城市教育委員会）

14. 本書で使用した遺構の略号は以下のとおりである。
ＳＡ：竪穴住居跡　ＳＢ：掘立柱建物跡　ＳＣ：土坑　ＳＤ：溝状遺構　ＳＥ：井戸跡
ＳＦ：道路状遺構　ＳＳ：集石遺構

15. 発掘調査で出土した遺物とすべての記録（図面・写真など）は都城市教育委員会で保管している。

本文目次

第1章　序説

第1節　調査に至る経緯……1

第2節　調査の組織……1

第2章　遺跡の位置と環境

第1節　地理的環境……2

第2節　横市地区の地形面区分……2

第3節　星原遺跡と周辺の遺跡……5

第3章　発掘調査の成果

第1節　発掘調査の方法と概要……7

第2節　遺跡の基本層序……7

第3節　各時代の調査成果

(1)縄文時代前～中期……13

1.調査の概要……13

2.遺構……13

3.包含層出土遺物……20

①土器……20

②石器・軽石製品……22

(2)縄文時代から古墳時代……31

1.調査の概要……31

2.遺構……31

①縄文時代晩期の遺構……31

②弥生時代後期の遺構……32

③古墳時代の遺構……32

3.包含層出土遺物……54

①縄文時代後期・晩期の土器……54

②弥生時代～古墳時代の土器……57

③石器・軽石製品……88

④鉄製品……98

(3)古代……99

1.調査の概要……99

2.遺構……103

①畝状遺構……103

②道路状遺構……108

③溝状遺構……109

④掘立柱建物跡……110

⑤竪穴状遺構……117

⑥土坑……117

3.遺物……124

①土師器……124

②須恵器・陶磁器類……152

③その他の遺物……157

(4)中・近世の遺構と遺物……162

第4章　自然科学分析

Ⅰ.星原遺跡の土層とテフラ……167

Ⅱ.星原遺跡のおける放射性炭素年代測定……172

Ⅲ.星原遺跡における種実同定……173

Ⅳ.星原遺跡における樹種同定……175

Ⅴ.星原遺跡における植物珪酸体分析……177

Ⅵ.星原遺跡における花粉分析……185

Ⅶ.星原遺跡における蛍光X線分析……189

第5章　調査のまとめ……191

挿図目次

第１図　遺跡位置図……2
第２図　地形区分図……3～4
第３図　調査区域図……6
第４図　土層柱状図……8
第５図　基本土層図……9～10
第６図　星原遺跡遺構配置図……11～12
第７図　Ｘ層検出遺構配置図……14
第８図　御池軽石下層トレンチ土層図……14
第９図　SS01、SS02及び焼土実測図……15
第10図　SS03、SS04実測図……16
第11図　SS04出土石器実測図……16
第12図　SS05実測図……17
第13図　SS06、SS07、SS09、SS10実測図……18
第14図　SS07、SS11出土石器実測図……18
第15図　SS08、SS11、SS12実測図……19
第16図　Ｘ層出土遺物①……21
第17図　Ｘ層出土遺物②……23
第18図　Ｘ層出土遺物③……24
第19図　Ｘ層出土遺物④……27
第20図　Ｘ層出土遺物⑤……28
第21図　Ｘ層出土遺物⑥……29
第22図　縄文時代～古墳時代遺構配置図……33
第23図　JSC01・JSC02実測図……34
第24図　JSC出土遺物……35
第25図　弥生時代後期埋設土器……36
第26図　SA04実測図(古墳時代)……37
第27図　SA04出土遺物……38
第28図　SA05実測図(古墳時代)……41～42
第29図　SA05出土遺物①……45
第30図　SA05出土遺物②……46
第31図　SA05出土遺物③……47
第32図　SA06実測図(古墳時代)……48
第33図　SA06出土遺物①……49
第34図　SA06出土遺物②……50
第35図　SA08実測図(古墳時代)……52
第36図　SA08出土遺物……53
第37図　縄文時代後・晩期土器分布図……55
第38図　縄文時代後・晩期遺物①……57
第39図　縄文時代後・晩期遺物②……58
第40図　縄文時代後・晩期遺物③……59
第41図　縄文時代後・晩期遺物④……60
第42図　縄文時代後・晩期遺物⑤……61
第43図　縄文時代後・晩期遺物⑥……63
第44図　弥生・古墳時代土器分布図……69
第45図　弥生・古墳時代遺物①……72
第46図　弥生・古墳時代遺物②……73
第47図　弥生・古墳時代遺物③……74
第48図　弥生・古墳時代遺物④……75
第49図　弥生・古墳時代遺物⑤……76
第50図　弥生・古墳時代遺物⑥……77
第51図　弥生・古墳時代遺物⑦……78
第52図　弥生・古墳時代遺物⑧……79
第53図　弥生・古墳時代遺物⑨……80
第54図　弥生・古墳時代遺物⑩……81
第55図　Ⅵ～Ⅶ層出土石器分布図……89
第56図　Ⅵ～Ⅶ層出土石器①……93
第57図　Ⅵ～Ⅶ層出土石器②……94
第58図　Ⅵ～Ⅶ層出土石器③……95
第59図　Ⅵ～Ⅶ層出土石器④……96
第60図　Ⅵ～Ⅶ層出土石器⑤……97
第61図　弥生・古墳時代包含層出土鉄器……98
第62図　古代遺構配置図……99
第63図　北部畠跡……100
第64図　谷部畠跡……101～102
第65図　道路状遺構①(SF05)……104
第66図　道路状遺構②(SF01～03、09、10)……105～106
第67図　溝状遺構……107
第68図　掘立柱建物跡配置図……111
第69図　掘立柱建物跡①……114
第70図　掘立柱建物跡②……115
第71図　掘立柱建物跡③……116
第72図　土坑①……119
第73図　土坑②……120
第74図　土坑③……121
第75図　土坑④……122
第76図　古代土師器分布図……125
第77図　古代包含層遺物①(土師器)……127
第78図　古代包含層遺物②(土師器)……128
第79図　古代包含層遺物③(土師器)……129
第80図　古代包含層遺物④(土師器)……130
第81図　古代包含層遺物⑤(土師器)……131
第82図　古代包含層遺物⑥(土師器)……132
第83図　古代包含層遺物⑦(土師器)……133
第84図　墨書土器・黒色土器分布図……143
第85図　古代包含層遺物⑧(黒色土器)……145
第86図　土師甕分布図……146
第87図　古代包含層遺物⑨(土師甕)……147
第88図　須恵器・緑柚陶器分布図……149
第89図　古代包含層遺物⑩(須恵器)……150
第90図　古代包含層遺物⑪(須恵器)……151
第91図　古代包含層遺物⑫(須恵器)……152
第92図　古代包含層遺物⑬(緑釉)……153
第93図　古代鉄器他分布図……155
第94図　古代包含層遺物⑭(鉄器他)……158
第95図　古代包含層遺物⑮(鉄器他)……159
第96図　古代包含相違物⑯(石器)……160
第97図　古代包含層遺物⑰(軽石)……161
第98図　中・近世の遺構……164
第99図　近世遺物……165
第100図　井戸内出土遺物……166
第101図　調査区西谷「い」セクションの土層柱状図……171
第102図　調査区東壁の土層柱状図……171
第103図　５トレンチの土層柱状図……171
第104図　「い」セクションの土層柱状図……171
第105図　K-10地点における植物珪酸体分析結果……182
第106図　K-10地点における植物珪酸体分析結果……183
第107図　K-10東地点における植物珪酸体分析結果……183
第108図　H-10北地点における植物珪酸体分析結果……183
第109図　H-10南地点における植物珪酸体分析結果……184
第110図　G-9地点における植物珪酸体分析結果……184
第111図　SE01における植物珪酸体分析結果……184
第112図　K-10地点における花粉ダイアグラム……188
第113図　K-10東地点における花粉ダイアグラム……188
第114図　各試料における主要元素含量……190

表目次

表１　Ｘ層検出遺構一覧表……20
表２　Ｘ層出土土器観察表……26
表３　Ｘ層出土石器一覧表……30
表４　遺構出土遺物観察表(縄文・弥生)……35
表５　SA04出土遺物観察表……38
表６　SA05出土遺物観察表……44
表７　古墳時代竪穴住居跡計測表……46
表８　SA06・08出土遺物観察表……50
表９　SA出土石器一覧表……51
表10　包含層出土遺物観察表①……62
表11　包含層出土遺物観察表②……64
表12　包含層出土遺物観察表③……65
表13　包含層出土遺物観察表④……66
表14　包含層出土遺物観察表⑤……67
表15　包含層出土遺物観察表⑥……68
表16　包含層出土遺物観察表⑦……70
表17　包含層出土遺物観察表⑧……71
表18　包含層出土遺物観察表⑨……82
表19　包含層出土遺物観察表⑩……83
表20　包含層出土遺物観察表⑪……85
表21　包含層出土遺物観察表⑫……86
表22　包含層出土遺物観察表⑬……87
表23　包含層出土石器一覧表……91
表24　包含層出土石器・軽石製品一覧表……92
表25　包含層出土鉄器計測表……98
表26　古代掘立柱建物跡一覧表……113
表27　土坑一覧表……123
表28　古代遺物観察表①……134
表29　古代遺物観察表②……135
表30　古代遺物観察表③……136
表31　古代遺物観察表④……137
表32　古代遺物観察表⑤……138
表33　古代遺物観察表⑥……139
表34　古代遺物観察表⑦……140
表35　古代遺物観察表⑧……141
表36　古代遺物観察表⑨……142
表37　古代遺物観察表⑩……144
表38　古代遺物観察表⑪……148
表39　古代遺物観察表⑫……153
表40　古代遺物観察表⑬……154
表41　古代遺物観察表⑭……156
表42　古代遺物観察表⑮……156
表43　古代遺物観察表⑯……157
表44　古代遺物観察表⑰……157
表45　古代遺物観察表⑱……162
表46　近世掘立柱建物跡一覧表……163
表47　テフラ検出分析結果……170
表48　屈折率測定結果……170
表49　試料と方法……172
表50　測定結果……172
表51　星原遺跡における種実同定結果……174
表52　星原遺跡における樹種同定結果……176
表53　星原遺跡における植物珪酸体分析結果……181～182
表54　星原遺跡における花粉分析結果①……187
表55　星原遺跡における花粉分析結果②……187
表56　星原遺跡における蛍光X線分析結果……190

写真図版目次

巻頭図版１　星原遺跡遠景

巻頭図版２　古代遺構検出状況

巻頭図版３　弥生時代中期脚台付壷

巻頭図版４　弥生時代後期埋設壷

図版１　星原遺跡の種実……174

図版２　星原遺跡の炭化材……176

図版３　植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真‥180

図版４　星原遺跡の花粉・胞子……188

図版５　Ｘ層遺構配置……195
R-7区付近遺物出土状況
Q-6区付近遺物出土状況
SS12
SS01
SS06
SS08
SS07

図版６　Ｘ層出土遺物……196

図版７　古墳時代遺構配置……197
SA05・04完掘状況
SA05完掘状況
SA05坩出土状況
SA05甕出土状況
SA05高坏出土状況
SA05高坏出土状況
SA05小型甕出土状況

図版８　SA04埋土堆積状況……198
SA04完掘状況
SA06遺物出土状況
SA06甕底部出土状況
SA06甕出土状況
SA06磨石他出土状況
SA08完掘状況
SA08埋土堆積状況

図版 9　古墳時代住居跡出土遺物……199
SA05出土甕
SA05出土甕
SA05出土小型甕
SA05出土坩
SA05出土高坏
SA05出土高坏脚部
SA05出土坩およびミニチュア土器
SA05出土甕
SA05出土甕底部のモミ圧痕
SA04出土高坏
SA08出土甕
SA08出土高坏およびニミチュア土器
SA06出土高坏
SA06出土甕
SA06出土甕
SA06出土坩および高坏脚部

図版10　縄文時代後期・晩期遺物……200

図版11　弥生時代・古墳時代遺物出土状況……201
P・Q-5・6区付近Ⅵ層遺物出土状況
P-6区遺物出土状況
弥生土器出土状況
弥生土器出土状況
弥生土器出土状況
鉄製紡錘車出土状況
埋設壷検出状況
炭化クリ出土状況

図版12　弥生時代・古墳時代遺物①……202

図版13　弥生時代・古墳時代遺物②……203

図版14　古代畝状遺構・溝状遺構……204
北部畝状遺構(北から)
谷部畝状遺構(北から)
谷部畝状遺構(西から)
畝状遺構とその他の古代の遺構
SA04内に残る畝状遺構
SA05内に残る畝状遺構
畝状遺構の境
南西部の畝状遺構
畝状遺構内小Pit完掘状況
O-8区畝状遺構とSD06
L-9区畝状遺構
畝状遺構完掘状況
SA05内畝状遺構完掘状況
SD06

図版15　古代道路状遺構①……205
道路状遺構検出状況
SF10検出状況
SF10(東端)とSC99
SF05(南から)
SF05(北から)
SF05断面

図版16　古代道路状遺構②……206
1トレンチSF断面
2トレンチSF断面
3トレンチSF断面
4トレンチSF断面
5トレンチSF断面
6トレンチSF断面
7トレンチSF断面
8トレンチSF断面

図版17　古代の遺構……207
南西部の掘立柱建物跡
SB01の柱痕
SB10・06検出状況
SB11及びSC12検出状況
SB14完掘状況
SB13完掘状況
SB15完掘状況
SA07完掘状況

図版18　星原遺跡土層堆積状況および遺物出土状況……208
調査区北壁土層堆積状況
調査区北壁土層堆積状況
K-10区付近土層堆積状況
土師器埦出土状況
M・N-8区付近遺物出土状況
土師器坏出土状況
M-9区遺物出土状況
刀子出土状況

図版19　古代の遺物①……209

図版20　古代の遺物②……210

図版21　古代から近世の遺構……211
SC12完掘状況
SC02半裁状況
SC83完掘状況
SC69検出状況
SC70完掘状況
SE01完掘状況
調査区北東検出遺構

第1章　序説

第1節　調査に至る経緯

宮崎県都城市横市地区では、平成5年度に県営ほ場整備事業（平成9年度から平成13年度まで県営担い手育成基盤整備事業、平成15年度から県営経営体育成基盤整備事業）の実施が採択された。平成6年度、宮崎県北諸県農林振興局から文化財の所在の有無について照会を受けた宮崎県文化課が一帯の分布調査を実施し、事業対象区域170ヘクタール内に10遺跡、約44ヘクタールに及ぶ埋蔵文化財包蔵地の所在が推定された。これを受け、都城市教育委員会は北諸県農林振興局と協議し、平成8年度から記録保存のための緊急発掘調査を継続的に実施している。

星原遺跡では平成13・14年度に宮崎県文化課が確認調査を行い、平成13年度では、弥生時代から中世にかけての遺物が出土した他、竪穴住居および土坑・ピット等が検出された。平成14年度には遺跡南部で御池軽石上層から弥生土器および縄文土器が、御池軽石下層からは縄文時代中期の春日式土器が出土した。そこでこれらの結果を工事計画と照らし合わせた結果、切土によって遺物包含層および遺構に影響を及ぼす6,500㎡の発掘調査を行うこととなった。現場における調査期間は平成14年5月20日から平成15年3月31日までである。この間発掘調査と平行して仮設事務所にて出土遺物の整理作業のうち水洗・注記・台帳作成を行い、平成15年度から平成17年度にかけて復元・実測図作成を行っている。

星原遺跡の調査成果の公開に関しては、平成15年1月28日・30日・31日、平成15年2月5日の4日にわたり、市内の小学生を対象に遺跡見学会を実施し、約270名の参加があった。

第2節　調査の組織

平成14年度（発掘調査実施年度）の組織

・調査主体者	宮崎県都城市教育委員会	
・調査責任者	教育長	長　友　久　男（平成14年6月30日まで）
		北　村　秀　秋（平成14年7月1日より）
・調査事務局	教育部長	轟　木　保　紘
	文化課長	井　尻　賢　治
	文化課課長補佐	坂　元　昭　夫
	文化課文化財係長	松　下　述　之
	文化財事務嘱託	桜　木　　梢
・調査担当者	文化課文化財係主事補	栗　山　葉　子
	文化課文化財係嘱託	津　曲　千賀子
・調査指導者	平成14年度：柳沢一男（宮崎大学）、田崎博之（愛媛大学）、宇田津徹朗（宮崎大学）、宍戸　章（宍戸地質研究所）、本田道輝（鹿児島大学）、井上　弦（宮崎大学）	
	平成15年度：山本信夫（山本学研究所）村上恭通（愛媛大学）、柴田博子（宮崎産業経営大学）、山村信榮（太宰府市教育委員会）	
	平成16年度：伊藤　晃（岡山県古代吉備文化財センター）	

平成17年度（報告書刊行年度）の組織

・調査主体者	宮崎県都城市教育委員会	
・調査責任者	教育長	玉　利　　譲（平成17年6月15日より）
・調査事務局	教育部長	今　村　　昇（平成17年10月1日から平成17年12月28日まで文化財課長兼務）
	文化財課長	有　馬　千　泳（平成17年9月30日まで）
		高　野　隆　志（平成18年1月1日より）
	文化財課課長補佐	新　宮　髙　弘
	文化財課副主幹	矢　部　喜多夫
	文化財課事務嘱託	諸　麦　友　香
・調査担当者	文化財課主事	栗　山　葉　子（報告書の執筆・編集）
・発掘作業従事者	阿久根トシエ、有馬昌子、今村マサ子、今村ミツ子、後田アヤ、大山伊智子、上宮田ミチ、加覧淳一、黒木昌子、児玉時春、下玉利文代、庄屋幸子、新宮良二、高橋露子、武石重利、武石アキ、竹下恵子、立野良子、谷口くみ子、谷山トミ、中須純子、永田義晴、西留健也、林　有紀、平田美智子、馬籠恵子、松原ヨシ子、松吉隆一、森山タツ子、山中輝雄、山中マリ、吉村則子、渡辺恭一	
・整理作業従事者	市来美都代、久保新子、新屋美佳、西　博子、八谷邦枝、水元美紀子、槇尾恵美子、水光弘子、奥登根子、小浜ひろ子、福岡八重子	

第２章　遺跡の位置と環境

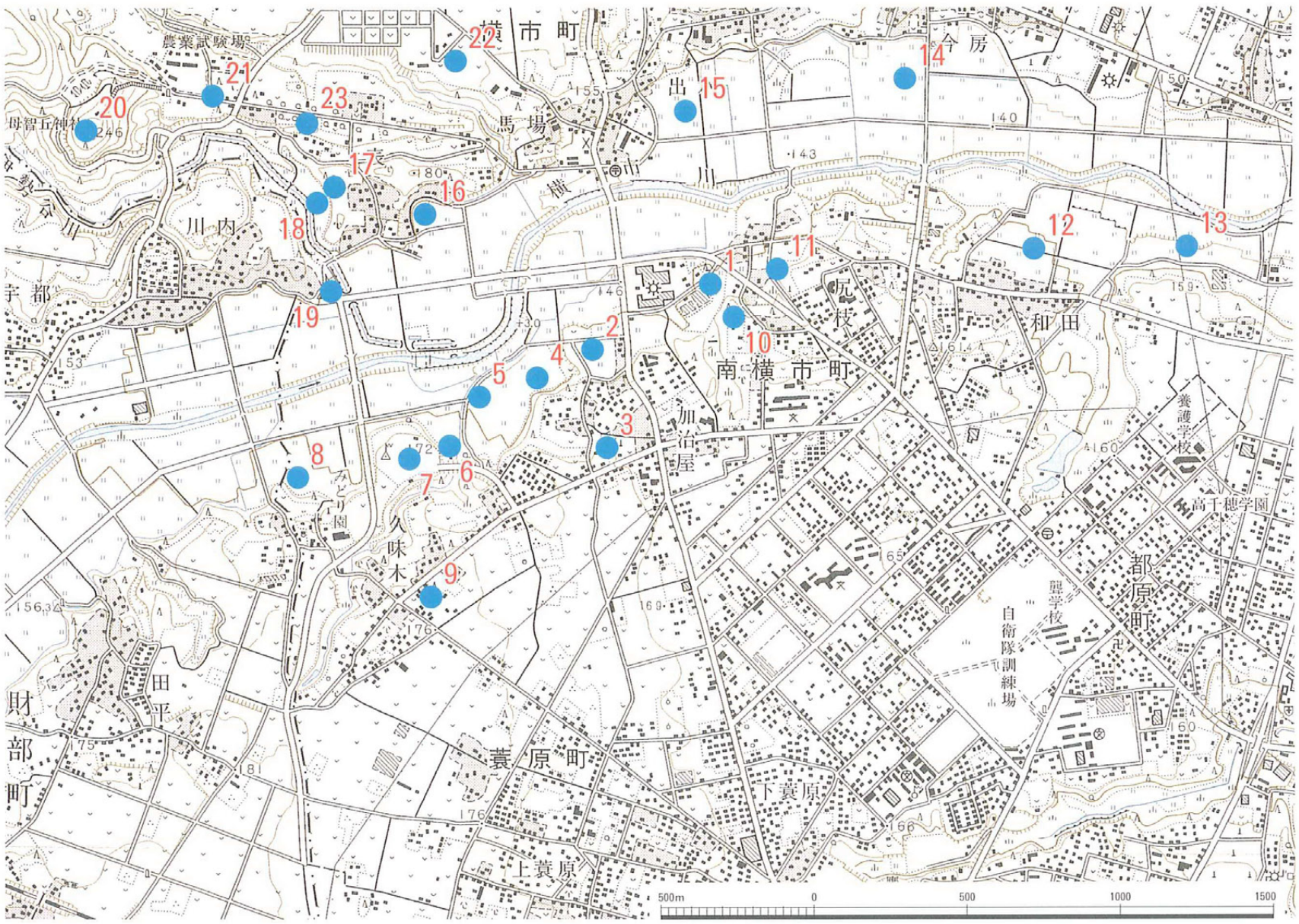
第１節　地理的環境

都城市は九州の東南部、宮崎県の南西部に位置しており、都城盆地のほぼ中央部を占めている。この盆地は北東を諸県丘陵、東から南を鰐塚山・柳岳を主峰とする鰐塚山地に、北西を霧島火山群、西を瓶台山や白鹿山などに囲まれ、地溝状の窪地となっている。東側の山地は急峻で起伏に富み、山地から流下する河川によりその麓は開析され、扇状地を形成している。西側の山地は盆地底にかけて緩やかに傾斜する。また、盆地の中央部を多くの支流を集めながら大淀川が北流している。その支流の一つである横市川は、霧島山麓を源とし、鹿児島県曽於市を経て蛇行しながら都城盆地中央へ向けて流下し、大淀川に合流する。横市川流域には河岸段丘と氾濫原が形成されており、現況は水田が広がる。この横市川両岸には、横市地区遺跡群と称される遺跡が点在しており、当遺跡もこの遺跡群の中に含まれる。

星原遺跡は、宮崎県都城市横市町字尻枝に所在する。横市川右岸の低位段丘面上に位置し、標高は海抜約 150 mから 152m で、横市川との比高差は約 8 mである。

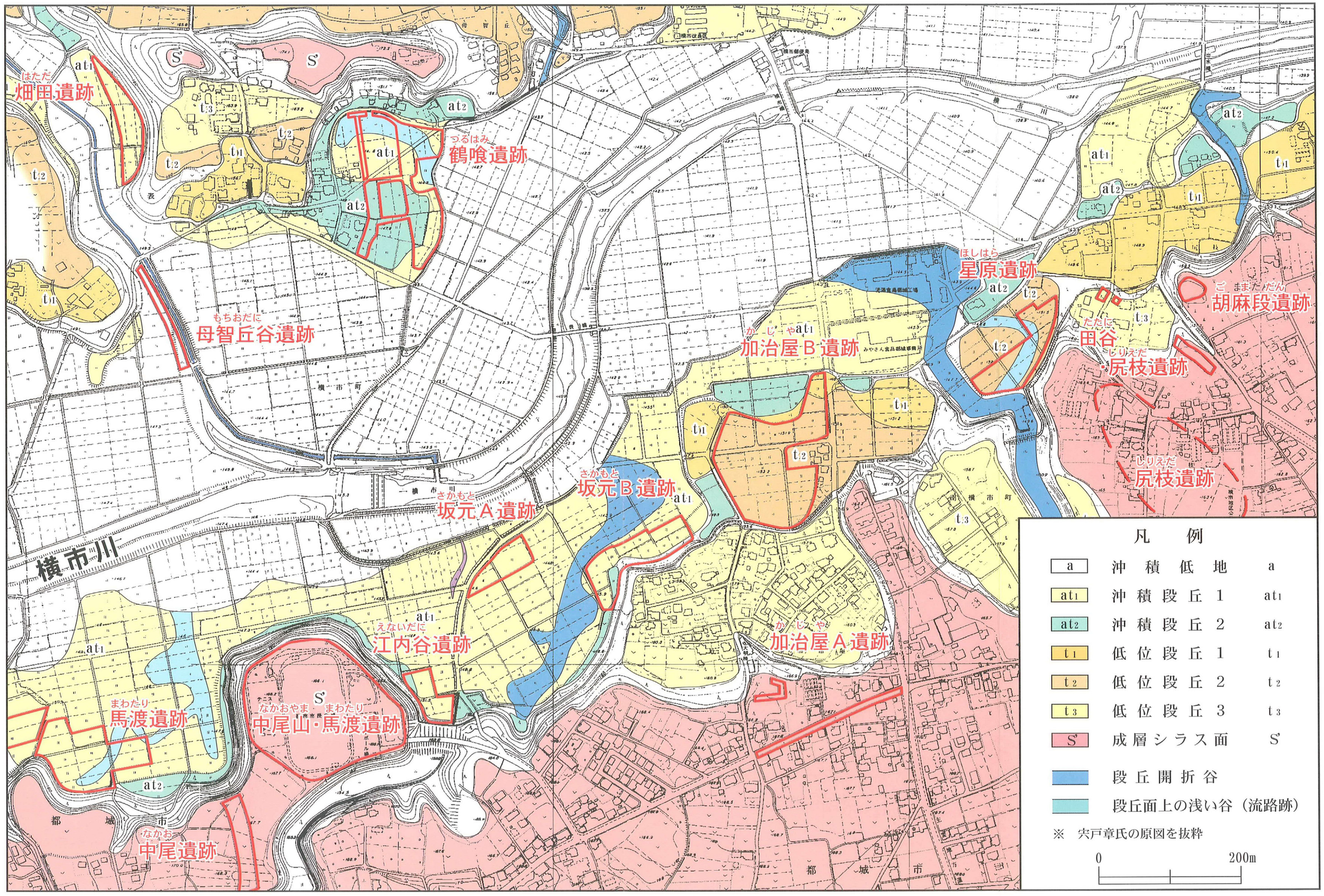
第２節　横市地区の地形面区分

平成 12 年度から平成 14 年度にかけて、宍戸章氏が横市川流域一帯の地形について成層シラス面より下位から現河床の存在する沖積低地（氾濫原）を除く面までを、薩摩テフラ（Ｐ 14）かそれより古いテフラに覆われるものを低位段丘、アカホヤ（k-Ah）やそれ以降の御池軽石（Kr-M）等に覆われるものを沖積段丘とし更に標高の違いからから低位段丘を３つ、沖積段丘を２つの計５つに区分を行っている。（第２図にその一部を掲載している。）



1：星原	2：加治屋Ｂ	3：加治屋Ａ	4：坂元Ｂ	5：坂元Ａ	6：江内谷
7：中尾山・馬渡	8：馬渡	9：池原	10：田谷・尻枝	11：湖摩段	12：平田
13：早馬	14：今房	15：肱穴	16：鶴喰	17：新宮城跡	18：畑田
19：母智丘谷	20：母智丘原第１	21：母智丘原第２	22：牧の原第２	23：横市中原	

第１図　遺跡位置図


畑田遺跡
鶴喰遺跡
母智丘谷遺跡
星原遺跡
胡麻段遺跡
田谷
尻枝遺跡
加治屋B遺跡
坂元B遺跡
坂元A遺跡
横市川
江内谷遺跡
加治屋A遺跡
馬渡遺跡
中尾山・馬渡遺跡
中尾遺跡
凡　例
a　沖積低地　a
at1　沖積段丘1　at1
at2　沖積段丘2　at2
t1　低位段丘1　t1
t2　低位段丘2　t2
t3　低位段丘3　t3
S'　成層シラス面　S'
段丘開折谷
段丘面上の浅い谷（流路跡）
※　宍戸章氏の原図を抜粋
0
200m

第2図　地形区分図

各地形面について簡略に説明しておく。

成層シラス面（S'）は姶良カルデラから噴出した入戸火砕流噴出直後に生じた湖の堆積物によって形成される面である。

低位段丘３（ｔ３）は成層シラスに埋積された湖の水位が低下する過程で生じた部分で、後の河岸段丘に相当する。よって一部の成層シラス面と共時性を持つが横市地区では上流域にのみ分布する。低位段丘面中の最高位に位置づけられ加治屋遺跡付近での沖積低地面との比高差は18ｍ前後高くなっている。

低位段丘２（ｔ２）の堆積物は礫や砂礫で薩摩テフラ（Ｐ14）直下の褐色ロームに覆われる。

低位段丘１（ｔ１）は平坦面のほかｔ２から垂れ下がるような緩傾斜も含まれる。加治屋遺跡では沖積低地面との比高差は９～10ｍほど高くなっている。堆積物は主にシルト•粘土で薩摩テフラ（Ｐ14）に直接覆われる。

沖積段丘２（ａｔ２）は沖積低地面との比高差が６～７ｍ高い面で、アカホヤ（k-Ah）および御池軽石（Kr-M）に覆われると考えられる面である。

沖積段丘１（ａｔ１）は御池軽石（kr-M）以上のテフラに覆われると思われ、沖積低地面との比高差は３～４ｍほど高く沖積段丘２～３ｍ低くなっている。

その他として谷地形部を**沖積低地の流路跡・段丘開析谷**（２面以上を横断して流下し流末が段差を持たずに沖積低地面に至るもの）・**段丘面上の浅い谷**（流路跡：段丘面形成時の古い流路跡や単一面上の小開析谷）の３つに細分している。

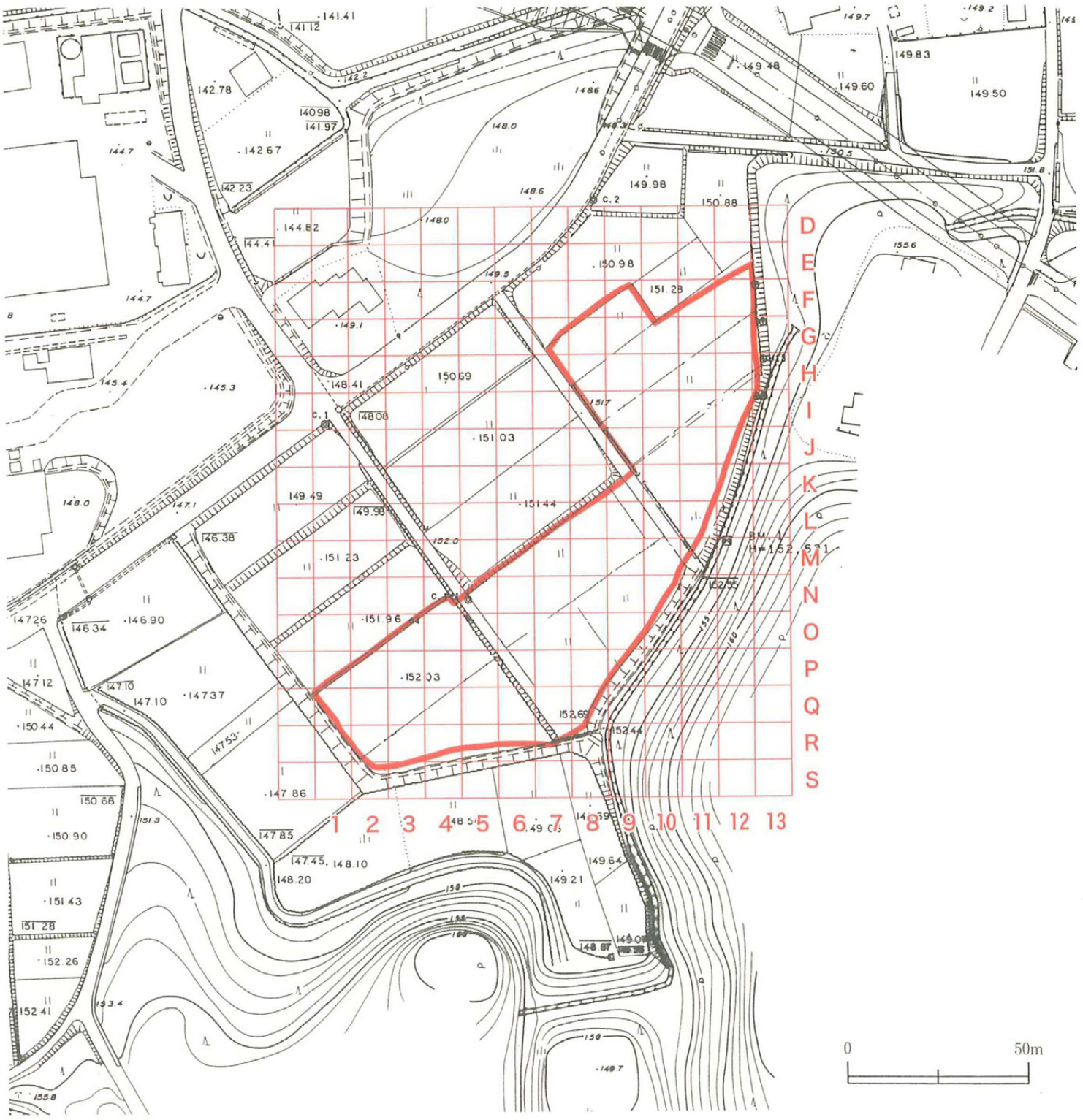
第３節　星原遺跡と周辺の遺跡

星原遺跡はｔ２面に位置する。遺跡中央を南西から北東に向かい開析谷がめぐっており、背後には成層シラス台地が広がる。この南側の台地上に位置するのが尻枝遺跡である。尻枝遺跡は星原遺跡が位置するｔ２面の背後にある成層シラス面の縁辺部、標高160ｍに位置する。昭和61年の試掘調査において、布留式併行器前後と考えられる壷や高杯等が出土している。田谷・尻枝遺跡は星原遺跡の背後にありｔ３面に位置する。谷へと下る斜面上では縄文時代早期および縄文時代中期の陥し穴が見つかっており、中世には溝状遺構や土師器埋納遺構、近世には掘立柱建物跡や土坑・堀状遺構が構築されている。星原遺跡の東側に位置する胡摩段遺跡は尻枝遺跡同様成層シラス面に位置しており、調査の結果縄文時代早期の遺物が出土している。星原遺跡の西約200ｍには鎌倉時代の在地領主館跡が見つかった加治屋Ｂ遺跡がある。加治屋Ｂ遺跡では鎌倉時代のほかに縄文早期の集石や、弥生時代中期・後期の集落跡、平安時代（９世紀後半から10世紀前半）の掘立柱建物跡や竪穴状遺構などが多数検出されている。加治屋Ｂ遺跡を更に上流に向かうと坂元Ｂ遺跡、坂元Ａ遺跡、江内谷遺跡、中尾山•馬渡遺跡、馬渡遺跡と遺跡が続いている。中尾山•馬渡遺跡以外は全てａｔ１面に位置している。坂元Ｂ遺跡は、弥生時代の竪穴住居跡や、古代・中世の掘立柱建物跡や溝状遺構が多数検出されている。坂元Ｂ遺跡と開析谷を挟んだ北側にある坂元Ａ遺跡では縄文時代晩期末の水田跡が見つかっている。その南側にある江内谷遺跡では古代の溝状遺構・掘立柱建物跡や多量の木製品が出土している。江内谷遺跡の西の成層シラス面に位置しているのが中尾山・馬渡遺跡で、古代の掘立柱建物跡や中世の畠跡が確認されている。この南側に位置するのが中尾遺跡で、古墳時代の竪穴住居跡や、中世の畠跡が見つかっている。横市地区遺跡群の中で鹿児島県との境にあるのが馬渡遺跡で、四面庇の掘立柱建物跡を含む掘立柱建物跡が多数見つかっており、墨書土器や石帯が出土している。横市川の対岸には肱穴遺跡がある。ａｔ１面から沖積低地面にあたる部分で、縄文時代晩期終末から弥生時代前期の円形の住居跡が見つかっており、遺構内からは刻目突帯文土器や擦り切り孔を有する石庖丁などが出土している。また、弥生後期•終末期においては水田の用•排水路と思われる溝状遺構や木組状遺構が、古代では竪穴住居跡や掘立柱建物跡のほか、古代末から中世にかけての水田層なども見つかっている。坂元Ａ遺跡の対岸に位置するのが鶴喰遺跡である。ａｔ１面からａｔ２面にまたがっており、ここでは古墳時代の竪穴住居跡が多数検出され、中にはカマドを持つものも多く見られた。遺跡からは青銅製の馬鐸なども出土している。その西の沖積低地面に位置するのが母智丘谷遺跡で、中世の水田跡が見つかっている。母智丘谷遺跡の北側のａｔ１面に位置するのが畑田遺跡で、やはり中世の水田跡が

見つかっている。畑田遺跡東のｔ２面には南北朝期に新宮城が築かれている。その背後の成層シラス面には縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての竪穴住居跡と古墳時代の竪穴住居跡が見つかっている横市中原遺跡がある。

【参考文献】

都城市教育委員会 1986『都城市遺跡詳細分布調査報告書』都城市文化財調査報告書第 5 集
都城市教育委員会 1997『田谷・尻枝遺跡』都城市文化財調査報告書第 38 集
都城市教育委員会 1998『鶴喰遺跡』都城市文化財調査報告書第 44 集
都城市教育委員会 1999『肱穴遺跡』都城市文化財調査報告書第 47 集
都城市教育委員会 2000『肱穴遺跡（１）　今房遺跡　馬渡遺跡（第 1 次)』都城市文化財調査報告書第 50 集
都城市教育委員会 2001『横市地区遺跡群　馬渡遺跡（第 2 次調査)・坂元 A 遺跡』都城市文化財調査報告書第 55 集
都城市教育委員会 2002『横市地区遺跡群　江内谷遺跡・坂元 B 遺跡・加治屋 B 遺跡（第 1 次調査)』都城市文化財調査報告書第 58 集
都城市教育委員会 2003『江内谷遺跡』都城市文化財調査報告書第 59 集
都城市教育委員会 2003『横市地区遺跡群加治屋 B 遺跡（第 2 次調査)・星原遺跡』都城市文化財調査報告書第 60 集
都城市教育委員会 2004『鶴喰遺跡（古墳時代編)』都城市文化財調査報告書第 61 集
都城市教育委員会 2004『馬渡遺跡』都城市文化財調査報告書第 62 集
宮崎県埋蔵文化財センター 2001『梅北佐土原遺跡・中尾遺跡・簑原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 42 集
宮崎県埋蔵文化財センター 2002『母智丘谷遺跡・畑田遺跡・嫁坂遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 63 集
宮崎県埋蔵文化財センター 2004『宇都第 3 遺跡　横市中原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 85 集
千田嘉博 1998「新宮城跡」『都城市の中世城館』都城市文化財調査報告書第 45 集　都城市教育委員会



第 3 図　調査区域図

第３章　発掘調査の成果

第１節　発掘調査の方法と概要

星原遺跡の現況は水田で、元地形は西から東にかけて広がる開析谷となっているため、調査区西側及び南側の山際については御池軽石層直上まで現耕作土によって削平を受けていた。また、その他の部分においても中・近世の遺物包含層は削平されており、調査区北東隅で、15c 後半に桜島より噴出した文明軽石が埋没した畠跡が一部確認できるのみで、遺物も出土しないため、現耕作土を重機によって剥ぎ取り、その後古代の遺物包含層と思われる黒色土上面まで重機によって掘り下げを行い、その後は発掘調査作業員が人力で掘り下げを行った。

調査区には公共座標軸系の SN 座標線に一致した 10 m× 10 mを１区画として設定し、東西方向を算用数字で、南北方向をアルファベットで表記し、その組み合わせで区画名とし、遺物の取り上げ等はこの区画名で行った。また、地形に合わせ谷を横断するトレンチを９トレンチから 13 トレンチまで設定し、９トレンチより北側を「あ」区、９トレンチと 10 トレンチまでを「い」区、10 トレンチから 11 トレンチまでを「う」区、11 トレンチから 12 トレンチまでを「え」区、12 トレンチから 13 トレンチまでを「お」区、13 トレンチより南を「か」区として設定した。

各区内に東西･南北方向土層観察のベルトを残しながらＶ層黒色土の掘り下げを行ったところ､「あ」の西側と「い」から「か」の北側では、黒色土下層の黒褐色土上面で幅 50 ㎝ほどの黒色土を埋土とする溝状の遺構が谷を横切るように東西方向に多数検出された。これらの溝状の遺構は谷の窪みに沿って谷を跨ぐように北西から南東に向かいほぼ平行に等間隔で検出された。また、「あ」西部では、地形に沿ってカーブを描きながら谷を跨いで検出されたことなどから、これらの溝状の遺構は古代の畠跡であると考えられた。

同時に「あ」区においては、北西から南東に向かう道路状遺構（SF01 ～ 03、08 ～ 10）が、また、「い」から「お」区北東に谷に並行する道路状遺構（SF05 ～ 07）を検出した。「あ」区の道路状遺構は中央が硬く硬化しており、その両側に御池軽石と思われる黄色軽石を多量に含むやや硬化した黒色土が面的に検出された。

また、Ⅵ層上面では同じＶ層黒色土を埋土とするピットや土坑も多数検出された。特に「か」区北西では掘立柱建物跡がＬ字に規則的に配置していた。「か」区では古代の包含層であるＶ層黒色土が削平されていたため遺物の出土は少ないものの、やはり古代の遺物が出土している。また、「え」区を中心に規則的な配置は見られないものの古代と思われる様々な規格の掘立柱建物跡が見つかっている。同じＶ層黒色土を埋土とする遺構には近世遺物が出土する井戸跡や掘立柱建物跡が調査区北西で見つかっている。Ｖ層黒色土中からは土師器を中心に多くの古代の遺物が出土している。

Ⅵ層上面では、直径４ｍから７ｍほどのＶ層黒色土の落ち込みが７箇所見られた。何れも多数の遺物を伴っていたが、調査を行ったところ、１軒は古代の竪穴状遺構（SA07)、３軒は古墳時代の竪穴住居跡（SA04 ～ 06)、３軒は遺物の集中は見られたものの、明確な掘り込みやピット等が確認できないため、遺構ではなく、自然の窪地に遺物が落ち込んだものと判断した（調査の都合上 SA01 ～ 03 としてある)。また、この他にⅥ層上面でⅥ層より明るく御池軽石と思われる黄色軽石を多く含む落ち込みがあり、調査を行ったところ古墳時代の竪穴住居跡であった（SA08)。

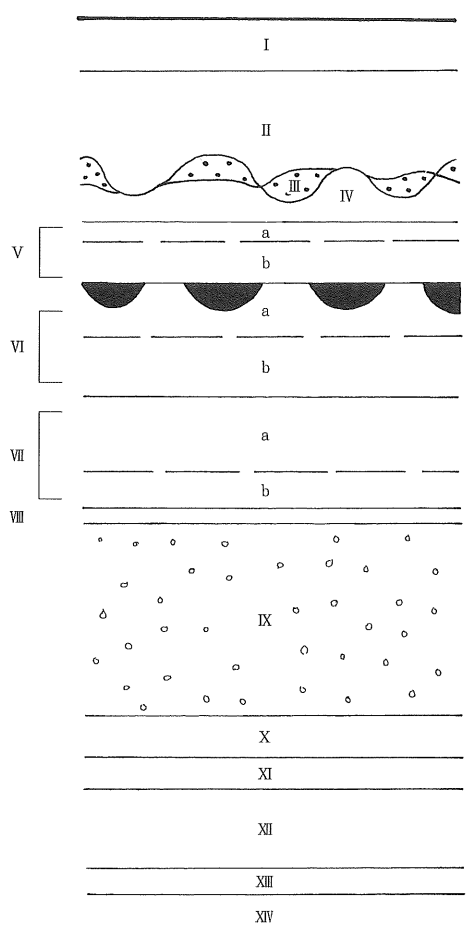
Ｖ層下部からⅥ層中にかけては、縄文時代から古墳時代にかけての遺物が多量に出土している。Ｎ－ 10 区では縄文時代晩期の深鉢形土器（以下深鉢）が一個体横たわった状態で出土した（JSC01)。残念ながら上半分を重機で掘削中に破壊している。また､Ｑ－８区では晩期の浅鉢形土器（以下浅鉢）が一個体出土している（JSC02)。Ｉ－ 11 区では弥生時代後期の壷が一個横たわった状態で出土している。その他、弥生時代中期の遺物がＰ・Ｑ－６区を中心に出土しており、ここからは脚台付壷や、顔料の付着した土器などが見つかっている。

Ｘ層では、縄文時代前期から中期の遺物と遺構（集石）が見つかっている。主に中期の深浦式土器が主体で、遺構の時期も当該期であると考えられる。

第２節　遺跡の基本層序

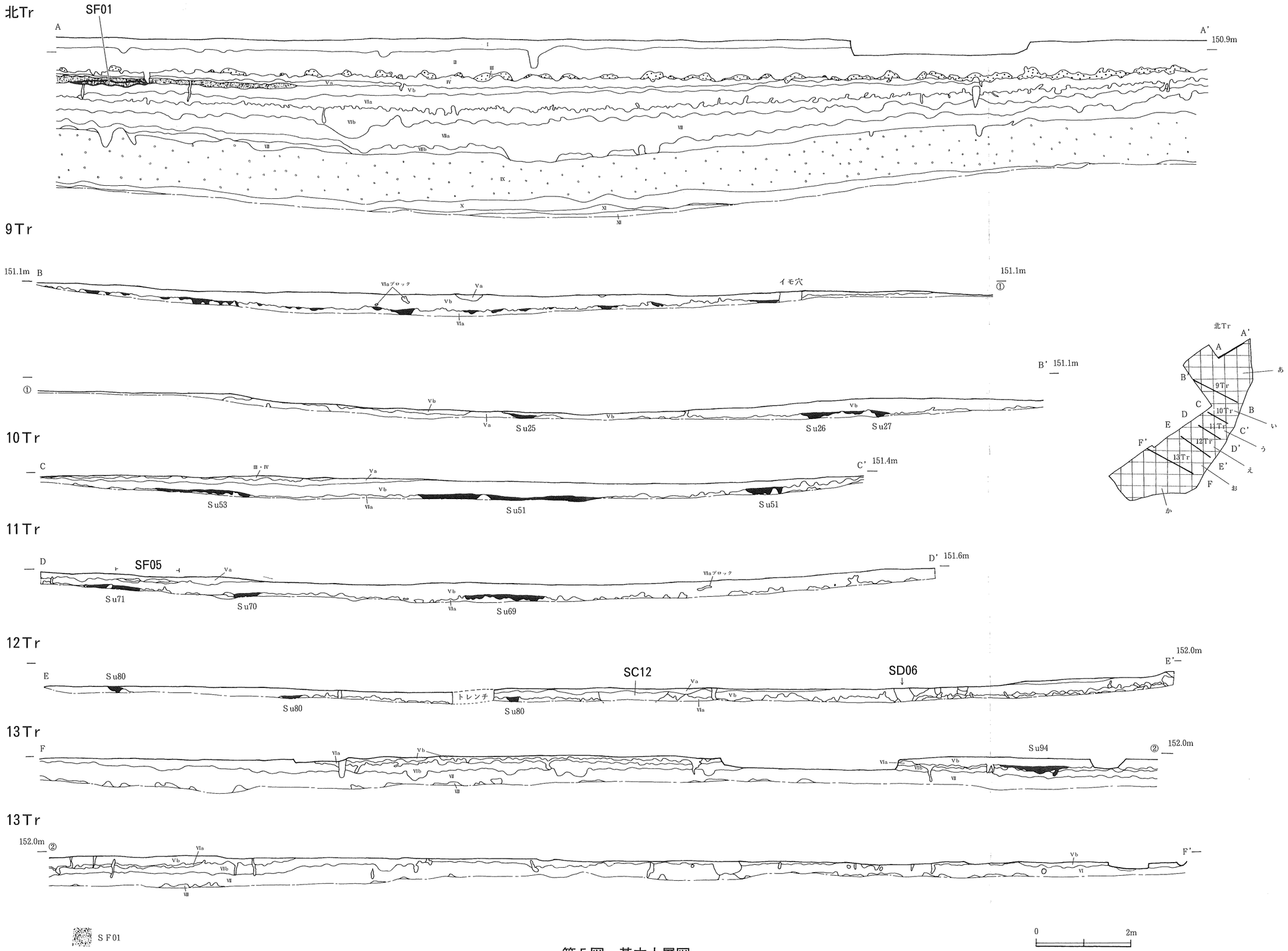
星原遺跡では「か」区以外は御池軽石上層までの調査となった。調査区をまたがるように谷が入っているものの、基本的な層序は遺跡全体的に共通する。また、「か」区については御池軽石上層のほとんどが削平されているため詳細は不明である。

基本土層を上から順に追っていくと、Ⅰ層は現在の耕作土（灰褐色砂質シルト）である。Ⅱ層は文明軽石降下後の耕作土（暗灰色砂質シルト：灰白色軽石を多く含む）と思われる。Ⅱ層中より近世の遺物が出土している。Ⅲ層は15世紀後半に鹿児島県の桜島から噴出したとされる文明軽石層である。調査区北部を中心に認められ、断面が半月状を呈している部分もみられるため文明軽石噴出によって埋没した畠跡の可能性がある。Ⅳ層は黒灰色砂質シルト土で、調査区北側に一部見られるのみである。Ⅴ層は黒色粘質シルト土で、ややしまりのあるさらさらとした土で、御池軽石をあまり含まないⅤａ層と、より黒味を帯び御池軽石を含むぼそぼそとしたⅤｂ層に細分することができる。SF05はこのⅤａ層とⅤｂ層の境から検出されている。Ⅴ層中からは古代の遺物が多量に出土している。また、古代の遺構の埋土はこのⅤ層を基調としている。Ⅵ層は黒褐色土から暗褐色土で、Ⅴ層より粘質が強く御池軽石を多く含む。Ⅵ層もⅥａ層（黒褐色粘質シルト土）とⅥｂ層（暗褐色粘質シルト土）に細分が可能で、Ⅵａ層はしまりがあまりなく、Ⅵｂ層がより御池軽石を多く含む。弥生時代や古墳時代の遺物の多くはⅥａ層から出土している。古代・古墳時代の遺構検出面はⅥ層上面で行っている。Ⅶ層は黒褐色粘質シルト土で上位層より硬くしまり、より粒の大きい御池軽石を多く含む。Ⅷ層はいわゆる御池軽石層の斬移層で、明黄褐色粘質シルト土で、非常に硬くしまる。Ⅸ層は約4,200年前に霧島御池より噴出したとされる御池軽石層である。下部に行くに従い軽石の粒が大きい。厚さは１～1.5ｍほどである。Ｘ層は黒色粘質シルト土で、パミス等を含まない土である。ここからは縄文時代前期から中期の遺物や遺構が見つかっている。ＸⅠ層は灰黄色微粘質シルト土である。ＸⅡ層・ＸⅢ層は喜界カルデラより約6,500年前に噴出したとされるアカホヤ火山灰層である。ＸⅣ層は牛の脛火山灰を含む黒褐色シルト土で非常に硬い。Ｘ層以下の層については第３節で詳細を述べることとする。

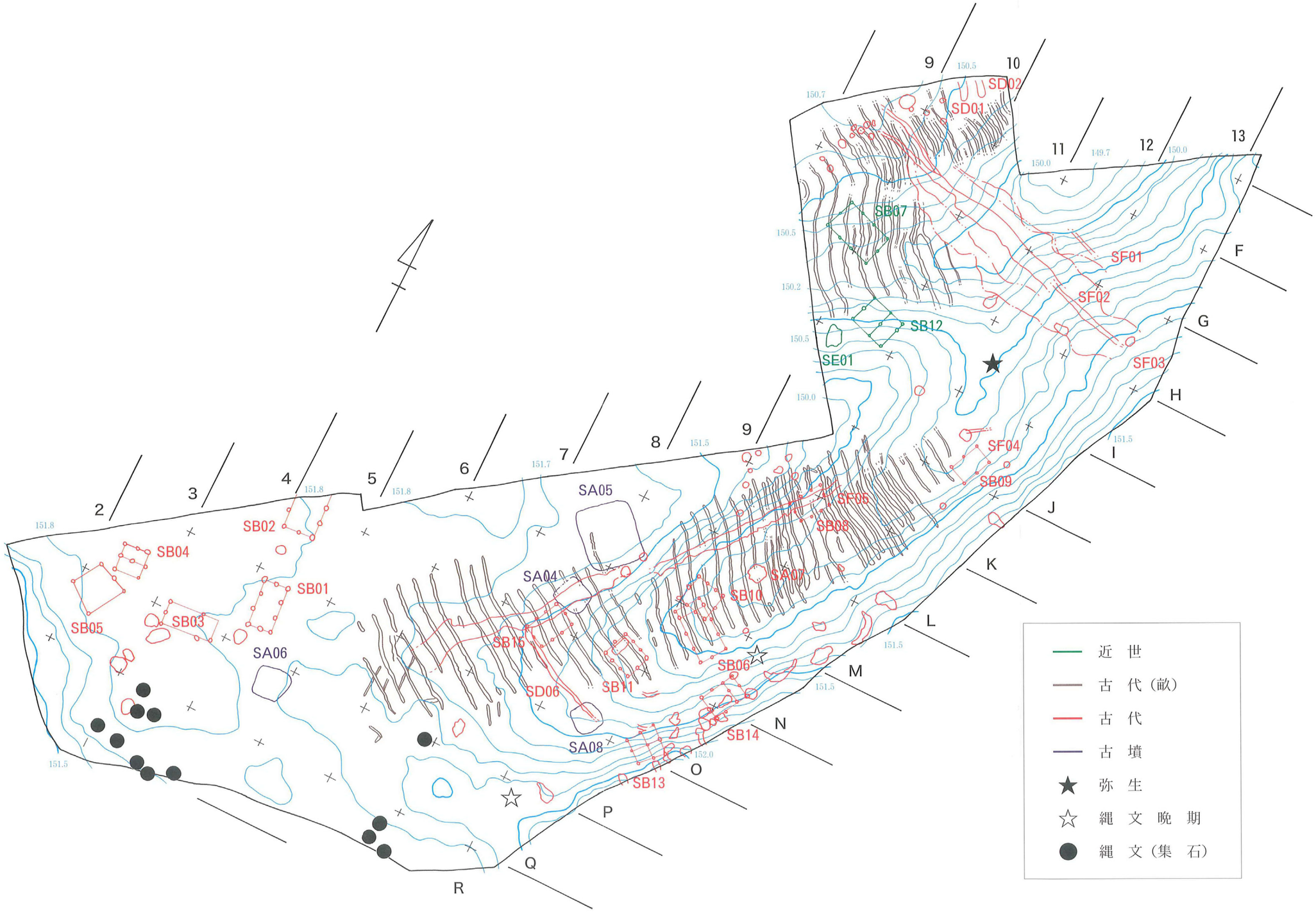


Ⅰ　：灰褐色砂質シルト
Ⅱ　：暗灰白色砂質シルト
Ⅲ　：文明軽石層
　（15ｃ後半に桜島より噴出）
Ⅳ　：黒灰色砂質シルト
Ⅴａ：黒色微粘質シルト　　→　古代遺物包含層
Ⅴｂ：黒色粘質シルト　　→　古代遺物包含層
　（Ⅴａ層より御地軽石を多く含む）
Ⅵａ：黒褐色粘質シルト　　→　縄文後期から古墳時代遺物包含層
Ⅵｂ：暗褐色粘質シルト
Ⅶ　：黒褐色粘質シルト
　（より御地軽石を含むものをⅦｂとしている）
Ⅷ　：御池軽石斬移層
Ⅸ　：御池軽石層
　（約4,200年前に霧島御池より噴出）
Ⅹ　：黒色粘質シルト
Ⅺ　：灰黄色微粘質シルト
Ⅻ　：アカホヤ火山灰層
　（約6,500年前に喜界カルデラから噴出）
XIII：アカホヤ火山灰の軽石粒層
XIV：黒褐色シルト
　（牛の脛火山灰を含む）

第４図　土層柱状図


北Tr
SF01
A
A'
150.9m
9Tr
151.1m
B
B'
イモ穴
Su25
Su26
Su27
10Tr
C
C'
151.4m
Su53
Su51
11Tr
D
D'
151.6m
SF05
Su71
Su70
Su69
12Tr
E
E'
152.0m
Su80
SC12
SD06
トレンチ
13Tr
F
F'
Su94
SF01
0
2m

第５図　基本土層図



第６図　星原遺跡遺構配置図

第３節　各時代の調査成果

（１）縄文時代前～中期

１．調査の概要

御池軽石層下のＸ層黒色土より縄文時代前～中期の遺物・遺構が確認された。調査は宮崎県教育委員会文化課の試掘結果と工事計画を考慮した結果、調査区南西部の約1,800㎡を中心に行っている。御池軽石より上層の調査終了後に行ったため、平成15年２月後半より重機によりⅦ・Ⅷ層（約30cm）を剥ぎ、その後、御池軽石層約1.5mを重機にて除去した。

区画の設定は御池軽石層上位の設定と同じ公共座標軸系のSN座標線に一致する10ｍ×10ｍを１区画とし、区画名も御池軽石層上位と共通である。

御池軽石層除去後は発掘作業員が鋤簾にて精査を行い、御池軽石層が落ち込む遺構のないことを確認後、Ｘ層黒色土の掘り下げを行った。

Ｘ層上面の地形は、調査区南東隅に向かって高まりが見られ、その高まりはそのまま遺跡北東の丘陵へと続いている。また、調査区北西に向かい下がり、西へ向かい高くなっていくため、調査区中央が、東から伸びる丘陵裾と西側の緩やかな丘陵に挟まれた浅い谷状になっており、この谷は遺跡南側にある湧水（田たんの池）へと向かっていたと思われる。

ここでＸ層以下の層について触れておくと、Ｘ層は黒色微粘質シルト土で、パミス等を含まず、調査区全体的に厚さ20cmほどほぼ水平に堆積していた。その直下に灰黄色の微粘質シルト土が厚さ10～20㎝ほど堆積しており、樹木等の根痕が多く見られた。このＸⅠ層はＸⅡ層アカホヤ火山灰が土壌化するいわゆる斬移層であり、遺物等は見られなかった。ＸⅡ層は喜界カルデラより約6,500年前に噴出したもので、黄橙色の火山灰層で厚さは40㎝ほどである。ＸⅢ層はアカホヤ火山灰が噴出し最初に地面に落ちた１センチ前後の軽石粒で、厚さは5cmほどである。ＸⅣ層は、黒褐色シルト層で、この層中には牛の脛火山灰が含まれ、非常に硬い層である。

遺物はⅨ層の御池軽石除去段階から調査区南側に集中して認められた。その他の部分では遺物の出土があまり確認されないことから、遺物集中箇所を中心にアカホヤ火山灰層（ＸⅡ層）上面まで掘り下げを行ったところ、遺物出土レベルとほぼ同レベルから集石（散石）・焼土が確認された（第７図）。

調査区南西部のほかに遺跡北側端の北トレンチ、９トレンチ、11トレンチについてもＸ層上面まで重機により御池軽石を除去し、発掘作業員が鋤簾にて精査を行ったが遺物・遺構は確認できなかった。

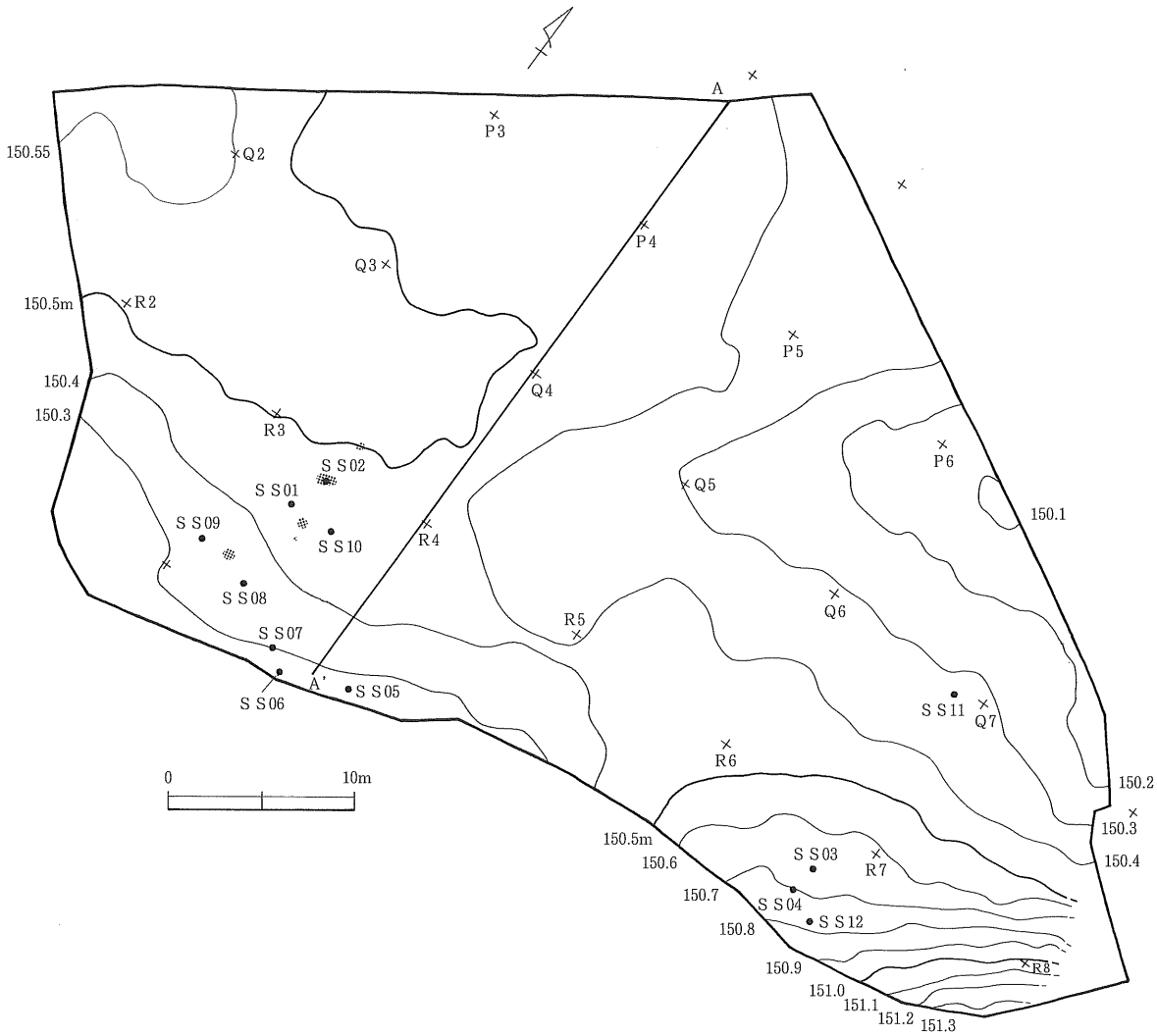
遺物と遺構はR-3・4区とR-6・7区の２箇所に集中して見られ、焼土はR-3・4区の集石間に見られた。集石（散石）は、5cm程度の礫が60㎝前後の範囲に集中し明確な掘り込みを持たないもの（SS01・02）と、やや規模も大きく明確な掘り込みを持つもの（SS06・07・08）と、明確な堀込を持たず、１ｍ～２ｍの範囲に多数の礫が散石するもの（SS03・04・05）と、少数の礫が散石するもの（SS09・10・11・12）がみられた。また、Ｑ－２・３区付近では、土器の出土は少ないものの石器が集中して出土している。遺物・集石の出土レベルはＸ層の上位から中位にかけてである。また、調査区全体に大小の礫がまばらに散石していた。

２．遺構

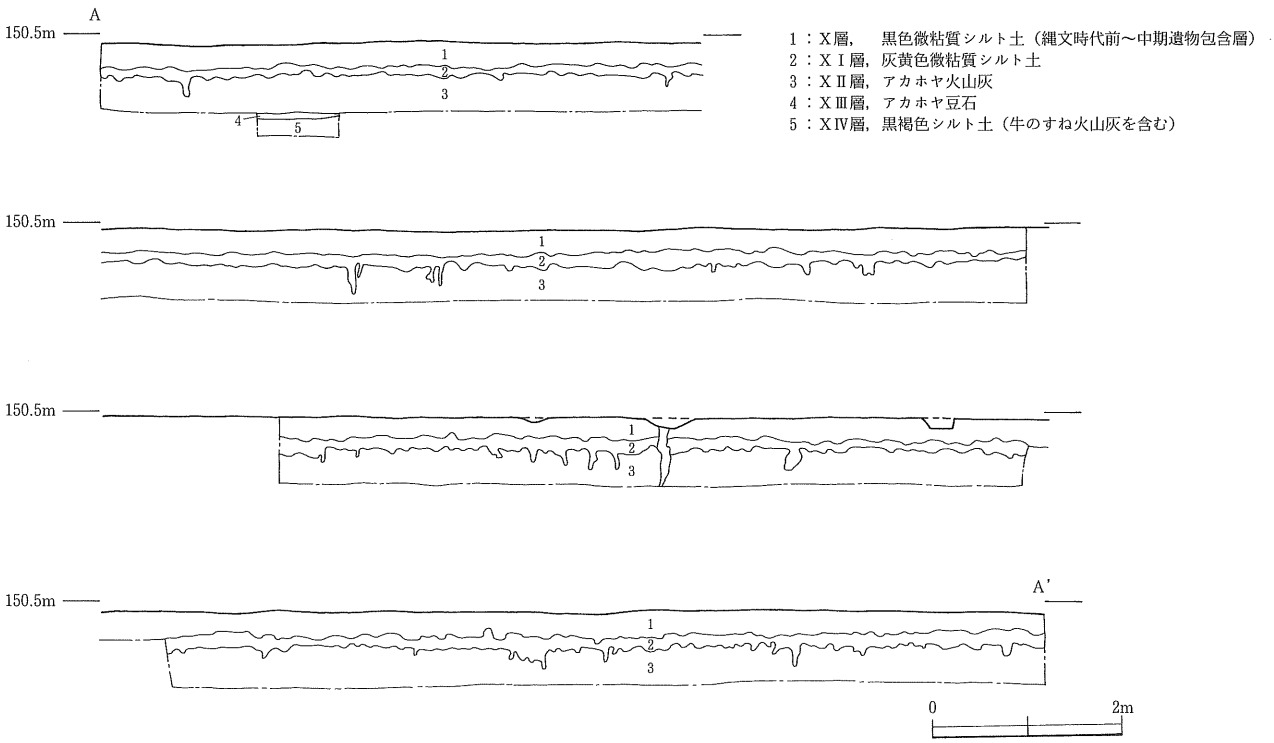
Ｘ層からは集石12基とそれに伴うと思われる焼土跡が６箇所（うち１箇所は集石と重なる）である。

SS01（第９図）は調査区南西のR-3区に位置し、約30㎝×35㎝の範囲に5㎝前後の砂岩を主体とする角礫が集中しているが、明確な掘り込みは見られない。SS01の東約50㎝のところでは直径約35㎝の範囲に厚さ約2cmの焼土が見られ、礫をまばらに伴っている。これらの礫もSS01と同様に赤化している。また、SS01内の礫と焼土周辺の礫が接合している。SS01の礫の平均重量は31gで全体的に受熱により赤化している。この焼土のほかにSS01の南約２ｍにも約30㎝×30㎝の焼土があり、これには礫を伴わず、焼土の厚さは３㎝である。

SS02（第９図）はSS01の北１ｍに位置し、焼土を伴う散石状のものである。焼土の範囲は約60cm×30㎝の範囲で、厚さは約１㎝である。礫は北側に偏っており、大きさは３㎝前後の砂岩の小礫で平均重量は約20ｇである。全体的に受熱により赤化している。また、SS02の北約1.5mには焼土が見られ、範囲は約30㎝×25㎝で、周辺から輝石安山岩の石皿（第20図66）・軽石（第21図71）・黒曜石の剥片が出土している。礫は伴っていない。

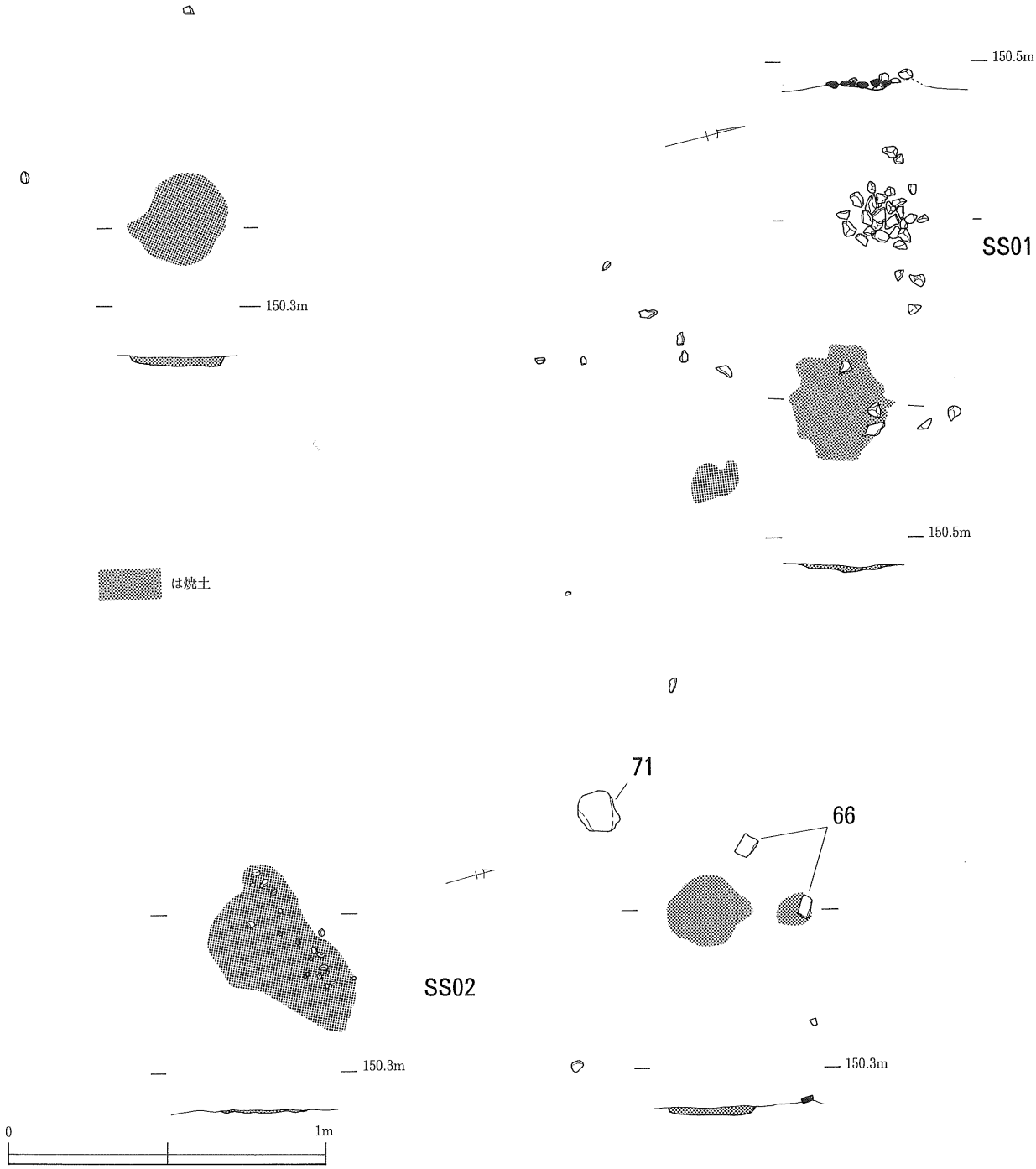


第７図　Ｘ層検出遺構配置図



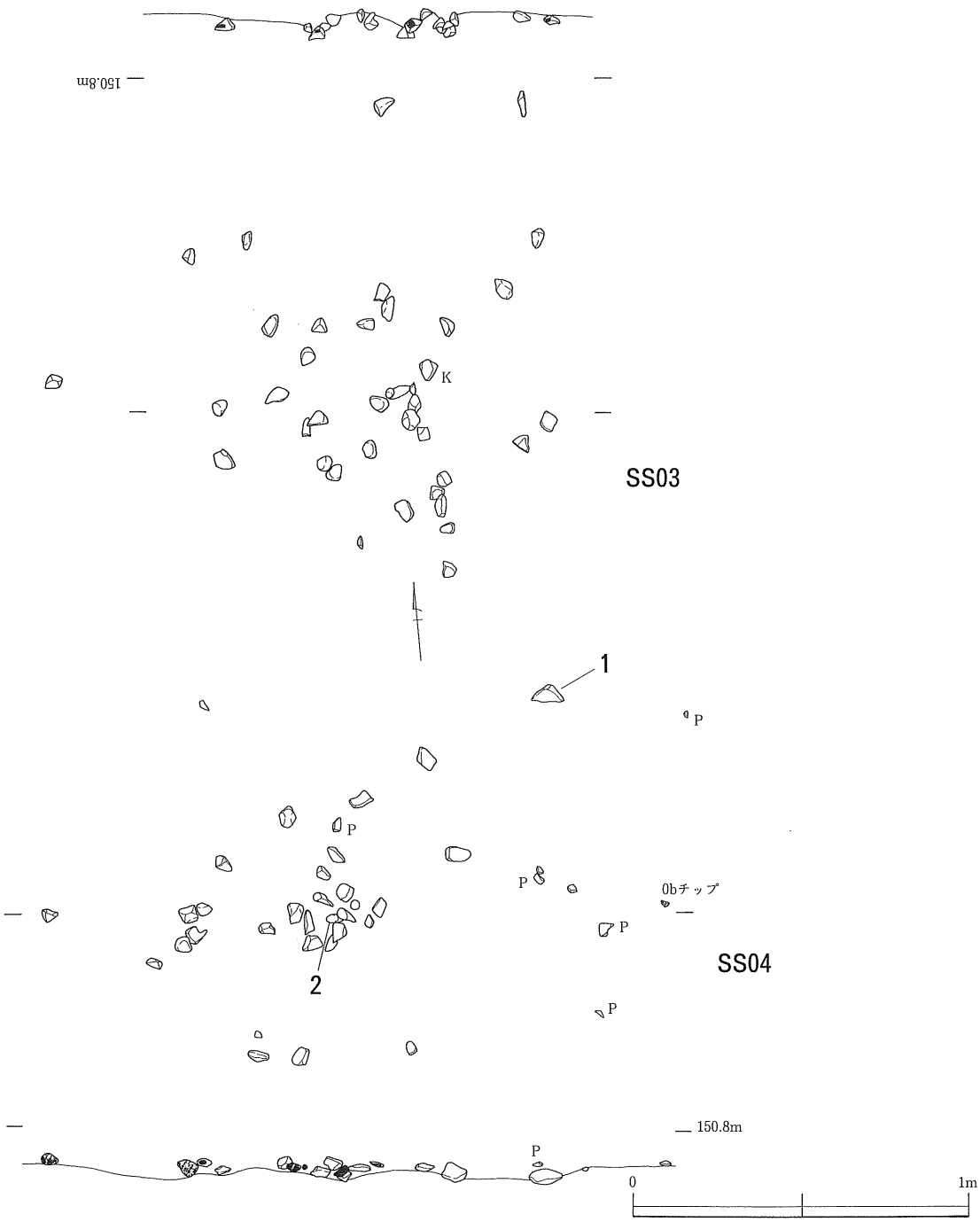
1：Ｘ層，　黒色微粘質シルト土（縄文時代前～中期遺物包含層）
2：ＸⅠ層，灰黄色微粘質シルト土
3：ＸⅡ層，アカホヤ火山灰
4：ＸⅢ層，アカホヤ豆石
5：ＸⅣ層，黒褐色シルト土（牛のすね火山灰を含む）

第８図　御池軽石下層トレンチ土層断面図

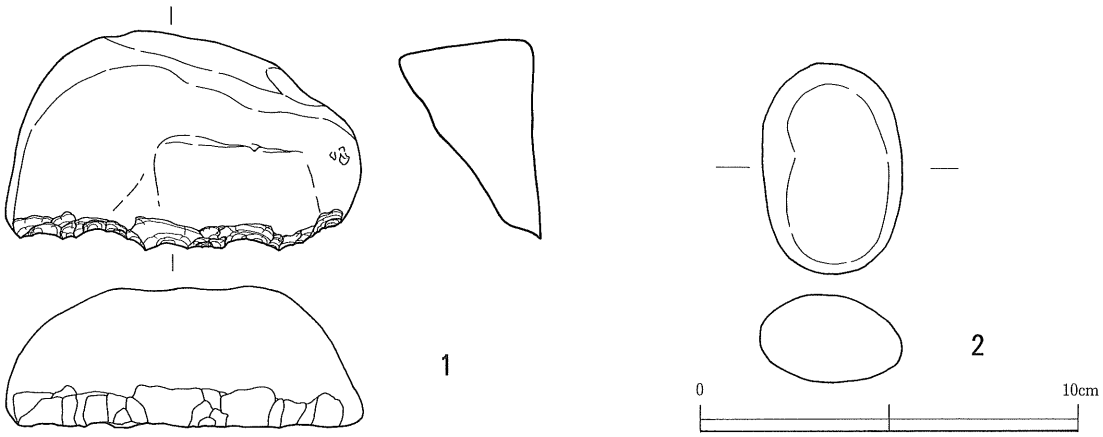


第9図　SS01(右上)、SS02(左下)及び焼土実測図

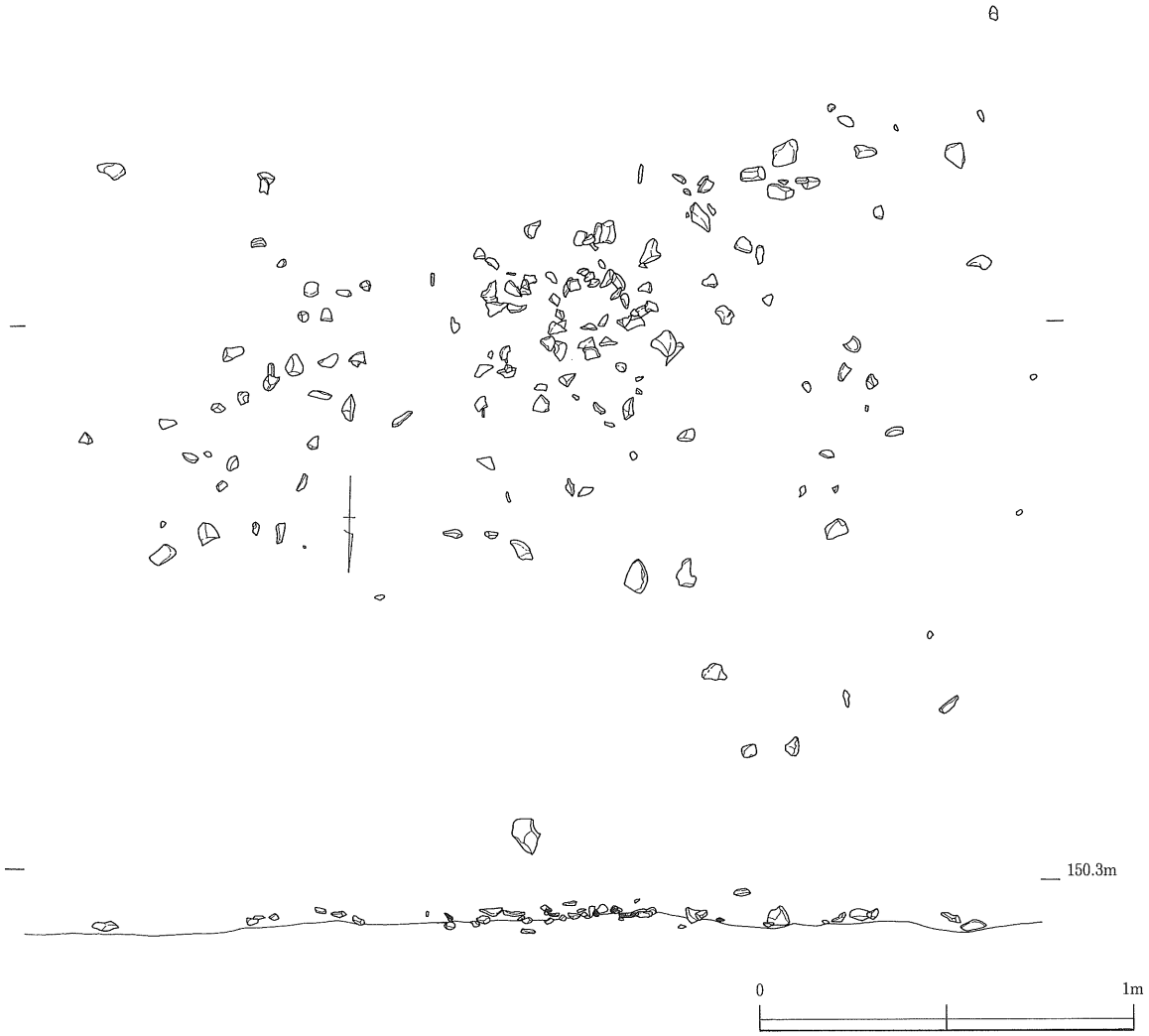
SS03・04（第10図）は、調査区南東のR-6区に位置する。北側にSS03、そのすぐ南にSS04が位置する。何れも散石状を呈しており明確な堀込を持たない。散石の範囲は、SS03が約1.5 m×1.5 mで、SS04が約2 m×1.1 mである。構成礫は砂岩が主体で5 cm～10 cm程の角礫が多く、重量平均はSS03が約73g、SS04が約64gで、大半が受熱により赤化している。SS03とSS04間での接合は見られない。また、SS04内からは礫器（スクレイパー）と磨石が出土した（第11図1・2）。1はSS03と04のほぼ中間地点から出土している。角礫の一辺を加工して刃を作り出しており、刃角は61°である。集石内の礫を利用して作られており石材は同様の砂岩で、散石内の礫同様受熱している。長さ5.8 cm、幅9.4 cm、厚さ3.7 cm、重さは210 gである。2はSS04中央から出土し、長さ5.6 cm、幅3.8 cm、厚さ2.3 cm、重さは約73.1g、石材は安山岩である。このほかに黒曜石のチップや土器片が出土している。



第 10 図　SS03(上)、SS04(下)実測図



第 11 図　SS04 出土石器実測図



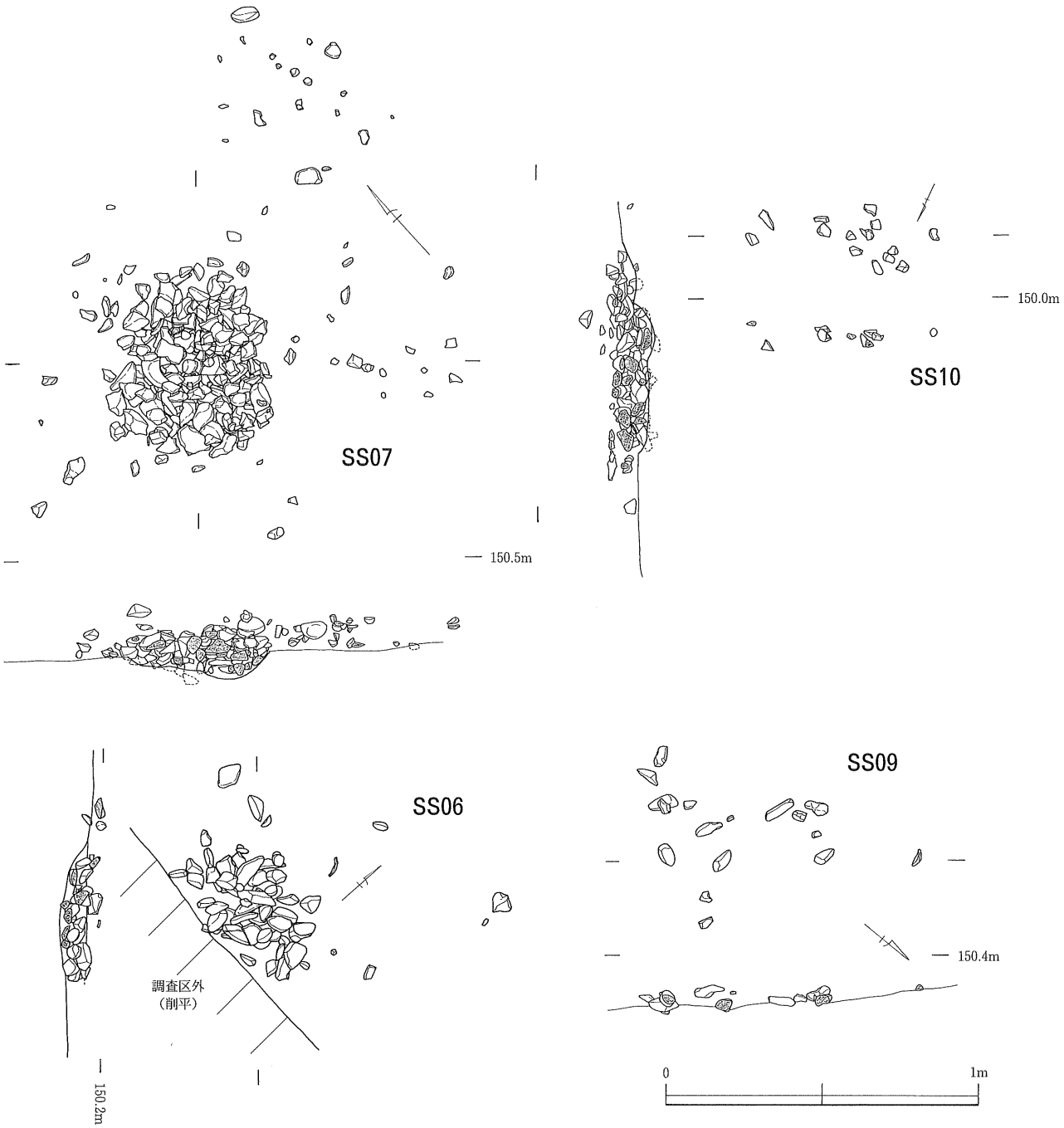
第 12 図　SS05 実測図

SS05（第 12 図）は、R-4 区の調査区南端に位置する。2.6 m× 2 mの範囲に 160 個ほどの礫が散石しており、明確な掘り込みを持たない。構成礫は、10 cm程の拳大の角礫と破砕した破片が主体で破片が多いため重量平均は約 30 g である。SS 内で接合する率が高く、また、SS06・SS07・SS08 と複数の遺構間接合も多数見られる。何れの礫も受熱により赤化し、また、ところどころスス状の黒化が見られる。

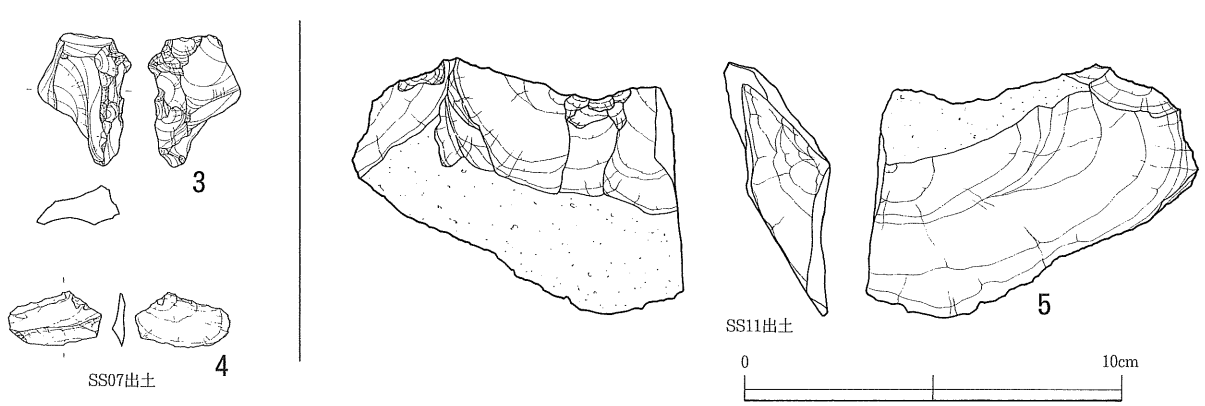
SS06（第 13 図）は SS05 の 4 m西に位置し、南半分が削平されている。残存するだけで約 60cm × 35 cmの範囲に 5 cm～ 10 cm程の円礫や角礫が 60 個ほど集中している。構成礫の重量平均は約 100 g で、SS 内で接合するものが 9 点と破片が SS05 と接合している。残存範囲で直径約 50 cm、深さ 15 cmの堀込を持つ。

SS07（第 13 図）は、SS06 の北西 1.5 mに位置し、約 70 cm× 80 cmの範囲に 5 cm～ 10 cm程の角礫が集中している。礫の重量平均は 82 g である。何れも受熱による赤化が激しく、一部スス状に黒化しているものも多い。SS 内での接合も多いが、SS05・SS08・SS09 と接合するものが多く見られた。直径約 50 cm× 50 cm、深さ約 10 cmの円形の掘り込みを持つ。SS07 内からは、無班晶流紋岩の加工痕のある剥片（第 14 図 3 ）と、無班昌安山岩の剥片（第 14 図 4 ）が出土している。 3 は長さ 3.6 cm、幅 2.4 cm、厚さ 1.2 cm、重さ 5.7 g で厚みのある断面三角形状の剥片の稜を作り出すように加工を施すものである。片側の側縁には加工が見られず形態は錐状を呈しているが、先端部に目立った加工および使用痕も見られないため、側縁部を機能部とするスクレイパー的なものと考えられる。 4 は長さ 1.5cm、幅 2.5cm、厚さ 0.3 cm、重さ 9 g で背面上部には原石面を残している。下縁に使用痕と思われる微細剥離が見られる。

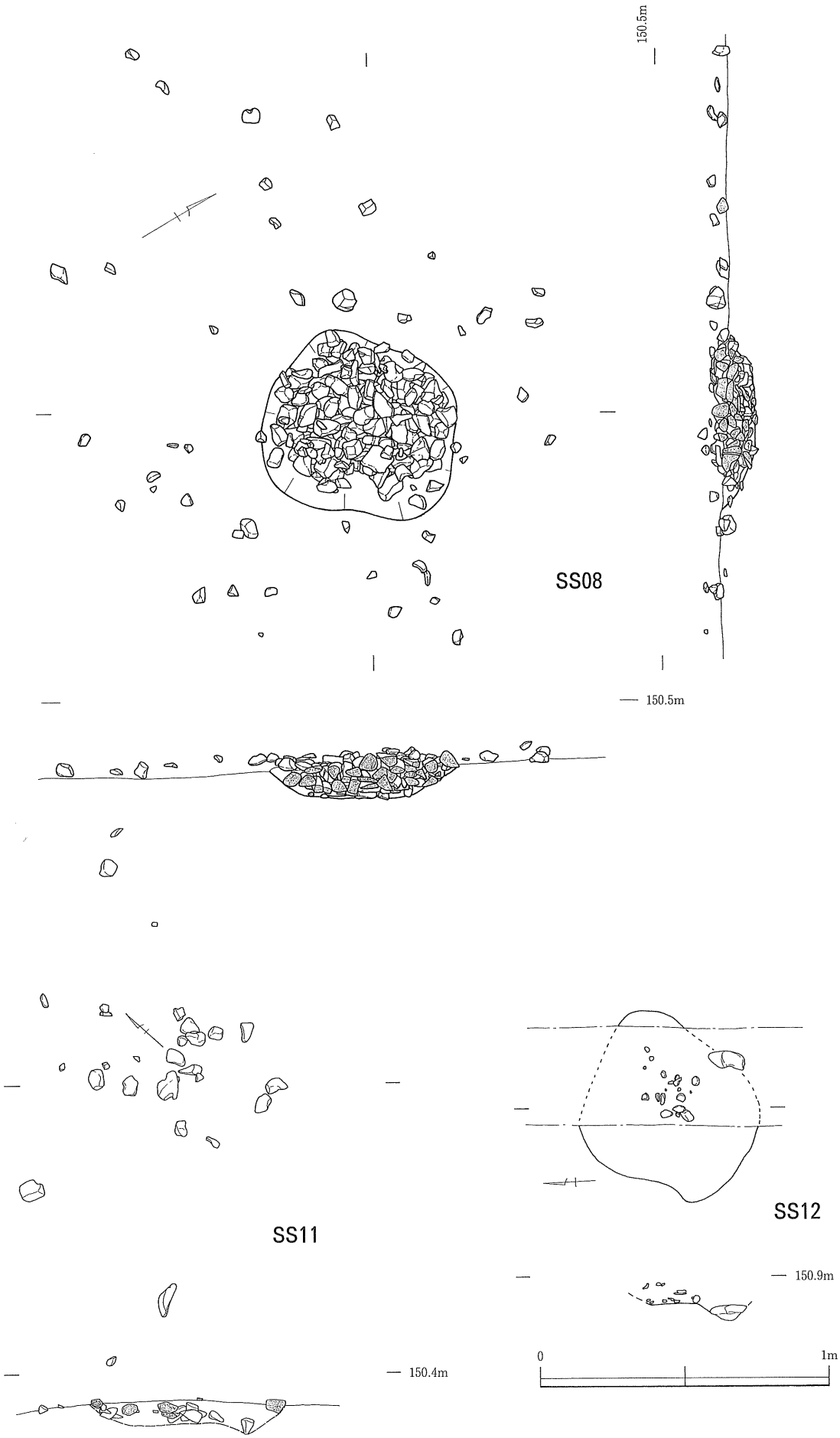
SS08（第 15 図）は SS07 の西北約 4 mに位置し、約 70 cm× 70 cmの範囲に 5 cm～ 10 cm程の角礫が集中している。掘り込みの規模は直径約 70 cm、深さ 10 cmの円形である。構成礫の大半が受熱により



第 13 図　SS06(左下)、SS07(左上)、SS09(右下)、SS10(右上) 実測図



第 14 図　SS07、SS11 出土石器実測図



第15図　SS08(上)、SS11(左下)、SS12(右下) 実測図

赤化し、一部スス状に黒化している。礫の重量平均は約 120 g で大半が破砕している。SS 内での接合も多く見受けられるが、SS07・SS08 と接合するものが多く、他に SS09 との接合も見られる。

SS09（第 13 図）は SS08 の西北約 3.5 m に位置し、約 90 ㎝× 60 ㎝の範囲に 5 ㎝～ 10 ㎝程の角礫が散石している。明確な掘り込みは持たない。構成礫の平均重量は約 65 g で、大半が破砕しており、受熱により赤化している。SS07 及び SS09 の礫と接合している。

SS10（第 13 図）は SS01 の東約 2.5 m に位置し、約 60cm × 20cm の範囲に 5 cm 前後の角礫がまばらに散石している。掘り込みは認められないが、礫は何れも受熱により赤化している。重量平均は 25g である。

SS11（第 15 図）は調査区東の Q-6 区に位置している。下層確認のトレンチを掘った際に検出したため南北が不明であるが、約 90 ㎝× 190 ㎝の範囲に 5 ㎝～ 10 ㎝の角礫が 30 個ほど散石している。何れの礫も受熱により赤化しており、平均重量は約 90 g である。SS11 内からは輝石安山岩の剥片が出土している（第 13 図 5）。5 は長さ 6.7cm、幅 8.8 ㎝、厚さ 2.8cm、重さ 69.9 g で横長剥片である。打点中央から加撃の際に割れたものと思われる。

SS12（第 15 図）は SS04 の南東 2 m に位置し、約 70 ㎝× 70 ㎝の砂利を多く含む範囲がありその中心部分に 5 ｃｍ前後の小礫が 30 個ほど認められた。

表 1　X 層検出遺構一覧表

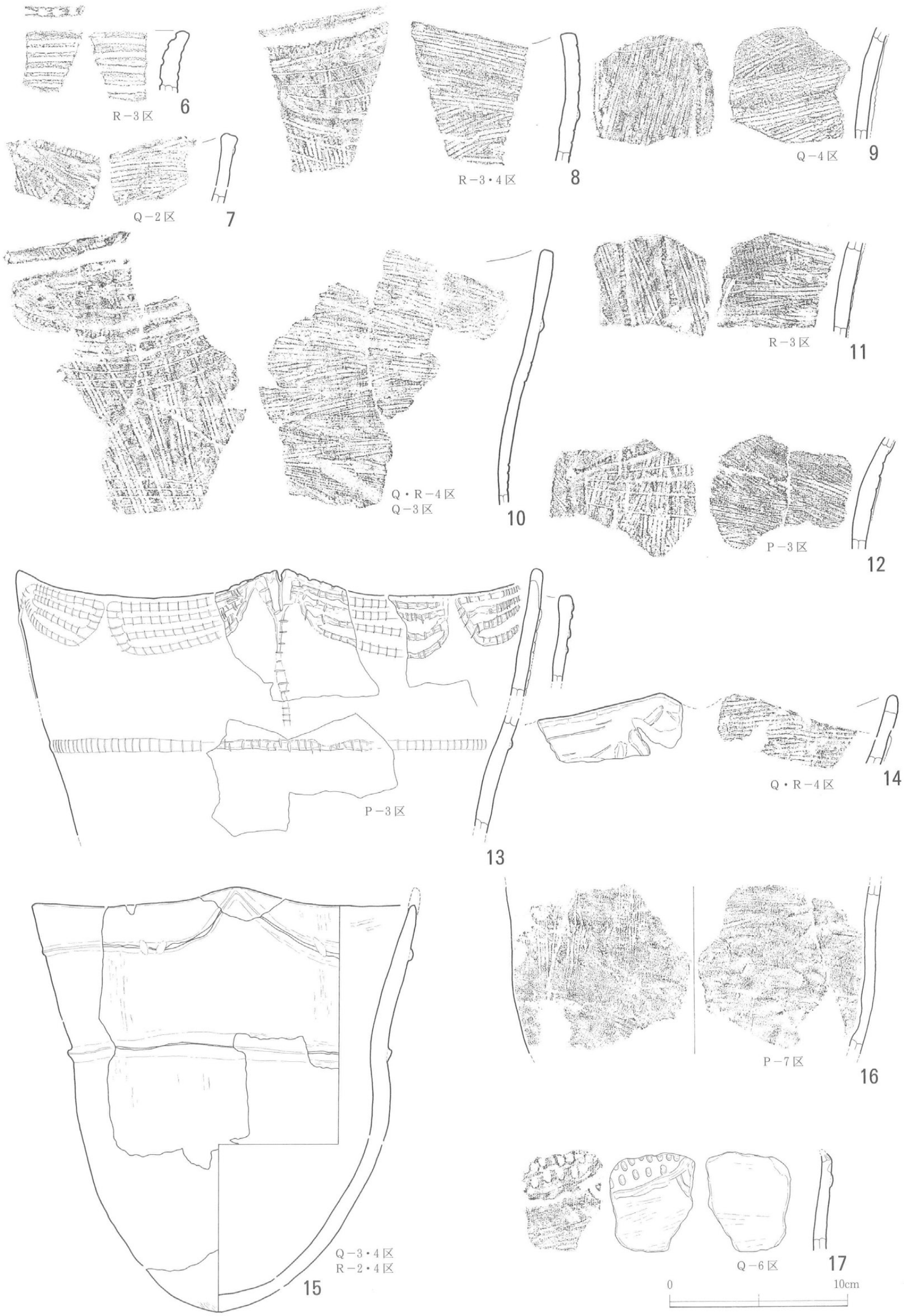
遺構番号	区	礫範囲（m）		掘り込み規模（m）			礫数	接合	
		長径	短径	長径	短径	深さ		集石内	集石間
SS01	R － 3	0.6	0.3	－	－	－	44	○	×
SS02	R － 3	0.5	0.2	－	－	－	20	○	×
SS03	R － 6	1.6	1.5	－	－	－	39	○	×
SS04	R － 6	1.85	1	－	－	－	39	○	×
SS05	R － 4	2.6	2.3	－	－	－	160	○	SS06・07・08・09
SS06	S － 3	1	0.8	0.5	－	0.1	68	○	SS05
SS07	S － 3	1.9	1.6	0.65	0.45	0.15	264	○	SS05・08・09
SS08	R － 3	2.15	1.8	0.7	0.7	0.15	301	○	SS05・07・09
SS09	R － 3	0.9	0.7	－	－	－	17	○	SS05・07・08
SS10	R － 3	0.65	0.25	－	－	－	14	×	×
SS11	Q － 6	1.8	1	－	－	－	29	○	×
SS12	R － 6	0.4	0.4	0.7	0.65	0.15	20	×	×

3．包含層出土遺物

①土器（第 16 ～ 18 図）

X 層からは前期～中期にかけての遺物が出土した。前期のものとしては曽畑式土器が 1 点出土している。中期は深浦式土器が大半を占め、春日式土器、船元式土器が出土している。深浦式の土器は 3 つの主な施文を施される。1 つは口縁部に弧状に刻目突帯を巡らせるもので、もう一つは胴部に貝殻連点の相互弧文を施すもの、もう一つが刻目を持たない突帯を施すものである。最も出土が多いのは刻目突帯をめぐらせるものであるが、何れも相美伊久雄氏の言われる深浦 2 式の範疇に含まれるものと考えられる。

6 は R-3 区出土の曽畑式土器口縁部である。内外面に横方向の沈線を施し口唇部には刺突が施される。にぶい黄橙色の細かな胎土に砂粒を多く含んでいる。7 から 12 は同一個体と思われ内面は横方向の条痕が施され、外面は縦方向の条痕を施した後、口縁部に 1 条の弧状の刻目突帯を施すものである。突帯で区画された内部と突帯下部には沈線が 3 条施され、口唇部は平坦にナデられた後、条痕が施され、やや肥厚する。9 から 12 では口縁部付近から縦方向に 1 から 2 条刻目突帯が施され区画されると思われる。13 は波状口縁で、波頂部は 4 つと思われる。外面は縦方向のナデで区画のための刻目突帯が胴部に 1 条施される。また口縁の波頂部から胴部の突帯まで縦に刻目突帯が 1 条施される。口縁部は平坦にナデが施されやや肥厚する。口縁部には突帯を 4 条弧状に施し突帯に刻目を施す。外面は丁



第16図　X層出土遺物①

寧にナデが施され、胴部内面は横方向のケズリ後にナデが施され、口縁部内面は横方向にナデが施される。14は波状口縁の波頂部である。口縁部を平坦にナデ、外面はナデの後に波頂部から弧状に突帯が施されている。突帯で区画された内部には沈線が弧状に施されている。突帯は縦にも2条施されると思われる。内面は横方向に条痕が施される。15は口縁部から底部まで残っており、底部はやや尖底気味の丸底である。外面は全体的に条痕を施した後丁寧にナデが施される。胴部には1条の突帯が施され、胴部突帯より上位はナデを施しているものの縦方向の条痕が残る。内面はナデが施され口縁部付近には横方向の条痕が残る。口縁部には1条の突帯を弧状に施している。波状口縁で波頂部は2あるいは4つと思われる。口径21.6㎝、器高は推定で23.5㎝である。16は胴部片で、内面は横方向の条痕を施した後ナデを施し、外面は横方向の条痕の後丁寧にナデられ、縦に7から9条の沈線が施されている。18は胴部片で、内面が横方向を主とする条痕が施され、外面は縦方向に条痕が施されるものである。19は底部から大きく膨らみながら胴部へ立ち上がり口縁部に向かいすぼまっていくものである。外面は胴部下位には条痕が施され、胴部の張る部分は丁寧なナデを施した後、貝殻連点の相互弧文が施される。内面は横方向を主とした条痕が施された後ナデが施されている。20は外面が横方向の条痕を施した後ナデが施され、内面は条痕を施した後にオサエが見られる。

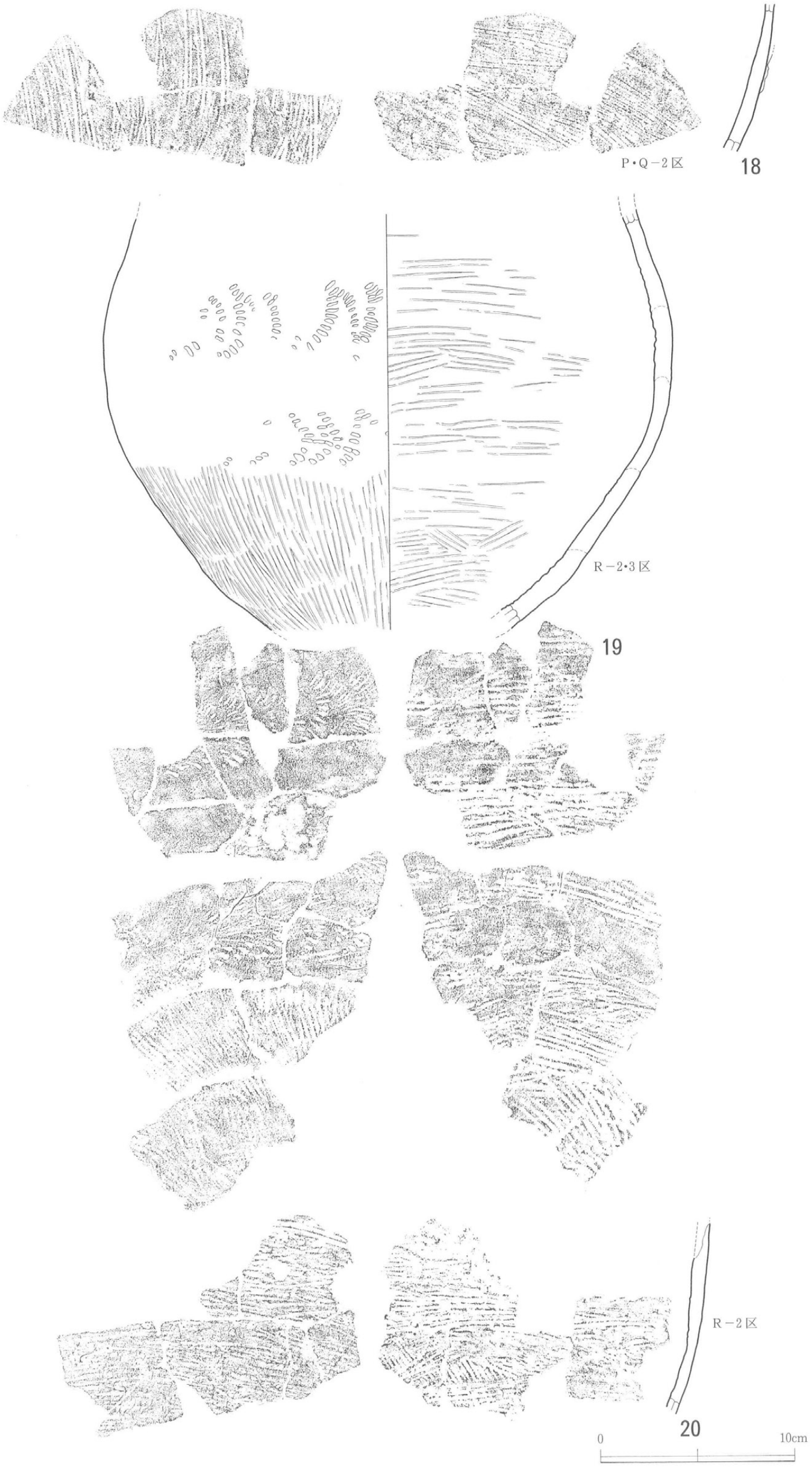
17・21～25は春日式土器の口縁部である。17はやや直行気味の口縁で、口縁直下に刺突とその下に突帯と太目の沈線を施している。調整は内外面とも条痕を施した後にナデを施している。21・22は口縁部が強く内湾するもので口縁直下に弧状の貼付突帯を持つ。突帯には条痕で刻目が施される。調整は内外面とも条痕で、口唇部はナデられる。23は緩やかに内湾する口縁で、外面にナデの後沈線が施される。内面は条痕の後ナデが施されている。24は口縁直下で強く外反するもので、貼付突帯と突帯の上部に沈線が施されている。外面は丁寧にナデが施され、内面は条痕の後ナデが施されている。25は口縁の屈曲部で、外面に沈線で文様を施している。内面はナデが施されオサエの痕が残る。

26・27は船元式土器の胴部である。内面は条痕を施した後にナデが施され、オサエの痕が残る。外面はナデが施された後にLRの縄文が斜めに施されている。

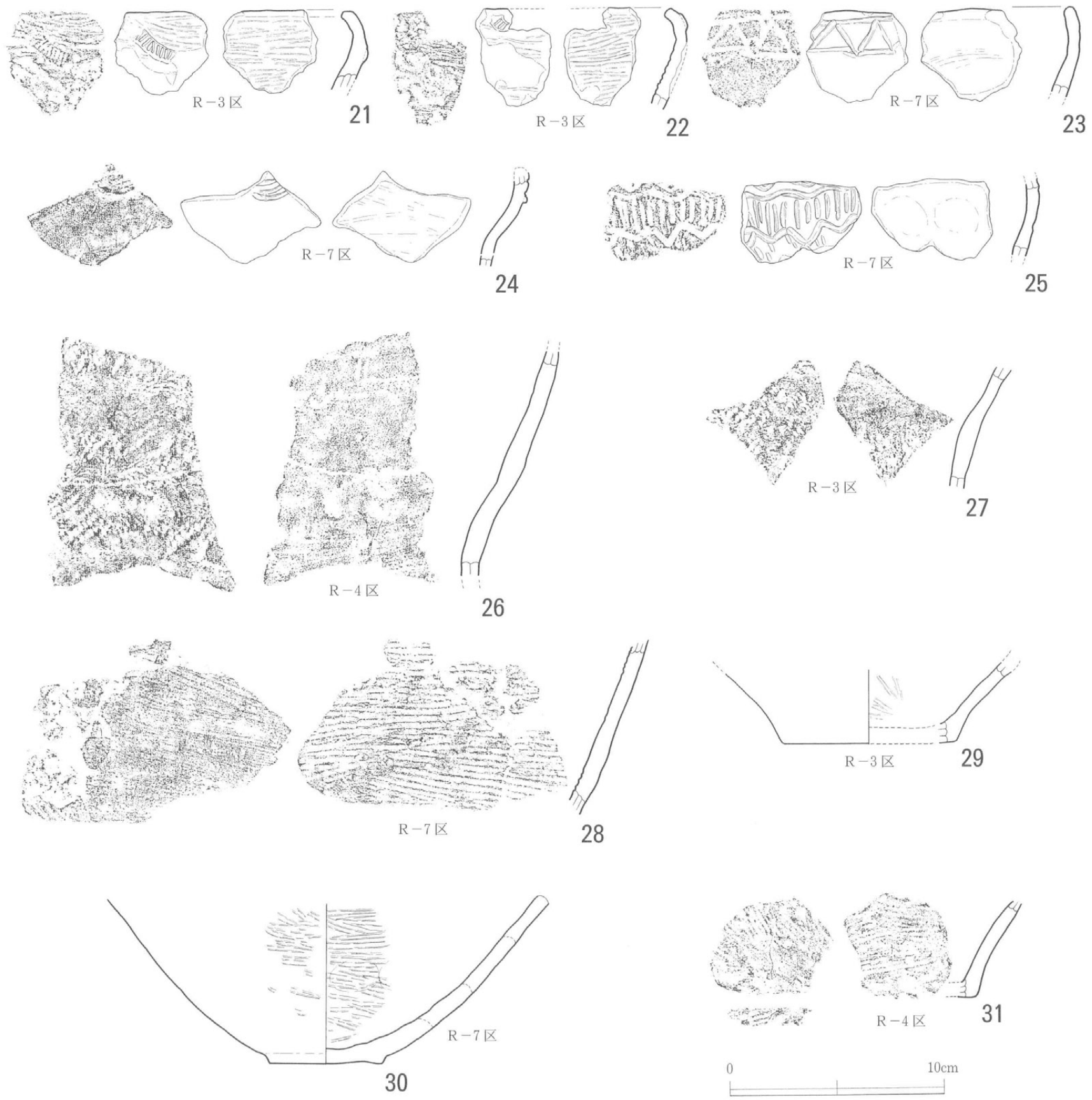
28・30は胴部胎土に多量の雲母を含んでいて、他の土器と異なる。28は胴部片で、外面は条痕の後にナデが施され、内面は条痕が残る。30は底部で、やや上げ底気味な底部が丸みを持って立ち上がる。外面は横方向の条痕を施した後丁寧にナデが施されている。底部内面は他方向に条痕が見られるが胴部は横方向を主体に条痕が施されている。条痕の後オサエが残る。29は底部で、やや外反して立ち上がる。外面はナデが施され、内面は条痕が施される。31も底部で、外面は斜め方向に条痕を施した後ナデを施している。内面も条痕が施される。また、底部外面にも条痕が見られる。

②石器・軽石製品（第19～21図）

剥片石器：剥片石器はQ-3区とR-7区を中心に出土している。石鏃や石匙と言った主要器種は少なく、剥片に簡単な加工を加えスクレイパーとして使用しているものや、剥片をそのままスクレイパーとして使用するものが多い。石材は黒曜石・チャート・瑪瑙のものが小型で、無斑晶流紋岩・無斑晶安山岩のものが厚手で大型のものとなっている。32はチャートの石鏃である。長さ2ｃｍ、幅1.3cm、厚さ0.4cm、重さ0.7gで、表裏面とも丁寧に調整が施され、側縁は鋸歯状を呈している。基部の抉りはやや浅く、厚みが残る。欠損は見られない。33は長さ1.5cm、幅1.6cm、厚さ0.6㎝、重さ1.1gで、調整は粗く原石面を残し、先端を大きく欠損していることなどから平基の石鏃未製品と思われる。石材は瑪瑙である。34は同じく瑪瑙で、比較的粗めの加工を施しつまみ部分の作り出しも粗い。刃部は鋭利であるが急角度であり厚みも残されるため未製品の可能性もある。長さ2.3㎝、幅2.2㎝、厚さ0.7cm、重さ2.9gである。35黒曜石製石匙で、長さ1.8㎝、幅2.5㎝、厚さ0.5㎝、重さ1.4gである。表面はわずかに素材面を残すものの丁寧に調整が施されつまみ部分の作り出しも丁寧である。裏面は大きく素材面を残しているものの周縁の調整は丁寧に施されている。厚みは残るものの刃部は鋭利に仕上げられている。光沢のない暗灰色を呈しており長崎県針尾島産のものと思われる。36は黒曜石製石匙で、長さ1.9㎝、幅2.6cm、厚さ1.6cm、重さ1.7gである。やや粗めに調整が施されており、厚みも残る。刃部の整形も粗い。光沢のない不透明の黒色を呈している。37は瑪瑙を使用した小型のスクレイパーである。小型の縦長剥片を素材とし、背面から急角度の調整を施し刃部を作り



第17図　X層出土遺物②



第18図　X層出土遺物③

出している。長さ1.7cm、幅1.7cm、厚さ0.5cm、重さ1.3g、刃角は75°である。38から41については透明感のある黒灰色をした黒曜石を用いている。38は長さ2cm、幅1.9cm、厚さ0.8㎝、重さ2.6gで楔形石器と思われやや厚みのある剥片の上下端部に急角度な調整が施されているのみである。39はスクレイパーである。長さ2.1㎝、幅1.6cm、厚さ0.6㎝、重さ2.0gである。縦長剥片の背面には原石面を大きく残し、刃部は右側縁から下縁で使用痕が残り、刃角は30°である。40は横長剥片を素材とするスクレイパーである。長さ1.1㎝、幅2.4㎝、厚さ0.7cm、重さ1.6gである。下縁にやや浅く抉り状に刃部を作り出している。刃角は49°である。41は縦長剥片素材を横方向に使用し、縁辺に刃潰しを施している。右側縁に微細剥離が見られることからここを刃部として使用したスクレイパーであると思われる。長さ2.6㎝、幅3.1㎝、厚さ0.9㎝、重さ5.4ｇで、刃角は35°である。42から48はスクレイパーで、43が無斑晶安山岩で、他はすべて無斑晶流紋岩である。42は右側縁に原石面を残し、左側縁に微細剥離がみられる。長さ1.8㎝、幅3.4㎝、厚さ0.9㎝、重さ4.5gである。43は原石面を大きく残し、全体的に風化が激しい。下縁から左側縁にかけて使用痕が残る。長さ3.6㎝、幅2.9cm、厚さ1.2cm、重さ10.8ｇである。44は長さ2.8㎝、幅5.9cm、厚さ1.7cm、重さ23.3ｇである。上部縁辺に調整が施され、下縁に使用痕が認められる。素材となる剥片は偶発的に得られ

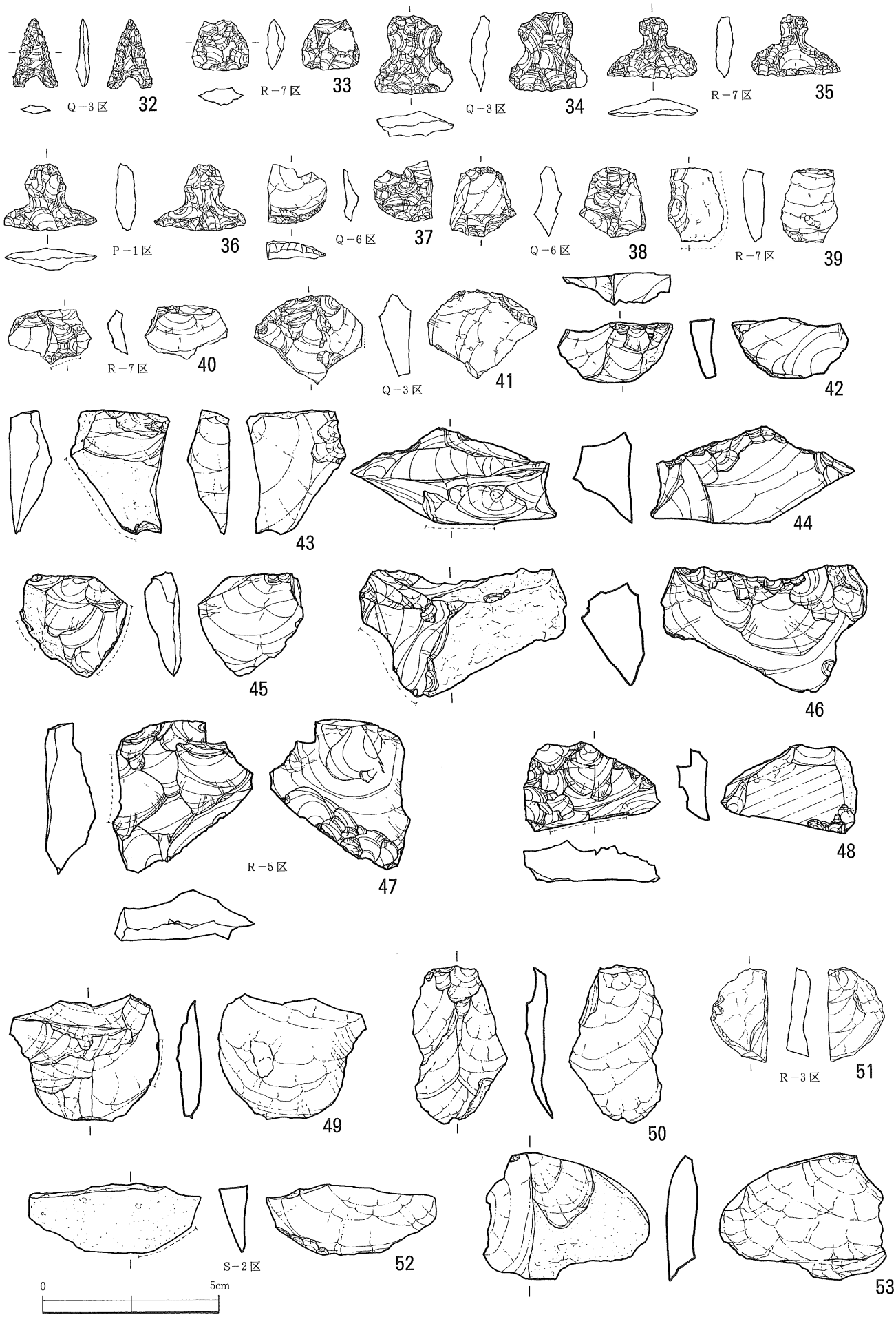
たものを使用していると思われる。45は原石面を残す縦長剥片素材の左右側縁に微細剥離が残るものである。長さ3.0㎝、幅3.1㎝、厚さ1㎝、重さ7.9gである。46は原石面を大きく残す横長剥片に加工を施したものである。主要剥離面の打瘤部の厚みを取るように打面から丁寧に加工が行われ、左側縁の湾曲部に使用痕が認められる。長さ3.7㎝、幅5.9cm、厚さ1.7cm、重さ26gである。47厚みのある縦長剥片の下縁に加工を施している。長さ4.4㎝、幅4cm、厚さ1.3cm、重さ18.1gで、刃角は70°である。48は背面の左右から加工が施されており、下縁に微細剥離が残される。長さ2.6㎝、幅3.9㎝、厚さ1.2㎝、重さ10.2ｇで、刃角は65°である。42と44から48は同一母岩の可能性がある。49は無斑晶安山岩の縦長剥片で、剥片を剥離した際に剥片上部を欠損している。右側縁に使用痕と思われる微細剥離が認められる。長さ4.2㎝、幅3.6㎝、厚さ0.7cm、重さ9.6gである。50は砂岩の縦長剥片で、長さ4.5㎝、幅2.7㎝、厚さ0.7cm、重さ5.9gである。51は瑪瑙の縦長剥片で、質的には37と同一母岩の可能性がある。長さ2.7㎝、幅1.7cm、厚さ0.7㎝、重さ3.7ｇである。52は輝石安山岩の横長剥片を素材としたもので剥片上部は折れて腹面下縁に使用痕と思われる剥離面が認められる。背面は原石面である。長さ2.1㎝、幅4.9cm、厚さ1cm、重さ8.6ｇである。53は無斑晶安山岩の横長剥片で、長さ3.6㎝、幅4.8㎝、厚さ1㎝、重さ15.8gである。

礫石器：R-7区を中心に磨石が多く出土している。54から58は敲石である。54は、長さ6.5㎝、幅3.8cm、厚さ3.0㎝、重さ122.7gである。平面長方形・断面方形と棒状を呈し、礫の上端と下端に敲打痕がのこる。55は平面円形・断面楕円形の下端に敲打痕が面的にのこる。石材は砂岩で、長さ5.3㎝、幅4.3㎝、厚さ3.4㎝、重さ106.3gである。56は長さ5.4㎝、幅4.9㎝、厚さ3.7㎝、重さ106.8g、石材は安山岩である。平面円形・断面半円形で、礫裏面は面的に磨痕が残され磨石的要素をもつ。礫側縁は細かい敲打痕が連続的に残され、礫表面の端部にも敲打痕が残されている。57は長さ6.1㎝、幅5cm、厚さ4.5cm、重さ167g、石材は多孔質安山岩である。平面楕円・断面楕円形の礫の端部に大きめの敲打痕が残される。58は平面楕円・断面不定形の礫の上下端部および平面端部に敲打痕が残る。長さ5.6cm、幅4.6㎝、厚さ3.5cm、重さ125.5gで、石材は砂岩である。59から63は磨石である。59は平面楕円形•断面楕円形の礫の表面に磨痕が面的に残される。長さ6.3㎝、幅4.7cm、厚さ3.8cm、重さ124gで、石材は多孔質安山岩である。60は平面楕円形・断面楕円形の礫の表・裏面および側面に面的に磨痕が残されるものである。長さ6.9cm、幅5.45cm、厚さ4.5cm、重さ217.5gで、石材は多孔質安山岩である。61は平面・断面楕円形の礫の表・裏面に面的に磨痕が残されている。長さ7cm、幅5.8cm、厚さ4.6㎝、重さ217.5ｇで、石材は凝灰岩である。62は平面・断面楕円形の礫の表・裏面に面的に磨痕が残される。長さ6cm、幅4.8㎝、厚さ4.1cm、重さ142.3ｇで、石材は多孔質安山岩である。63は平面楕円・断面楕円の礫の表・裏面に磨痕が面的に残る。長さ9.3㎝、幅7.3cm、厚さ3.9㎝、重さ218gで、石材は多孔質安山岩である。64は凹石である。平面楕円•断面楕円の礫の表面に5ｃｍ×4ｃｍの範囲で0.5㎝ほど浅く窪み、内面は磨耗している。また、側面の一部も面的に磨痕が残されている。65は敲石で、半分ほど欠損している。割れ面の縁辺に敲打痕および敲打による剥落が見られる。また、礫下端にも激しい敲打痕が残されており、敲打の際に大きく剥落している。66はSS02北側から出土した石皿である。板状の雲母・輝石を多く含む輝石安山岩で、表面に磨面が残される。磨面は、ほぼ礫表面全体を使用する範囲と、その内部をより使い込んでいる。67は台石兼石皿である。大型の角礫の表面は磨痕で大きく面をなし、その内部は大きめの敲打痕が残されている。裏面についても平坦な面を利用して面的に磨痕が残され、側面部についても面的に磨痕が残されている。68・69は石皿片で、板状の礫の表・裏面に面的に磨痕が残る。裏面は元々の礫面ではなく割れた後の磨面で、石材は輝石安山岩である。石材の質や厚さ、磨面の状況から見ると、元々同一個体であった可能性がある。70は軽石製品で、中央に直径1㎝の穴が表裏面からあけられている。表裏面はほぼ平坦である。71はSS02北側から出土した軽石製品である。表面の中央が縦方向に僅かに窪んでおり、72は原石面の残る縦長剥片が2枚接合している。各剥片に二次加工は見られない。73は薄く剥げた石片が4枚接合している。何れも表面に原石面を残しており、表面は赤化している。72の資料も原石面部分は赤化している。

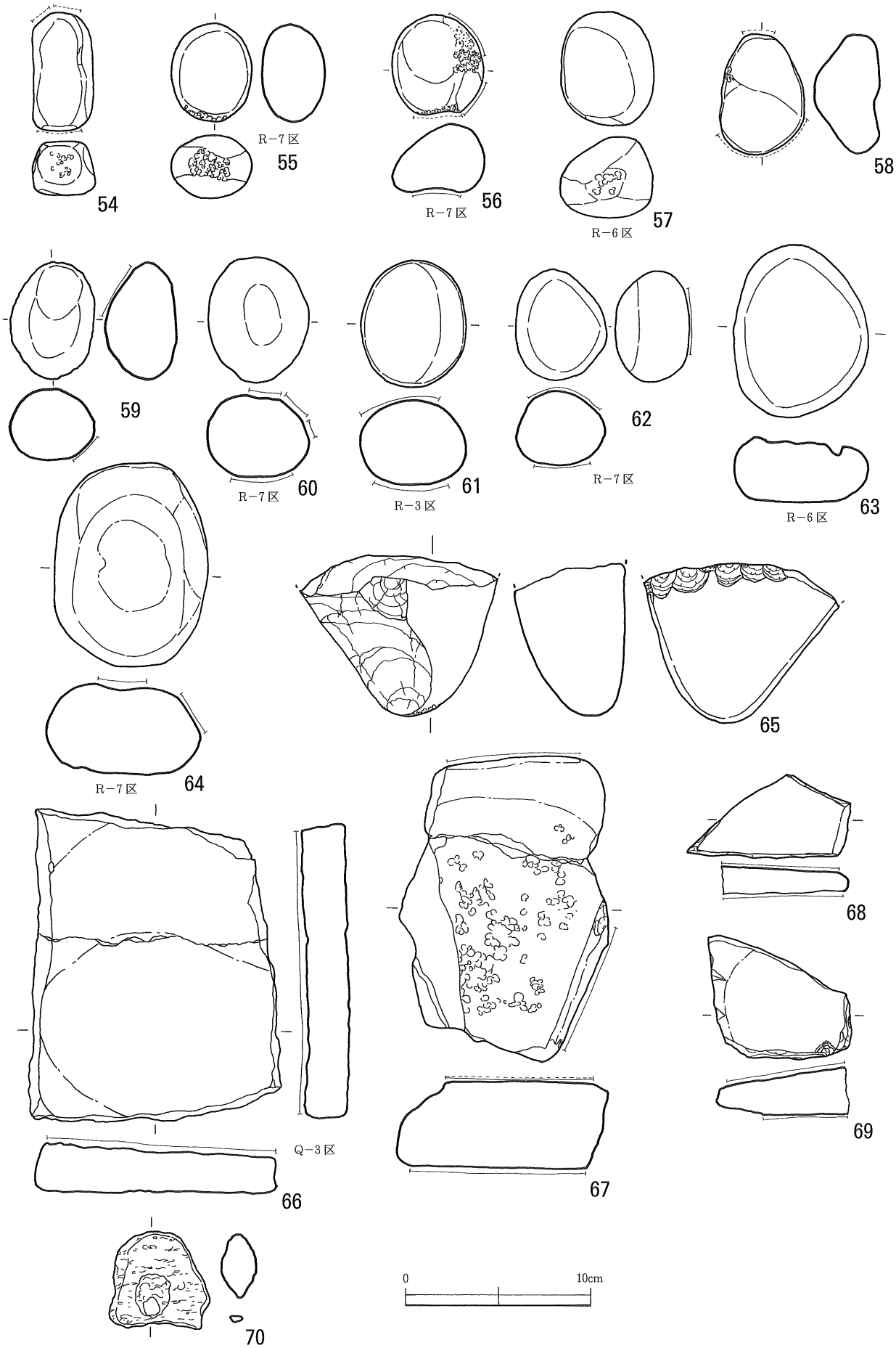
これらの資料から、輝石安山岩は熱を加えてから剥離を行った可能性が考えられるが、輝石安山岩を用いた石器がほとんど出土しないため在地石材の利用法の可能性にとどまる。

表２　Ｘ層出土土器観察表

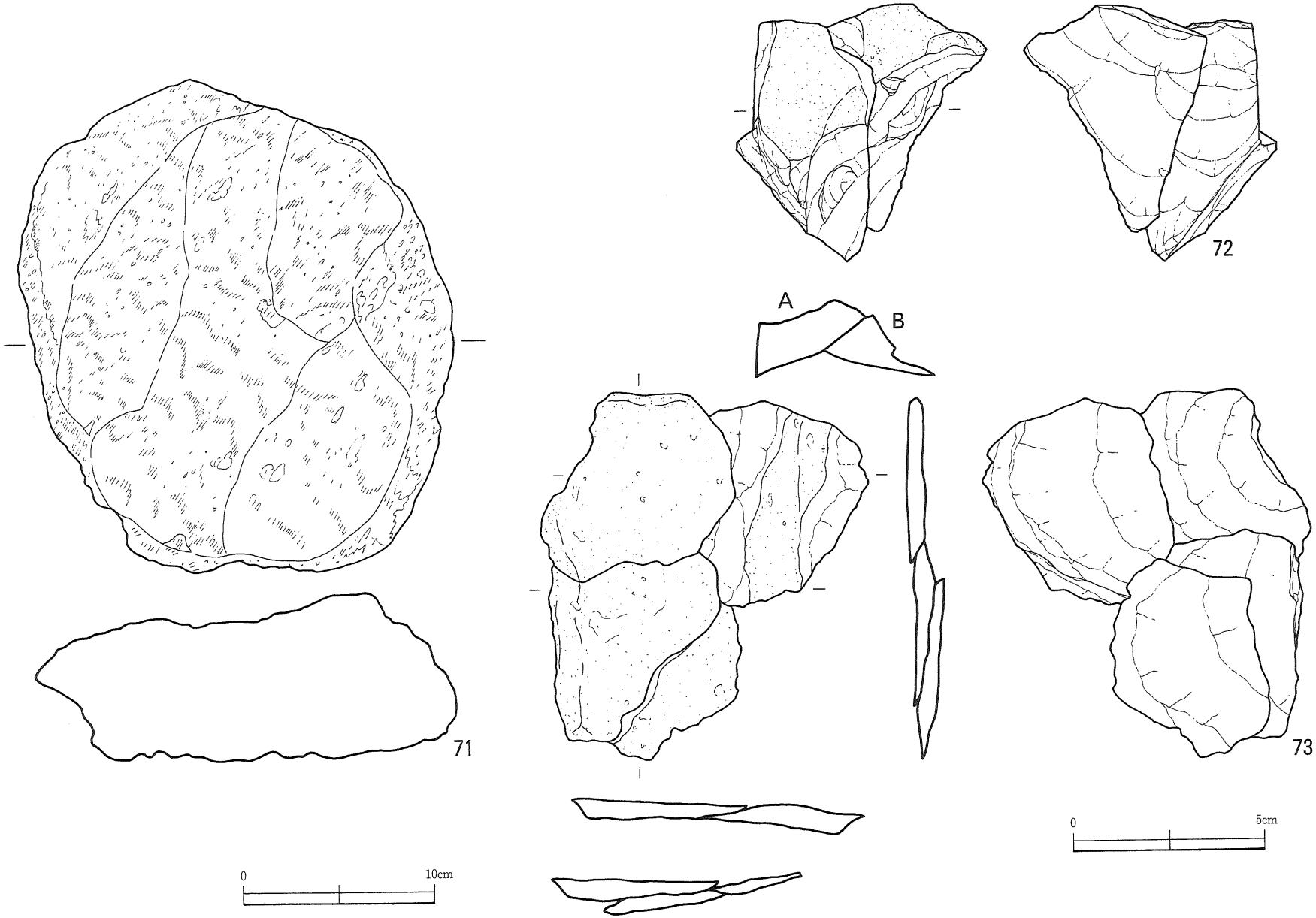
図版番号		出土区	出土層	器種	調整		色調		胎土	備考
					内面	外面	内面	外面		
16	6	R-3	X	深鉢	条痕	条痕	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	砂粒多	
	7	Q-2	X	深鉢	条痕	条痕	黒褐 (10YR3/2)	暗褐 (10YR3/3)	石英・白色砂粒多	8・11・12と同一個体か
	8	R-3 R-4	X	深鉢	条痕	条痕	暗褐 (10YR3/3)	暗褐 (10YR3/3)	石英・白色砂粒多	7・11・12と同一固体か
	9	Q-4	X	深鉢	条痕	条痕	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (5YR6/4)	石英・白色砂粒多	
	10	Q・R-4 R-3	X	深鉢	条痕	条痕	黒褐 (7.5YR2/2)	黒褐 (7.5YR2/2)	白色砂粒多	
	11	R-3	X	深鉢	条痕	条痕	暗褐 (10YR3/3)	暗褐 (10YR3/3)	石英・白色砂粒多	7・8・12と同一固体か
	12	R-3	X	深鉢	条痕	条痕	暗褐 (10YR3/3)	暗褐 (10YR3/3)	石英・白色砂粒多	7・8・11と同一固体か
	13	P-3	X	深鉢	ケズリ後ナデ	ナデ	にぶい黄褐 (10YR5/4)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	石英・白色砂粒多	
	14	Q-4 R-4	X	深鉢	条痕	ナデ	暗褐 (10YR3/3)	暗褐 (10YR3/3)	石英・白色砂粒多	
	15	Q-3・4 R-2・4	X	深鉢	条痕、ナデ	条痕＋ミガキナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	石英・白色砂粒多	口径：21.6 cm 器高：23.5 cm
	16	R-7	X	深鉢	条痕→ナデ	条痕＋ナデ	灰褐 (7.5YR4/2)	黒褐 (7.5YR3/2)	石英・白色砂粒多	
	17	Q-6	X	深鉢	条痕	条痕	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/7)	砂粒多	
17	18	Q・R-2	X	深鉢	条痕	条痕	黒褐 (7.5YR3/2)	明褐 (7.5YR5/6)	石英・白色砂粒多	
	19	R-2 Q-3	X	深鉢	条痕→ナデ	条痕＋ナデ	にぶい黄褐 (10YR5/3)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	角閃石を僅かに含む	
	20	R-3	X	深鉢	条痕→ユビオサエ	条痕→ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	雲母・白色砂粒多	
18	21	R-3	X	深鉢	条痕	条痕	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	長石多	22と同一個体か
	22	R-3	X	深鉢	条痕	条痕	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	長石多	21と同一個体か
	23	R-7	X	深鉢	条痕→ナデ	ナデ	褐 (7.5YR4/3)	黒褐 (10YR3/2)	角閃石多	
	24	R-7	X	深鉢	条痕	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	褐灰 (10YR4/1)	石英・白色砂粒多	
	25	Q-7	X	深鉢	ユビオサエ＋ナデ	ナデ	黒褐 (7.5YR3/2)	黒褐 (7.5YR3/1)	石英多	
	26	R-4	X	深鉢	ユビオサエ＋ナデ	縄文（LR）	にぶい黄褐 (10YR5/4)	黒褐 (10YR5/4)	角閃石多	
	27	R-3	X	深鉢	ユビオサエ＋ナデ	縄文（LR）	にぶい黄橙 (10YR6/4)	黒褐 (10YR3/2)	角閃石多	
	28	R-7	X	深鉢	条痕	条痕→ナデ	灰黄褐 (10YR4/2)	暗褐 (10YR3/3)	雲母・白色砂粒多	
	29	R-3	X	深鉢	条痕	ナデ	明黄褐 (10YR5/2)	にぶい黄褐 (10YR5/4)	白色砂粒多	
	30	R-7	X	深鉢	条痕＋ユビオサエ	条痕→ナデ	にぶい黄褐 (10YR4/3)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	雲母多	
	31	R-4	X	深鉢	条痕	条痕→ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	明黄褐 (10YR7/6)	石英・黒色砂粒多	



第19図　X層出土遺物④



第20図　X層出土遺物⑤



第21図　X層出土遺物⑥

表３　Ｘ層出土石器一覧表

図版番号		出土区	層	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石材	備考
11	1	SS04	X	スクレイパー	5.8	9.4	3.7	210.0	砂岩	
	2	SS04	X	磨石	5.6	3.8	2.3	73.1	安山岩	
14	3	SS07	X	二次加工剥片	3.6	2.4	1.2	5.7	無班晶流紋岩	
	4	SS07	X	剥片	1.5	2.5	0.3	9.0	無班晶安山岩	
	5	SS11	X	剥片	6.7	8.8	2.8	69.9	輝石安山岩	
19	32	Q-3	X	石鏃	2.0	1.3	0.4	0.7	チャート	
	33	R-7	X	石鏃未製品	1.5	1.6	0.6	1.1	瑪瑙	
	34	Q-3	X	石匙	2.3	2.2	0.7	2.9	瑪瑙	
	35	R-7	X	石匙	1.8	2.5	0.5	1.4	黒曜石	
	36	P-1	X	石匙	1.9	2.6	1.6	1.7	黒曜石	
	37	Q-6	X	スクレイパー	1.7	1.7	1.5	1.3	瑪瑙	
	38	Q-6	X	楔形石器	2.0	1.9	0.8	2.6	黒曜石	
	39	R-7	X	スクレイパー	2.1	1.6	0.6	2.0	黒曜石	
	40	R-7	X	スクレイパー	1.1	2.4	0.7	1.6	黒曜石	
	41	Q-3	X	スクレイパー	2.6	3.1	0.9	5.4	黒曜石	
	42	一括	X	スクレイパー	1.8	3.4	0.9	4.5	無班晶流紋岩	
	43	一括	X	スクレイパー	3.6	2.9	1.2	10.8	無班晶安山岩	
	44	一括	X	スクレイパー	2.8	5.9	1.7	23.3	無班晶流紋岩	
	45	一括	X	スクレイパー	3.0	3.1	1.0	7.9	無班晶流紋岩	
	46	一括	X	スクレイパー	3.7	5.9	1.7	26.0	無斑晶流紋岩	
	47	R-5	X	スクレイパー	4.4	4.0	1.3	18.1	無班晶流紋岩	
	48	一括	X	スクレイパー	2.6	3.9	1.2	10.2	無班晶流紋岩	
	49	一括	X	剥片	4.2	3.6	0.7	9.6	無班晶安山岩	
	50	一括	X	剥片	4.5	2.7	0.7	5.9	砂岩	
	51	R-3	X	剥片	2.7	1.7	0.7	3.7	瑪瑙	
	52	S-2	X	剥片	2.1	4.9	1.0	8.6	輝石安山岩	
	53	一括	X	剥片	3.6	4.8	1.0	15.8	無班晶安山岩	
20	54	一括	X	敲石	6.5	3.8	3.0	122.7	砂岩	
	55	R-7	X	敲石	5.3	4.3	3.4	106.3	砂岩	
	56	R-7	X	磨・敲石	5.4	4.9	3.7	106.8	安山岩	
	57	R-6	X	敲石	6.1	5.0	4.5	16.7	多孔質安山岩	
	58	一括	X	敲石	5.6	4.6	3.5	125.5	砂岩	
	59	一括	X	磨石	6.3	4.7	3.8	124.0	多孔質安山岩	
	60	R-7	X	磨石	6.9	5.5	4.5	217.5	多孔質安山岩	
	61	R-3	X	磨石	7.0	5.8	4.6	217.5	凝灰岩	
	62	R-7	X	磨石	6.0	4.8	4.1	142.3	多孔質安山岩	
	63	R-6	X	磨石	9.3	7.3	3.9	218.0	多孔質安山岩	
	64	R-7	X	凹石	11.0	8.0	4.8	290.0	多孔質安山岩	
	65	一括	X	敲石	8.7	10.7	6.0	620.0	砂岩	
	66	Q-3	X	石皿	17.0	13.5	3.4	1150.0	輝石安山岩	
	67	一括	X	台石	16.5	11.3	4.7	1350.0	砂岩	
	68	一括	X	石皿片	8.7	4.5	1.5	75.9	輝石安山岩	
	69	一括	X	石皿片	6.7	7.7	3.5	166.4	輝石安山岩	
	70	一括	X	軽石製品	5.3	5.4	2.0	12.7	軽石	
21	71	SS01	X	軽石製品	27.0	22.8	8.7	955.0	軽石	
	72－A	一括	X	剥片	6.8	3.8	2.0	43.1	輝石安山岩	接合
	72－B	一括	X	剥片	6.0	5.0	1.7	24.3	輝石安山岩	接合
	73	一括	X	破片				59.5	輝石安山岩	

（2）縄文時代から古墳時代

1．調査の概要

試掘結果では黒褐色土中から縄文土器や弥生土器が出土しており、竪穴住居跡も確認されていた。また、Ⅴ層中やⅤ層を埋土とする古代の遺構を掘った際、掘立柱建物跡のピットや土坑、畝状遺構内から縄文時代から古墳時代にかけての遺物が見つかっていた。よって調査区全域についてⅤ層同様に発掘作業員が人力でⅥ層からⅦ層の掘り下げを行った。

縄文時代から古墳時代の遺物は、Ⅴ層からⅦ層にかけて出土が見られたが、このうちⅤ層中のものについては古代の遺構（特に畝状遺構）を掘った際に掘りあげられたものが大半であると思われる。また、Ⅶ層中からの遺物の出土は少なく、出土した遺物の大半がⅥａおよびⅥｂ層からの出土となっている。「あ」区東側では遺物の出土は見られず、西側の谷部周辺から弥生時代と思われる土器が出土しているが、量はあまり多くはない。一番遺物の出土が多かったのは「お」区で、特に弥生時代の遺物が多量に出土している。

Ⅵ層上面での地形はⅤ層上面とさほど変わりなく、やはり、西から東に延びる開析谷となっており、Ⅴ層上面より谷が若干深く入っている。弥生時代･古墳時代の遺構検出は古代と同様、Ⅵ層上面で行っている。古墳時代の竪穴住居跡３軒（SA04～08）と弥生時代の埋設壷を１基、検出している。古墳時代の竪穴住居跡１軒に関してはⅥｂ層に程近いところで検出している。また、縄文時代晩期の埋甕１基（JSC01）、浅鉢が埋納されたと思われる土坑（JSC02）１基についても同様である（第22図）。

第３章１節でも少し触れたが、古墳時代の住居跡３軒（SA04～06）は、検出時黒色土（Ⅴ層）の落ち込みであった。また、特にSA05では古代の須恵器等が埋土中から出土していたため、古代の竪穴住居跡の可能性が考えられた。このような落ち込みと遺物の集中を伴うものが、SA04の南西部、（N・O-5・6区）であと３箇所程見られた。そこでトレンチを入れ調査をしたところ、明確な落ち込みと、ピット等は検出されなかったため、自然の窪地に遺物が流れ込んだものと判断している（SA01～03）。ここからは古墳時代・弥生時代の遺物が多く出土している。よって古墳時代の住居跡は４軒であるが、遺構番号はSA04～06、08となっている（SA07は古代の竪穴状遺構）。

後述するが、星原遺跡では弥生時代の遺構は後期の埋設壷１基である。しかしながら、出土遺物の量は、古代の土師器についで多い。竪穴住居がある古墳時代の遺物はあまり多いとはいえない。

弥生時代の遺物は主に土器であるが、時期は前期から終末までである。中でも多いのは後期から終末にかけてのものである。この時期の土器は、調査区北西の谷を挟んだ西側の高まりにかけてと、M･N-8区を中心に出土している。

また、弥生時代中期後半の土器がP・Q-6・7区を中心に多く出土している。この部分は、周辺よりも御池軽石を多く含み明褐色を帯びており、遺物も集中することから、当初遺構と思われたが、調査を行った結果、掘り込みや柱穴を確認することはできなかった。よって古墳時代以降に撹乱を受けたものと判断した。また、この地点からは脚台付壷（第46図226）や、赤色顔料を塗布された壷（第45図223他）などが出土している。

2．遺構

①縄文時代晩期の遺構

JSC01（第23・24図）はN-10区で検出された。星原遺跡では調査区が南北に細長いため、調査区東端２～3mを通路状に残し、そこに廃土を一旦仮置きし、それを重機で運ぶ方法を取っていた。その通路西側手前まで重機で表土を剥いだ際検出したものである。谷が東側の丘陵に向かって急傾斜で上がっていく丁度際の部分である。

出土したのは縄文時代晩期前半の深鉢形土器である。底部を丘陵側（東）にして口縁部がやや下になって出土した。底部はやや上げ底気味の平底で、外に大きく開きながら胴部で屈曲し外反しながら口縁部へ立ち上がる。口縁部は肥厚し、やや内湾する。内面は横ナデが主体で、胴部屈曲から上にはユビオサエが残る。また、胴部下半には炭化物が大量に付着している。外面は横ナデが施され、胴部下半には帯状にススが、口縁部から胴部屈曲にかけては吹きこぼれと思われる炭化物が付着している。

この炭化物の放射性炭素年代測定を行ったところ、2,950±40BPと言う年代が得られている。口

径 49.3 ㎝、器高 39.0 ㎝、底径 6.1 ㎝である。

JSC02 はⅥａ層掘り下げ中に Q-8 区で検出した。土器が一箇所に集中して出土し、周辺を精査したところ、周辺よりやや暗みを帯び御池軽石を多く含む土中から出土したため、遺構として調査した。口縁部が上、底部が下で、潰れた状態であった。縄文時代晩期前半の浅鉢形土器である。底部は丸底で、大きく丸みを帯びながら開き、胴部最大径で丸みを帯びて屈曲し、頸部がすぼまる。頸部から口縁部は緩やかに外反しながら立ち上がり、口縁部直下には１条の沈線を施す。内外面は横方向に丁寧にミガキが施される。丸底の底部設置面は磨耗がみられる。

この土器の直下の土壌を宮崎大学の宇田津徹朗氏が持ち帰りプラント・オパール分析を行ったがイネは検出されなかった。

JSC01・02 とも検出状態が悪く、特に JSC01 に関しては火を明らかに使用した痕跡が残されるため遺構として取り扱うべきか問題が残されるが、何れの土器の周辺からも同時期の土器を含め縄文土器の出土はほとんど無い。

②弥生時代後期の遺構

弥生時代の遺構は I-11 区で見つかった後期の埋設壷１基だけである。Ｖｂ層掘り下げの際に検出した。壷は東に底部、西に口縁部を向けほぼ真横に横たえた状態で出土した。当初、Ｖｂ層からの掘り込みと思われ、土層観察のベルトを残した状態で掘り下げたが、Ⅵａ層中まで、明確な掘り込みは見られなかった。土坑は壷が半分埋まる程度の深さで、東側にテラスを持つ瓢箪形の土坑と思われる。埋土はⅥａ層に黒色土のブロックと御池軽石を含むものである。周辺よりしまりがないものである。壷は、横たわった状態の上１／３が明らかに磨耗し、風化が激しいことも考え合わせ、1/3 埋まらない状態で長期間横たわったまま放置されていたと考えられる。

壷の胴部下半には１条のローマ字の「Ｊ」のような線刻が認められる。丁度、風化部分より真下の部分にあたる。底部はやや丸み帯びた平底で、胴部が張り、頸部がすぼまる。ややいびつである。外面はハケ目が縦方向に施され、上半はナデ消されている。頸部から口縁部にかけては下から上へハケ目が掻き揚げられている。口縁部内面はナデが施され、頸部には絞られた痕が残る。壷底部内面付近には有機物と思われる黒色の付着物が認められる。口径 10.2 ㎝、器高 22.6 ㎝、底径 4.2 ㎝である。

③古墳時代の遺構（竪穴住居跡）

古墳時代の遺構は竪穴住居跡が４軒見つかっている。規模はまちまちであるが、何れも方形で、テラス等の付帯施設を持たず、住居内部にカマドも見られない。SA08 を除いてはⅥａ層上面でⅤ層黒色土の落ち込みがあり検出した。検出時は方形ではなく楕円形であった。SA08 は宮崎県文化財課の確認調査で確認されていた住居であるが、Ⅵａ層上面ではプランが確認できず、Ⅵａ層を掘り下げ中に周辺より明るく御池軽石が多く含まれるために検出することができた。遺構内からは遺物多くが出土しているが、どの住居からも須恵器は１点も出土していない。

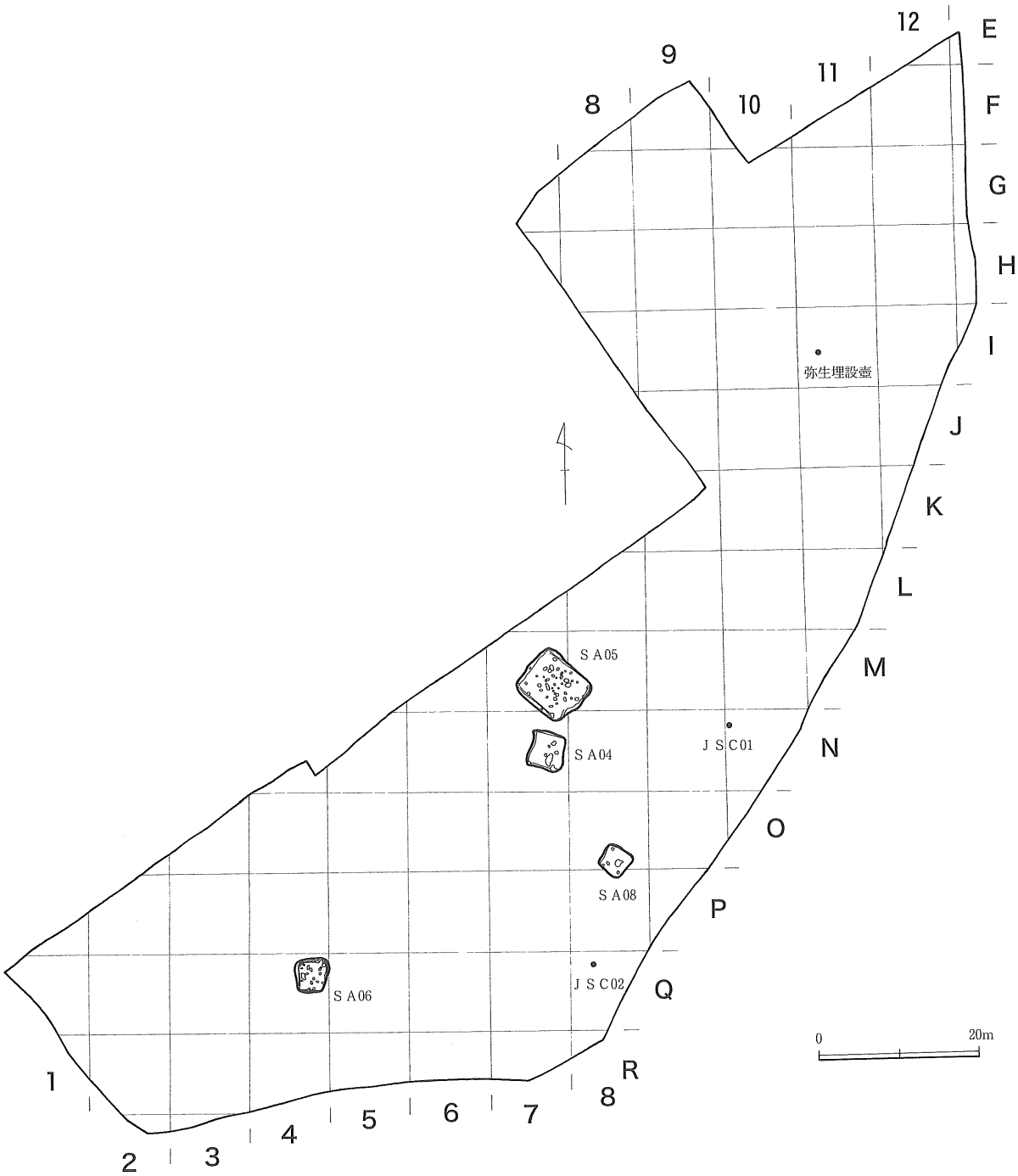
SA04（第 26 図）

N-7 区で検出された。4.6 ｍ四方の方形の竪穴住居跡で、深さは検出面から床面までが 0.5 ｍ、掘り込み面までが 0.7 ｍである。主軸はほぼ南北で、西側上部が現代のイモ穴によって削平を受けている。

住居は西から東に下る傾斜地に立地し、遺構構築時は東西の壁の立ち上がりが 40 ㎝以上は差があったと思われる。住居はⅥａ層中から掘り込まれたものと思われ、１層はⅤａ層、２層がⅤｂ層、３層が畠を作った時期の層に相当するものと考えられる。よって畠が作られる古代までこの住居は半分程度しか埋まっておらず、畠の畝間が SA04 内でも見つかっている。

住居はⅨ層御池軽石を掘り込んだ後、一旦ならし、御池軽石を多く含む暗褐色土（Ⅵ～Ⅶ層の土）で貼床をほぼ平坦に仕上げている。貼床は、御池軽石を極多く含み、非常に硬くしまる。

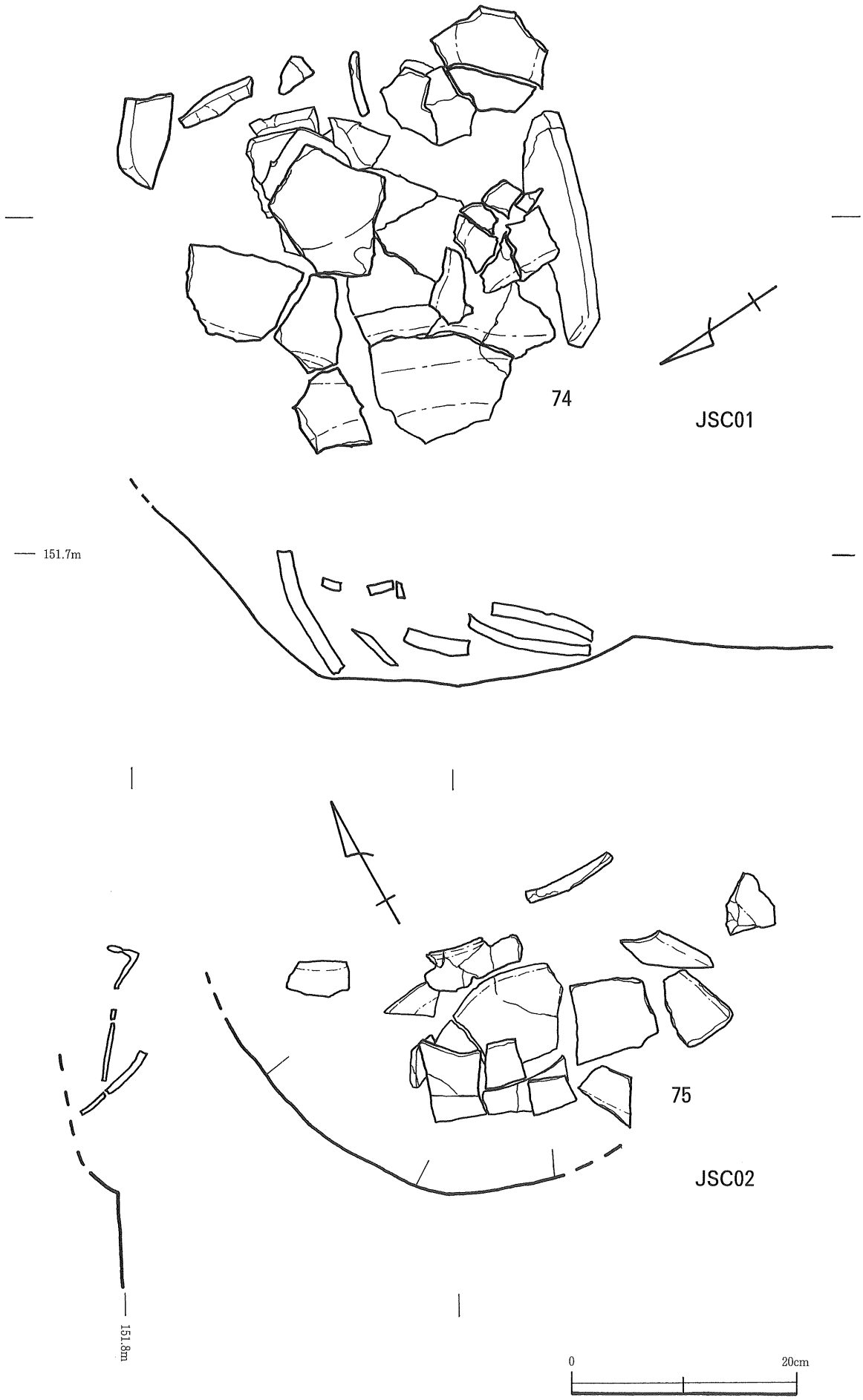
主柱穴は中央の南北方向にある２本で、柱間は 1.2 ｍである。南側の柱穴が直径 34 ～ 40 ㎝で、床面からの深さは 50 ㎝程で底面は平坦である。北側の柱穴は直径 35 ㎝で、床面からの深さは 42 ㎝で底面は平坦である。



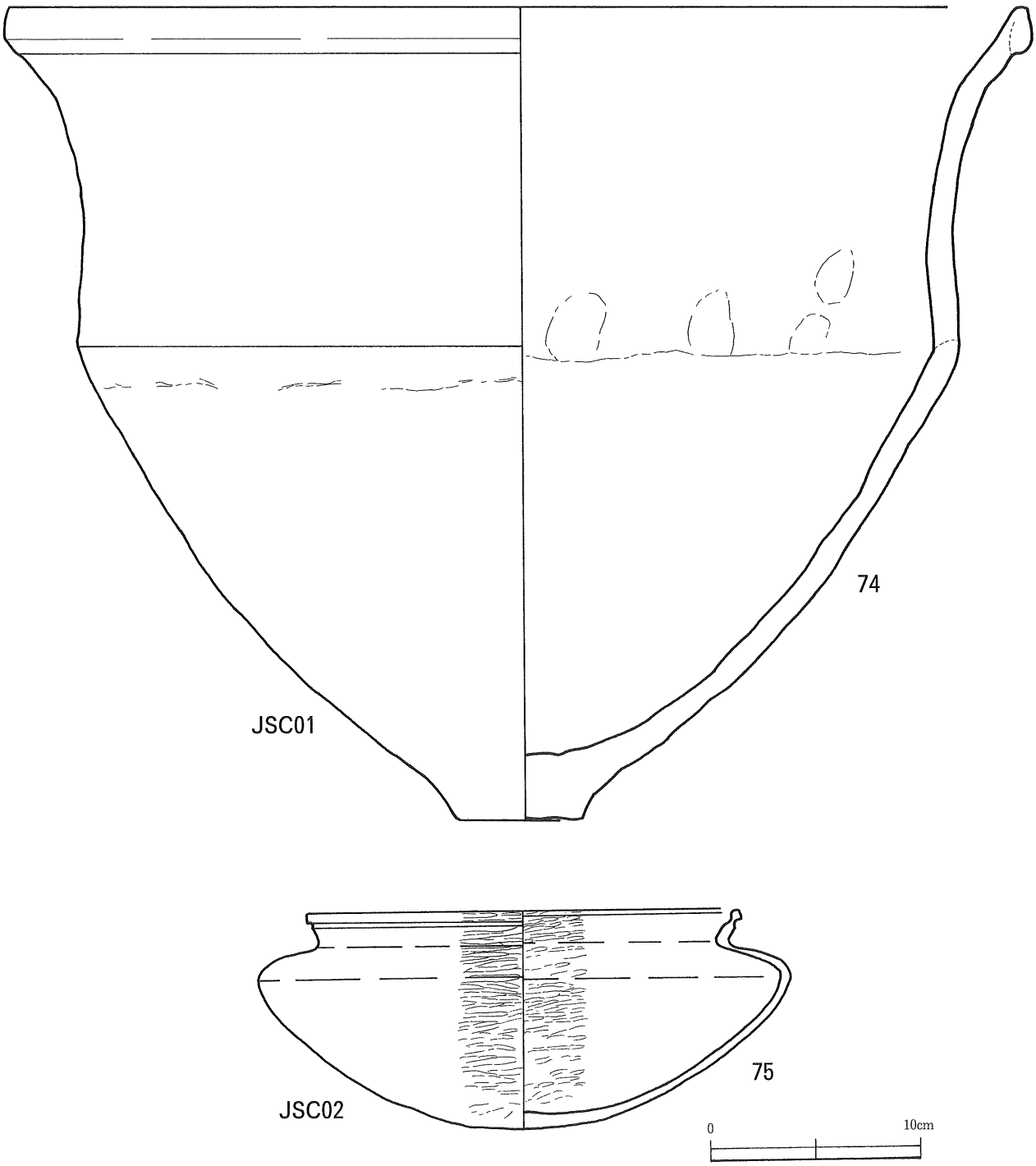
第22図　縄文時代～古墳時代遺構配置図

また、住居の北東隅を除く3隅には直径40～60㎝、床面からの深さ50～70㎝の柱穴が認められた。その他に南側主柱穴の東側には、長軸1.6 m、短軸0.9 m、最深部で1 mを測る土坑と、北側主柱穴北東に長軸0.6 m、短軸0.5 m、深さ0.2 mの土坑があり、主柱穴の中間部分にあたる1 m東側には、径約50㎝、深さ60cmの柱穴が認められた。壁帯溝は認められなかった。

SA04内からの遺物の出土は少なく、床面からの出土は高坏2点と甕の底部片1点である。その他は埋土中からの出土である（第27図77～83）。77・78は高坏で、77は口径19.7㎝、器高は残存で15㎝を超える。外面は斜めから縦方向の磨きが丁寧に施され、内面は横ナデが施される。外観は、脚部は直線的で、坏部は深く、やや丸みを持って直線的に口縁部に立ち上がる。坏部内外面にはススが付着している。脚部分は北側主柱穴の東側で、坏部分は住居南側の柱穴に隣接する窪地と南側主柱穴の南西で出土している。ススが付着している部分は南側主柱穴南西で出土したものである。78は坏部の1/4ほどが残るもので、内外面は横ナデが施される。外観は口縁部へ向かい緩やかに外反する。外面には僅かにススが付着している。口径23.8㎝で、77に比べ口径が大きく坏部の深さは浅めである。



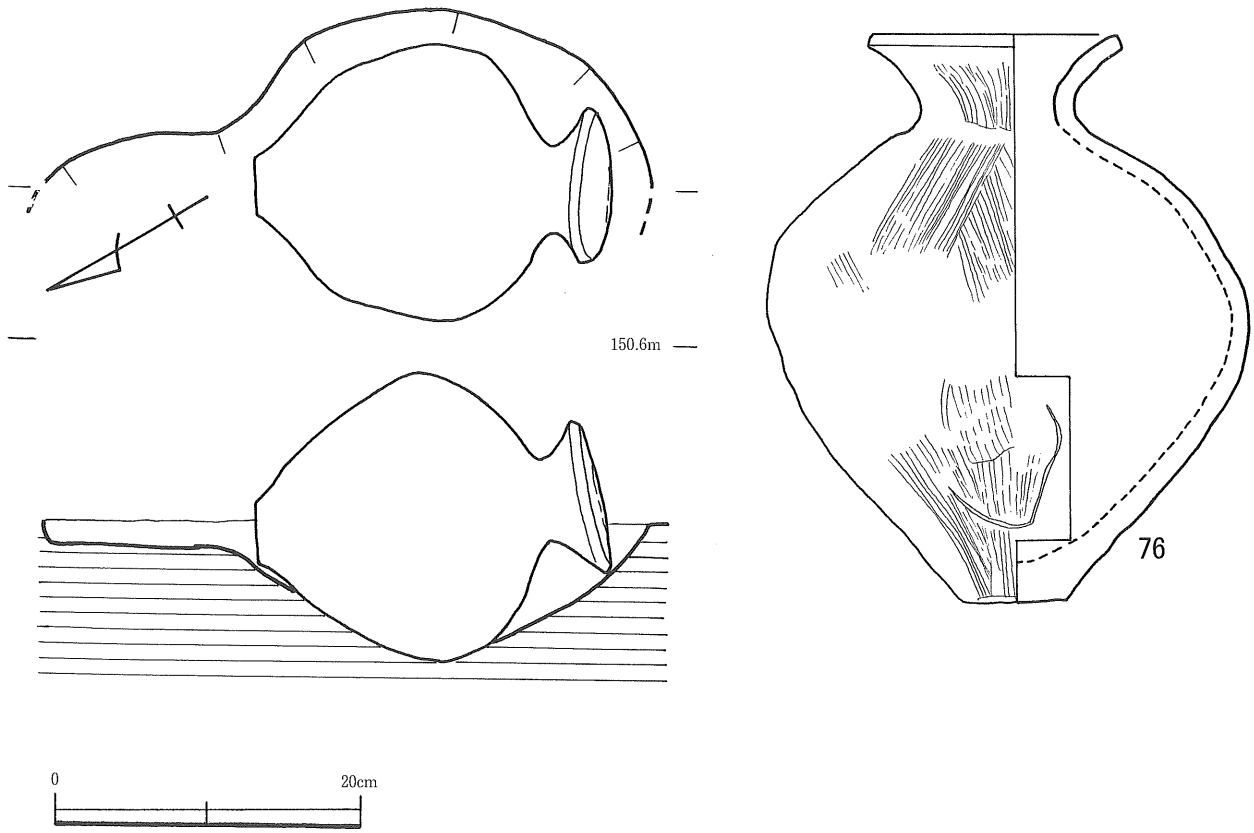
第 23 図　JSC01・JSC02実測図



第 24 図　JSC 出土遺物

表 4　遺構出土遺物観察表（縄文・弥生）

図版番号		出土区	出土層	器種	調整		色調		胎土	備考
					外面	内面	内面	外面		
24	74	JSC01		深鉢	オサエ→ナデ	ナデ	褐灰 (10YR4/1)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	角閃石・黒色砂粒多	口径：49.3 cm 器高：39 cm 底径：6.1 cm スス
	75	JSC02		深鉢	ミガキ	ミガキ	灰黄褐 (10YR4/2)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	白色砂粒	口径：20.6 cm 器高：10.5 cm 底径：丸底
25	76	I-11	VI a	壷	ハケ目、ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	大粒の赤褐・黒色鉱物多	口径：10.2 cm 器高：22.6 cm 底径：4.2 cm 線刻有



第 25 図　弥生時代後期埋設土器

北側主柱穴の浅い土坑上部より出土している。79 は壷の二重口縁の屈曲部分で、内外面は丁寧に横方向を主体にミガキが施され、屈曲部に刻目を持つ。床上の層から出土しているが、Q-7 区出土の 356・357 と同一と思われ、包含層からの流入と思われる。80・81 は甕の底部である。80 は底径が 6.2 ㎝で、外観はやや外反しながら立ち上がる。外面は工具によるナデが下から上へ縦方向に施され、内面はナデが施される。外面に一部ススが付着している。81 は底径が 6.4 ㎝で、内外面はナデが施される。

石器は砥石と槌石が各 1 点出土している。82 は住居西端の床面から出土している。元々は長楕円の礫で、端部に敲打痕を残すものである。礫表裏側面は約 3.5cm ～ 4cm の幅で縦方向に磨耗が見られ、砥石として使用されたものである。また、礫表面には幅約 0.2 ㎝、長さ約 4cm の縦長の溝状の傷も見られる。82 は 3 層から出土しているため住居に伴わない可能性が高い。礫の端部に敲打痕と敲打に伴う剥落を伴うものである。その他、大型の礫や軽石が出土している。

SA05（第 28 図）

SA04 のすぐ北側、M•N-7•8 区にまたがって検出された。北西•南東を長軸にし、8.2 m、短軸が 7.1 mの方形の竪穴住居跡で、深さは検出面から床面までが 0.6 m、掘り込み面までが 0.9 mである。

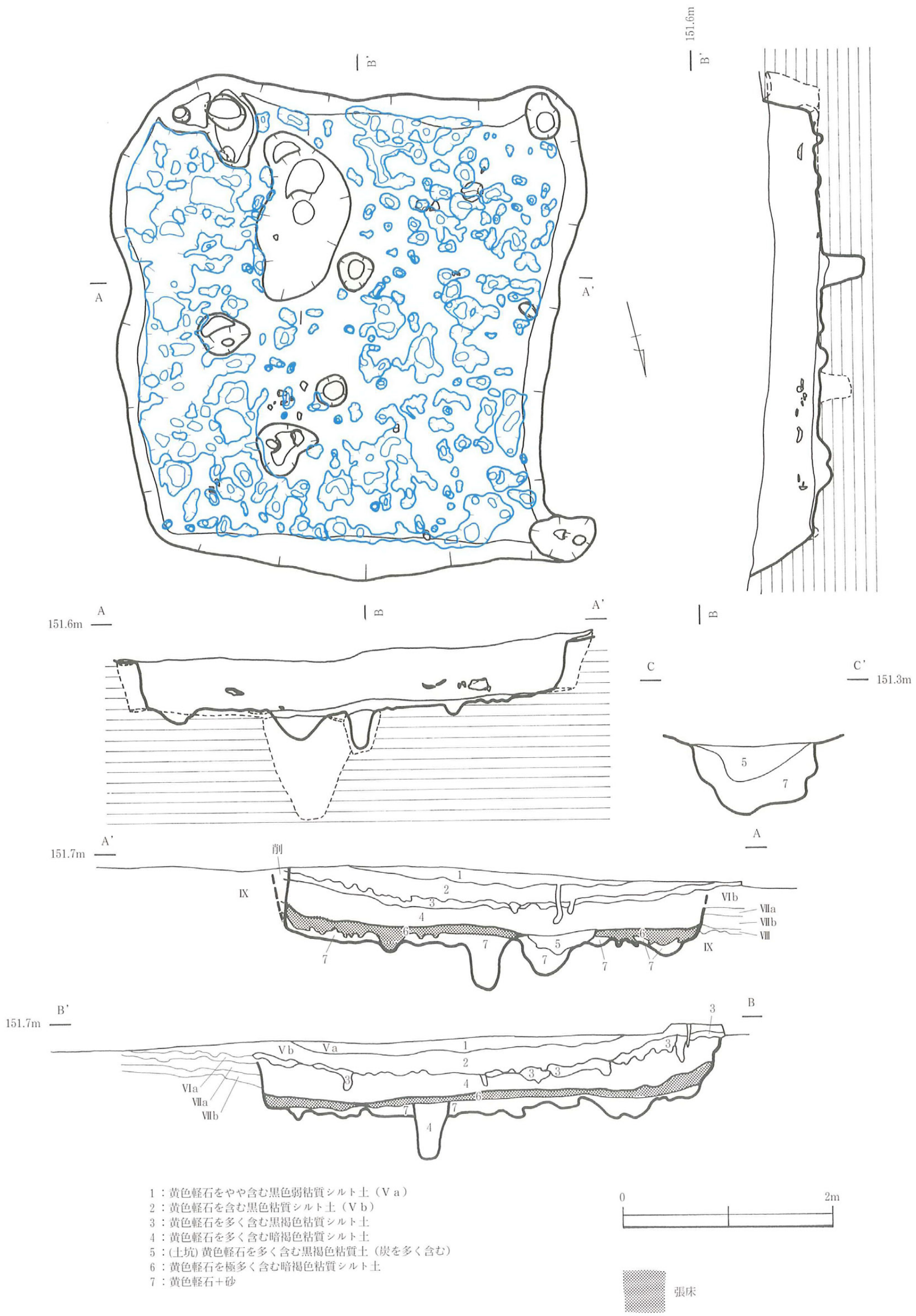
住居は SA04 の真北に位置し、やはり西から東に下る傾斜地に立地している。住居はⅥa 層中から掘り込まれたものと思われ、1 層～ 5 層がⅤa・b 層にあたる。古代の畠の畝間が 5 層で確認されるため畠が作られる古代まで、この住居はほとんど埋まっていなかったことになる。

また、8 層では、長さ 20 ｃm前後の炭化物が南側に 1.7 m四方の範囲で多量に出土している。直接的に住居と関係するものではないが住居廃絶後の段階で、何らかの人的行為が行われた可能性がある。

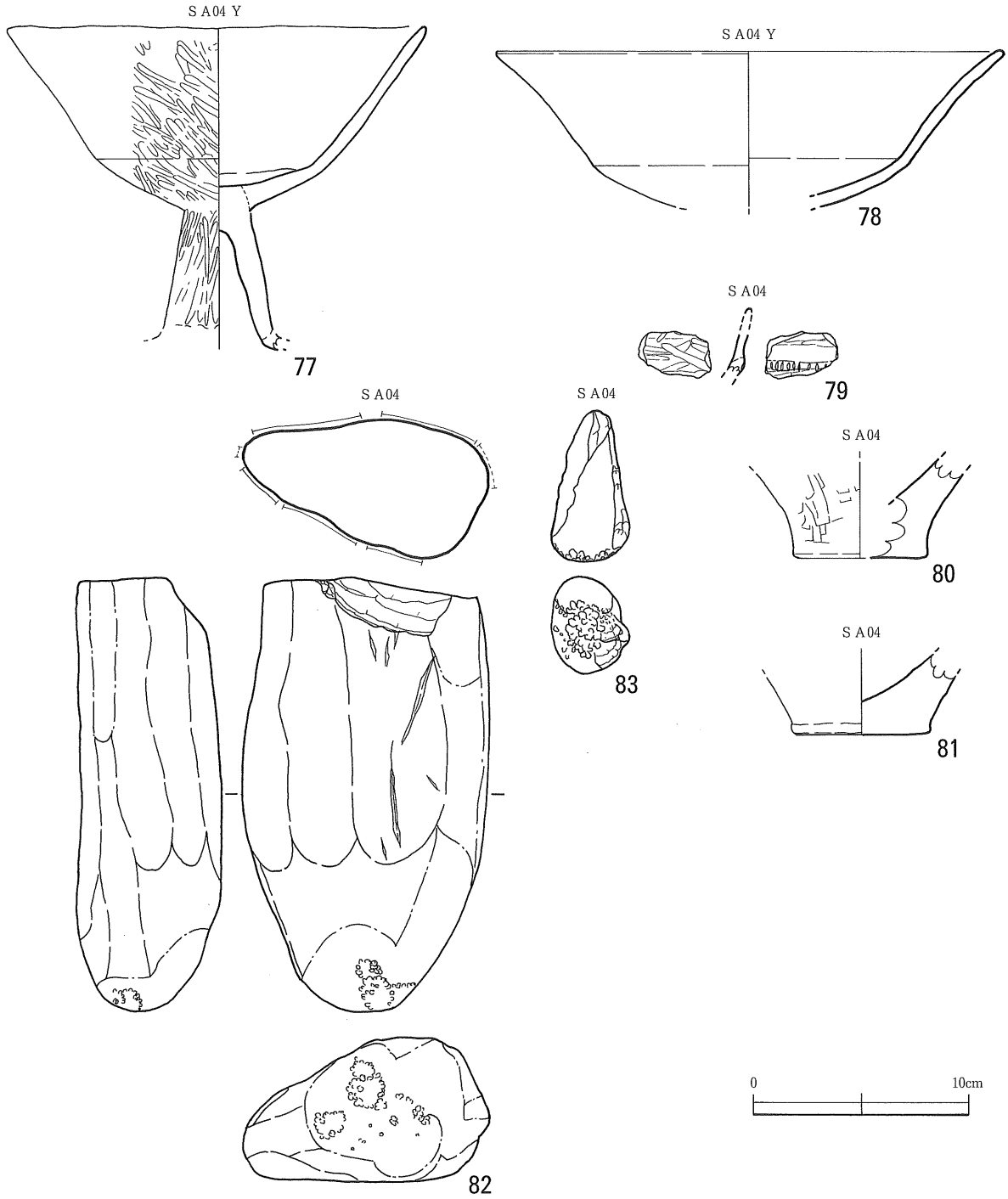
住居はⅨ層御池軽石を掘り込んだ後、一旦ならし、御池軽石を多く含む暗褐色土（Ⅵ～Ⅶ層の土）で貼床をほぼ平坦に仕上げているが、貼床の北側はやや薄い。貼床は、御池軽石を極多く含み、非常に硬くしまる。

主柱穴は住居中央の 4 本で、4 本の柱間は東西方向が 2.5 m、南北方向が 2.3 mである。主柱穴の直径は 40 ～ 50 ㎝で、深さは 50 ～ 70 ㎝である。

住居南東の一部を除いて壁帯溝が廻っている。溝幅、深さとも約 20 ㎝である。また、壁帯溝と重



第 26 図　SA04 実測図（古墳時代）



第 27 図　SA04 出土遺物

表 5　SA04 出土遺物観察表

図版番号		出土区	出土層	器種	調整		色調		胎土	備考
					外面	内面	内面	外面		
27	77	SA04	Y	高杯	ミガキ	ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	橙 (5YR7/6)	黒色鉱物粒多	口径：19.7 cm スス
	78	SA04	Y	高杯	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	黒色・赤褐色鉱物粒多	口径：23.8 cm スス
	79	SA04	4	壷	ナデ、ミガキ	ミガキ	にぶい橙 (7.5YR7/3)	浅黄橙 (10YR8/4)	黒色鉱物粒多	第 54 図 356・357 と同一か
	80	SA04	3	甕	工具ナデ	ナデ	褐灰 (10YR4/1)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	黒色・白色鉱物粒多	底径：6.2 cm スス
	81	SA04	Y	甕	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	黒色・白色鉱物粒多	底径：6.4 cm

なるように住居の壁際には直径 20 ～ 30 ㎝の小ピットが南北に 3 本ずつ認められた。住居内には主柱穴を除く多数の柱穴が認められたが、土坑は認められなかった。

SA05 内からは甕、坩、高坏などが出土している(第 29・30 図)。84 ～ 93 は甕である。84 は住居の北東、壁際で横たわった状態で出土している。外面は工具によるミガキ状のナデが器面全体的に縦方向を主に施されるが、胴部下半は粗くナデられているのか、工具痕が残る。厚く張り出し気味の底部と胴部の境は工具痕が残る。底部は切り離しの際の工具痕を丁寧にナデ消している。胴部はやや丸みを帯び、胴部最大径を測る部分に 1 条の貼付突帯が認められる。突帯はやや幅広で厚みがあり、丁寧にナデが施された後に、布目の残る刻目が施されている。突帯より上部は縦方向の工具によるナデが施され、口縁部は横ナデが施される。内面は底部付近に部分的に工具痕を残すものの、丁寧にナデが施されている。突帯上部の内面には一部オサエも残される。胴部中位より上の外面にはススが付着し、口縁部から突帯下部には吹きこぼれと思われる炭化物も付着している。口縁部がやや強めに内湾している。口径 27.2 ㎝、器高 35.4cm、底径 5.0cm である。85 は住居の南西隅を中心に出土している。上げ底気味の底部から直線的に立ち上がり、口縁部はやや内傾気味である。84 同様外面は工具によるミガキ状のナデが器面全体に施され、内面は丁寧にナデが施され、口縁部から突帯にかけては縦方向にナデが施される。突帯の刻目の方向は 84 と逆である。やはり、外面の胴部下半から上位にはススが認められ、口縁部から突帯の下位まで炭化物が付着する。口径 27.7 ㎝、器高 15.6 ㎝、底径 5.4cm である。86 は小型の甕である。底部から大きく膨らみながら立ち上がり、頸部で屈曲し、口縁部は外反する。外面は丁寧に横ナデが施され、頸部に布目のある刻目突帯を貼り付ける。内面は横ナデが施されれるが、粘土輪積み痕が残る。外観は壷とも鉢とも取れるが、胴部最大径を測る部分を中心にススが付着し口縁部にも吹きこぼれの痕が認められることから甕としている。住居南東より出土している。口径 15.5 ㎝、器高 15.6 ㎝、底径 5.4cm である。87 は甕の口縁部であるが、口径 18.8 ㎝と小型である。外面にススが付着する。88 ～ 93 は甕の底部で、88 は住居南東から出土している。厚みのある張り出し気味の円盤状の底部から丸味を帯びて立ち上がる。底部には接合痕が残される。底部内面は、指で押し込んだように深く窪む。底部外面にはモミの圧痕が認められる（図版 9)。89 ～ 91・93 は平底で、89 は底部に棒状の工具痕を残す。91 はやや小ぶりで、内面に工具痕が残る。94 ～ 96 は高坏の坏部である。94 は住居北東隅の柱穴の上から口縁部を下にして出土した。内外面とも風化が激しいが、部分的に縦方向のミガキが施され、上下端部は横ナデが施されている。また、内外面とも接合痕が残る。口縁部が大きく開く。96 は南東隅の柱穴内から出土している。97 ～ 99 は高杯脚部で、97 は北西の主柱穴のすぐ西側から出土している。外面に縦方向のミガキが、内面にナデが施される。98 は住居北西隅の柱穴のすぐ西側から出土している。外面には丁寧なナデが施され、ススが付着する。99 は外面が縦方向にミガキが施され、内面は横ナデが施されている。住居内からは高杯の坏部と、脚部が多く出土しているが、坏部と脚部が接合するものはない。100 ～ 102 はミニチュア土器である。100 と 101 は住居南側で近接して出土している。100・102 は円錐状を呈し、口縁部が底部に比べ薄い。101 は全体的に厚くユビオサエもしっかりと残る。103・104・106・108・109 は坩である。103 は住居北西の 84 の近くから出土している。器面は風化気味であるが、ナデが施されている。底部から丸く立ち上がり頸部で屈曲する。胴部と口縁部の接合痕が残る。口縁部はやや内傾気味である。口縁部と胴部の長さはあまり変わらず、胴部がやや長めとなっている。104 は住居北東隅の壁際で底部を上にして出土している。口縁部を欠いているが、胴部外面は下半が丁寧なミガキが横方向を主に、最大径部分が斜めに、上部が縦方向に施されている。内面はナデが施されている。底部は丸底である。106・108・109 は坩の底部で、やや大ぶりである。内外面は丁寧にナデが施され、106 は内面に工具痕が残る。底部にはススが付着する。105 は下部を欠損しているが、台付鉢と思われる。胴部外面はハケ目が残り、口縁部は下から上へハケ目が掻き上げられている。内面はナデが施されている。口径 10.8 ㎝である。南東主柱穴の東側から出土しており、同一個体と思われる破片が SA04 から出土している。107 は平底の壷か鉢の底部と思われ、外面は工具によるミガキが施され、内面はナデが施される。

石器は槌石と砥石、軽石製品が出土している。110 ～ 112 は槌石である。110 は住居東の壁際から出土しており、丁度 86 の下にあたる。長い楕円形の礫の端部には敲打痕が面的に残り、敲打に伴う剥落も見られる。礫表面から左側面にかけては敲打痕が残り、右側面から裏面にかけては面的に磨耗が

見られる。長さ 14.6cm、幅 5.3 ㎝、厚さ 5.3 ㎝、重さ 670 ｇの砂岩製である。112 は 96 が出土した南東柱穴から出土しており、96 の上に乗っていた。棒状の細長い角礫の端部に激しく敲打痕が残される。長さ 18.0 ㎝、幅 7.5 ㎝、厚さ 5.6 ㎝、重さ 1,130 ｇの砂岩製である。111 は南西の壁際から 85 の甕の破片に挟まれるように出土した。長い楕円形の礫の上下端部と側面にかけて敲打痕が残される。長さ 15.8 ㎝、幅 7.2 ㎝、厚さ 4.3 ㎝、重さ 750 ｇの砂岩製である。113 は砥石で、表面が磨耗によって浅く窪む。114 ～ 117 は軽石製品である。114 ～ 116 は何れも軽石表面に穴が 2 つから 6 つあけられている。116 の穴は貫通していない。117 は表面に 5 ～ 7cm 幅の浅い窪みが縦に見られる。用途は不明である。

SA06（第 32 図）

他の 3 軒と少し離れた Q-4 区で検出された。南北を長軸にし、4.5 m、短軸が 4.3 mの方形の竪穴住居跡で、深さは検出面から床面までが 0.35 m、掘り込み面までが 0.5 mである。検出時は円形のプランをしていた。掘り下げ段階で北側に開く方形住居であることを確認した。検出面がⅦａ層中であることから住居の深さが他より比較的浅いものとなっている。SA04・05 同様上位の埋土はⅤ層を基調とするもので、古代まで、半分程度しか埋まっていなかったものと思われる。

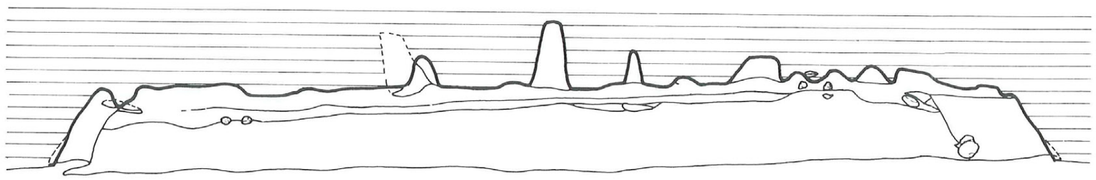
住居はⅨ層御池軽石を掘り込んだ後、一旦ならし、御池軽石を多く含む暗褐色土（Ⅵ～Ⅶ層の土）で貼床をほぼ平坦に仕上げている。貼床は、御池軽石を極多く含み、非常に硬くしまる。

主柱穴は住居中央の 2 本で、東西方向に立つ。柱間は 1.8 mである。主柱穴は西側が直径 40 ㎝で、深さは 40 ㎝である。東側は直径 35cm、深さ 40 ㎝である。

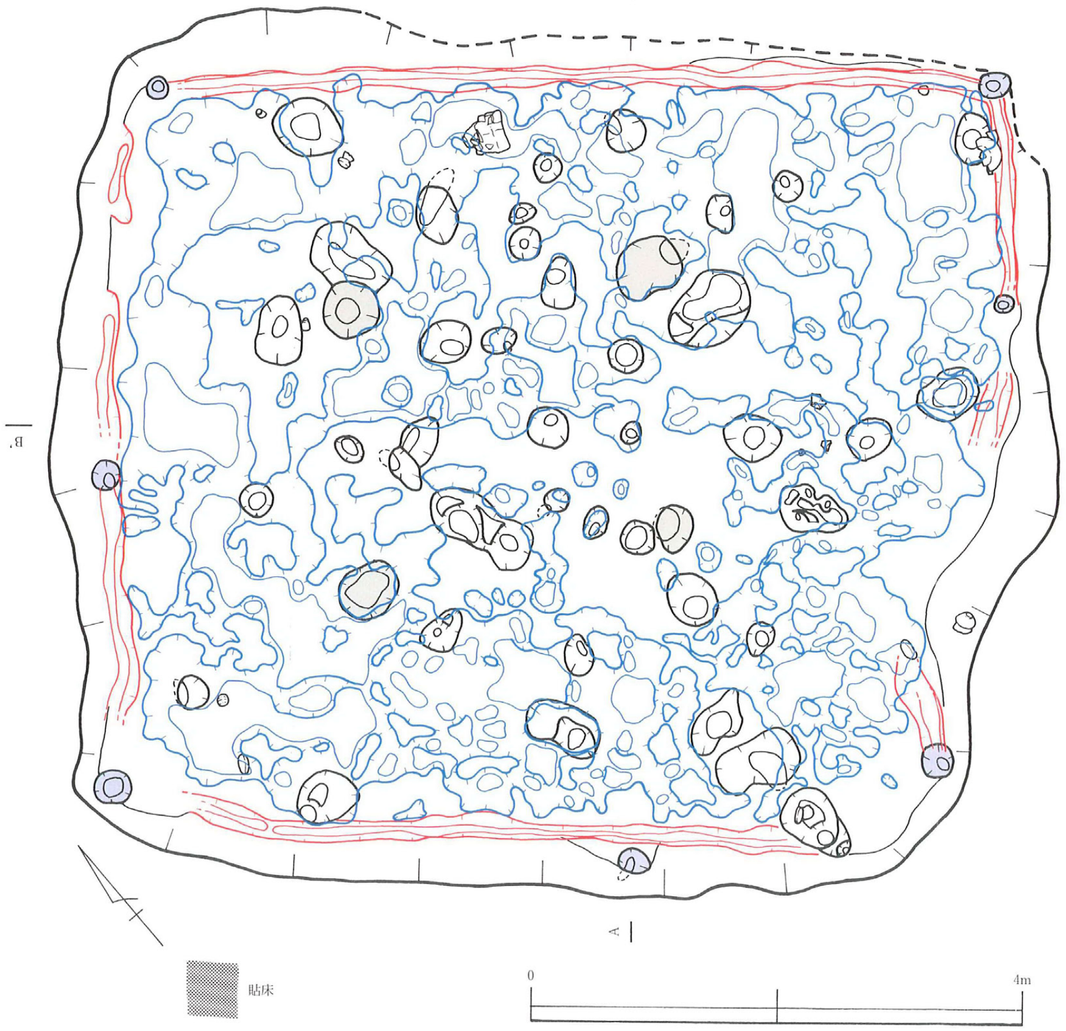
住居の壁際には壁帯溝が廻っている。溝幅 15 ㎝、深さ 10 ㎝である。また、壁帯溝と重なるように住居の壁際には直径 20 ～ 30 ㎝の柱穴がいくつか認められた。住居内には主柱穴を除く多数の柱穴と土坑が 2 基認められた。土坑の 1 基は西側主柱穴の西側にあり、長軸 0.9 m、短軸 0.6 m、深さ 0.3 m の楕円形の浅い皿状を呈す。また、住居北東隅に直径 0.5 m、深さ 0.2 mほどの円形の土坑が認められた。

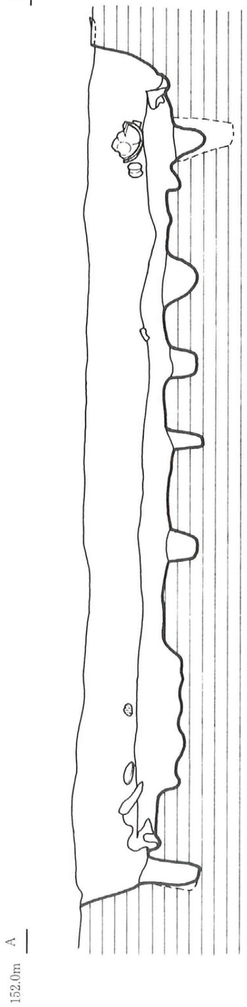
遺物は住居の四隅から多く出土している（第 33 図）。SA06 の遺物は他の住居に比べ橙色を呈しているものが多いようである。118 ～ 120 は甕である。118 は住居南東隅で出土した。円盤状の厚みのある底部からやや丸味を帯びて外に開きながら立ち上がる。口縁部下にはやや細めの突帯を貼り付け後、布目のついた刻目を施す。外面は工具によるナデが施され、突帯上部は斜め方向のナデが施される。内面は全体的に丁寧にナデが施され、口縁部付近は斜め方向のナデが施される。内外面にはススが付着し、口縁部外面から突帯付近まで炭化物が付着する。口径 31.0 ㎝、器高 29.1 ㎝、底径 6.9 ㎝である。119 は住居北西隅から出土している。底部を欠いているが、外面は工具によるミガキ状のナデが胴部下半は斜めから横方向に、口縁部は斜め方向に丁寧に施され、1 条の断面三角の突帯を口縁部下に貼り付けている。突帯を貼り付ける際に丁寧に横ナデが施される。突帯に刻目は認められない。内面は横ナデが施され、口縁部付近には粘土の輪積み痕が残る。口唇部は平坦にナデが施される。口径 31.6 ㎝である。胴部外面にススが付着する。120 は住居北東隅から出土している。口径 23.2 ㎝である。器面は工具によるナデが斜め方向に丁寧に施され、布目の残る刻目突帯が口縁部下に 1 条認められる。内面は横ナデを主体とし、ユビオサエが残る。また、粘土の輪積み痕も残る。外面にはススが付着する。121 は高杯の坏部で、住居北西部から出土している。丸味のある坏部は大きく開き、口唇部は平坦に仕上げられている。内外面とも丁寧にナデが横方向に施される。外面にはススが付着する。口径 23.2 ㎝である。122 は高杯の脚部である。下に向かって大きく開き、外面は丁寧な横ナデが施され、内面上部はケズリが、下部はナデが施される。123 は坩で、住居北東隅で出土している。外面は丁寧にナデが施され、一部ミガキ状に残る。内面はナデが施されるが、粘土輪積み痕が残る。底径 1.8 ㎝である。124 は甕の底部で、住居北西隅から底部を上にして出土している。胴部から上を欠いている。円盤状の厚みのある底部で、底径 6.4 ㎝である。底部付近は横ナデが施され、胴部は縦方向にナデが施される。内面は横方向のナデが施され、底部は平坦である。

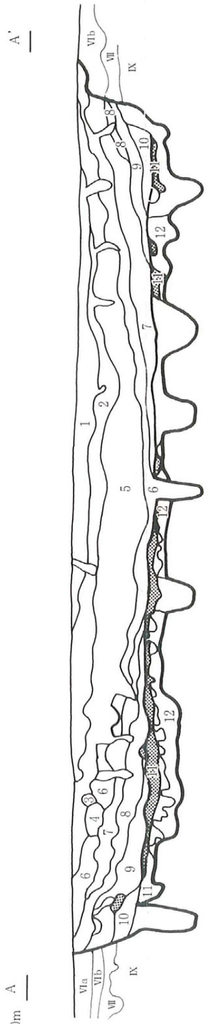
石器は磨製石鏃と槌石、敲石が各 1 点出土している。125 は磨製石鏃で、床面から出土している。平基の鏃で、頁岩製である。丁寧に凌ぎを作り出している。長さ 4.3 ㎝、幅 3.3 ㎝、厚さ 0.3 ㎝、重さ 4g である。126 は槌石で、長さ 14.0cm、幅 5.4cm、厚さ 4.0 ㎝、重さ 400 ｇである。砂岩の楕円形礫の上下端部に敲打痕が激しく残り、敲打に伴う剥落が残る。裏面は面的に磨耗が見られる。住居

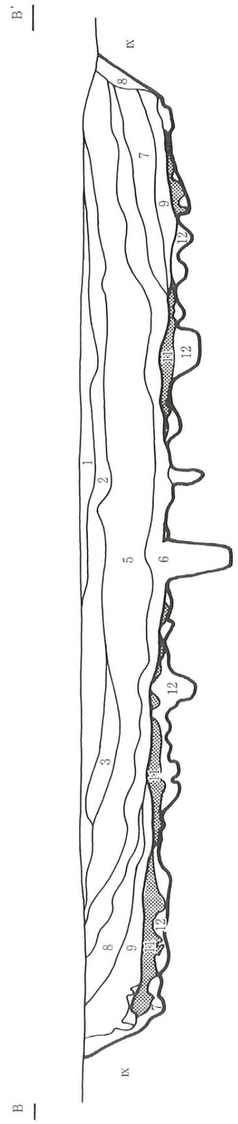


1：黄色軽石をやや含む黒褐色弱粘質シルト土
2：黄色軽石を所々含む黒褐色粘質シルト土
3：黄色軽石を含む黒色粘質シルト土
4：1に黄色軽石ブロックを含む
5：1ブロック
6：黄色軽石を含む灰黄褐色～褐色粘質シルト土
7：黄色軽石を含む褐色粘質シルト土
8：黄色軽石を含む明褐色粘質シルト土
9：黄色軽石を多く含む褐色粘質シルト土
10：黄色軽石を多く含む暗褐色粘質シルト土
11：黄色軽石を多く含む褐色粘質シルト土
12：黄色軽石＋砂









第 28 図　SA05 実測図（古墳時代）

南側から出土している。127は敲石である。長さ11.7㎝、幅10.1㎝、厚さ5.1㎝、重さ930ｇである。砂岩の円礫の側面部に激しく敲打痕が残り、表裏面は磨面が形成される。住居北東から出土している。

SA08（第35図）

SA04・05の南東、P・Q－8区で検出された。軸をSA05とほぼ同じくし、長軸3.8ｍ、短軸が3.6ｍの方形の竪穴住居跡で、深さは検出面から床面までが0.5ｍ、掘り込み面までが0.7ｍである。他の3軒住居と違いⅤ層の黒色土の落ち込みが見られなかった。検出面はⅥｂ層中であるが、深さはSA04・05とさほど変わらない。埋土の堆積状況を見ると、1・2層はⅥ層を主体とする褐色の土で、3層は1・2層の褐色土に黒色を含む非常に硬くしまった層で、御池軽石を非常に多く含んでいる。また、4層を掘り込むように堆積し、また、やや緩やかに窪みはするもののほぼ平坦になっていることなども考え合わせると、当初の住居がある程度埋まった時点で、再度残った窪地を利用して住居としている可能性が考えられる。当初の住居はⅨ層御池軽石を掘り込んだ後、一旦ならしている。1回目の住居では他の住居のような明確な貼床は認められず、住居の中央を中心に貼床が残されるのみであった。

この住居では明確な柱穴は認められず、主柱穴と思われるものは3本で、北東の1本を欠いている。柱穴の直径は40～50㎝であるが、深さが10～30㎝と非常に浅い。柱間は1.7ｍである。住居中央には、長軸1.8ｍ、短軸0.8ｍ、深さ0.3ｍの土坑が認められ、土坑には炭化物が多く含まれていた。壁帯溝は認められなかった。

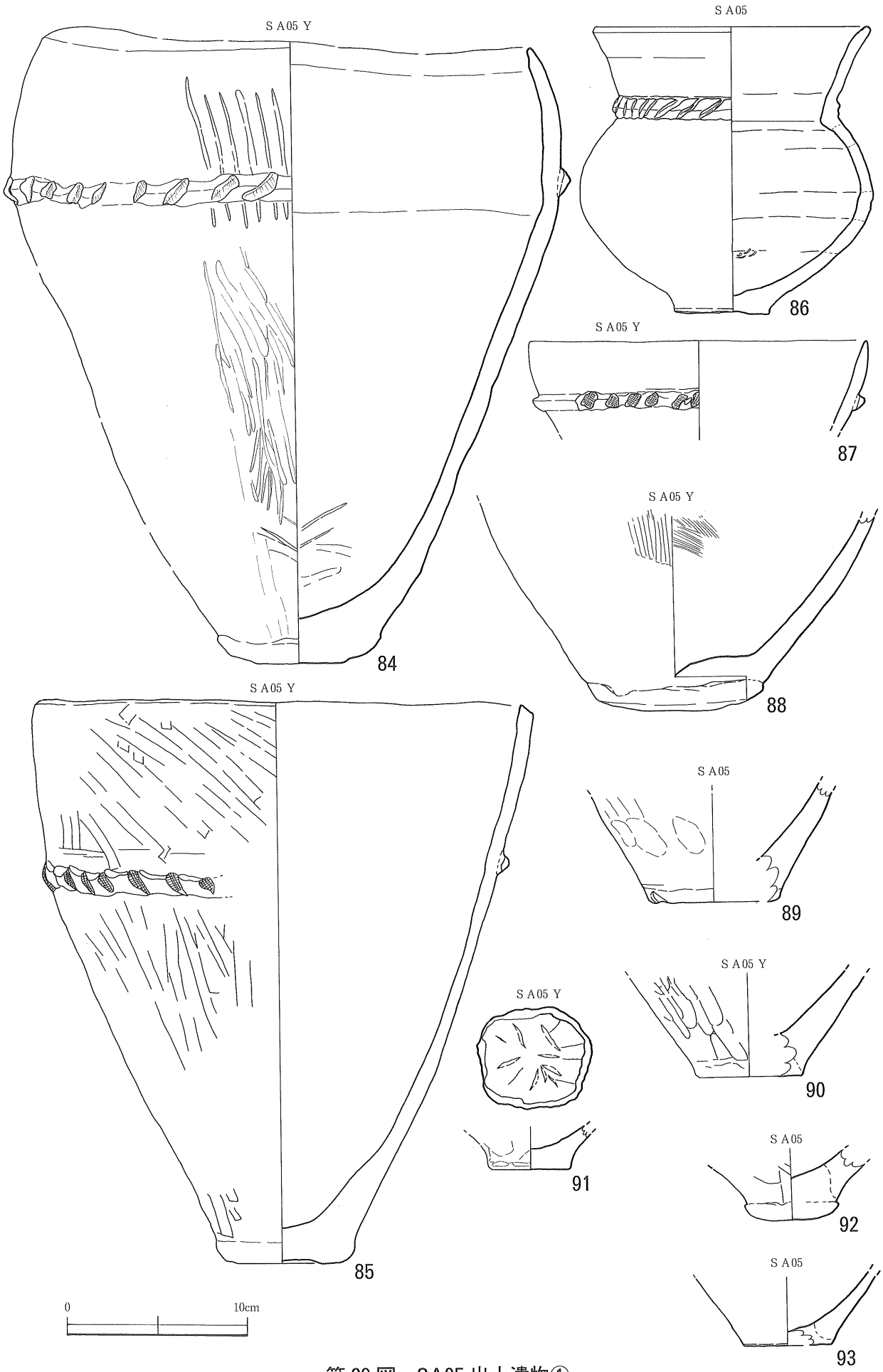
住居からの遺物の出土は大半が2回目の床面より上位で見つかっており、1回目の床面からは大型の礫が散石している状況であった。

住居内からは甕などが出土している（第36図）が、その大半は2回目の住居に伴うものである。128～132は甕である。132は当初の住居に伴うもので、それ以外の甕は2回目に伴う。128は口径22.0㎝の甕口縁部で、外面に工具によるミガキ状のナデが縦方向に施され、口縁部は横ナデが施される。内面は横ナデが施される。内外面には粘土輪積み痕が残る。また、外面には炭化物が付着している。129は張り出し気味の円盤状の底部から直線的に胴部へと立ち上がる。外面は工具によるナデが縦方向に丁寧に施され、内面は横ナデが主体である。底部は丁寧にナデ画施され、やや白色を呈す。胴部の外面と、内面は底部近くにススが付着している。底径7.2㎝である。130は甕底部で、底径7.2㎝である。外面底部はナデで、工具によるミガキ状のナデが縦方向に施される。内面はナデが施される。底部は布のようなものを付けた工具で外面から押し上げられており、非常に薄く作られている。底部内面にはススが付着している。131は内外面ともナデが丁寧に施され、外面の一部はミガキが残る。底部はやや薄作りで、丁寧にナデられている。中央がやや浅く窪む。底径は6.6㎝である。132は底径5.2cmで、外面は丁寧にナデが施され、内面はナデが施されるが、工具痕が残る。底部は厚めに作られている。1回目の住居床面から出土している。133は高坏の坏部で、2回目の住居に伴うものである。内外面とも丁寧な横方向のミガキが施されており、屈曲部外面には沈線状の稜が付く。口縁部は直線的に大きく開く。134・135はミニチュア土器で、134は2回目の住居に伴う。口径5.8㎝、器高3.2㎝で、内外面はナデが施され、外面にはユビオサエが残る。また、一部工具の痕も見られる。底部から外に大きく開くものである。135は1回目の中央土坑内から出土している。内外面ともナデが施され、特に外面は丁寧である。また、オサエの痕も残る。ややいびつな形であるが、口縁部は非常に薄くなっている。口径3.9㎝、器高3.7㎝である。136は2回目の住居の床面から出土している坩である。外面は丁寧にミガキが施され、内面はナデが施される。

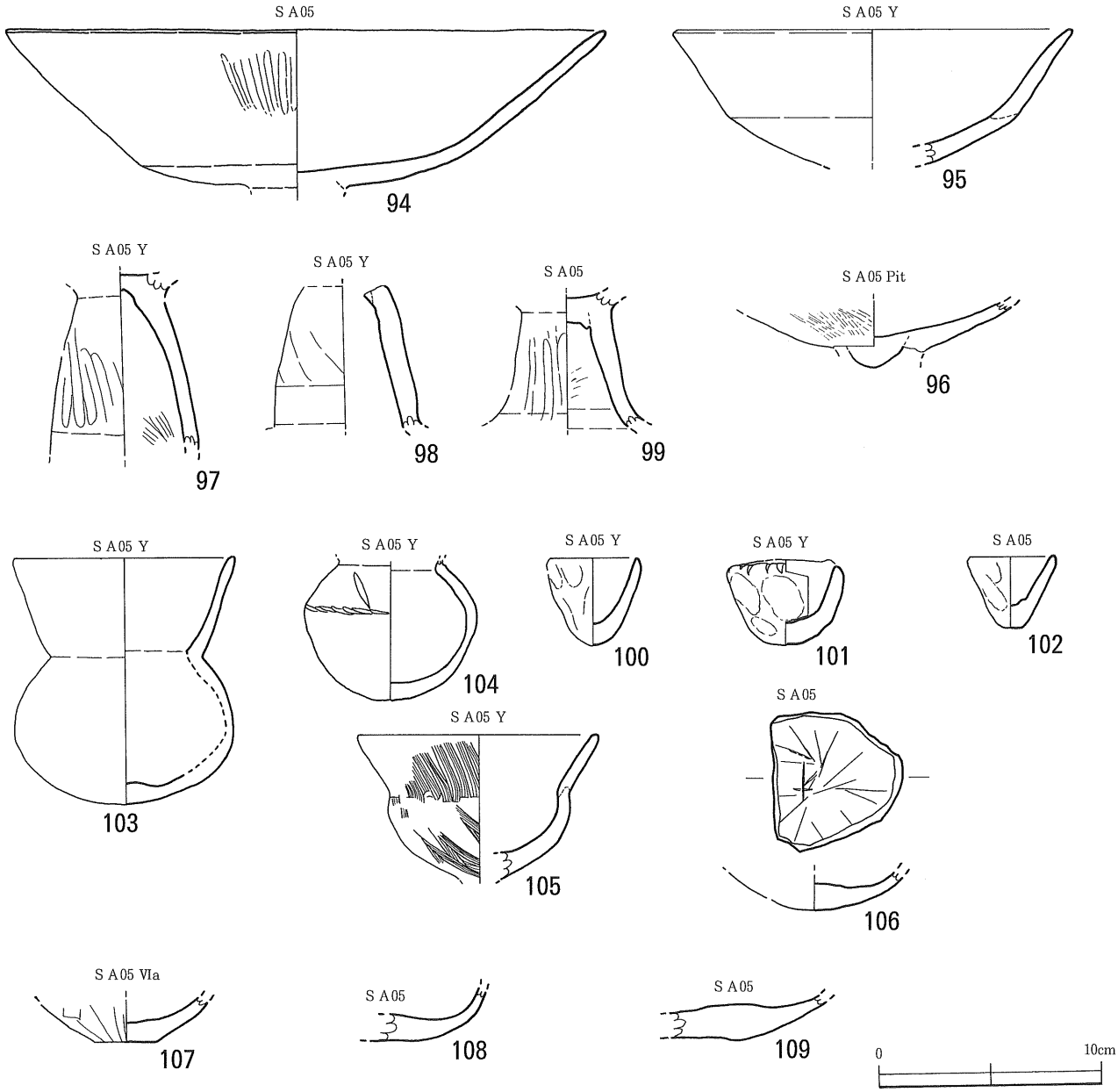
石器は台石、敲石、磨石、軽石製品が出土している。137は台石としたが、断面三角形を呈す砂岩礫の稜部は敲打痕が激しく残り、平坦面の3面は面的に磨耗しているため砥石的な要素が見られる。礫端部には敲打痕が見られないことと、長さ15.5㎝、幅12.6㎝、厚さ10.4㎝、重さ2,460ｇと非常に大きいため台石とした。2回目の住居に伴うものである。138は砂岩の棒状楕円礫の端部に敲打痕が激しく残される。また、側面にも敲打痕が認められる。1回目の床面から出土しているが、接合する2つの破片はそれぞれ、SA05の1層と、M-8区のⅥａ層出土のものである。139は2回目の住居に伴うもので全面的に磨耗しており磨石と思われる。140は軽石製品である。表裏面を平滑に整えてある。2回目の住居に伴うものである。

表 6　SA05 出土遺物観察表

図版番号		出土区	出土層	器種	調整		色調		胎土	備考
					外面	内面	内面	外面		
29	84	SA05	5～Y	甕	ミガキ状 工具ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	黒・赤褐・白色鉱物多	口径：27.2 cm 器高：35.4cm 底径：5.0cm
	85	SA05	Y	甕	ミガキ状 工具ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	大粒の黒・茶褐・白色鉱物多	口径：27.7 cm 器高：31.6 cm 底径：6.5 cm
	86	SA05	8	甕	ナデ	ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	黒・白色鉱物多	口径：15.5 cm 器高：15.6 cm 底径：5.4 cm
	87	SA05	Y	甕	ナデ	ナデ	灰白 (10YR8/2) ～にぶい黄橙 (10YR7/3)	灰白 (10YR8/2) ～にぶい黄橙 (10YR7/3)	黒・褐色鉱物多	口径：18.8cm
	88	SA05	Y	甕	ミガキ状 工具ナデ	ナデ、ハケ、 オサエ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	黒・褐色鉱物多	底径：8.8 cm 底部に籾圧痕
	89	SA05	8	甕	ミガキ状 工具ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	黒・白色鉱物多	底径：7.4 cm 底部側面棒状工具圧痕
	90	SA05	Y	甕	ミガキ状 工具ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	黒・白色鉱物多	底径：6.0 cm
	91	SA05	Y	甕	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3) ～橙 (5YR7/6)	浅黄橙 (10YR8/3) ～にぶい橙 (5YR7/4)	黒・白色鉱物多	底径：4.7 cm 工具調整痕
	92	SA05		甕	ミガキ状 工具ナデ	ナデ	灰黄褐 (10YR5/2)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	黒・白色鉱物多	底径：5.2cm
	93	SA05	4	甕	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	黒・白色鉱物多	底径：5.0cm
30	94	SA05	6	高坏	ナデ、 ミガキ	ナデ＋ハケ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	黒色鉱物多	口径：27cm
	95	SA05	Y	高杯	ハケ状 工具ナデ	ハケ状 工具ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	黒色鉱物多	口径：18.0 cm
	96	SA05	柱穴内	高杯	ナデ	ハケ→ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	橙 (7.5YR7/6)	黒・赤褐色鉱物多	
	97	SA05	Y	高杯 脚部	ミガキ、 ナデ	ナデ、ハケ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	赤褐色鉱物多	
	98	SA05	Y	高杯 脚部	ナデ	ケズリ	褐灰 (10YR4/1)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	黒色鉱物多	
	99	SA05	1	高杯 脚部	ミガキ、 ナデ	オサエ、 ケズリ	黒	浅黄橙 (7.5YR8/3)	黒色鉱物多	
	100	SA05	Y	ミニ チュア	ナデ、 ユビオサエ	ナデ、 ユビオサエ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	黒色鉱物多	口径：4.2 cm 器高：3.9 cm 底径：0.9 cm
	101	SA05	Y	ミニ チュア	ナデ、 ユビオサエ	ナデ、 ユビオサエ	灰白 (10YR8/2)	浅黄橙 (10YR8/3)	黒・白色鉱物多	口径：5.2cm 器高：3.8 cm 底径：1.4 cm
	102	SA05	5	ミニ チュア	ナデ、 ユビオサエ	ナデ、 ユビオサエ	浅黄橙 (7.5YR8/3)	浅黄橙 (7.5YR8/3)	黒・赤褐・白色鉱物多	口径：4.0 cm 器高：3.2 cm 底径：0.8 cm
	103	SA05	Y	坩	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	黒色鉱物多	口径：10.0 cm 器高：11.1 cm 底径：2.0 cm
	104	SA05	Y	坩	ミガキ	ナデ	灰黄褐 (10YR4/2)	灰黄褐 (10YR4/2)	黒色鉱物多	丸底
	105	SA05	Y	台坏鉢	ハケ	ナデ	褐灰色 (7.5YR8/4)	褐灰色 (7.5YR8/4)	黒・赤褐色鉱物多	口径：10.8 cm
	106	SA05	5	坩	ナデ	ナデ→ヘラオサエ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	黒色鉱物多	底部スス
	107	SA05	7	坩	工具ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	黒・赤褐色鉱物多	底径：2.8 cm
	108	SA05	5	坩	ナデ	ナデ	褐灰 (10YR5/1)	浅黄橙 (10YR8/4)	黒色鉱物多	
	109	SA05	7	坩	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	灰白 (10YR8/2) ～橙 (7.5YR7/6)	黒色鉱物多	



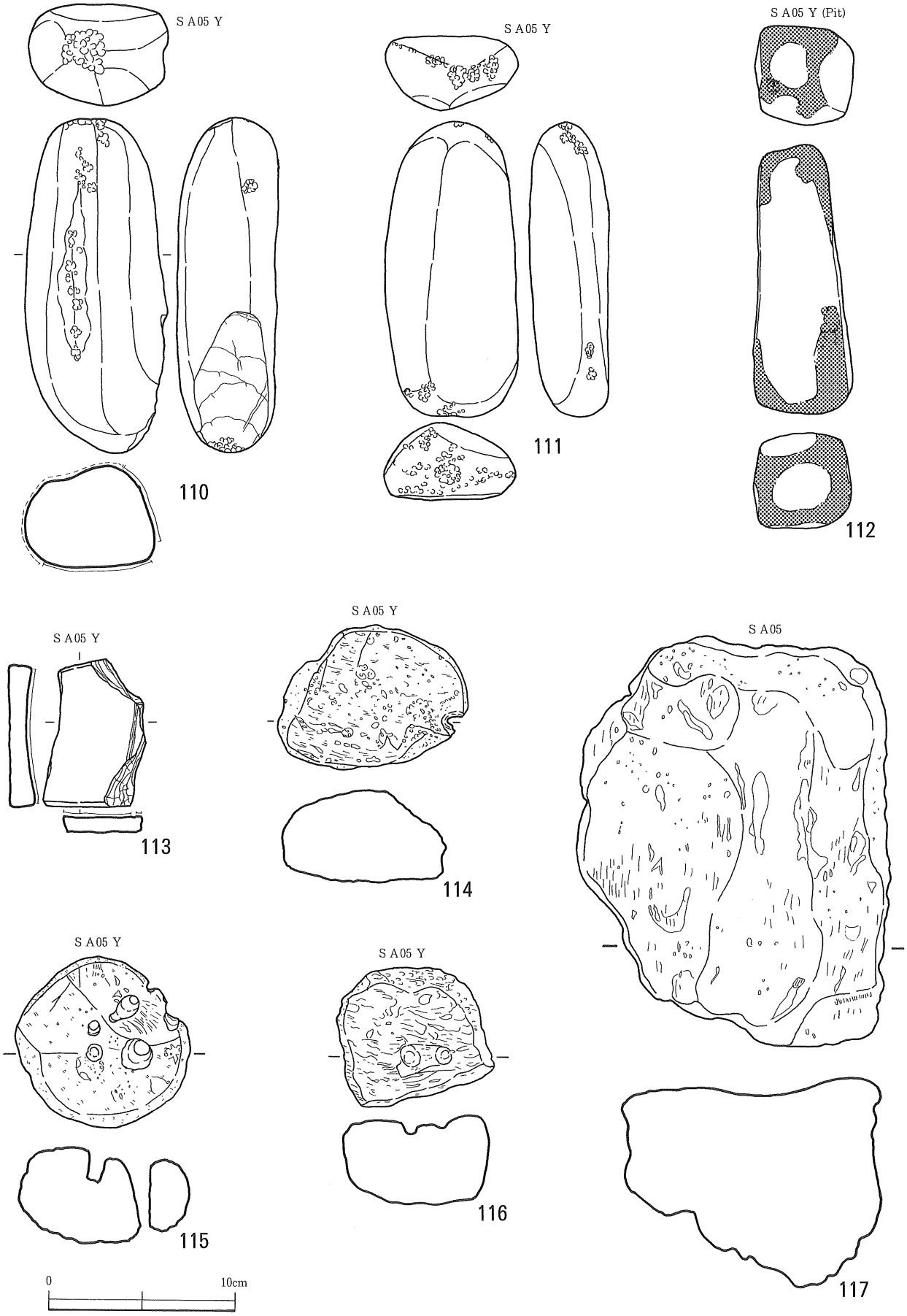
第 29 図　SA05 出土遺物①



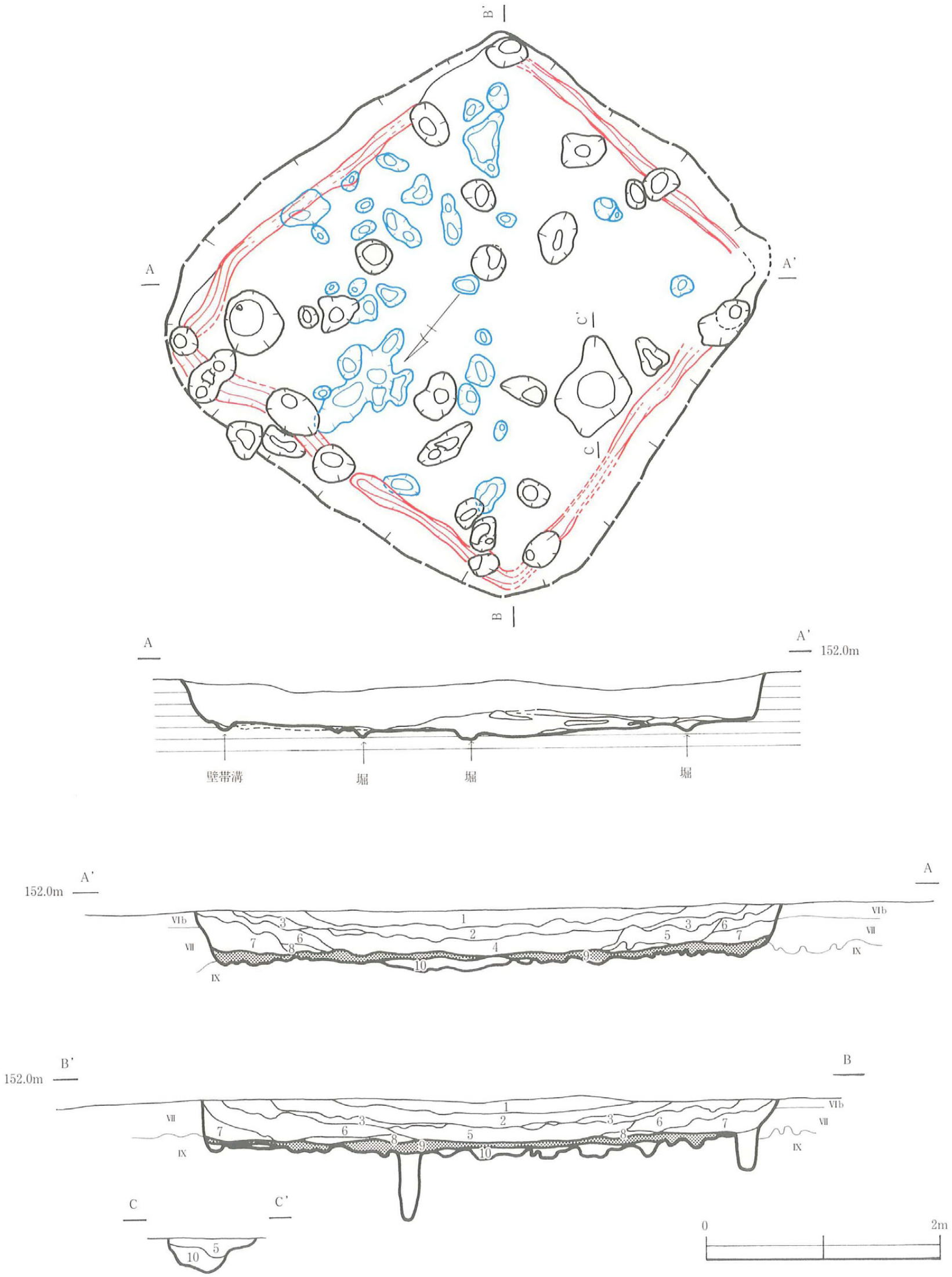
第 30 図　SA05 出土遺物②

表 7　古墳時代竪穴住居跡計測表

遺構番号	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	掘込 (m)	主柱数 (本)	主ピット径 (cm)	主ピット深 (cm)	壁帯溝幅 (cm)	壁帯溝深 (cm)	備考
SA04	4.6	4.6	0.5	0.7	2	35 ～ 40	50 ～ 42	—	—	土坑 2 基
SA05	8.2	7.1	0.6	0.9	4	40 ～ 50	50 ～ 70	20	20	
SA06	4.5	4.3	0.35	0.5	2	35 ～ 40	40	15	10	土坑 2 基
SA08	3.8	3.6	0.5	0.7	3	40 ～ 50	10 ～ 30	—	—	土坑

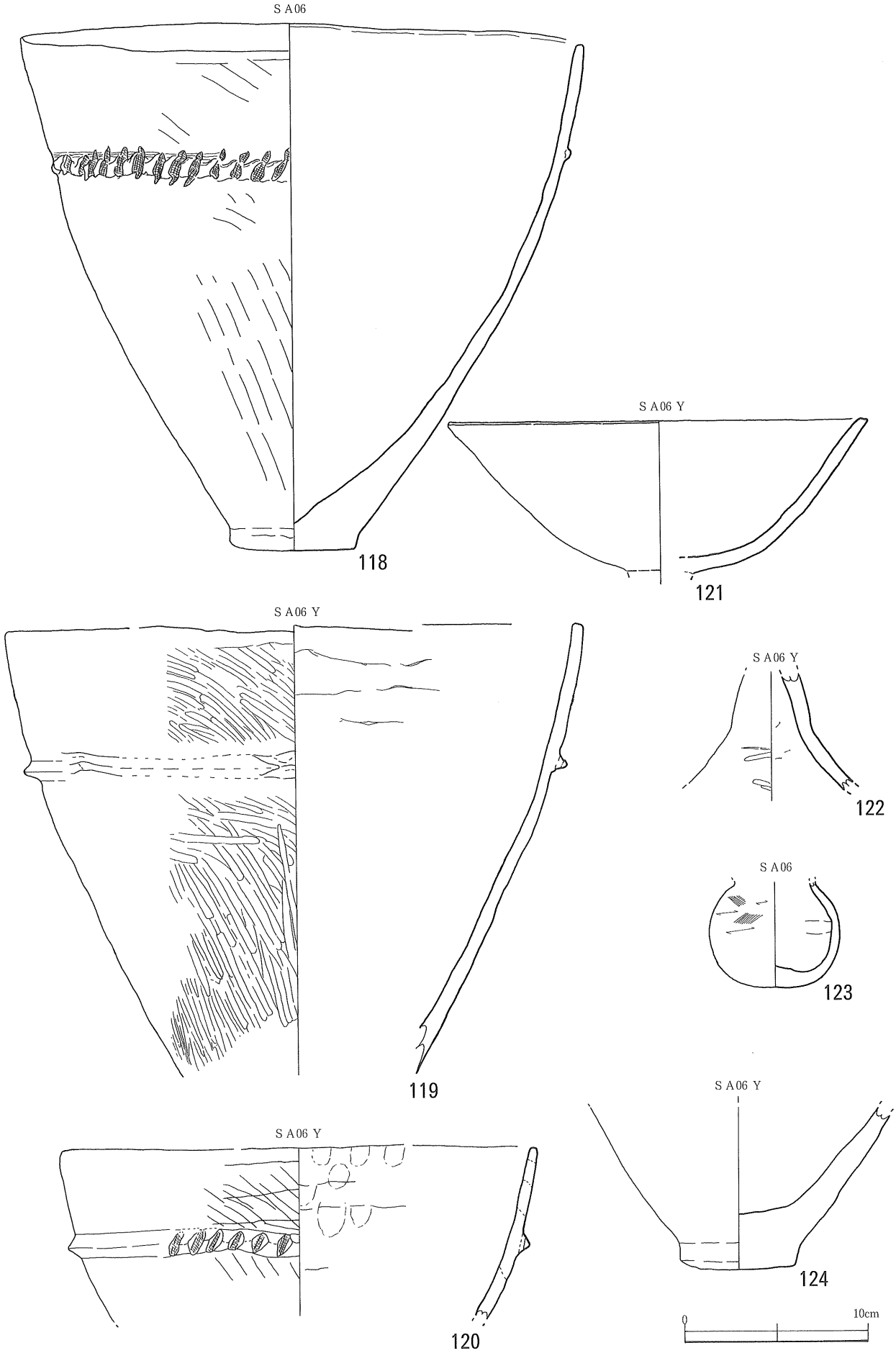


第 31 図　SA05 出土遺物③

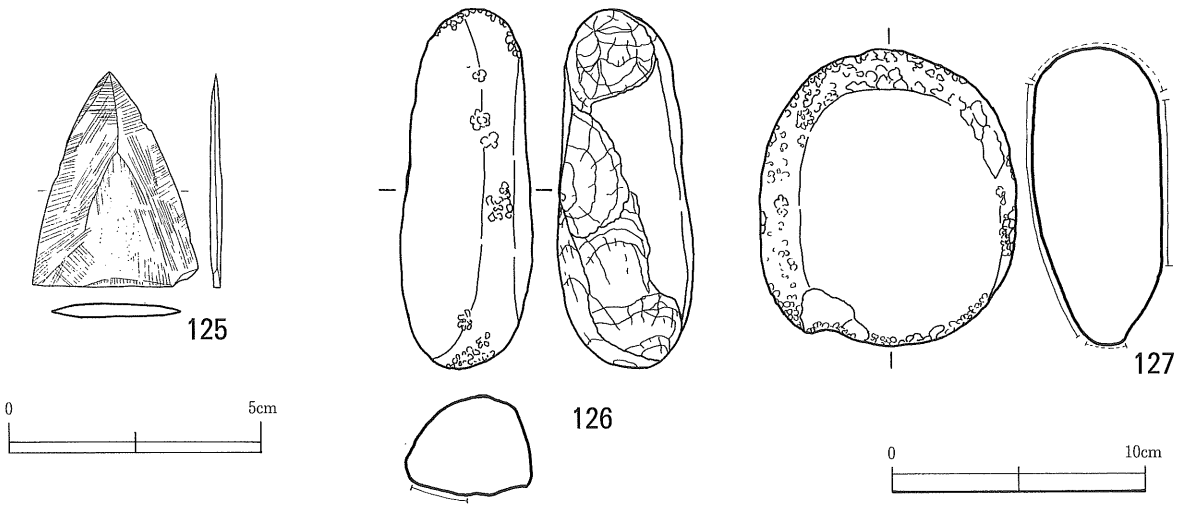


1：黄色軽石を満遍なく含む黒色粘質シルト土
2：黄色軽石を多く含む黒色粘質シルト土
3：黄色軽石を含む黒色粘質シルト土＋褐色粘質シルト土
4：黄色軽石をやや多く含む黒褐色粘質シルト土
5：黄色軽石を極多く含む黒褐色粘質シルト土
6：黄色軽石をやや多く含む黄褐色粘質シルト土
7：黄色軽石をやや多く含む暗褐色粘質シルト土
8：黄色軽石を多く含む黒褐色粘質シルト土
9：黄色軽石と炭を多く含む黒色粘質シルト土
10：黄色軽石を満遍なく含む黒褐色粘質シルト土

第 32 図　SA06 実測図（古墳時代）



第 33 図　SA06 出土遺物①



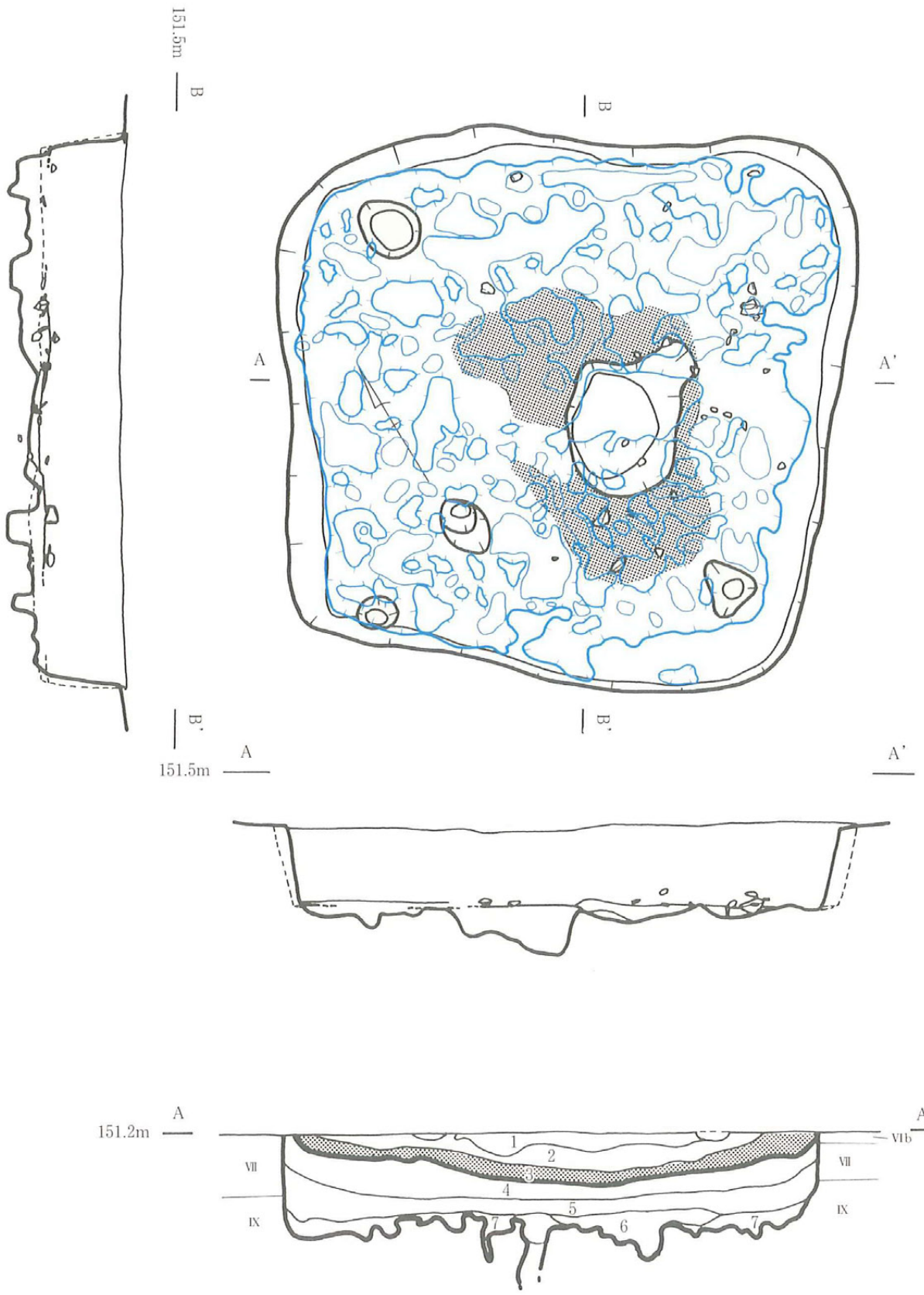
第 34 図　SA06 出土遺物②

表 8　SA06・08 出土遺物観察表

図版番号		出土区	出土層	器種	調整		色調		胎土	備考
					外面	内面	内面	外面		
33	118	SA06	Y	甕	工具ナデ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (5YR7/6)	褐・黒色鉱物多	口径：31.0 cm 器高：29.1 cm 底径：6.9 cm
	119	SA06	Y	甕	ミガキ状ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	橙 (5YR6/6)	褐・黒色鉱物多	口径：31.6 cm
	120	SA06	Y	甕	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	白色鉱物多	口径：26 cm 内外面輪積痕
	121	SA06	Y	高坏	ナデ	ナデ	橙 (2.5YR6/6)	橙 (2.5YR6/6)	褐・黒色鉱物多	口径：23.2 cm
	122	SA06	Y	高杯脚部	ナデ	ケズリ、ナデ	橙 (5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	褐・黒色鉱物多	
	123	SA06	6	坩	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	黒色鉱物多	底径：1.8 cm
	124	SA06	Y	甕	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	褐・黒色鉱物多	底径：6.4 cm
36	128	SA08	2	甕	ミガキ状工具ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	にぶい橙 (7.5YR7/3)	褐・黒色鉱物多	口径：22.0 cm 内外面輪積痕
	129	SA08	1～3	甕	工具ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	褐・白・黒色鉱物多	底径：7.2 cm
	130	SA08	c	甕	ナデ→工具ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/3)	褐・白・黒色鉱物多	底径：7.2 cm 内面炭化物 底部側面棒状工具
	131	SA08	2	甕	ナデ、ミガキ	ナデ	褐灰 (10YR6/1)	浅黄橙 (10YR8/3)	褐・黒色鉱物多	底径：6.6 cm
	132	SA08	5	甕	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/2)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	褐・黒色鉱物多	底径：5.2 cm
	133	SA08	2	高杯	ミガキ	ミガキ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3) ～橙 (7.5YR7/6)	黒色鉱物多	
	134	SA08	1	ミニチュア	ナデ、オサエ	ナデ、オサエ	淡黄 (2.5Y8/3)	淡黄 (2.5Y8/3)	褐・黒色鉱物多	口径：5.8 cm 器高：3.2 cm
	135	SA08	6	ミニチュア	ナデ、オサエ	ナデ、オサエ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	黒色鉱物	口径：3.9 cm 器高：3.7 cm
	136	SA08	3	坩	ナデ、ミガキ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	ほとんど含まない	

表 9　SA 出土石器一覧表

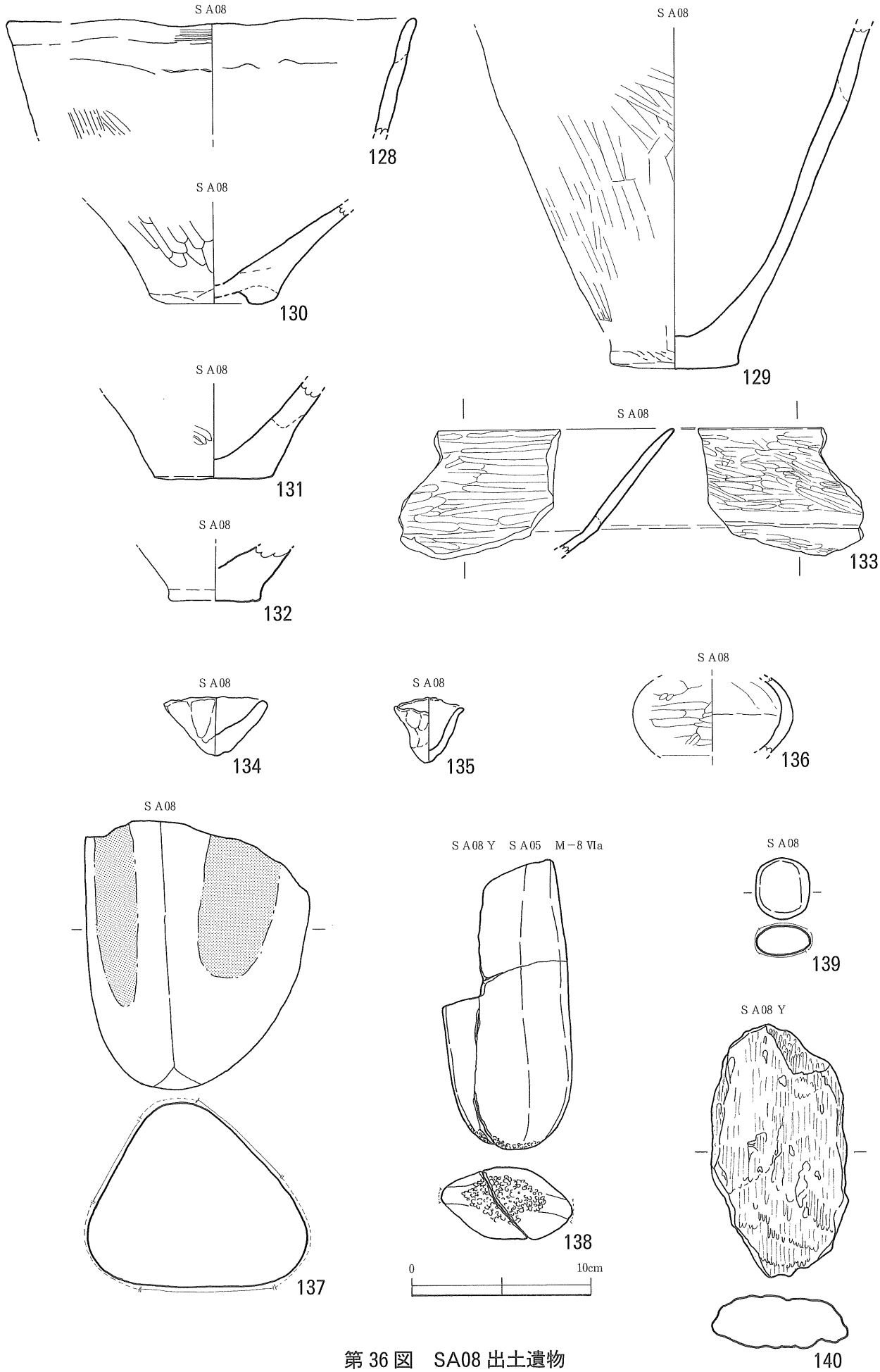
図版番号		出土区	出土層	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
27	82	SA04	Y	砥石	21.5	11.5	6.7	2,008	砂岩	
	83	SA04	1	槌石	(6.9)	(3.7)	(4.5)	(114)	砂岩	
31	110	SA05	Y	槌石	14.6	5.3	5.3	670	砂岩	
	111	SA05	Y	槌石	15.8	7.2	4.3	750	砂岩	
	112	SA05	Y	槌石	18.0	7.5	5.6	1,130	砂岩	
	113	SA05	Y	砥石	7.9	5.5	1.3	65	砂岩	
	114	SA05	Y	軽石製品	10.4	7.8	5.0	139	軽石	
	115	SA05	Y	軽石製品	9.3	9.3	5.3	101	軽石	
	116	SA05	Y	軽石製品	7.5	8.0	5.1	130	軽石	
	117	SA05	7	軽石製品	22.1	16.8	11.4		軽石	
34	125	SA06	Y	磨製石鏃	4.3	3.3	0.3	4	頁岩	
	126	SA06	Y	槌石	14.0	5.4	4.0	400	砂岩	
	127	SA06	Y	磨・敲石	11.7	10.1	5.1	930	砂岩	
36	137	SA08	1	台石	15.5	12.6	10.4	2,460	砂岩	
	138	SA08 SA05 M-8	Y 1 Ⅵa	槌石	16.2	7.3	4.0	525	砂岩	
	139	SA08	Y	磨石	3.4	3.0	1.7	26	砂岩	
	140	SA08	2	軽石製品	14.1	7.5	3.0	88	軽石	



1：黄色軽石を含む褐色粘質シルト土
2：黄色軽石を多く含む褐色粘質シルト土
3：黄色軽石を極多く含む黒褐色粘質シルト土
4：黄色軽石を多く含む暗褐色粘質シルト土
5：黄色軽石をやや含む褐色粘質シルト土
6：炭を多く含む黒色粘質シルト土
7：黄色軽石を多く含む暗褐色粘質シルト土

0　2m

第 35 図　SA08 実測図（古墳時代）



第 36 図　SA08 出土遺物

3．包含層出土遺物

Ⅵａ層～Ⅶｂ層は縄文時代後期から古墳時代にかけての遺物包含層である。一番多く出土するのがⅥａ層である。遺物の中にはⅤ層から出土しているものもあるが、これらの大半は畝状遺構やその他の遺構を掘った際に掘りあげられたものであると考えられる。

土器の中で最も多いのが弥生時代のもので、調査区のほぼ全域から出土するが、特に中期の土器がP・Q-6・7区に集中している（第44図）。ここからは脚台付壷や赤色顔料を塗布した土器が出土している。

古墳時代の土器はSA04・05の周辺（SA01～03のあたり）と、P・Q-6・7区付近から多く出土しているが、全体量はさほど多くない。

縄文時代後・晩期の土器は一部を除いて、調査区南西部（「か」区）から出土している。特に調査中からR-2～4区にかけて遺物が多く出土し、中でも組織痕を残す土器の底部片が多く出土していた（第37図）。

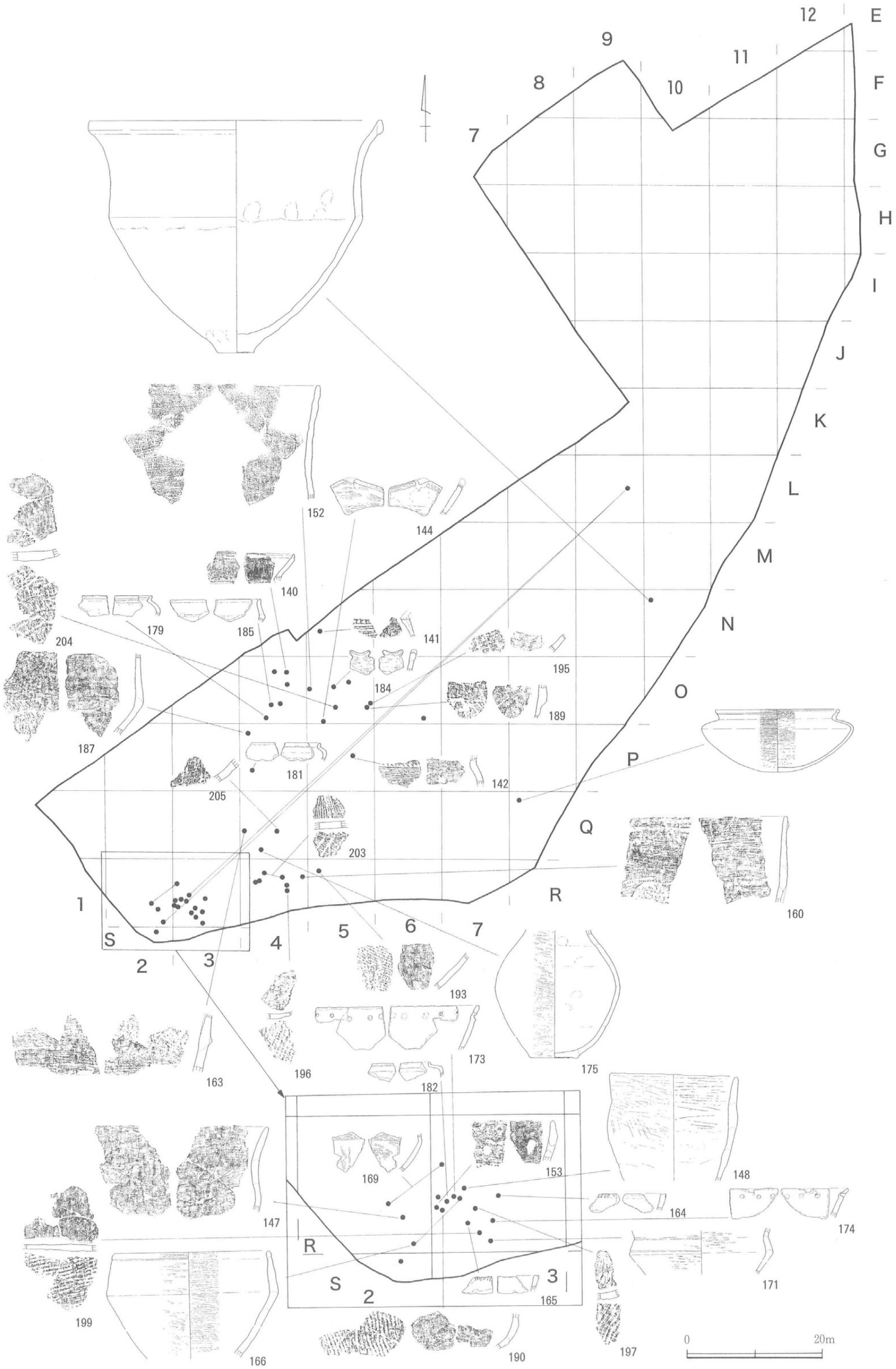
Ⅵａ層からⅦａ層にかけては石器も出土している。中でも打製の土掘具が多く出土している。また、輝石安山岩製の粗製剥片石器も出土しており、その母岩と思われるものも見つかっている。主に縄文時代晩期から弥生時代のものが主体的と思われるが、石器の出土量自体はあまり多くない。その他の遺物として弥生時代から古墳時代のものと思われる鉄鏃・鉄製紡錘車が出土している（第55図）。

①縄文時代後期・晩期の土器（第38図～43図）

140は口縁部外面に凹線が2条認められ、外面はミガキ、内面はナデが施される。141・142は屈曲部の破片であるが、屈曲部に刺突を施し、その下に平行沈線を数条施している。143は内面がミガキ、外面はナデが施されている。口縁部直下には刺突が施される。144は波状口縁で、外面はミガキが、内面はオサエとナデが施される。145は外面が条痕の後ナデが、内面はオサエ痕が残る。146は外面が縦方向、内面が横方向のミガキが施される。147は緩やかに屈曲をもつもので口唇部がやや平滑にナデられる。調整は外面がナデの後にミガキを施し、内面はミガキやナデが残される。器面にはススや炭化物が付着する。

148はやや張る胴部から口縁部にむかって緩やかに屈曲し、直線的に口縁部に立ち上がる。調整は内外面とも条痕とナデが施される。粗めの胎土で器壁も厚めである。口径21.3㎝で、外面には口縁部から屈曲部までススが付着する。L-9区で出土した破片1点以外はR-3区で出土している。149は直線的に立ち上がる口縁部で、外面は条痕が残り、内面は条痕の後丁寧にナデが施される。150も内面は条痕後丁寧にナデが施される。151は口縁直下に連点文を施すものである。152は口唇部を平坦にナデ、胴部から口縁部へとやや外反しながら直線的に立ち上がる。内外面は条痕が施され、胎土には白色の砂粒を非常に多く含み粗い。153は内湾する口縁部で、口縁部下に補修孔が認められる。孔は両側から穿孔される。口縁部外面にはススが付着する。154は内外面にナデを施すものである。155は内外面に条痕を明瞭に残すもので、口唇部は平坦にナデられる。やや内湾気味の口縁部である。胎土は152同様に砂粒を多く含み粗い。156は内面がナデの後ミガキが施されるもので、口唇部は平坦である。157は内湾する口縁部で、口縁部の下に1条の細い貼付突帯が認められる。158は鉢の胴部で、丸味のある底部から直線的に立ち上がる。内面は横方向、外面は横方向を主体的に縦方向にも条痕が施される。152・155と同様の粗い胎土である。159はナデとミガキが施され、口縁部の下に1条の細い貼付突帯が認められる。

160は直線的に立ち上がるもので、口唇部はやや平坦である。口縁部の下に1条の貼付突帯を持つ。内外面はナデが施され、内面にはケズリの痕が残る。161・162は胴部の屈曲に刻目を施すものである。内外面はナデが施される。163は外面に条痕を残すもので、断面三角の太い突帯を持つものである。164・165は口縁部に「ハ」の字状の刻みを持つもので、口唇部は平坦に作られている。内外面は丁寧なナデが施されている。165は口縁部にススが付着し、焼成後にあけられた補修孔が認められる。166は口径25.7㎝で、外面にはススが付着する。口縁部下の接合部分には沈線が1条廻る。胴部は強く屈曲し、内傾しながら直線的に口縁部へ立ち上がる。内外面は横方向にミガキが施される。167は内面が横方向、外面が上部に縦方向のミガキが施される。内面にはススが付着する。168は内傾しつつも外反する口縁部で、内外面に丁寧な横方向のミガキを施すものである。169は接合部で屈



第 37 図　縄文時代後・晩期土器分布図

曲し、内面は横方向主、外面は屈曲より上位が横方向、屈曲より下位が縦方向のミガキを施すものである。170 は接合部で屈曲し、接屈曲部には沈線が施される。屈曲より上位は横方向のミガキが施される。171・172 は鉢で、171 は屈曲部に沈線を施すもので、内外面は横方向のミガキが施される。また、内外面にはススが付着する。172 は口径 21.4 ㎝で、内外面とも横方向のミガキが施される。

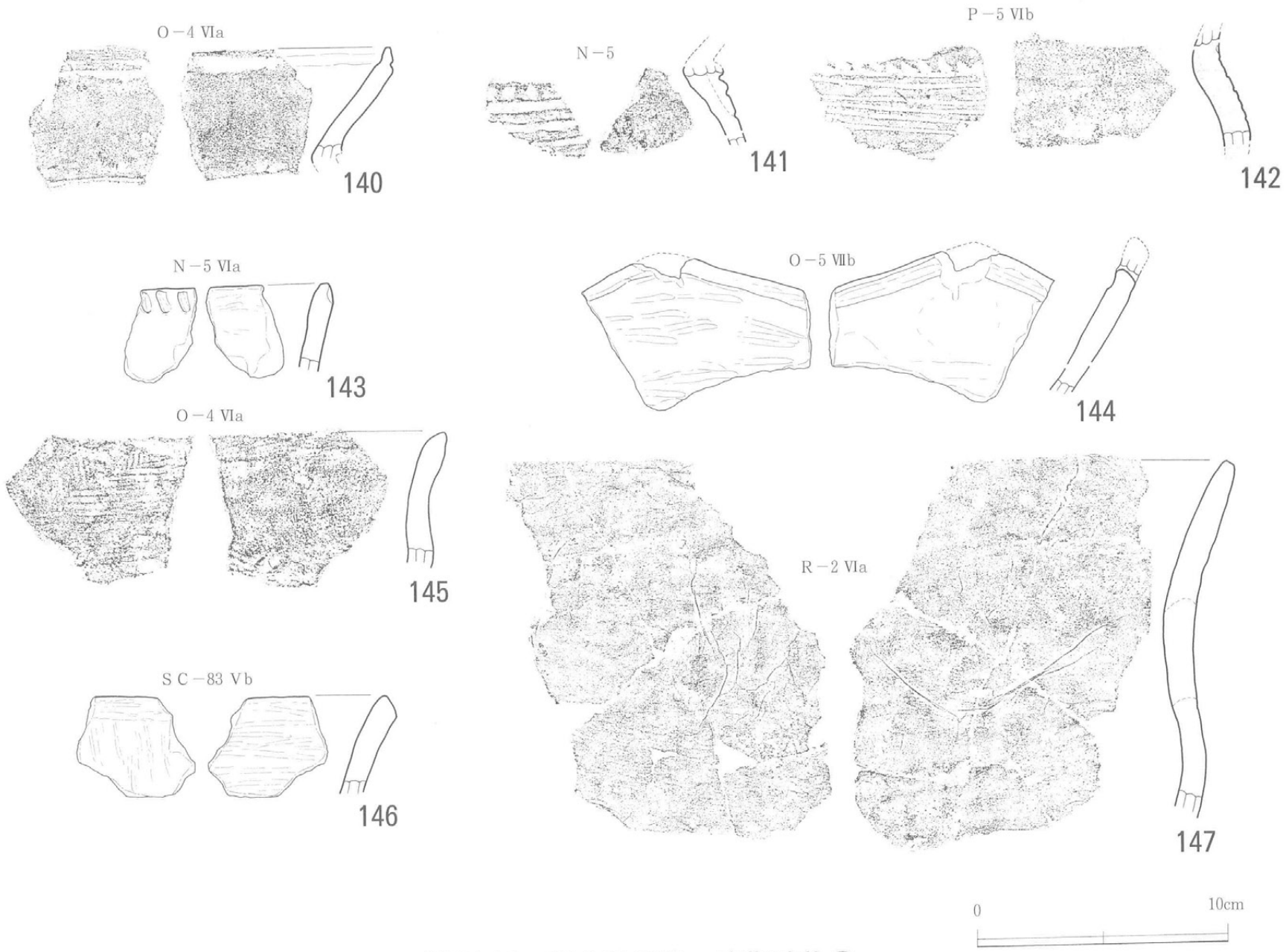
173・174 は内外面ともナデが施した後、口縁部下に孔列文を施すものである。175 は壷で口縁部から頸部を欠いている。底径 21.4 ㎝で、底部はやや上げ底気味である。外面は横方向のミガキ、内面はナデが施される。

176 ～ 185 は浅鉢の口縁部である。176 ～ 178 は胴部の張り出しから屈曲して口縁部に立ち上がる。口縁部内外面には沈線が施される。外面から口縁部内面までは丁寧に横方向のミガキが施されている。胴部内面は丁寧な横ナデが施され、器壁は薄い。179 ～ 181 は張り出した胴部から丸味を帯びて内湾し、口縁部は強く外反する。179 は口縁部内外面にに沈線が認められる。張り出しから口縁部までが短い。外面から口縁部内面にはミガキが施され、内面は横ナデが施される。182 は張り出した胴部から強く屈曲し、口縁部は短く外反する。屈曲部から口縁部外面までは横方向にミガキが施され、内面と、外面の屈曲部から下はナデが施される。183 は強く外反する口縁で、内外面に沈線が施される。外面は磨耗が激しく、内面は横方向のミガキが残る。184 は鰭状突起部で、外面はミガキ、内面はナデが施される。185 は屈曲部から内傾し、口縁端部がやや外反する。外面はミガキ、内面はナデが施される。

186 ～ 204・209 は組織痕を残すものである。186 は口径 38.0 ㎝で、外面下位は組織痕が残り、口縁部はナデが施される。組織痕が残る部分から極端に薄く作られる。口縁部は内湾する。187 は胴部屈曲から下位に組織痕を残す。屈曲からはやや内傾しながら立ち上がる。屈曲より上位はナデで、内面もナデが施される。188・189 は下位に組織痕を残し、組織痕の上位から肥厚するもので、上位は横ナデである。190・192・195 は丸味を持って立ち上がり、外面に細かな組織痕をしっかり残す。内面は横ナデが施される。191 は揺る山に屈曲する胴部で、屈曲部より下位に組織痕を残し、屈曲部から上位と、内面は丁寧にナデが施される。193 は直線的に外に開く胴部で、外面に目の細かい組織痕を残し、内面はススが全体的に付着する。破片の割れ面には一部炭化物が付着しており、破砕後に火を受けていると思われる。194 は屈曲部から上は斜め方向のナデが施され、内面は丁寧なナデが施される。屈曲部から下位に組織痕が残される。196 ～ 203・204・209 は底部である。196 ～ 198 はやや丸味を帯びている。細かい組織痕が外面に残され、196・198 の内面は丁寧なナデが、197 はケズリが残る。198 の組織痕は特に細かい。199 ～ 203・204・209 は平底である。119 は外面に細かい組織痕をしっかりと残し、内面にはオサエの痕が残り、ススが付着する。器壁はやや薄い。200・202 は粗めの組織痕が外面に残り、器壁は厚い。内面は丁寧にナデが施される。201 は細かい組織痕が外面にしっかりと残り、内面は条痕の後に丁寧にナデが施され、一部ミガキのようにも取れる。203 は外面に細めの組織痕をしっかりと残し、一部輪状に窪みが残る。内面は条痕が明瞭に残り、ススが付着している。204 の器壁は厚く、内面は丁寧にナデが施され、外面は粗い組織痕が残る。底部の立ち上がり付近である。209 は外面の磨耗が激しいが僅に組織痕が残る。内面は丁寧にナデが施される。器壁は厚く、底径も大きいと思われる。

205 ～ 207 は葉脈痕を残すのもである。外にナデを施した後に葉脈痕が残されている。内面はナデが残る。

208 ～ 215 は底部である。208 は内外面にナデが施され、内面にはオサエの痕も残る。割れ面にススが付着しているため、最後に火を受けたものと思われる。210 は張り出した底部から外へ開きながら直線的に立ち上がる。上げ底気味の底部である。立ち上がりは下から上へヘラ状の工具でなで上げられ、底部の張り出しはオサエによってつまみ出される。底径は 8.2 ㎝である。211 は円盤状の張り出した底部で、内外面はナデが施される。底径は 10.0 ㎝である。212 は底径 3.4cm と小さな底部から丸味を持って外に大きく開くものである。外面は丁寧にナデが施され一部ミガキも認められる。内面はナデとオサエが残る。213 は底径 7.2 ㎝で、オサエによって摘み出され気味の底部から外へ丸味を持って大きく開く。外面はミガキが、内面はオサエとナデが残る。214 は丸底の底部で、底径 6.3 ㎝である。内外面はナデが施され、内面にはオサエの痕が残る。215 は底径 7.0 ㎝の平底で底部側面に 2 条の沈線を廻らすものである。内外面はミガキが施される。



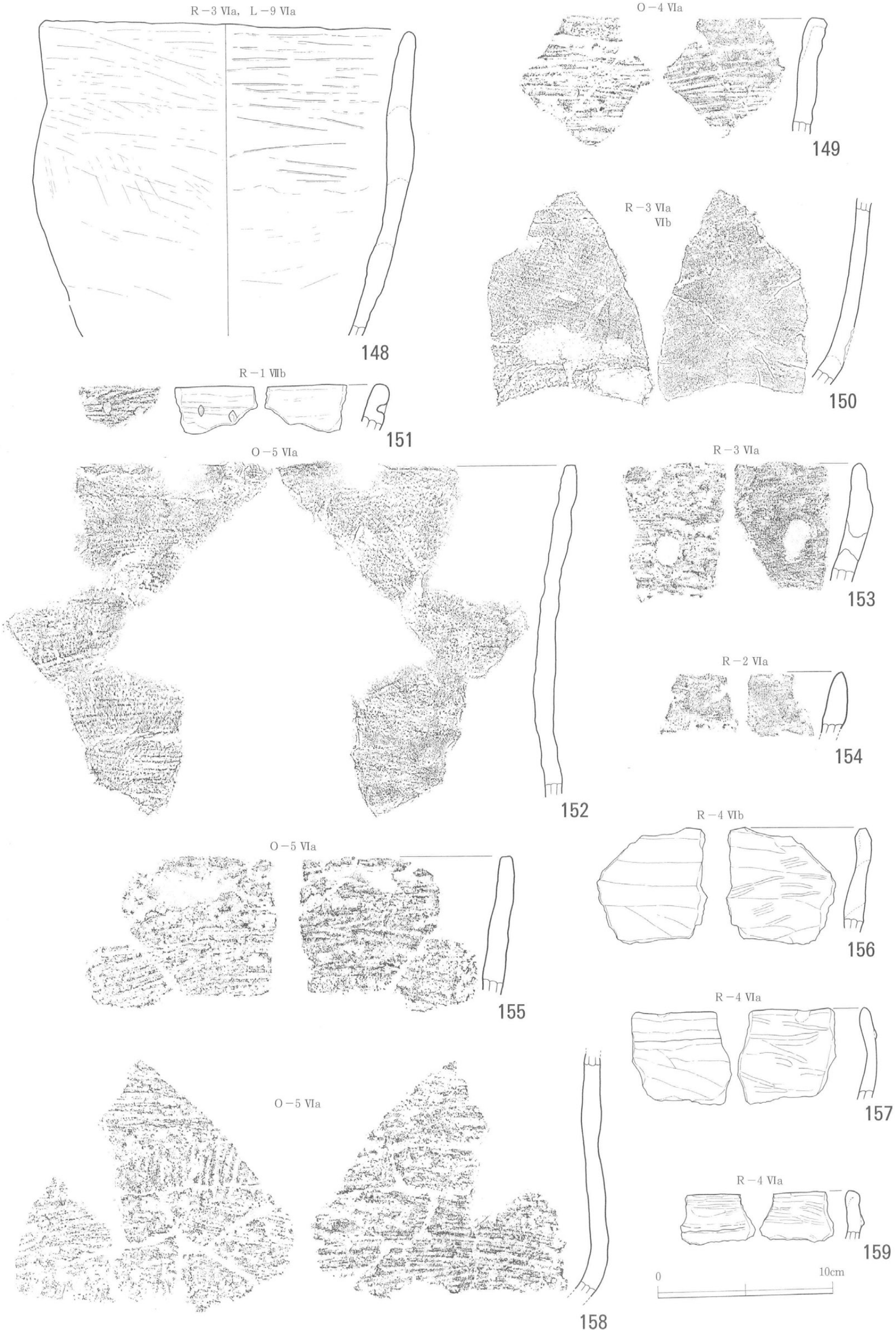
第 38 図　縄文時代後・晩期遺物①

②弥生時代～古墳時代の土器（第 45 図～ 54 図）

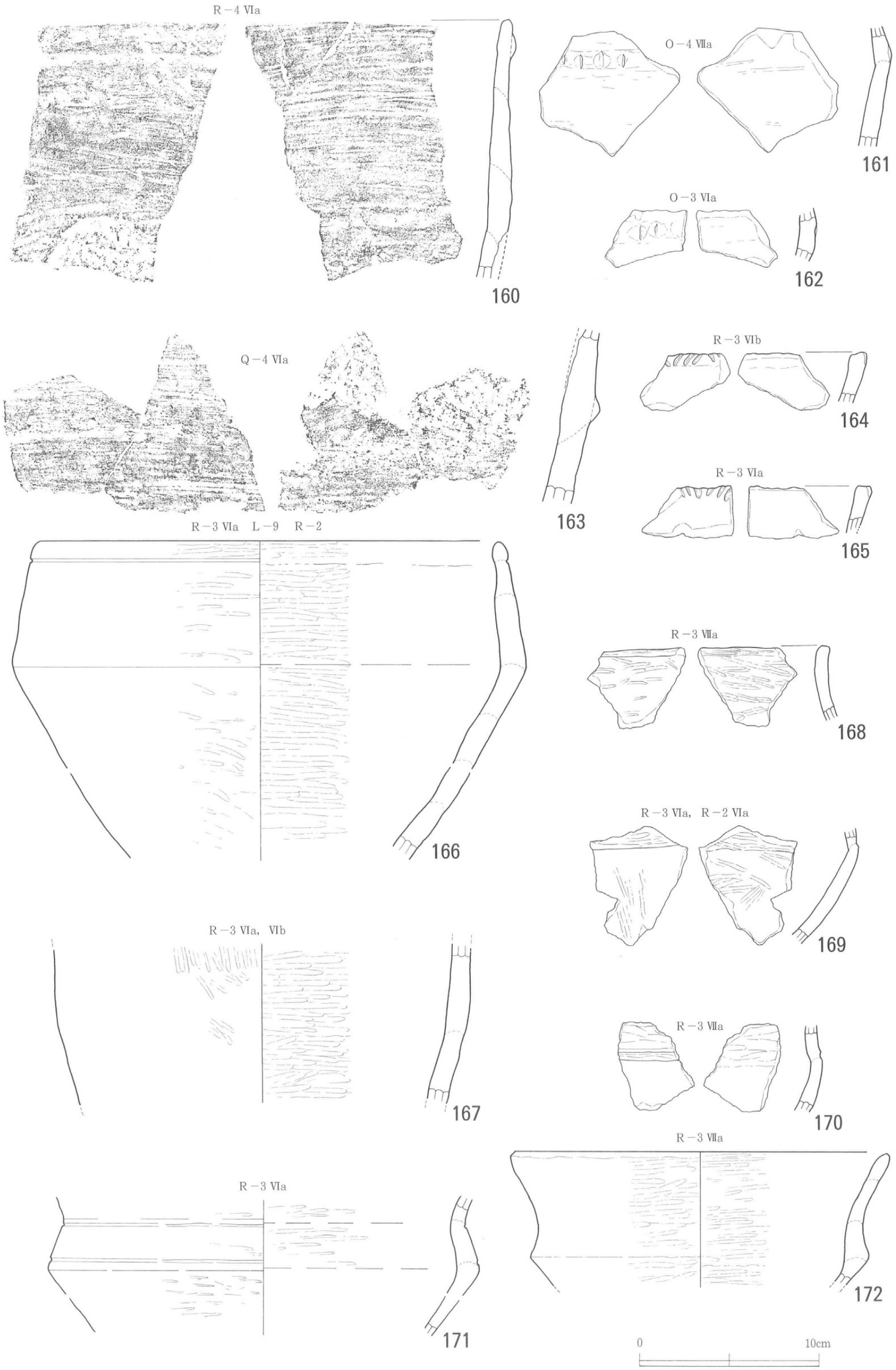
216 は甕の口縁部と思われ、刻目突帯を持つ。口唇部はやや平坦に作られる。内外面はナデが施される。217 は壷の口縁部で、口唇部をナデ、沈線を 1 条施し、小さな丸い刺突が部分的に施している。外反する口縁の下には段を形成しており、調整は外面に横方向のミガキが施される。口径は 22.0 cm である。

218 ～ 222 は甕である。218・220・222 は入来Ⅱ式で、218 は口径 19.8 cmである。口縁部がやや下がり気味で口唇部に沈線と刻目を施す。口縁部下面には接合線が明瞭に残る。胴部には 2 条の貼付突帯が廻り、突帯には一部刻目が施される。外面は胴部下半が縦方向のハケ、上位が横から斜め方向のハケ目が残る。突帯の上下は横方向のナデが施される。内面はオサエの後にハケとナデが施される。内外面にはススが付着している。220 は口径 32 cmで、下方に垂れ下がる台形状の口縁部は厚みがあり、口唇部中央がやや窪む。口縁部下面は丁寧にナデが施され接合線は認められない。胴部には 3 条の貼付突帯が廻り、突帯に刻目は認められない。器面は内外面とも丁寧にナデが施され、胎土には雲母を多く含んでいる。222 の口縁部はほぼ水平で厚みがあり、口唇部中央は窪む。口縁部下面は丁寧にナデが施され接合線は認められない。胴部に 3 条の貼付突帯が廻ると思われる。胎土に雲母を多く含み、器面内外にはススが付着する。219 は中溝式の口縁部で、口径 26.6 cmである。外反する口縁部は端部に向かって厚みをまし、口唇部は平坦にナデられ、中央がやや窪む。胴部の屈曲下には断面三角の貼付突帯が 1 条廻り、突帯には刻目が施される。内面はハケ目が残り、外面はナデが施されている。内外面にはススが付着している。221 は甕で、口径 24.2 cmである。口縁部は断面三角形を呈し、口縁部から胴部外面までススが付着する。粗い胎土には大粒の鉱物を多く含む。外面には縦方向のミガキの痕が残る。

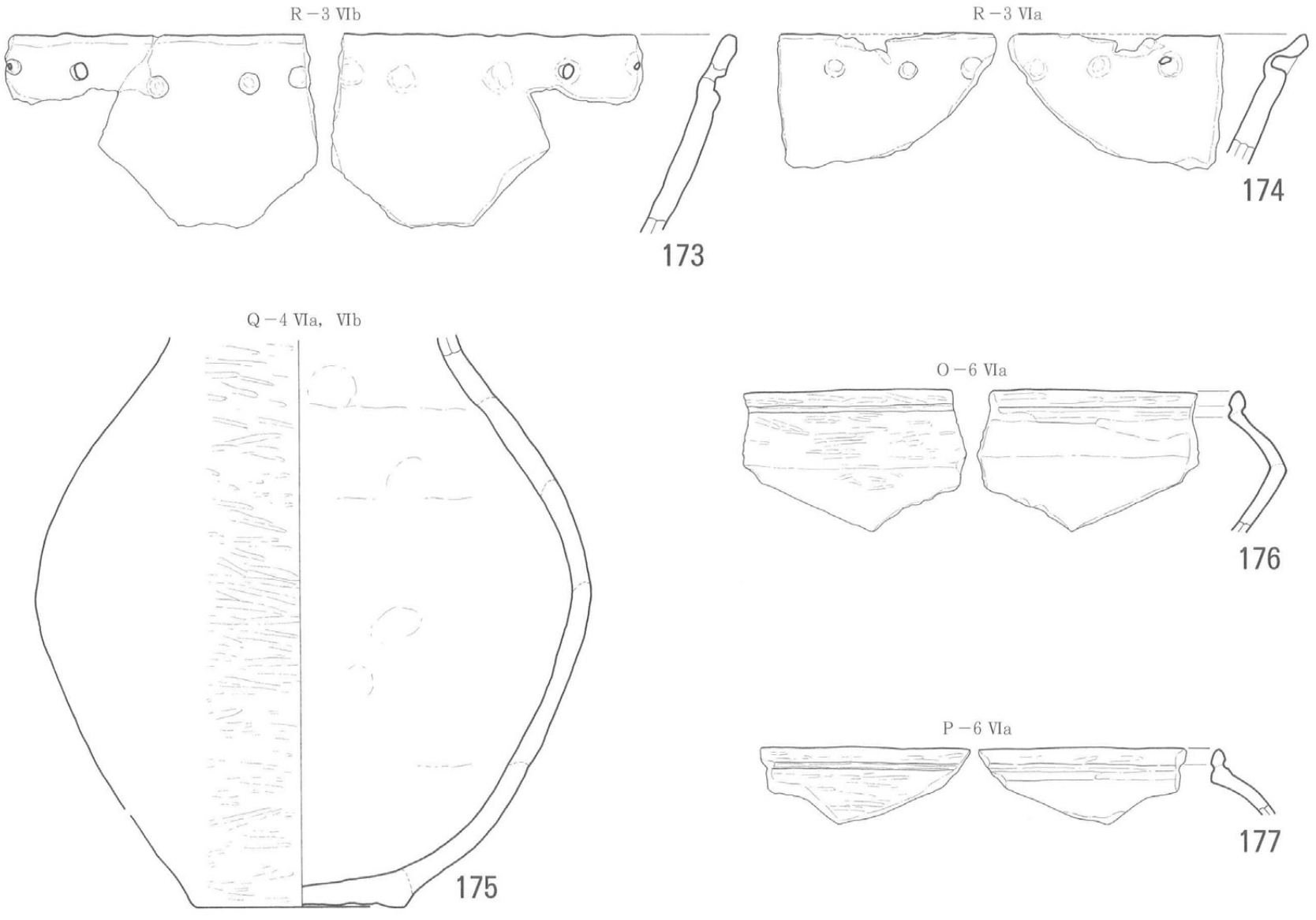
223 ～ 225 は壷の口縁部から頸部である。223 は口径 13.6 cmで、2 対の孔が焼成前に内面から外面に向かって穿孔されている。孔の直径は約 0.6 cmである。器壁は厚く、器面には口縁端部が横方向、

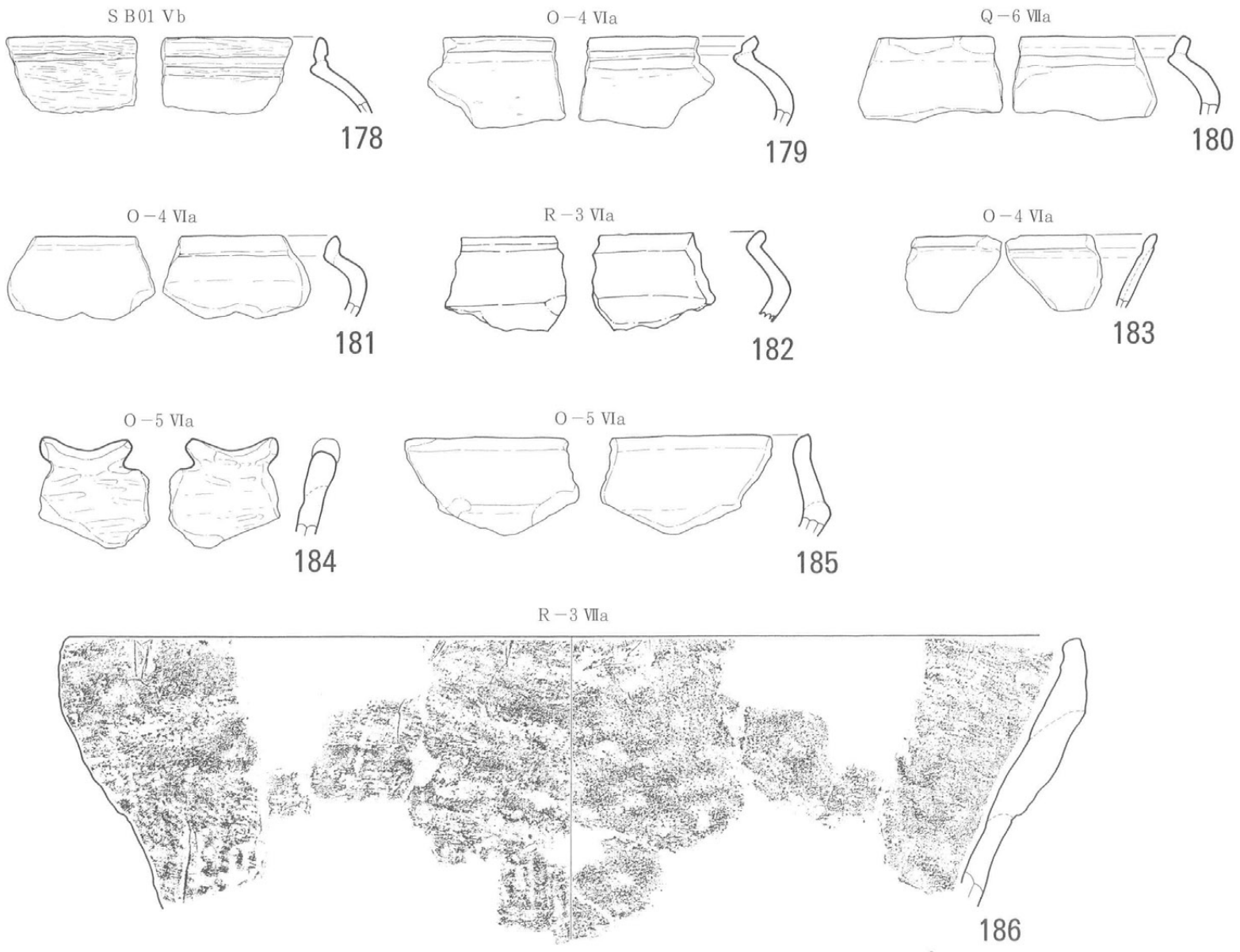


第 39 図　縄文時代後・晩期遺物②

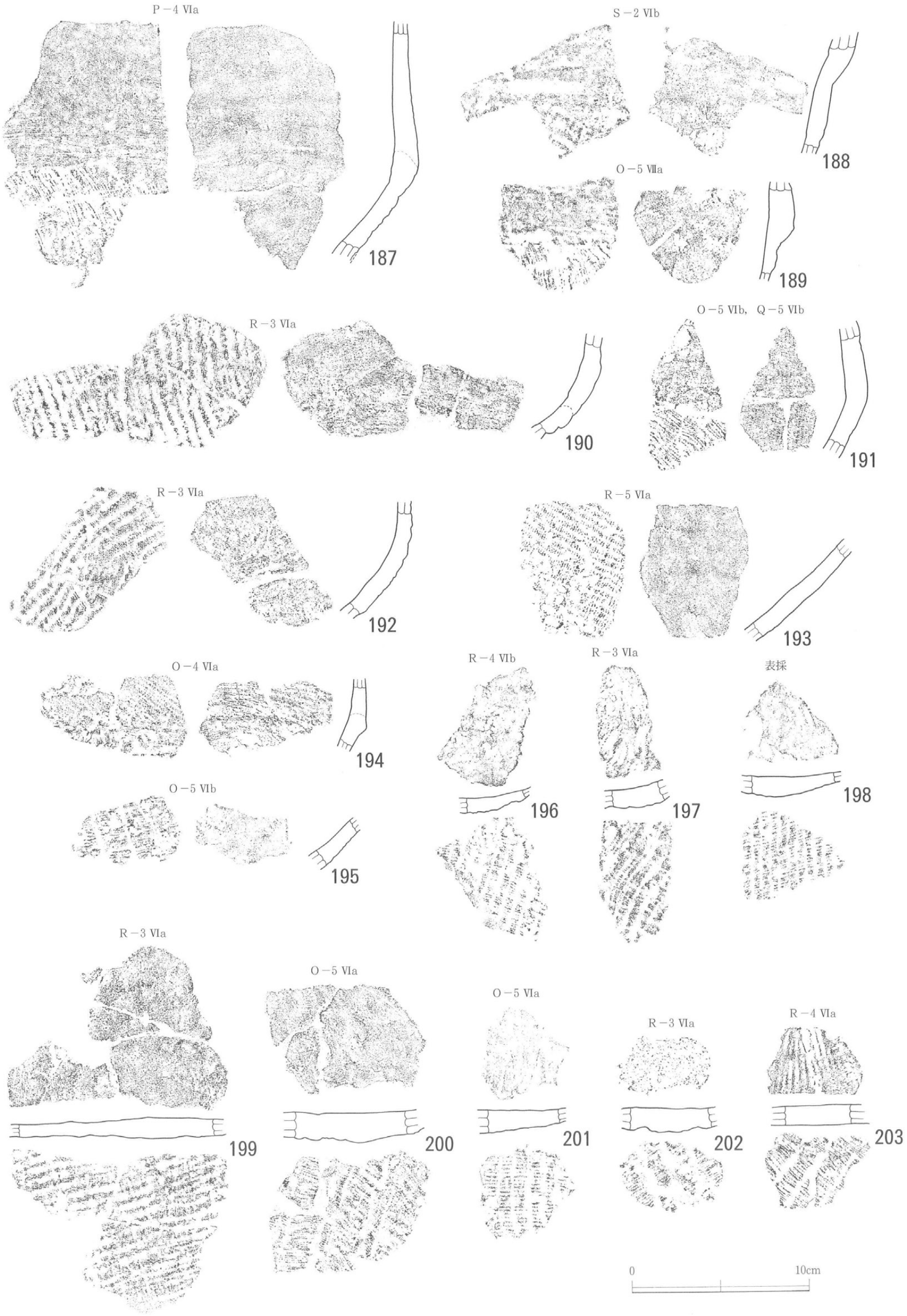


第 40 図　縄文時代後・晩期遺物③





第 41 図　縄文時代後・晩期遺物④

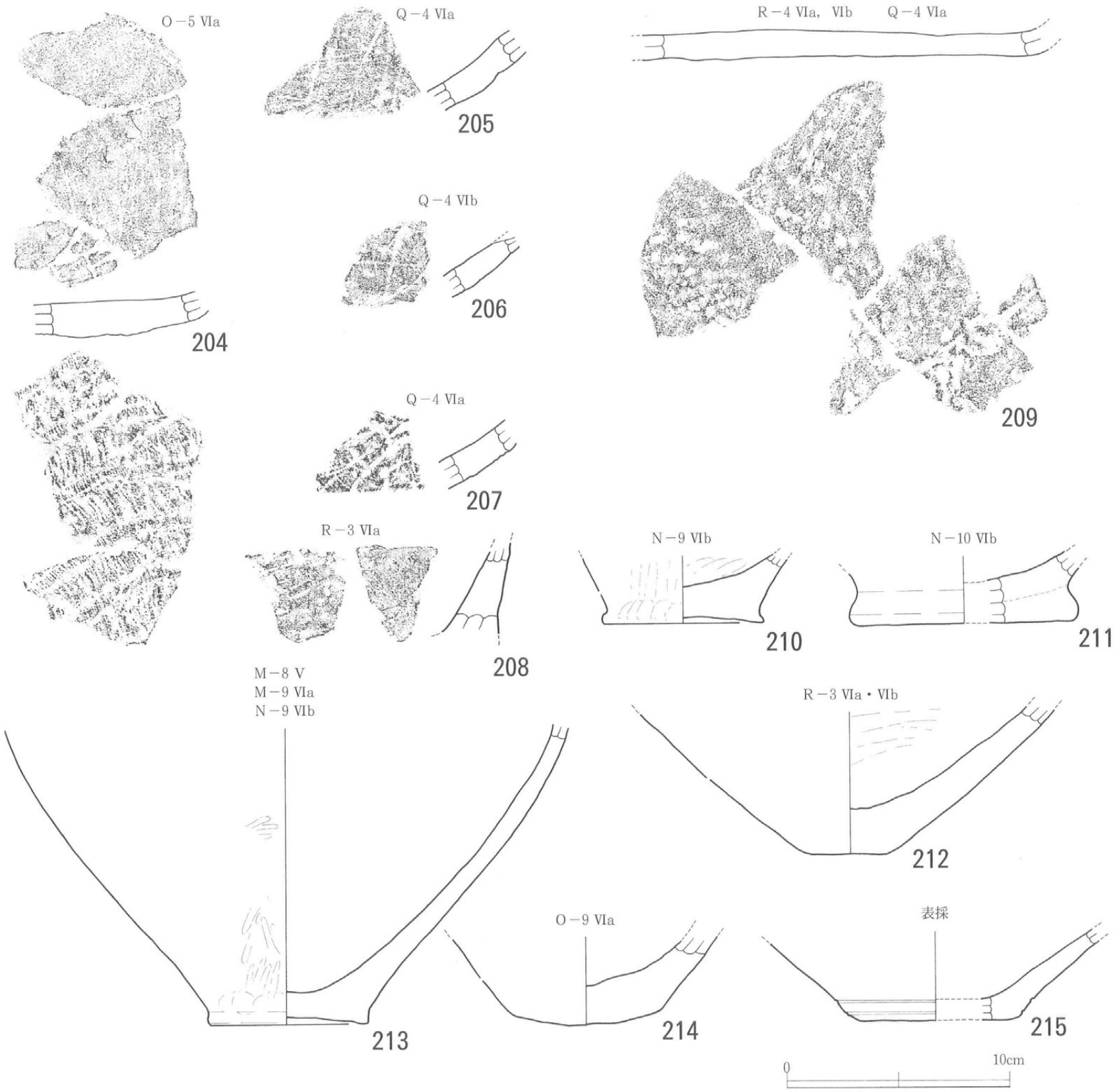


第 42 図　縄文時代後・晩期遺物⑤

頸部に向かって縦方向のミガキが施され、外面には赤色顔料が塗布されている。口唇部には沈線が施されている。224 は口径 14.8 cmで、口縁端部はやや肥厚し、口唇部には沈線が施される。口縁内部には突帯が 1 条廻る。胎土は粗く、大粒の鉱物を多く含んでいる。225 は口径 18.6 cmで、口縁端部に向かい器壁が厚みを増す。厚く貼り付けられた口唇部は中央が窪む。

表 10　包含層出土遺物観察表①

図版番号		出土区	出土層	器種	調整		色調		胎土	備考
					外面	内面	内面	外面		
38	140	O-4	Ⅵa	深鉢	ミガキ	ナデ	黒褐 (7.5YR3/2)	褐 (7.5YR4/4)	白色砂粒多	
	141	N-5		深鉢	ミガキ	ナデ	褐 (7.5YR4/4)	黒褐 (7.5YR4/2)	白色砂粒多	
	142	P-5	Ⅵb	深鉢	ミガキ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	石英・白色・茶褐色砂粒多	
	143	N-5	Ⅵa	深鉢	ナデ	ミガキ	黒 (7.5YR2/1)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	白色砂粒多	
	144	O-5	Ⅶb	深鉢	ミガキ	オサエ→ナデ	褐 (7.5YR4/3)	黒褐 (2.5YR3/1)	長石多	
	145	O-4	Ⅵa	深鉢	条痕→ナデ	オサエ＋ナデ	橙 (7.5YR7/6)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	白色・黄褐色砂粒多	
	146	SC83	Ⅴb	深鉢	ミガキ	ミガキ	灰黄褐 (10YR4/2)	黒褐 (7.5YR3/3)	角閃石多	
	147	R-2	Ⅵa	深鉢	ナデ→ミガキ	ナデ＋オサエ→ミガキ	暗褐 (10YR2/2)	黒褐 (10YR2/2)	長石・角閃石多	
39	148	R-3 L-9	Ⅵa	深鉢	ナデ	条痕→ナデ	橙 (5YR7/6)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	黒褐色・斜褐色砂粒多	口径：21.3 cm スス付着
	149	O-4	Ⅵa	深鉢	条痕→ナデ	条痕→ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	白色・茶褐色砂粒多	
	150	R-3	Ⅵa Ⅵb	深鉢	条痕	条痕→ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	石英・白色砂粒多	
	151	R-1	Ⅶb	深鉢	条痕	ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	白色砂粒	
	152	O-5	Ⅵa	深鉢	条痕	条痕	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい褐 (7.5YR7/4)	白色砂粒多	
	153	R-3	Ⅵa	深鉢	ナデ	ナデ	灰黄褐 (10YR5/2)	にぶい黄橙 (10YR5/2)	白色砂粒多	補修孔有
	154	R-2	Ⅵa	深鉢	ナデ	ナデ＋オサエ	褐灰 (10YR4/1)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	白色砂粒多	
	155	O-5	Ⅵa	深鉢	条痕→ナデ	条痕→オサエ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	黒褐 (2.5YR3/2)	石英・黒色砂粒多	
	156	R-4	Ⅵb	深鉢	ナデ	ナデ→ミガキ	黒褐 (10YR3/1)	にぶい黄橙 (10YR5/3)	白色砂粒多	
	157	R-4	Ⅵa	深鉢	ナデ	オサエ＋ナデ→ミガキ	灰黄褐 (10YR5/2)	にぶい黄橙 (10YR6/2)	白色砂粒多	スス付着
	158	O-5	Ⅵa	鉢	条痕→ナデ	条痕→ナデ、ナデ	灰黄褐 (10YR4/2)	黒褐 (10YR3/1)	石英多	
	159	R-4	Ⅵa	深鉢	ナデ＋ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR5/3)	白色砂粒多	



第 43 図　縄文時代後・晩期遺物⑥

226 は脚台付壷である。P-6 区の遺物集中部から出土し、口縁部が下を向いた状態で、周辺から胴部片や底部が出土した。中実の脚部は甕の脚部を思わせるが、やや直線的に長めである。底部はやや上げ底気味で、底部側面は面を形成し、細かい刻目が施される。脚部は上から下へ向かってミガキが残される。脚部の付け根には断面三角形の貼付突帯が 1 条廻る。胴部は大きく張り、断面三角形の貼付突帯が4条廻る。また、頸部の付け根から肩部にかけて断面三角形の貼付突帯が3条廻るものである。胴部内面には横から斜め方向に丁寧にミガキが施されている。内面はハケ・ナデ・オサエによって丁寧に整形される。頸部は縦方向に丁寧にミガキが施され、内面は一部絞りの痕がのこるものの丁寧にナデられている。口縁部は長めでやや垂れ下がり、口縁端部が肥厚する。口唇部は平坦になでられた後、中央に沈線を施し、縦に細かい刻目を施している。口縁部付け根は丁寧にナデが施され、その直下に断面三角形の貼付突帯が 1 条廻る。口縁内付け根の内面にはつまみ出したように突帯が形成される。胴部の突帯と脚部には所々赤色顔料が付着している。口径 14.0 cm、器高 30.7 cm、底径 8.8 cmである。胎土には雲母の他白色の鉱物粒を多く含んでおり、他の土器と比べ鮮やかな橙色を呈している（胴部に一部黒斑あり）。

227 は小型の甕である。口径 12.4 cm、器高 12.9 cm、底径 4.3 cmである。口縁部は断面三角形を呈し、内部には接合痕を残す。器面は丁寧なナデによって整形され、底部はやや上げ底気味か。口縁部内外

にはススが付着する。228 は大甕の胴部片で、下がり気味の貼付突帯が施され、突帯中央はやや窪む。229 は甕の脚部で、底径 7.6 ㎝である。短い中実の脚で屈曲部から直線的に立ち上がる。屈曲より上部は縦方向のミガキが施される。脚部外面と底部には白色の付着物が認められる。230 は底径 8.6 ㎝の脚部である。底部は上げ底で側面に面を形成する、脚部の調整は縦方向のミガキが主で、付け根の下は横方向のミガキが施される。付け根には断面三角形の突帯が 2 条認められる。脚部の付け根に突帯が施されること等から脚台付壷の脚部の可能性もあるが、胴部への立ち上がりの角度を考えると甕の脚部である可能性が高いと思われる。231 は甕の胴部片である。2 条の貼付突帯を施し、外面には赤色顔料が一部施されている。

232 は口径 23.8 ㎝の壷である。口縁部は横ナデ、頸部から下位は縦方向のミガキが施される。頸部付け根からやや膨らむ。

233 ～ 243 は甕である。233 は口径 22.4 ㎝で、口縁端部がやや肥厚する。内外面はナデが施される。234 は口径 19.8 ㎝で、胴部に張りを持たない筒状を呈す口縁部はやや外反し、口縁部外面は屈曲部より上へ掻き上げられる。調整は内外面ともハケを主体とし、胴部下半に工具によるナデが認められる。内外面にはススが付着する。235 は口径 24.5cm ですぼまった底部から外に大きく開きながら立ち上がる。口唇部は平坦に仕上げられる。胴部下半は工具による縦方向のナデが施され、内面は屈曲部の下方にオサエの痕が残る。外面は口縁部から胴部下半までススが付着している。

表 11　包含層出土遺物観察表②

図版番号		出土区	出土層	器種	調整		色調		胎土	備考
					外面	内面	内面	外面		
40	160	R-4	Ⅵa	深鉢	ケズリ＋ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR5/4)	黒褐 (2.5YR3/1)	長石・石英多	スス付着
	161	O-4	Ⅶa	深鉢	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	黒褐 (10YR3/2)	長石多	
	162	O-3	Ⅵa	深鉢	ミガキ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	長石・白色砂粒多	
	163	Q-4	Ⅵa	深鉢	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	黒 (10YR2/1)	長石・石英・茶褐色砂粒多	
	164	R-3	Ⅵb	深鉢	ナデ	ナデ	灰黄褐 (10YR4/2)	褐灰 (10YR4/1)	白色・黒色砂粒多	
	165	R-3	Ⅵa	深鉢	ナデ	ナデ	灰黄褐 (10YR5/2)	黒褐 (10YR3/1)	白色砂粒多	スス付着 補修孔有
	166	R-3 L-9 R-2	Ⅵa	深鉢	ミガキ	ミガキ	灰黄褐 (10YR6/2)	灰黄褐 (10YR5/2)	白色砂粒多	スス付着 口径：25.7 ㎝
	167	R-3	Ⅵa Ⅵb	深鉢	ミガキ＋ナデ	ミガキ	灰黄褐 (10YR5/2)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	茶褐色・黒色砂粒多	
	168	R-3	Ⅶa	深鉢	ミガキ	ミガキ	黒褐 (7.5YR3/1)	黒 (7.5YR2/1)	白色砂粒	
	169	R-2 R-3	Ⅵa	深鉢	ミガキ	ミガキ	黒褐 (7.5YR3/1)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	長石多	
	170	R-3	Ⅶa	深鉢	ナデ＋ミガキ	ナデ＋ミガキ	黒褐 (7.5YR3/1)	黒褐 (7.5YR3/1)	長石多	
	171	R-3	Ⅵa	鉢	ミガキ	ミガキ	灰黄褐 (10YR5/4)	にぶい黄褐 (10YR5/4)	黒色砂粒多	内外スス付着
	172	R-3	Ⅶa	鉢	ミガキ	ミガキ	黒 (10YR2/1)	黒褐 (7.5YR3/1)	白色砂粒多	口径：21.4 ㎝

236 は口径 22.4 ㎝である。内面はハケ目が残り、外面はナデが施されている。器壁は薄く口唇部は平坦になでられている。屈曲部に沈線状の稜が残る。237 は口径 23.8 ㎝で、胴部と頸部の屈曲は弱く、口唇部は平坦である。外面にはススが付着する。238 は口径 20.8 ㎝で、内外面ともナデで整形され、頸部の屈曲は弱く、器壁は口縁部に向かい薄くなる。外面にはススが付着する。239 は胴部から底部にかけて残るもので、底径 5.4cm である。底部は上げ底で底部側面はユビオサエの痕が残る。内外面は下から上にナデ上げられる。240 は外面にハケ目を明瞭に残し、内面の底部付近にはユビオサエの痕が残り、胴部にはヘラ状の工具によるナデの痕が残る。

241 ～ 243 は甕であるが、先述の甕に比べ器高が低く、口が広いものである。241 は口径 33.2 ㎝、器高 25.6 ㎝、底径 7.0 ㎝である。小ぶりの底部から大きく外へ開きながら立ち上がり、張り出した胴部から、口縁部は外反する。口唇部は平坦にナデが施され、口縁部外面は屈曲部から下から上へハケで掻き上げられており、掻き上げの起点から反り返る。底部は円盤状で、やや丸味を帯びる。胴部は下から上へ向かいハケ目が残り、内面はナデ消されている。口縁部から胴部上位にかけてススが残る。242 は口径 26.2 ㎝で、胴部が口縁部より張り出すものである。胴部が内外面はナデが施され、外面にススが付着する。243 は口径 32.6 ㎝で、胴部の張りは弱く口縁部は直線的に外反する。口唇部はナデによって平坦に整形される。胴部外面は不定方向に工具によるナデが残り内面はナデとオサエが残る。外面の屈曲部には粘土の接合痕が明瞭に残り稜をなす。また、口縁部から胴部かけてススが残る。

表 12　包含層出土遺物観察表③

図版番号		出土区	出土層	器種	調整		色調		胎土	備考
					外面	内面	内面	外面		
41	173	R-3	Ⅵb	鉢	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	灰色砂粒多	孔列文
	174	P-3	Ⅵa	鉢	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR5/3)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	白色・茶褐色砂粒多	孔列文
	175	Q-4	Ⅵa Ⅵb	壷	ミガキ	オサエ＋ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい黄褐 (10YR5/4)	茶褐色・黒色砂粒多	底径：21.4 ㎝
	176	O-6	Ⅵa	浅鉢	ケズリ＋ミガキ	ナデ	灰黄褐 (10YR5/2)	灰黄褐 (10YR5/2)	白色砂粒	
	177	YSA	Ⅵa	浅鉢	ミガキ	ケズリ	灰褐 (10YR4/1)	灰褐 (10YR4/1)	白色砂粒多	
	178	SB01	Ⅴb	浅鉢	ミガキ	ミガキ、ナデ	黒褐 (2.5YR3/1)	黒褐 (2.5YR3/1)	白色砂粒多	
	179	O-4	Ⅵa	浅鉢	ケズリ→ミガキ	ナデ	灰黄褐 (10YR5/2)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	石英・茶褐色砂粒多	
	180	Q-6	Ⅶa	浅鉢	ナデ→ミガキ	ナデ	黄灰 (2.5Y4/1)	灰黄褐 (10YR4/2)	白色砂粒多	
	181	P-4	Ⅵa	浅鉢	ナデ→ミガキ	ナデ＋オサエ	灰黄褐 (10YR4/2)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	白色砂粒多	
	182	R-3	Ⅵa	浅鉢	ナデ、ミガキ	ナデ	褐灰 (10YR5/1)	褐灰 (10YR5/1)	白色砂粒多	
	183	O-5	Ⅵa	浅鉢	?	ミガキ	褐灰 (10YR4/1)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	石英多	
	184	O-5	Ⅵa	浅鉢？	ミガキ	ナデ→ミガキ	黄灰 (2.5Y4/1)	暗灰黄 (2.5YR5/2)	白色砂粒多	突起部
	185	O-4	Ⅵa	浅鉢	ミガキ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	白色砂粒多	
	186	R-2 R-3	Ⅵa	深鉢	組織痕、ナデ	オサエ→ナデ	灰黄褐 (10YR5/2)	橙 (7.5YR7/6)	白色砂粒多	口径：38.0 ㎝

244 は SC84 の埋土中から出土している。二重口縁の壷で、口縁部に櫛描波状文が 4 条残る。内外はナデが施され、口唇部は平坦にナデられている。245・246 は小型の甕である。245 は口径 18.6 ㎝で、胴部から「く」の字に外反する口縁部へと立ち上がる。口唇部は平坦にナデが施され、外面は不定方向のナデが施される。内面は口縁部が横方向のナデ、胴部が下から上にハケ目が残る。外面にはススが付着する。246 は口径 16.0 ㎝で、口唇部は平坦にナデられる。外面はナデが施され、内面は丁寧なミガキが施される。

表 13　包含層出土遺物観察表④

図版番号		出土区	出土層	器種	調整		色調		胎土	備考
					外面	内面	内面	外面		
42	187	P-4	Ⅵa	鉢	組織痕、ナデ	ナデ	黒褐 (10YR3/1)	灰黄褐 (10YR4/2)	角閃石・長石多	
	188	S-2	Ⅵb	鉢	組織痕	ナデ	灰黄褐 (10YR5/2)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	白色・黒色砂粒多	
	189	O-5	Ⅶa	鉢	組織痕、ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	茶褐色砂粒多	
	190	R-3	Ⅵa	鉢	組織痕	オサエ→ナデ	褐灰 (10YR4/1)	明黄褐 (10YR7/6)	白色・黒色砂粒多	
	191	O-5 R-5	Ⅵb	鉢	組織痕、ナデ	ナデ	黒褐 (10YR3/1)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	石英・角閃石多	
	192	R-3	Ⅵa	鉢	組織痕	ナデ	黒褐 (10YR3/2)	明黄褐 (10YR7/6)	白色砂粒多	
	193	P-5	Ⅵa	鉢	組織痕	ナデ	黒 (10YR2/1)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	長石・白色砂粒多	
	194	O-4	Ⅵa	鉢	組織痕、ナデ	ナデ	褐 (7.5YR4/3)	橙 (7.5YR6/6)	白色砂粒多	
	195	O-5	Ⅵb	鉢	組織痕	ナデ	にぶい黄褐 (10YR5/3)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	長石多	
	196	R-4	Ⅵb	鉢	組織痕	ナデ	灰黄褐 (10YR5/2)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	白色・黒色砂粒多	
	197	R-3	Ⅵa	鉢	組織痕	ケズリ	灰黄褐 (10YR5/2)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	白色・黒色砂粒多	
	198	表採		鉢	組織痕	ナデ	灰褐 (2.5YR5/2)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	石英多	
	199	R-3	Ⅵa	鉢	組織痕	オサエ→ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	石英多	
	200	O-5	Ⅵa	鉢	組織痕	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	橙 (7.5YR6/6)	石英・長石多	
	201	O-5	Ⅵa	鉢	組織痕	ナデ	灰黄褐 (10YR4/2)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	長石多	
	202	R-3	Ⅵa	鉢	組織痕	?	にぶい黄橙 (10YR7/4)	明黄褐 (10YR7/6)	茶褐色・黒色砂粒多	
	203	R-4	Ⅵa	鉢	組織痕	条痕	黒褐 (10YR3/1)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	黒色砂粒多	

247～252は底部である。247は底径4.8cmで、内外面はナデが施され、底部内面には絞りの痕が残り、中央は窪む。248は底径5.7㎝で、器面はナデが施される。底面にはケズリの痕や、底部切り離しの際の工具痕が残る。249は底径6.8㎝で、248同様底部に工具痕を残す。250は底径6.8㎝である。器壁は厚く円盤状の底部から丸みを持って大きく開く。器面全体にナデが施され、底部側面には布状の痕を残すオサエが認められ、底部中央は布状のオサエによって上げ底状になっている。251は丸味を帯びた底部で、底径は6.0cmである。252は底径9.8㎝で、ナデによって整形され、やや上げ底である。

253～268は甕である。253は口径26.8㎝で、口縁部と胴部の境に明瞭な稜を持つ。器面はハケとナデが残り、口縁部は胴部との境を起点に下から上にハケで掻き上げた後横ナデを施している。外面は粘土紐の輪積みの痕跡が残り、ススが付着する。254は口径26.4㎝で、口唇部が平坦にナデられる。また、口縁部と胴部の境には明瞭な稜をもつ。器面はナデが施される。

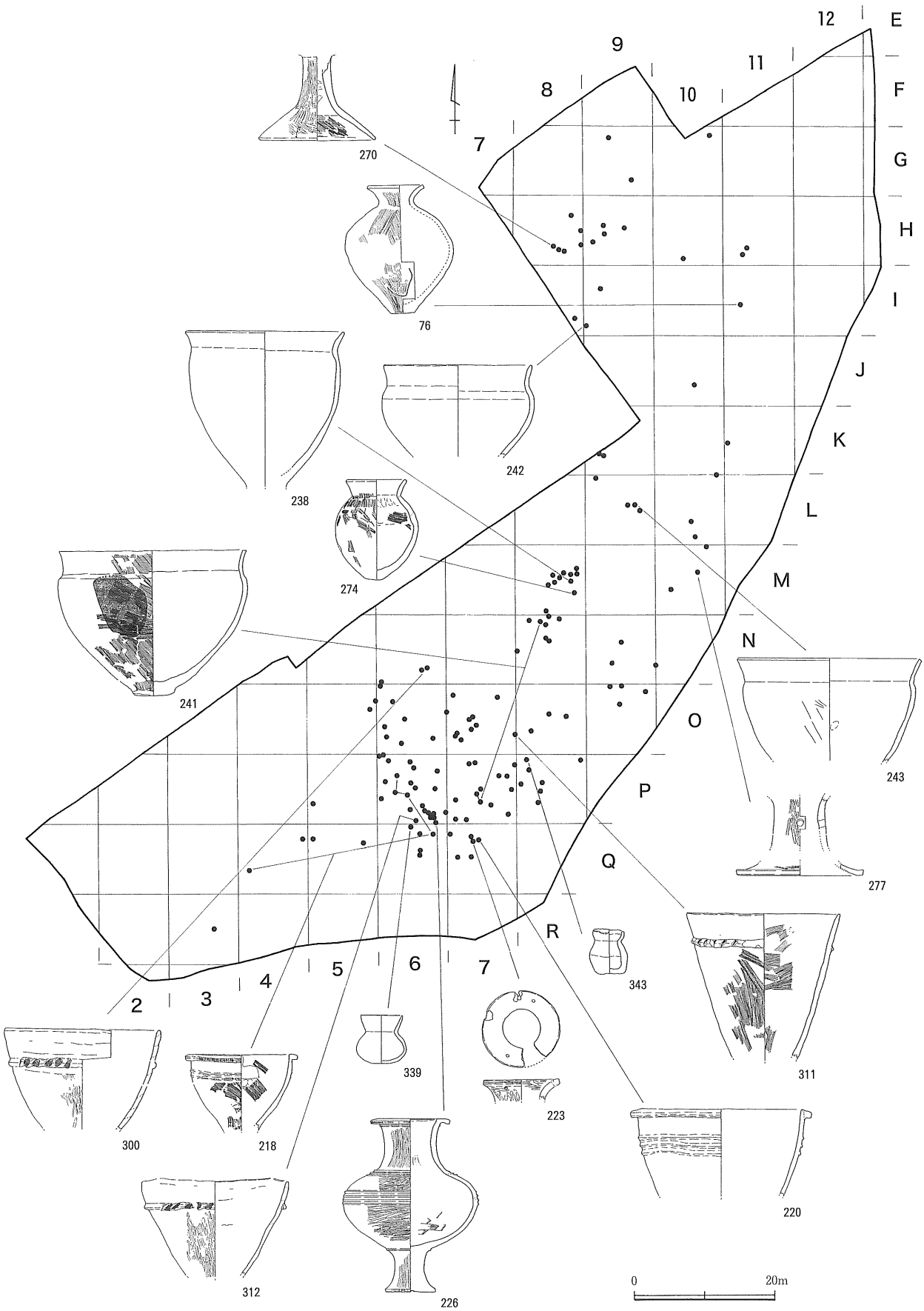
255～268は底部である。255は底径5.0cmで円盤状の底部から丸味をもって立ち上がる。器面は工具によるナデを残し、底部側面と内面にはオサエの痕が明瞭に残る。外面にススが付着する。256は平底で底径は6.8㎝である。底部側面に一部工具の痕を残す。257は底径7.8㎝で、器面はナデが施される。底部側面には布状の痕を残すオサエが認められ、底部は布状の痕跡を残す上げ底となっている。外面にススが付着する。258は上げ底気味の底部で、底径は6.4cmである。円盤状の底部から外に開きながら直線的に立ち上がる。259は底径5.9㎝の上げ底の底部である。底部外面には棒状工具の圧痕が残る。

表14　包含層出土遺物観察表⑤

図版番号		出土区	出土層	器種	調整		色調		胎土	備考
					外面	内面	内面	外面		
43	204	O-5	VI a	鉢	組織痕	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	石英・角閃石・茶褐色砂粒多	
	205	Q-4	VI a	鉢	葉脈痕	ナデ	灰黄褐 (10YR6/2)	黄橙 (10YR8/6)	石英・黒色砂粒多	
	206	Q-4	VI b	鉢	葉脈痕	ナデ	灰黄褐 (10YR5/2)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	白色・黒色砂粒多	
	207	Q-4	VI a	鉢	葉脈痕	ナデ	灰黄褐 (10YR6/2)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	白色・黒色砂粒多	
	208	R-3	VI a	鉢	ナデ	オサエ、ナデ	灰黄褐 (10YR6/2)	にぶい黄橙 (10YR7/4)		
	209	Q-4 R-4 Q-6	VI a	鉢	組織痕	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	明黄褐 (10YR7/6)	白色砂粒多	
	210	N-9	VI b	深鉢	ナデ	オサエ	明赤褐 (5YR5/6)	明赤褐 (5YR5/6)	石英・白色砂粒多	底径：8.2㎝
	211	N-10	VI b	深鉢	ナデ	ナデ	黒褐 (10YR2/2)	明赤褐 (5YR5/6)	角閃石・白色砂粒多	底径：10.0㎝
	212	R-3	VI a	深鉢	ナデ	ナデ	灰黄褐 (10YR7/2)	灰褐 (7.5YR7/2)	白色砂粒多	底径：3.4㎝
	213	M-8 M-9 N-9	V VI a VI b	壷？	ミガキ、オサエ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	長石・茶褐色砂粒多	底径：7.2㎝
	214	O-9	VI a	深鉢	ナデ	ナデ＋オサエ	褐 (7.5YR4/3)	赤褐色 (5YR4/6)	角閃石・石英多	底径：6.3㎝
	215	表採		深鉢	ミガキ	オサエ、ミガキ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	灰黄褐 (10YR6/2)	茶褐色砂粒多	底径：7.0㎝

表 15　包含層出土遺物観察表⑥

図版番号		出土区	出土層	器種	調整		色調		胎土	備考
					外面	内面	内面	外面		
45	216	N-9	Ⅵb	甕	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR5/3)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	白色鉱物多	
	217	P-6	Ⅵb	壷	ミガキ	ミガキ	浅黄橙 (10YR8/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	黒色鉱物多	
	218	P-6 Q-6	Ⅴ Ⅵa Ⅵb	甕	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	白色鉱物多	口径：19.8 cm スス・炭化物
	219	O-8	Ⅵb	甕	ナデ	ハケ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	白色鉱物多	口径：26.2 cm スス 中溝式
	220	P-6 P-7 Q-7	Ⅵa Ⅵb	甕	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (5 YR6/4)	白色鉱物 雲母	口径：32.0 cm 入来Ⅱ式
	221	L-10	Ⅵb	甕	ナデ→ミガキ	ナデ＋オサエ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	白色鉱物	口径：24.2 cm スス
	222	Q-5	Ⅴ	甕	ナデ	ナデ＋オサエ	にぶい褐 (7.5YR5/3)	にぶい褐 (7.5YR5/3)	白色鉱物 雲母	スス 入来Ⅱ式
	223	P-6 P-7 Q-7	Ⅵa Ⅵb	壷	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	白色鉱物多	口径：13.6 cm 穿孔４つ 赤色顔料 スス
	224	P-6	Ⅵa	壷	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	大粒の黒・赤褐色鉱物多	口径：14.8 cm
	225	H-10	Ⅵb	壷	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	黒・赤褐色鉱物多	口径：18.6 cm
46	226	P-6 O-6 Q-6	Ⅵb Ⅶa Ⅶb	脚付壷	ナデ、ミガキ	ハケ、ナデ	橙 (5YR7/8)	橙 (5YR7/8)	雲母・白・褐色鉱物多	口径：14.0 cm 器高：30.7 cm 底径：8.8 cm 頸部・胴部・脚部に一部赤色顔料
	227	Q-5	Ⅵb	小型甕	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	黒・白・褐色鉱物多	口径：12.4 cm 器高：12.9 cm 底径：4.3 cm 外面スス
	228	P-8	Ⅵb	甕	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	白色鉱物多 雲母	
	229	P-7	Ⅴa	甕	ミガキ	ナデ	褐灰 (7.5YR4/1)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	大粒の白色鉱物多	底径：7.6 cm 底面白色土
	230	P-6	Ⅵb	甕脚部？	ミガキ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	黒・白・褐色鉱物多	底径：8.6 cm 壷脚部の可能性有
	231	O-7	Ⅵb	甕	ナデ	ナデ	灰白 (10YR8/2)	灰黄褐 (10YR6/2)	黒・白色鉱物・雲母	赤色顔料



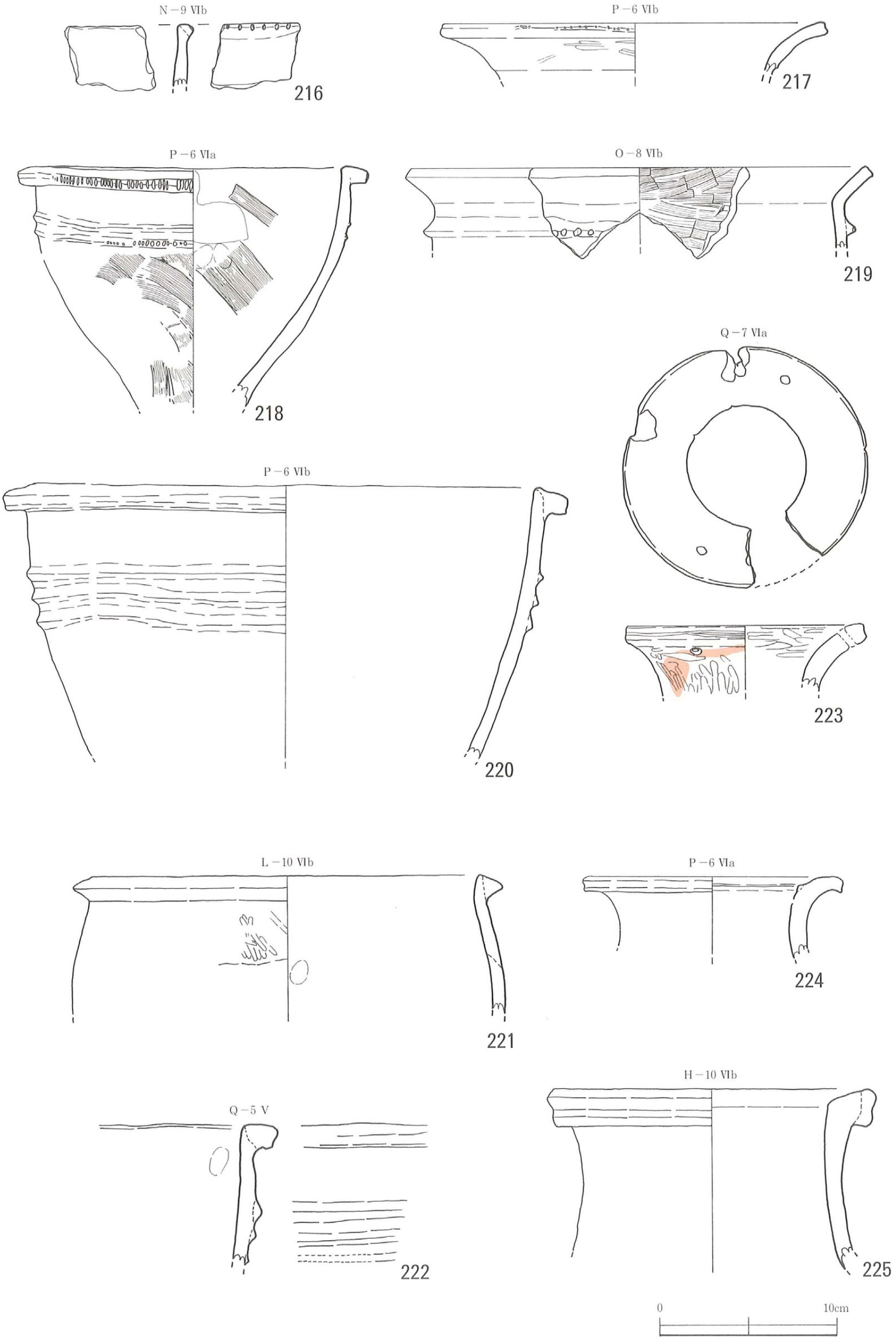
第 44 図　弥生・古墳時代土器分布図

表 16　包含層出土遺物観察表⑦

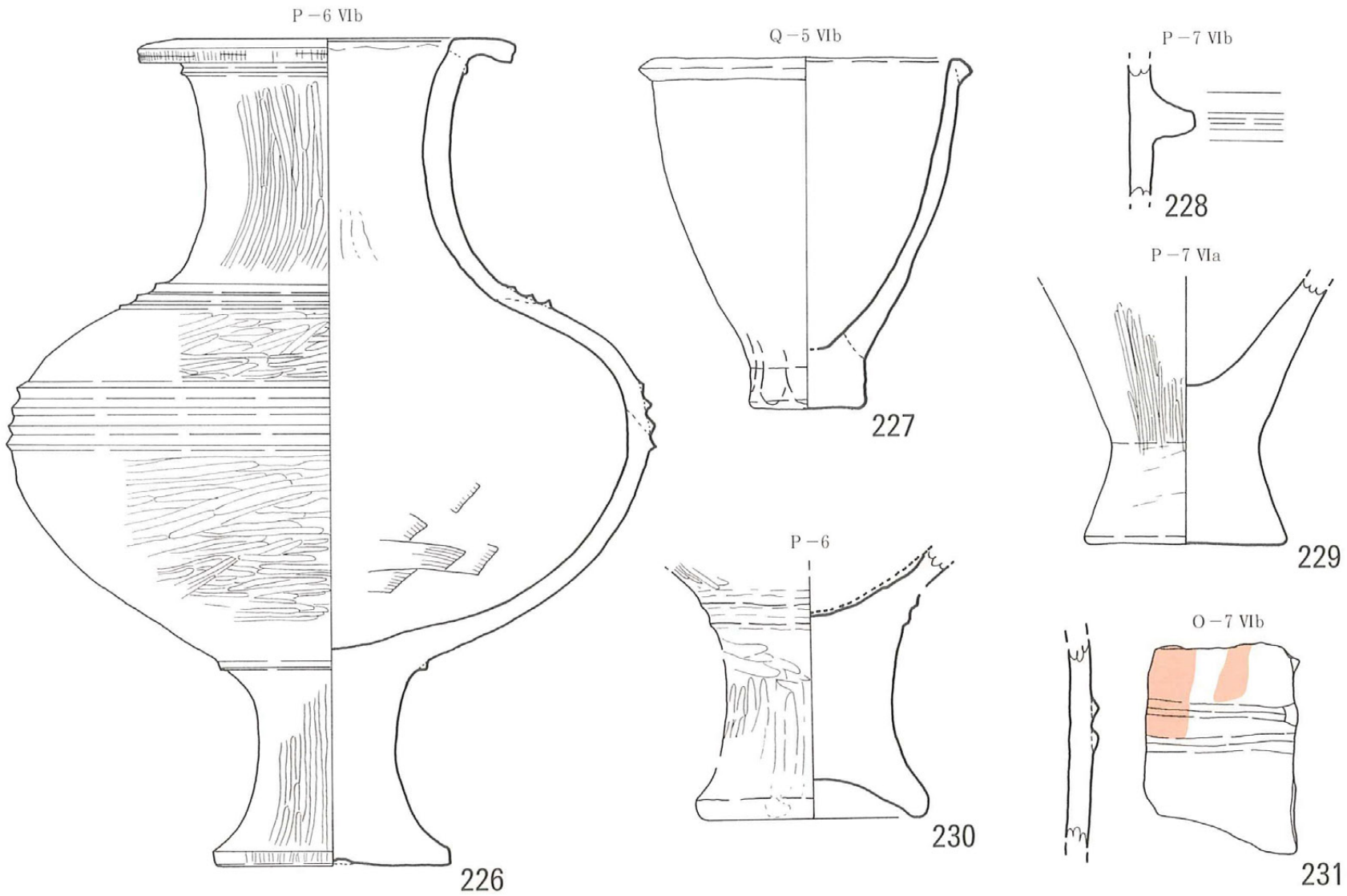
図版番号		出土区	出土層	器種	調整		色調		胎土	備考
					外面	内面	内面	外面		
47	232	H-11	Ⅵa	甕	ミガキ、ナデ	ハケ、ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/4)	赤褐・黒色鉱物多	口径：23.2 cm
	233	P-8	Ⅵb	甕	ナデ	ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	橙 (7.5YR7/6)	褐・灰白色鉱物多	口径：22.4 cm
	234	M-8	Ⅵa	甕	ナデ、ハケ	ハケ	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	大粒の褐色鉱物多	口径：19.8 cm スス・炭化物
	235	O-6 P-6	Ⅵa	甕	ミガキ＋ナデ	ナデ＋ユビオサエ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	黒色鉱物多	口 径：24.0 cm 外面スス
	236	G-9	Ⅵa	甕	ナデ	ハケ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	黒・褐色鉱物多	口径：22.4 cm
	237	M-8	Ⅵa	甕	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	大粒の褐色鉱物多	口径：23.8 cm スス付着
	238	M-8	Ⅵa Ⅵb	甕	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	大粒の褐・灰白色鉱物多	口径：20.8cm
	239	K-9	Ⅵa	甕	ナデ＋ユビオサエ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	橙 (7.5YR7/6)	大粒の褐色鉱物	底径：5.4 cm
	240	O-6 P-6	Ⅵb	甕	ハケ	ナデ、オサエ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい橙 (7.5YR7/3)	暗褐色鉱物多	
48	241	N-8	Ⅵa Ⅵb	甕	ハケ	ハケ＋ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/3)	浅黄橙 (7.5YR8/3)	大粒の褐色鉱物多	口径：33.2 cm 器高：25.6 cm 底径：7.0 cm 外面スス
	242	I-9	Ⅵa	鉢	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	大粒の褐・黒色鉱物多	口径：26.2 cm 外面スス
	243	K-9 L-9	Ⅵa Ⅵb	甕	工具ナデ	ナデ	浅黄橙 (2.5Y7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	大粒の褐・黒色鉱物多	口径：32.6 cm 外面スス
	244	SC84		壷	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	大粒の褐・黒色鉱物多	
	245	Q-6	Ⅵb	甕	ナデ	ナデ、ハケ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	灰・褐色鉱物多	口径：18.6 cm 外面スス
	246	N-8	Ⅵb	甕	ナデ	ミガキ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	大粒の褐・灰白色鉱物	口径：16 cm
	247	O-7	Ⅵa	底部	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	灰白 (10YR8/2)	大粒の茶褐色鉱物	底径：4.8cm
	248	M-8	Ⅵa	底部	ハケ、ナデ	ナデ	褐灰 (10YR5/1)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	白色鉱物多	底径：5.7 cm
	249	O-7	Ⅵa	底部	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	灰白 (10YR9/2)	大粒の茶・褐色鉱物多	底径：6.2 cm
	250	M-10	Ⅴ	壷	ナデ、 オサエ（布）	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	暗褐色鉱物多	底径：6.8 cm
	251	F-10	Ⅵa	鉢	ナデ 一部ハケあり	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/2)	浅黄橙 (10YR8/4)	大粒の白・褐色鉱物	底径：6.0 cm
	252	Q-6	Ⅵb	甕	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	大粒の暗褐色鉱物	底径：9.8 cm

表 17　包含層出土遺物観察表⑧

図版番号		出土区	出土層	器種	調整		色調		胎土	備考
					外面	内面	内面	外面		
49	253	K-9 L-9	VI a VI b	甕	ナデ	ハケ＋ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	大粒の灰・褐色鉱物	口径：26.8 cm
	254	G-2	VI a	鉢	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	大粒の褐・灰色鉱物多	口径：26.4 cm
	255	M-8	VI a	甕	工具ナデ、オサエ	ナデ、オサエ	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	大粒の褐・灰色鉱物多	底径：5.0 cm
	256	K-10	VI b	底部	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	黒・褐色鉱物多	底径：6.8 cm 底部スス
	257	N-8	VI a	底部	ナデ	ナデ	灰黄褐 (10YR6/2)	灰白 (10YR8/2)	褐色鉱物	底部：7.8 cm
	258	M-8	V	壷	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	大粒の褐・灰色鉱物多	底径：6.4 cm
	259	O-7	VI a	底部	ナデ	ナデ	灰黄褐 (10YR6/2)	にぶい橙 (7.5YR6/3)	黒色鉱物多	底径：5.4 cm
	260	Q-6	VI b	底部	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	褐・灰色鉱物多	底径：6.4 cm
	261	SA01	VI a	底部	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/4)	黒・褐色鉱物多	底径：5.0 cm
	262	L-9	VI a VI b	甕	ナデ	ナデ	黒	にぶい黄橙 (10YR7/3)	大粒の褐色鉱物多	底径：5.8 cm
	263	P-9	VI b	甕	ナデ、ハケ	ナデ	褐灰 (10YR4/1)	浅黄橙 (10YR8/3)	大粒の褐・灰色鉱物多	底径：6.3 cm 内面炭化物
	264	H-11	VI a	甕	ナデ後ハケ	ナデ後ハケ	浅黄橙 (10YR8/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	黒色鉱物多	底径：7.9 cm
	265	M-8	VI a	甕	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	大粒の褐・灰色鉱物多	底径：5.6 cm
	266	I-8 I-9	VI a	甕	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	大粒の褐・灰色鉱物多	底径：6.0 cm
	267	M-8	VI b	甕	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/2)	浅黄橙 (10YR8/4)	大粒の褐・灰色鉱物多	底径：6.0 cm
	268	I-9	VI a	甕	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	黒・白色鉱物多	底径：4.9cm
	269	M-8	VI a	鉢	ミガキ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	褐色鉱物	口径：9.2 cm 器高：9.2 cm 底径：2.2 cm
	270	H-8 H-9	VI a	高坏	ナデ＋ミガキ	ナデ＋ハケ＋ケズリ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	黒・褐色鉱物多	底径：20.6cm



第45図　弥生・古墳時代遺物①



第46図　弥生・古墳時代遺物②

260は底径6.4㎝でやや上げ底である。261は底径5.0cmで、側面に粘土がはがれた痕が残っており、本来はやや張り出した底部であったと思われる。262は底径5.8㎝で、円盤状の底部と胴部の境に明瞭な稜を持ち、切り離しの際に工具痕が残されている。上げ底である。263は底径6.3㎝で、上げ底である。底部内面は指1本程の幅しかなく、炭化物が付着する。張り出した底部は横方向のナデが施され、胴部への立ち上がりは下から上へハケ目が残る。264は底径7.9センチで、張り出した底部から下から上へハケ目が残る。265は底径5.6㎝である。やや張り出し気味で、上げ底である。直線的に胴部へ立ち上がる。266・267は底径6.0センチでやや張り出し気味で、輪状の粘土を接合させ上げ底としている。268は底径4.9cmの円盤状の底部から粘土をつまみ出し、上げ底としている。

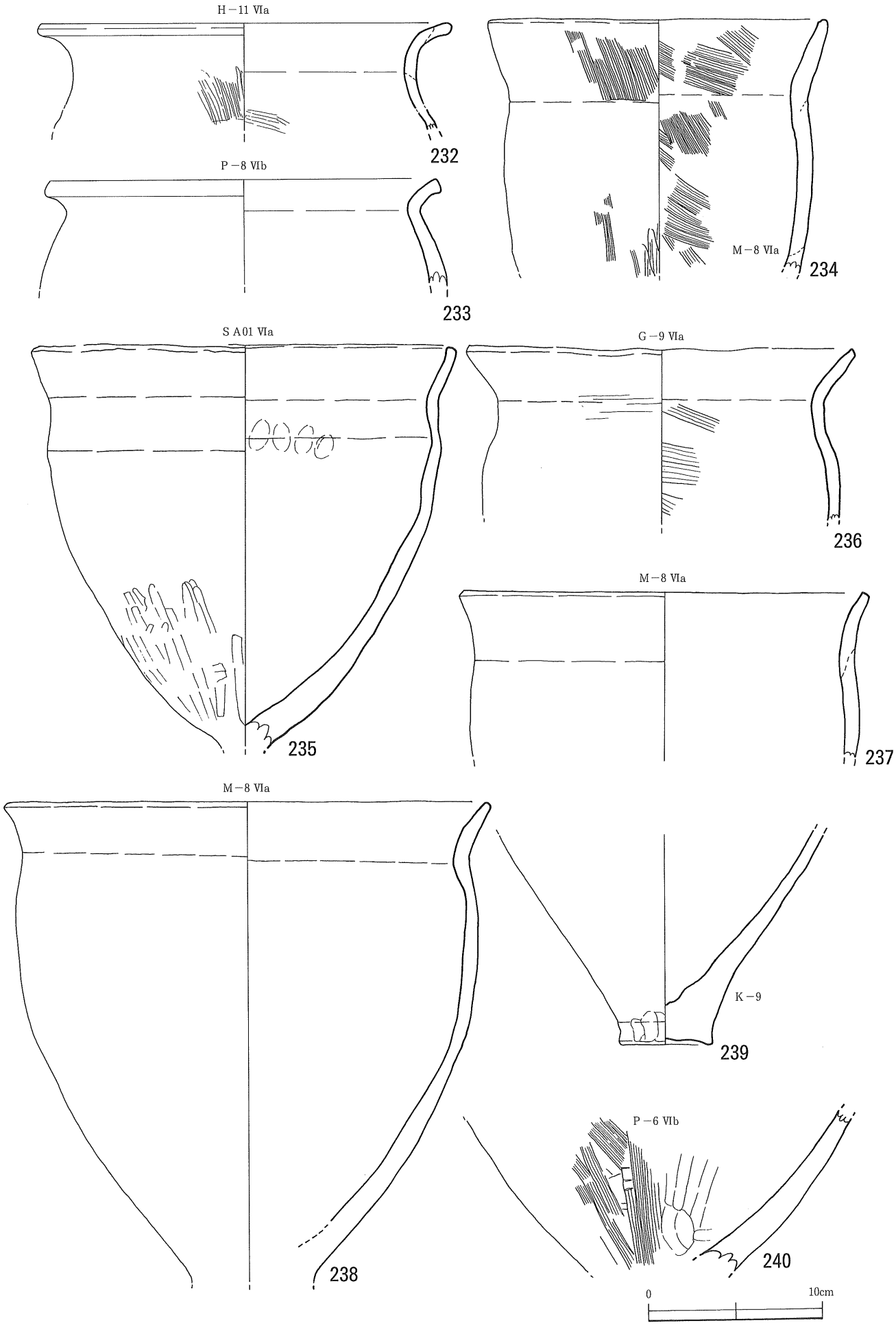
269は鉢で、口径9.2㎝、器高9.2㎝、底径2.2㎝で、底部から胴部は縦方向にミガキが残り、胴部最大径から上と底面はナデが施される。口縁部はやや内湾する。

270は高坏脚部である。底径は20.6㎝で、大きく開く底部から伸びる脚部は直線的に長く伸びる。外面はハケ目を部分的に残しながらも縦方向のミガキが施される。脚部内面はケズリが、底部はハケ目が残る。底部端は平滑にナデられる。接合しないものの同一個体と思われる円盤充填で作られる坏底部が付近から出土している。

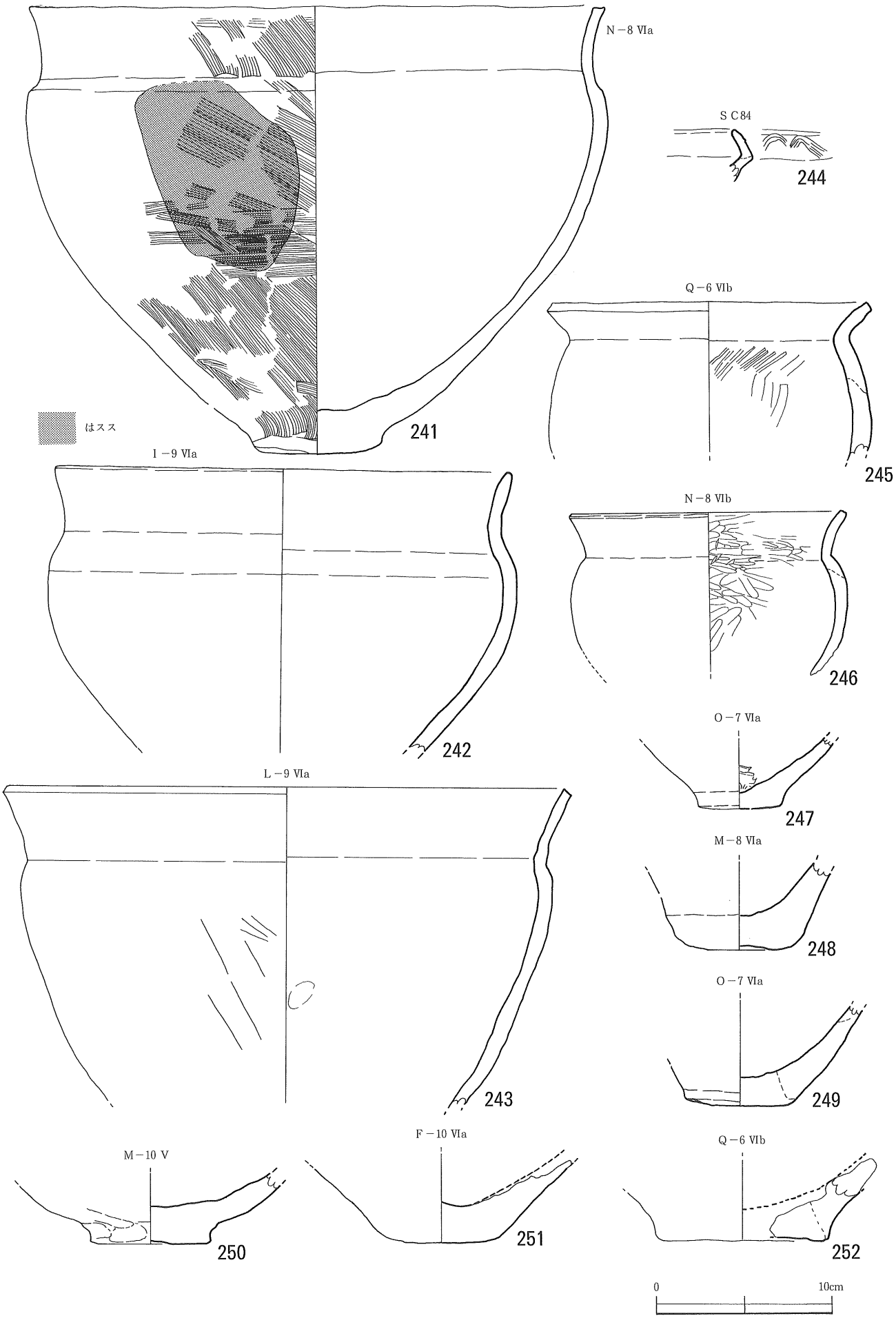
271～273は壷である。271は口縁部と底部を欠いている。外面はハケ目を残すものの丁寧にナデが施され、内面は横方向のハケ目が残る。頸部下には絞り痕も残る。272は口径10.7㎝、器高17.7㎝、底径2.0㎝の小型の壷である。やや丸味を帯びた小さい底部から丸みを持って膨らみ、口縁部は頸部から外反する。器面にはハケ目とナデが明瞭に残り、内面はオサエや粘土輪積み痕が残る。底部内面には工具によるオサエの痕が放射状に残る。275は底径5.4cmで、円盤状の底部側面には繊維痕を残すオサエの痕が残る。276は底径3.3㎝の丸味のある底部である。内外面はナデが施され、胴部最大径の内面には接合痕が残る。

277は器台である。底径22.4㎝で胴部に2段円形の透かしがある。底部側面はハケ状の工具で横ナデが施され、擬凹線状になっている。外面は縦方向のミガキが施される。

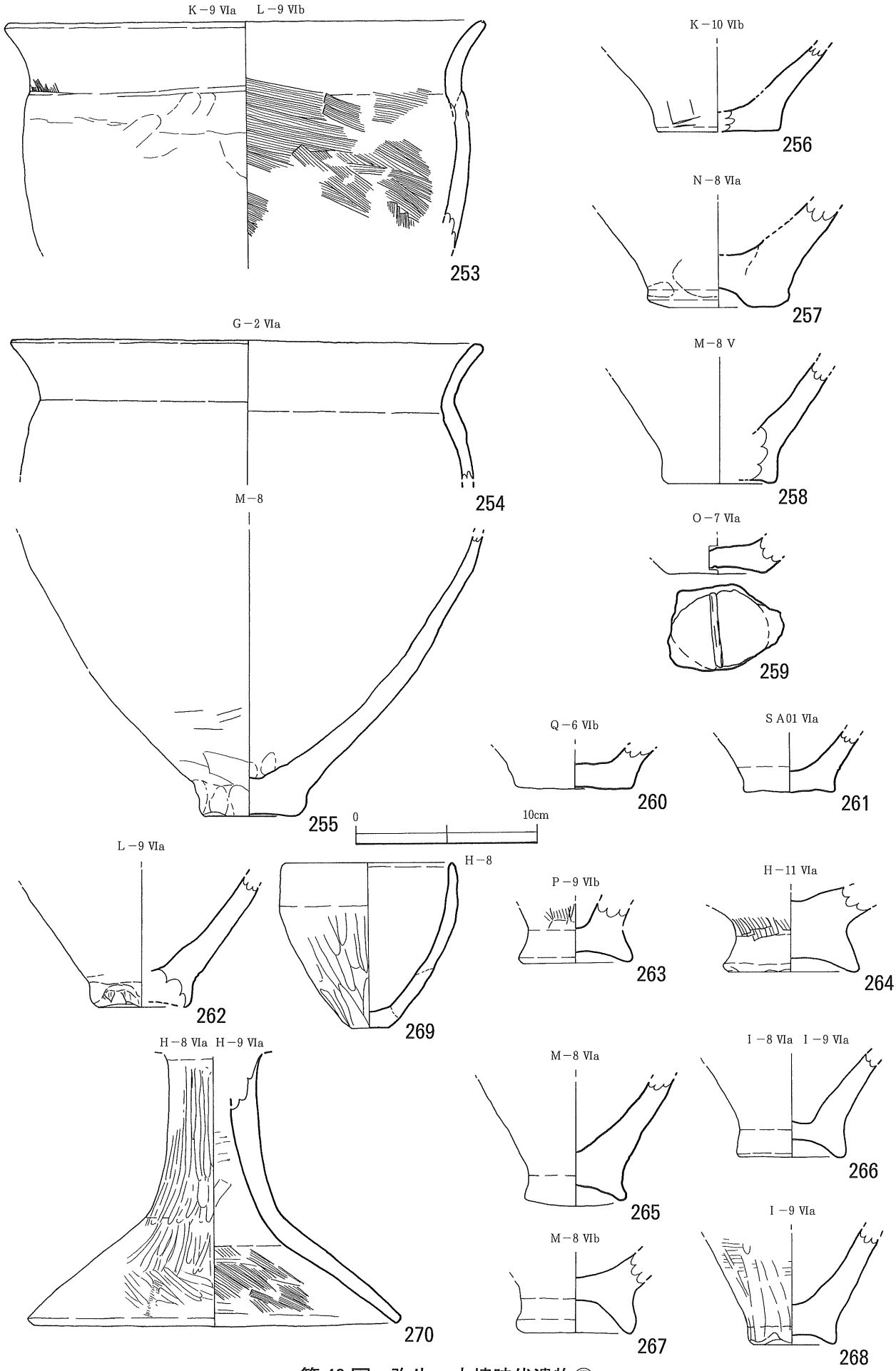
278は鉢で口径14.8㎝、器高14.9㎝、底径4.4㎝で器面は磨耗が激しい。底部は上げ底になっており、内面にはオサエが残る。口縁部は短く外反する。



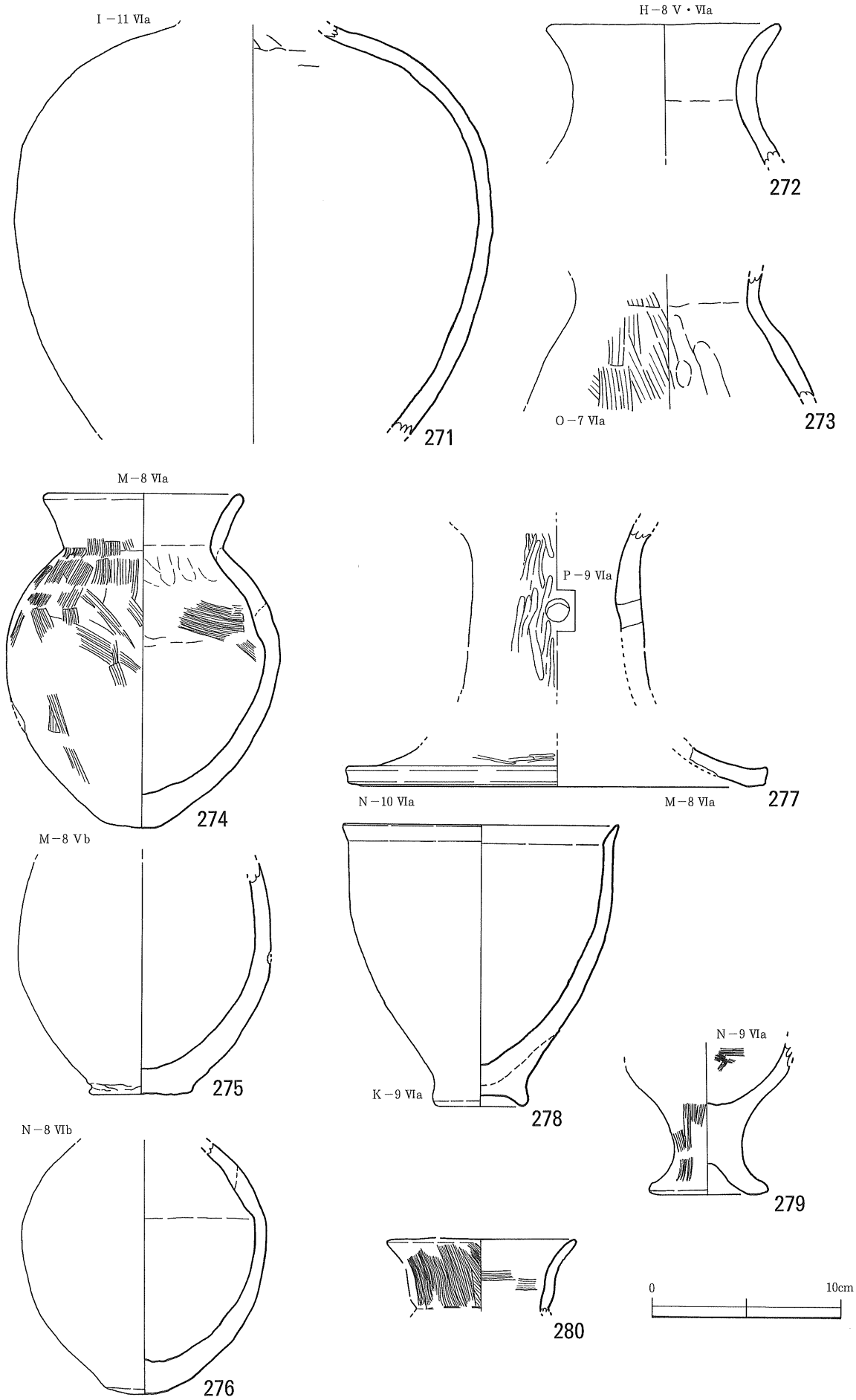
第 47 図　弥生・古墳時代遺物③



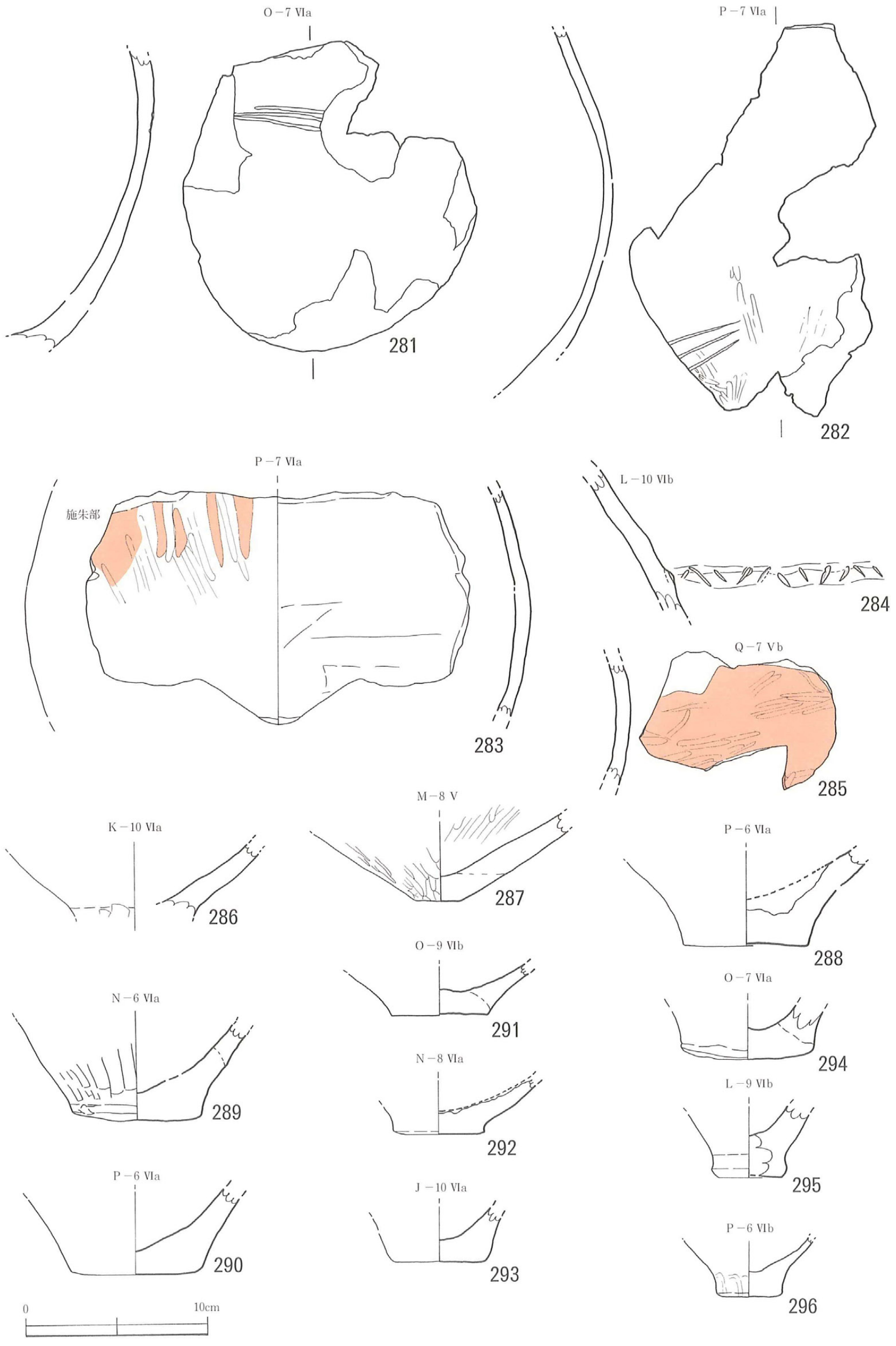
第 48 図　弥生・古墳時代遺物④



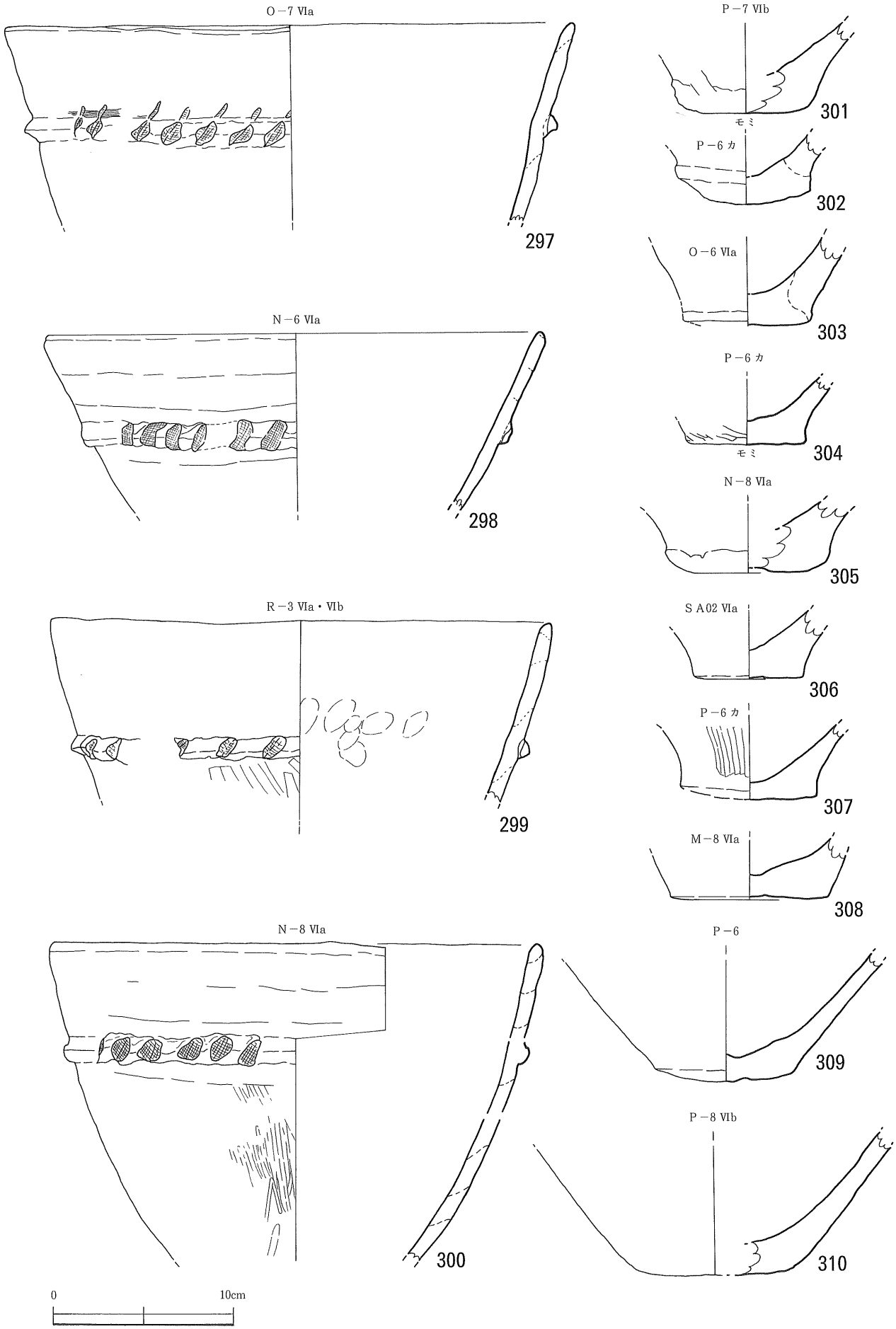
第 49 図　弥生・古墳時代遺物⑤



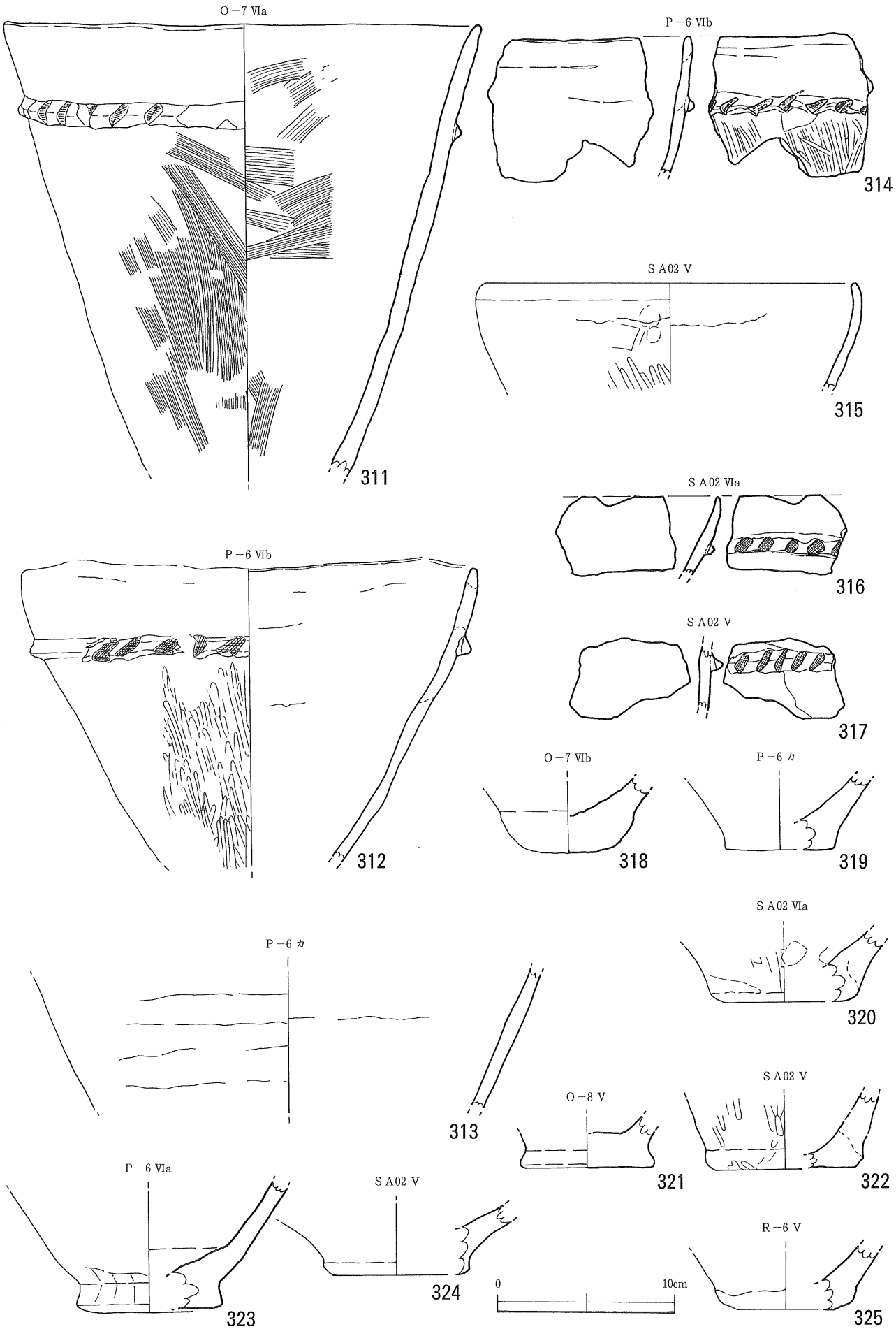
第 50 図　弥生・古墳時代遺物⑥



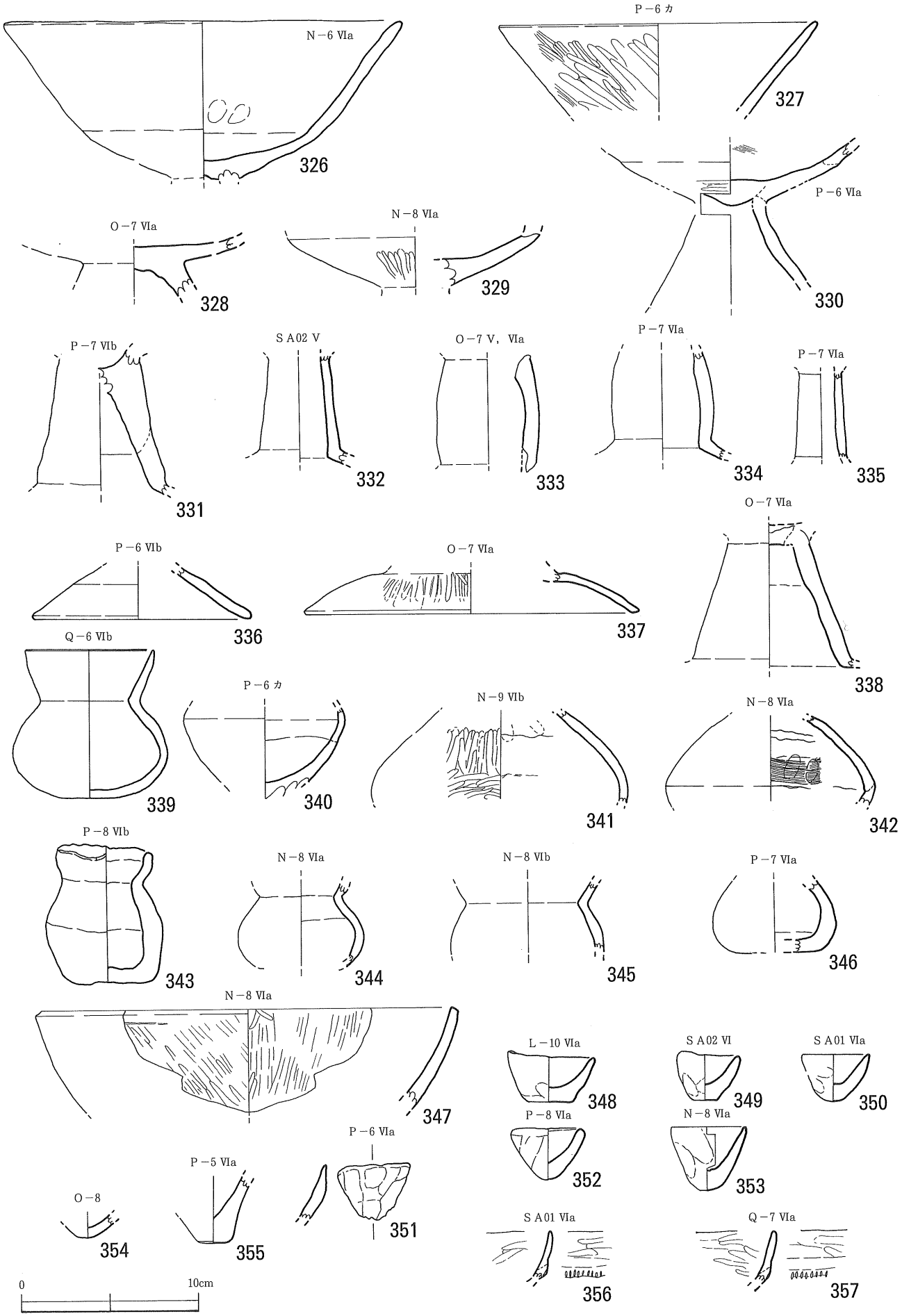
第51図　弥生・古墳時代遺物⑦



第52図　弥生・古墳時代遺物⑧



第53図　弥生・古墳時代遺物⑨



第 54 図　弥生・古墳時代遺物⑩

表 18　包含層出土遺物観察表⑨

図版番号		出土区	出土層	器種	調整		色調		胎土	備考
					外面	内面	内面	外面		
50	271	H-8 H-9	V VI a	壷	ナデ	ナデ	浅黄橙 (2.5Y6/1)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	褐・灰色鉱物多	
	272	O-7 P-7	VI a VI b	壷	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	灰・褐色鉱物多	口径：12.6 cm
	273	P-7	VI a	壷	ハケ	指頭調整 ＋ナデ	灰白 (10YR8/2)	浅黄橙 (10YR8/4)	褐色鉱物多	
	274	M-8 N-8	VI a	壷	ハケ＋ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	黒・褐色鉱物多	口径：10.7 cm 器高：17.7 cm 底径：2.0 cm
	275	N-8	VI b	壷	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	褐・灰色鉱物多	底径：5.4 cm
	276	M-8	V b	壷	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	褐・灰色鉱物多	底径：3.3 cm
	277	M-10	VI a	器台	ミガキ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	黒・褐色鉱物多	底径：22.4 cm 円形透かし
	278	K-9	VI a	鉢	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (7.5YR8/3)	褐・黒色鉱物多	口径：14.8 cm 器高：14.9 cm 底径：4.4 cm
	279	N-9	VI a	台付鉢	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	黒色鉱物多	底径：6.4 cm
	280	M-8	VI a	壷	ハケ	ハケ	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	大粒の褐色鉱物多	口径：10.0 cm
51	281	O-7	VI a VII a	壷	ナデ	ナデ	黄灰 (2.5YR6/1)	にぶい橙 (5 YR7/4)	黒・褐色鉱物多	線刻
	282	P-7 P-8	VI a VI b	壷	ミガキ	ナデ	橙 (7.5Y7/6)	橙 (5YR7/6)	黒・褐色鉱物多	線刻
	283	P-7	VI a VI b	壷	ミガキ	工具ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	黒色鉱物	赤色顔料
	284	L-10	VI b	壷	ナデ	ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/3)	浅黄橙 (7.5YR8/3)	黒色鉱物多	
	285	Q-7	VI b	壷	ミガキ		灰黄褐 (10YR4/2)	灰黄褐 (10YR4/2)	白色鉱物多	赤色顔料
	286	K-10 K-11	VI a VI b	甕	ハケ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	黒・褐色鉱物多	
	287	M-8	V VI a	壷	ミガキ	ミガキ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/4)	黒・褐色鉱物	底径：2.2 cm
	288	P-6	VI a VI b	底部	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	黒・褐色鉱物多	底径：6.8 cm
	289	N-6	VI a	甕	ナデ、ミガキ状工具ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	白色鉱物多	底径：7.1 cm
	290	P-6	VI a	底部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	白・黒色鉱物多	底径：7.0 cm
	291	O-9	VI b	底部	ナデ	ナデ	灰黄褐 (10YR5/2)	にぶい黄橙 (10YR6/2)	白色鉱物多	底径：5.4 cm
	292	M-8	VI a VI b	甕	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	灰・褐色鉱物多	底径：5.0cm

279 は台付鉢で、底径 6.4 ㎝である。底部中央をケズリ出しナデている。外面には縦方向のハケ目が残る。280 は壷の口縁部で頸部と胴部の境に沈線状の明瞭な稜が付く。口径 10.0 ㎝で、内面はオサエとナデが、外面は下から上へのハケ目が残る。

281・282 は壷胴部に線刻を有するものである。281 は胴部上半に、282 は胴部下半に 3 条の線刻が横方向に認められる。内外面は丁寧なナデが施され、282 の外面の一部にはミガキも認められる。

283 は胴部に赤色顔料を塗布されるもので、器面が磨耗しているものの、縦方向のミガキの上から赤色顔料が塗布されている。また、内外面にはススが認められる。

表 19　包含層出土遺物観察表⑩

図版番号		出土区	出土層	器種	調整		色調		胎土	備考
					外面	内面	内面	外面		
51	293	J-10	Ⅵa	壷	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	橙 (5YR7/6)	灰色鉱物多	底径：5.0 ㎝
	294	O-7	Ⅵa	甕	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	白色鉱物多	底径：7.4 ㎝
	295	L-9	Ⅵb	甕	ナデ	ナデ	褐灰 (7.5YR5/1)	にぶい橙 (7.5YR7/3)	褐色鉱物多	底径：4.2 ㎝
	296	P-6	Ⅵb	壷	オサエ	ナデ	灰黄褐 (10YR4/2)	灰黄褐 (10YR4/2)	黒色鉱物多	底径：3.6 ㎝
52	297	O-7 O-8	Ⅵa	甕	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	褐色鉱物多	口径：32.0 ㎝
	298	O-7	Ⅵa	甕	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	白色鉱物多	口径：28.2 ㎝
	299	R-3	Ⅵa Ⅵb	甕	ナデ	ナデ	にぶい橙 (5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	白色鉱物多	口径：28.0 ㎝
	300	N-6	Ⅵa	甕	ナデ	ナデ＋ミガキ状工具ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	白色鉱物多	口径：27.6 ㎝ ス・輪積痕
	301	P-7	Ⅵb	甕	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/4)	白色鉱物多	底部籾圧痕
	302	N-8	Ⅵa	甕	ナデ	ナデ	褐灰 (10YR4/1)	褐灰 (10YR4/1)	白色鉱物多	底径：7.4 ㎝
	303	O-6	Ⅵa	底部	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	白色鉱物多	底径：7.2 ㎝
	304	P-6	カクラン	甕	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	白色鉱物多	底径：6.7 ㎝
	305	N-8	Ⅵa	甕	ナデ	ナデ	灰黄褐 (10YR6/2)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	ほとんど含まない	底径：9.2 ㎝
	306	SA02	Ⅵa	甕	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	黒色鉱物多	底径：6.2 ㎝
	307	P-6	カクラン	甕	工具ナデ	ナデ	褐灰 (10YR5/1)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	白色鉱物多	底径：7.1 ㎝
	308	M-8	Ⅵa	甕	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/2)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	白・黒色鉱物多	底径：8.6 ㎝ 工具痕
	309	P-6	カクラン	甕	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	白色鉱物多	底径：7.8 ㎝
	310	P-8	Ⅵa Ⅵb	甕	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/2)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	白・黒色鉱物多	底径：9.0 ㎝

284 は壷の胴部に幅広の「ハ」の字に刻目を施した突帯を廻らすものである。285 は壷の胴部と思われ、器面全体に赤色顔料が塗布されるものである。

286 ～ 296 は底部である。286 は外面にハケ目を残す。287 は底径 2.2 ㎝で、内外面にミガキを施す。288 は底径 6.8 ㎝の平底である。289 は底径 7.1 ㎝で、やや丸味を帯びる外面に工具によるミガキ状のナデが施される。290 は底径 7.0 ㎝で、内外面はナデが施され、底部内面中央はオサエにより窪む。291 は平底で底径 5.4cm、底面内部中央がやや盛り上がる。292 は底径 5.0cm で、円盤状の底部側面は工具によるオサエが残る。293 は底径 5.0cm の平底で、底部から直線的に立ち上がる。294 は厚い底部側面に工具によるオサエが残り、底部内面中央はオサエにより窪む。295 は底径 4.2 ㎝のやや上げ底気味の底部で、直線的に立ち上がる。296 は底径 3.6 ㎝で、底部内面に工具痕を残す。底部側面にはユビオサエが残る。

297 ～ 300 は古墳時代の甕である。297 は口径 32.0 ㎝で、口縁部下に 1 条の突帯を廻らす。突帯の下部は縦方向のナデが、上部は横方向のナデが施される。突帯の上下は貼り付けの際に丁寧にナデつけられ、やや窪む。突帯貼り付け後に布を巻いた工具で刻目をつけている。胴部は垂直に立ち上がるが、突帯部分やや屈曲し外反する口縁部から突帯までの距離がやや短い。298 は口径 28.2 ㎝で、器面に粘土輪積み痕を明瞭に残す。299 は口径 28.0 ㎝で 1 条の貼付突帯が廻る。突帯には布痕を残す刻目が施され、刻目の間隔が広い。突帯下部は工具によるナデが施され、突帯内面にはオサエの痕が残る。外面にはススが付着する。口縁部から突帯までの距離が短い。300 は口径 27.6 ㎝で、器面に接合痕を残す。突帯より下位の器面には工具によるミガキ状のナデが残る。胴部外面にはススが付着する。

301 ～ 310 は底部である。301 は底径 7.2 ㎝で、底面から側面にかけて全体的に籾や繊維の圧痕が残る（図版 13）。底部側面の胴部との接合部はあまり調整を施していない。302 は底径 7.4 ㎝で、底面側部に粘土接合痕を明瞭に残す。また、底面にも切り離しのしの工具痕が認められる。303 は底径 7.2 ㎝で、底部内面には工具のオサエが残る。304 は底径 6.7 ㎝で、底面に籾の圧痕が残る（図版 13）。底面は丁寧にナデられ、側面には細い工具によるオサエの痕が残る。305 は底径 9.2 ㎝で、円盤状に貼り付けた底部の側面は調整をほとんど施さず接合痕を明瞭に残す。底面は丁寧にナデが施され、中央部は工具によって丸く押し上げ、上げ底状に仕上げられている。器面にはススが付着する。306 は底径 6.2 ㎝で、やや上げ底となっている。内面はオサエの痕が残る。307 は底径 7.1 ㎝で、底面はナデが施された後に繊維の圧痕を残す。308 は底径 8.6 ㎝で、内面にはオサエの痕が、底面にはナデの後に繊維の圧痕を残す。中央は上げ底状である。309 は円盤状の底部で、接合痕が残る。底部内面中央はオサエによって窪む。底径 7.8 である。310 は底径 9.0 ㎝で、内面中央はオサエによって窪む。

311 ～ 317 は甕である。311 は底部を欠いている。口径 27.0 ㎝である。外面に縦方向のハケ目が残り、口縁部は横方向にナデが施される。内面は横方向のハケ目が残る。直線的な胴部には 1 条の貼付突帯が施され、貼り付け後に布目を残す刻目を施している。口縁部から胴部にかけてはススが付着し吹きこぼれの痕も残る。口縁部から突帯までの距離が短い。312 は口径 26.0 ㎝で、外に大きく開き口縁部がやや内湾し、口唇部が平坦に仕上げられている。貼付突帯の下部は工具によるミガキ状のナデが施され、口縁部は横方向にナデが施される。口縁部内外面と胴部内面には粘土輪積み痕が残る。胴部外面にはススが付着する。313 は粘土輪積み痕を明瞭に残す胴部片である。314 は口縁部から突帯までの距離が短くやや内湾する口縁部である。内外面に粘土輪積みの痕が残り、外面にはススが付着する。315 は口径 21.0 ㎝で、内湾する口縁部である。細めの粘土輪積み痕が残り、ミガキとナデが施される。316 は器壁が薄く、内湾する口縁部で、細い貼付突帯が施される。口縁部との距離は非常に短い。317 は細く厚い突帯が貼り付けられる。

318 ～ 325 は底部である。318 は底径 5.0cm で、底面に僅かであるが繊維痕が残る。319 は底径 6.2 ㎝で、器面は丁寧にナデが施されるが、側面に布状のオサエの痕と思われる痕跡が認められる。底面には白色の付着物が認められる。320 は底径 8.0 ㎝で、下から上へ工具によるナデが施され、底部側面にはヘラ状工具でのオサエが残る。321 は底径 7.6 ㎝で、張り出した底面内部中央が盛り上がる。底部との接合部にはオサエが残る。322 は底径 9.0 ㎝で、底部内面はオサエによって中央が窪み、外面は下から上に、ミガキが施される。底面には繊維痕と、棒状工具の圧痕が認められる。323 はやや張り出す円盤状の底部底面は丁寧にナデが施され、接合部は板状の工具で整形される。また、底部内

面中央に向かって工具痕が放射状に認められる。底径は 8.2 cmである。324 は底径 8.2 cmで。底面は丁寧にナデが施されるが、底部側面は調整があまり行われず、接合痕も残る。325 は底径 5.6 cmである。底面にナデ後、棒状の圧痕が残される。

326 ～ 338 は高坏である。326 は口径 22.8 cmの坏部である。器面は磨耗しているが、所々ミガキが残り、口縁部は横方向にナデが残る。内面は全体的にナデが施され、屈曲部周辺にオサエが残り、屈曲部は粘土の接合痕が残る。屈曲部外面に明瞭な稜は持たず、やや外反しながら口縁部へ立ち上がる。脚部との接合部は円盤状の粘土が充填される。327 は口径 18.2 cmで、外面にはミガキが残る。328 は磨耗が激しいが、内面はナデが施される。坏底面が水平なものである。329 は坏底面にあたり、粘土接合面で割れている。外面にはミガキが残る。330 は脚部が外に大きく開き、坏部は屈曲に段を持つものである。

表 20　包含層出土遺物観察表⑪

図版番号		出土区	出土層	器種	調整		色調		胎土	備考
					外面	内面	内面	外面		
53	311	O-7 O-8 P-8	V VI a	甕	ハケ＋ナデ	ハケ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	細かい黒・褐色鉱物多	口径：27.0 cm
	312	P-6	VI b	甕	ミガキ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	黒・白・褐色鉱物多	口径：26.0 cm
	313	P-6	カクラン	甕	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	白色鉱物多	
	314	P-6	VI b	甕	ミガキ状工具ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	黒色鉱物多	外面スス
	315	SA02	V	甕	ナデ＋ミガキ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい橙 (7.5YR7/3)	白色鉱物多	口径：21.0 cm
	316	SA02	V	甕	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	浅黄橙 (10YR8/3)	黒色鉱物多	
	317	SA02	VI a	甕	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/2)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	黒色鉱物多	
	318	O-7	VI b	甕	ナデ	ナデ	褐灰 (7.5YR5/1)	にぶい橙 (7.5YR7/3)	非常に細かい白色鉱物多	底径：5.0 cm
	319	P-6	カクラン	甕	ナデ	ナデ	褐灰 (10YR5/2)	褐灰 (7.5YR5/1)	白色鉱物多	底径：5.8 cm
	320	SA02	VI a	甕	工具ナデ、オサエ	ナデ	褐灰 (10YR5/2)	浅黄橙 (10YR8/3)	黒色鉱物多	底径：8.0 cm
	321	O-8	V	底部	ナデ	ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/3)	にぶい橙 (7.5YR7/3)	大粒の黒・褐色鉱物多	底径：7.6 cm
	322	SA02	V VI a	甕	ミガキ	ナデ	褐灰 (10YR5/1)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	白色鉱物多	底径：9.0 cm
	323	P-6	VI a	甕	ケズリ、ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	白色鉱物多	底径：8.2 cm
	323	P-6	VI a	甕	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	大粒の白・黒色鉱物多	底径：8.2 cm 板状工具
	324	SA02	V	甕	ナデ	ナデ	灰白 (10YR7/1)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	黒・褐色鉱物多	底径：8.2 cm
	325	R-6	V	底部	ナデ	ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/3)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	大粒の黒・褐色鉱物	底径：5.6 cm 底部工具痕

331はやや外に開く長めの脚柱部で、内面に粘土接合痕が残る。332は細くほぼ垂直に伸びる脚で、外面にはミガキ、内面にはケズリの痕が残る。333は中ほどに張りを持つ脚柱部である。334は裾間近に張りを持つ脚柱部である。335は細く垂直に伸びる脚柱部である。底径は12.6㎝である。336は脚裾部で、直線的な皿状である。337は浅い皿状の脚裾部で、縦方向のミガキを残す。底径は19.2センチである。338は脚柱部で、裾へ向かって直線的に開く。坏部との接合は円盤状の粘土が充填される。

339は坩である。口径7.4㎝、器高8.5㎝、底径2.7㎝である。胴部が丸く張り、頸部から強く屈曲し口縁部へ立ち上がる。胴部はミガキが、口縁部はナデが施される。底部内面には工具痕が放射状に残る。

表21　包含層出土遺物観察表⑫

図版番号		出土区	出土層	器種	調整		色調		胎土	備考
					外面	内面	内面	外面		
54	326	N-6	Ⅵa	高坏	ナデ（一部ミガキが残る）	ユビオサエ＋ナデ	橙（2.5YR6/6）	橙（2.5YR6/6）	雲母・黒色鉱物多	口径：22.8 cm
	327	P-6	カクラン	高杯	ミガキ	ナデ	にぶい黄橙（10YR7/3）	にぶい橙（7.5YR7/4）	黒色鉱物多	口径：18.2 cm
	328	O-7	Ⅵa	高杯	ナデ	ナデ	褐灰（10YR6/1）	浅黄橙（10YR8/4）	黒色鉱物	
	329	N-8	Ⅵa	高杯	ミガキ	ナデ	浅黄橙（10YR8/3）	浅黄橙（7.5YR8/4）	黒色鉱物多、褐色鉱物	
	330	P-6	Ⅵa	高杯	ミガキ	ミガキ	浅黄橙（10YR8/3）	浅黄橙（10YR8/3）	黒色鉱物多	
	331	P-7	Ⅴb	高杯脚部	ナデ	ナデ	浅黄橙（10YR8/3）	灰黄褐（10YR6/2）	黒色鉱物多	
	332	SA02	Ⅴ	高杯脚部	ミガキ	ナデ	にぶい橙（7.5YR7/3）	にぶい橙（7.5YR7/4）	ほとんど含まない	
	333	O-7	Ⅴ Ⅵa	高杯脚部	ナデ	ナデ	橙（7.5YR7/6）	橙（5YR6/6）	白・灰色鉱物多	
	334	P-7	Ⅵa	高杯脚部	ナデ	ナデ	褐灰（7.5YR4/1）	にぶい橙（7.5YR7/4）	ほとんど含まない	
	335	P-7	Ⅵa	高杯脚部	ナデ	ナデ	にぶい橙（7.5YR7/3）	にぶい橙（7.5YR7/3）	白色鉱物	
	336	P-6	Ⅵb	高杯	ナデ	ナデ	にぶい橙（7.5YR7/4）	にぶい橙（7.5YR7/4）	黒色砂粒多	底径：12.6 cm
	337	O-7	Ⅵa	高杯	ミガキ、ナデ	ナデ	灰白（10YR8/2）	にぶい黄橙（10YR7/4）	ほとんど含まない	底径：19.2 cm
	338	O-8	Ⅴ Ⅵa	高杯脚部	ナデ	ケズリ、ナデ	にぶい黄橙（10YR7/2）	にぶい黄橙（10YR7/3）	黒色鉱物多	
	339	Q-6	Ⅵb	坩	ミガキ、ナデ	ナデ	灰黄褐（10YR6/2）	灰黄褐（10YR6/2）	黒色鉱物多	口径：7.4 cm 器高：8.5 cm 底径：2.7 cm
	340	P-6	カクラン	台付鉢？	ナデ	ナデ	にぶい黄橙（10YR7/3）	にぶい黄橙（10YR7/3）	黒色鉱物多	
	341	N-9	Ⅵb	坩	ミガキ	ナデ	にぶい黄橙（10YR7/3）	にぶい黄橙（10YR7/3）	大粒の褐色鉱物僅	
	342	N-8	Ⅵa	坩	ハケ＋ナデ	ナデ	にぶい黄橙（10YR7/3）	にぶい黄橙（10YR7/3）	褐・灰色鉱物多	内面輪積痕

340 は底部を欠いているが、底部付近で外反していることから台付鉢であると思われる。内面には粘土輪積み痕が残る。341 は外面にはミガキを施し、内面はナデが施されるが、粘土輪積み痕と、オサエが残る。342 は内面には粘土輪積み痕が明瞭に残るもので、上位に行くほど粘土紐幅は細くなっている。

343 は手捏土器である。胴部の器壁は厚くナデとオサエによって整形される。口縁部内面から胴部外面までススが付着する。

344 は内面に粘土接合痕を残し、354 は内外面に丁寧にナデが施され、346 は胴部の張りを底部近くにもち、平底である。

表 22　包含層出土遺物観察表⑬

図版番号		出土区	出土層	器種	調整		色調		胎土	備考
					外面	内面	内面	外面		
54	343	P-8	Ⅵb	ミニチュア	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	黒・褐色鉱物多	口径：5.2 cm 器高：7.9 cm 底径：3.9 cm
	344	N-8	Ⅵa	坩	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	灰色鉱物多	
	345	N-8	Ⅵb	坩	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	黒色鉱物多	
	346	P-7	Ⅵa	坩	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	黒色鉱物多	底径：4.6 cm
	347	N-8	Ⅵa Ⅵb	鉢	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	大粒の褐・黒色鉱物多	口径：24.2 cm
	348	L-10	Ⅵa	ミニチュア	ナデ	ナデ	灰白 (10YR8/2)	灰白 (10YR8/2)	ほとんど含まない	口径：5.0 cm 器高：2.9 cm 底径：2.4 cm
	349	SA02	Ⅵa	ミニチュア	ナデ、オサエ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	黒色鉱物	口径：3.6 cm 器高：2.8 cm 底径：1.2 cm
	350	SA01	Ⅵa	ミニチュア	ナデ、オサエ	ナデ	灰黄褐 (10YR6/2)	灰黄褐 (10YR6/2)		口径：4.0 cm 器高：2.7 cm 底径：0.8 cm
	351	P-6	Ⅵa	ミニチュア	ナデ、オサエ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)		口径：4.1 cm
	352	P-8	Ⅵa	ミニチュア	ナデ、オサエ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	黒色鉱物	口径：4.3 cm 器高：2.8 cm 底径：0.6 cm
	353	N-8	Ⅵa	ミニチュア	ナデ、オサエ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	白色鉱物多	口径：4.4 cm 器高：3.6 cm 底径：1.0 cm
	354	O-8		鉢	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	黒色鉱物多	底径：0.6 cm
	355	P-5	Ⅵa	鉢	ナデ	ナデ	灰白 (10YR8/2)	灰白 (10YR8/2)	黒・褐・灰色鉱物多	底径：1.8 cm
	356	SA01	Ⅵa	壷	ミガキ、ナデ	ミガキ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR7/3)	ほとんど含まない	SA04 出土 79 と同一か？
	357	O-7	Ⅵa	壷	ミガキ、ナデ	ミガキ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	浅黄橙 (10YR8/3)	ほとんど含まない	SA04 出土 79 と同一か？

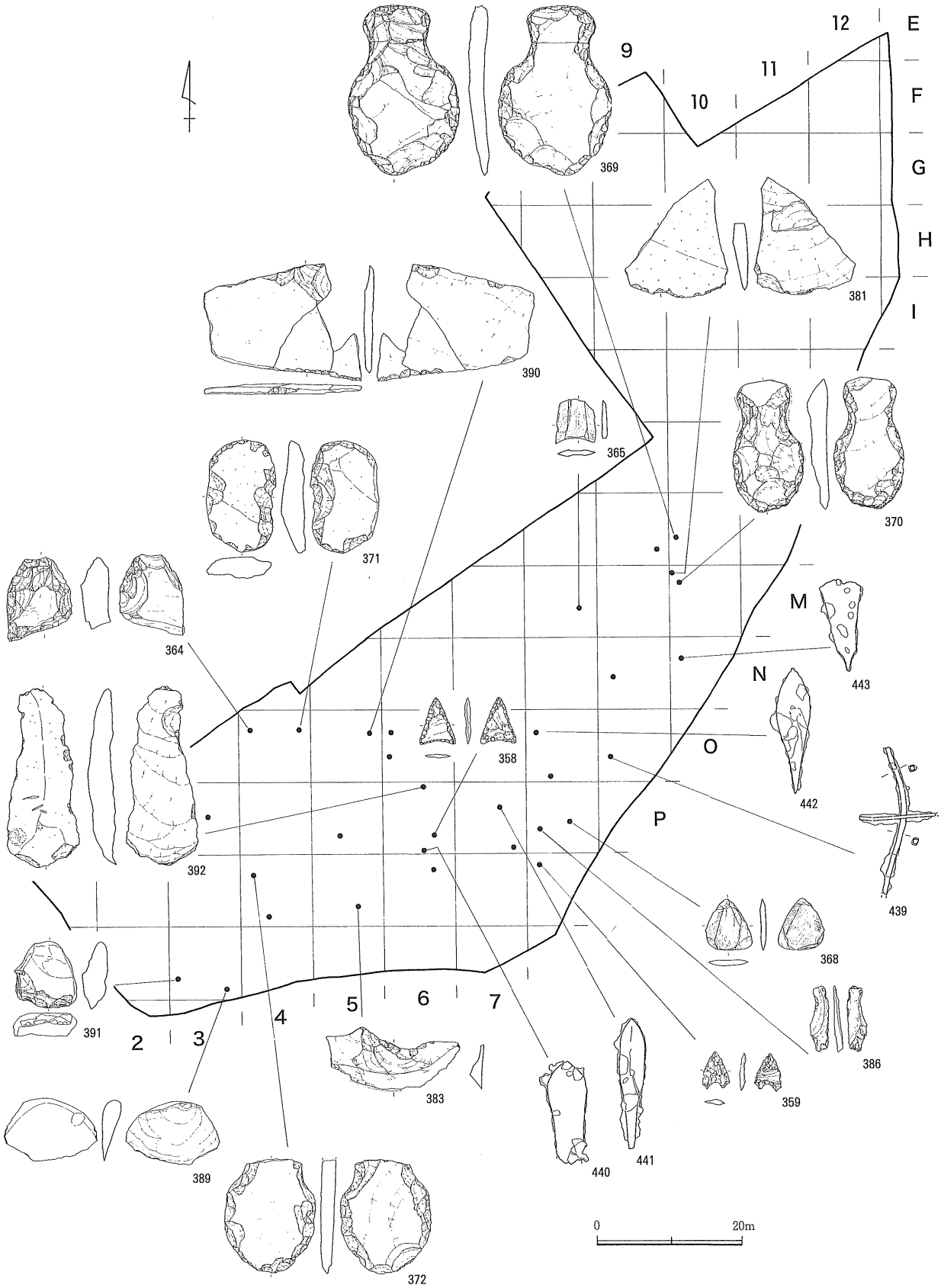
347は鉢で、口径24.2㎝で、口唇部は平坦にナデられる。器面内外は縦方向のミガキが丁寧に施される。
348～354まではミニチュア土器である。348は底部が平らで鉢状を呈す。オサエの痕が残り、外面にススが付着する。349の底面は平底であるが、内面は丸く窪み、オサエの痕が残る。350は外に開き、ナデとオサエが残る。351は器壁が薄く、オサエも細かい。352はナデとオサエが残り、小ぶりの底部から外へ大きく開く。353は器壁が薄く、丁寧にナデが施される。354は胎土が粗い。
355は鉢の底部と思われる。下から上に丁寧にナデが施される。
356・357はSA04出土の79と同一個体と思われ、二重口縁壷の口縁部である。横方向にミガキを施した後、屈曲部外面に細かい刻目を施す。

③石器・軽石製品

基本的にⅥa層～Ⅶb層にかけて出土したものであるが、一部Ⅴ層中から出土したものについても取り上げた。358～364は打製石鏃および未成品である。358は薄手の剥片を素材とし、周縁加工を主体的に行ったもので、抉りは殆どない。長さ2.5㎝、幅1.9㎝、厚さ0.3㎝、重さ1.1ｇである。359～361はチャートを利用している。359は裏面に素材面を残すもので、抉りを作り出している。長さ2.0センチ、幅1.4㎝、厚さ0.3㎝、重さ0.6ｇである。360は先端部のみ残存している。やや厚みがある。361は裏面に大きく素材面を残すもので、抉りは見られない。先端部を欠いている。また、かなりの厚みを残すことから製作途中で廃棄したものと思われる。362は頁岩製である。表裏面とも中央部には丁寧に磨かれており、周縁部のみ加工が施されていることから、磨製石鏃を再加工したものと思われる。抉りは深く、脚は細く鋭い。長さ1.5cm、幅1.3㎝、厚さ0.3㎝、重さ0.3gである。363・364はチャートの石鏃未成品で、363は分厚い縦長剥片を利用し周縁から厚みを取るため加工を施している。長さ3.3㎝、幅2.7㎝、厚さ1.0㎝、重さ5.9ｇである。364はチャートの小さな原石に周縁から加工を加えている。長さ4.3センチ、幅3.4センチ、厚さ1.5cm、重さ27.4ｇである。

365～368は磨製石鏃および未成品である。365は上部を欠損しているが細かく丁寧に研磨が施され、凌ぎを作り出している。長さ2.4センチ、幅2.1㎝、厚さ0.4㎝、重さ1.8ｇである。366は未成品である。石材が他の磨製石鏃と同じ頁岩製で、また、一部研磨が見られる。長さ2.9㎝、幅2.6㎝、厚さ0.6㎝、重さ3.1㎝である。367は製品を破損後再加工したものである。368はあらかた整形が済んだ後に研磨したものである。

369から377は打製石斧、いわゆる土掘具である。369はラケット状を呈しており、ホルンフェルスを利用している。厚みのある横長の剥片を素材とし、柄の部分にやや抉りを入れ、肩を張るように周辺から厚みを残しつつ加工を施している。刃部は角度をつけている。柄の抉りの部分は着装によるものか磨耗が見られる。柄の部分で一旦破損しており、破損後再度折れ面から加工を施し、破損後も使用しているものである。刃部は右側の目減りが見られる。長さ17.9㎝、幅11.9㎝、厚さ2.1㎝、重さ440ｇと非常に重い。370は表面に原石面を残す。原石面にはパンチ痕が認められる。原石を割った後に原石面側を主体的に加工し厚みを整え、周縁の加工を行っている。肩の張りは弱いが基部の抉られた部分は潰しが認められる。また、刃部は表裏面とも磨耗が認められる。長さ13.8㎝、幅7.4㎝、厚さ2.2㎝、重さ250ｇである。371は輝石安山岩の転石を加工したものである。石斧とするには問題も残るが、周辺から加工を施している。特に中ほどの厚みを取るために右側縁から加工を施している。長さ11.8cm、幅7.2㎝、厚さ2.5㎝、重さ280ｇである。372は基部を欠損しているが、ラケット状を呈するものと思われる。表面は原石面を残す横長剥片を素材とし、周辺加工を施すものである。長さ12.1㎝、幅9.5㎝、厚さ1.5㎝、重さ250ｇである。373は上半分ほど欠損している短冊状のものである。横長剥片を素材と市、周辺から加工を施している。374は上部と下部を欠損している。厚みのある横長剥片を素材とし、基部の左右に抉りを入れている。また、上部は破損後再度使用するために折れ面から再度加工を施している。375は基部から下を欠損している。頭頂部に原石面を残しており、原石面側を主体的に加工し厚みを整えている。表面には着装によるものと思われる磨耗が見られる。376は舌状の基部と思われる。両側縁は着装のためか潰しが認められる。377はあまり加工を施さずに使用している。刃部と基部に当たる部分は使用による磨耗が激しく、特に刃部は縦に線条痕



第55図　VI～VII層出土石器分布図

が残される。長さ 13.9 ㎝、幅 7.4 ㎝、厚さ 1.4 ㎝、重さ 99.3 ｇである。
378・379 は磨製石斧である。全体的に研磨が施されているが左右側縁部には二次加工の痕が残る。刃部は左よりに目減りしている。379 は刃部片である。

380 は頁岩の横長剥片を素材とし、刃部と基部に簡単な加工を施したもので、表面に磨耗が見られる。長さ 5.8 ㎝、幅 3.6 ㎝、厚さ 1.2 ㎝、重さ、12.3 ｇである。383 は横長剥片に二次加工を施したスクレイパーである。下縁に使用痕と思われる磨耗が認められる。長さ 6.5 ㎝、幅 14.2 ㎝、厚さ 1.6 ㎝、重さ 106.9 ｇである。384 は輝石安山岩の横長剥片の周縁に加工を加えたものである。385 も、周縁から簡単に加工を施したスクレイパーである。386 は薄手の剥片に簡単な加工を加えたものである。387 は周縁から厚みを取るように加工を施したのに、上端と下端に剥離が認められる。388 は横長剥片を使用したものである。389 原石面を有する剥片で鋭利な一辺をそのまま刃部として使用したものである。
381・382・390・392 は粗製剥片石器である。381 は原石面を残し下縁に細かな剥離が簡単に施されるものである。長さ 12.5 ㎝、幅 10.9 ㎝、厚さ 1.7 ｃｍ、重さ 205 ｇである。382 は石斧の破損品とも思われるが、原石面を有する集めの剥片に周辺から加工を施し刃部を作り出す。また、上端からも加工が施される。390 は原石面を残す薄手の輝石安山岩である。欠損しているが下縁に刃部を作り出すものである。391 は礫の一辺に急角度な加工を加え刃部を作り出している。長さ 7.1 ㎝、幅 6.0 ㎝、厚さ 2.9 ㎝、重さ 135.7 ｇである。
392 は長さ 18.8 ㎝、幅 7.5 ㎝、厚さ 2.9 ㎝、重さ 590 ｇである。原石面を残す輝石安山岩に部分的に加工が認められる。使用方法としては土掘具であると思われる。
393 は元々石皿であると思われる。上面が面的に磨耗し、所々敲打痕も認められる。石材は輝石安山岩で、加工痕や剥離面が残される。394 も輝石安山岩の石皿である。上面の平坦面を機能部としている。礫面は火を受けたと思われ赤化している。元々大きな角礫であったと思われるが、各側面は大きく剥離する。側面の大きさは 390 にちかく、このような大型の礫から薄手で大きな剥片を取っていた可能性が考えられる。接合する剥片は見つかっていない。このほかにも、輝石安山岩で火を受けた痕跡を持ち、明らかに人為的に剥離が認められ、石核と考えられるものが多く出土している。

395 ～ 425 は礫石器である。395 ～ 400 は小型の磨石・敲石類で、395・398 は表裏面に磨痕が面的に残されるもので磨石である。396 は側面に敲打痕を残し、表裏面は磨痕が残る。敲打に伴うと思われる剥落も見られる。397 は表裏面に磨痕を、上下端部に敲打痕が残る。399 は側面部に敲打痕を残すものである。400 は側面に所々敲打痕を残すものである。401 ～ 414 は大型の磨石・敲石類である。401・402 は表裏面に磨痕を、側面部には敲打痕を残す。403 は大型の円礫の破片を利用したもので、割れ面に磨痕が残される。404 は表裏面に磨痕が面的に残される。405 は裏面に磨痕と敲打痕を併せ持ち、側面端部に敲打痕を有するものである。406 は表裏面に磨痕を、側面部に敲打痕を残す。407 は側面を部分的に使用し、敲打痕を残すもので、敲打に伴い破損している。破損後割れ面を使用しているようで、面的に磨耗する。405 は表裏面を磨面として主に使用し、側面部には敲打痕が激しく残される。また、裏面中央には敲打痕が残る。409 も表裏面を磨石として使用し、側面部を敲石として使用している。410 は側面端部を中心に敲打痕が認められる。411 は表裏面には面的に磨耗が見られ、礫の上下端部に敲打痕が認められる、右側面には敲打によるものと思われる剥落が認められる。412 は表裏面を面的に磨石として使用し側面部を敲石として使用している。413 は表裏面を磨石として使用している。特に裏面は上・下の 2 面に分かれるように使用している。周縁には激しく敲打痕が残される。上端の一部を破損しているものの、破損後も敲石と使用しており、割れ面端部に敲打痕を留める。また、右側面には細い溝状の痕跡と激しい磨耗が見られ、砥石的な要素も併せ持つものと思われる。414 の表裏面は磨面が形成され、側面部・上下端部は敲打痕が残る。415 は細長い棒状の槌石である。上下端部に敲打痕を残し、また、表裏・側面には磨耗が面期に認められる。416 は棒状礫の上下端部に敲打痕を残すもので、下端には剥落を伴う。417 は上部を欠損するものの下端に激しく敲打痕を残し、また、割れ面端部に敲打痕と剥落を残すものである。418 は輝石安山岩で、礫表面は激しく赤化している。火を受けた後に敲打痕が激しく残されている。419 は石皿で表面に面的な磨痕を認める。420 も石皿で、表裏面に広い磨面を残す。また、右側面部についても磨耗が面的に認められる。

421 は石皿片である。礫が割れた状態での使用が認められる。422 は長細い断面台形の大きな礫の端部には敲打痕が激しく残される。敲打に伴う剥落も認められるが、その後の面的な使用によって磨耗している。表面・側面を細長い幅で使用しているようで、砥石的要素の強いものである。423 の表裏面は面的に使用されており磨耗する。側面部には所々敲打痕を残す。424 は大型の礫が割れたものを使用している。割れ面である表裏面は磨耗が激しく、側面部は敲打痕が残る。425 は大型の礫の表裏面を細長い幅を研ぎ面として使用し、端部には敲打痕が激しく残る。

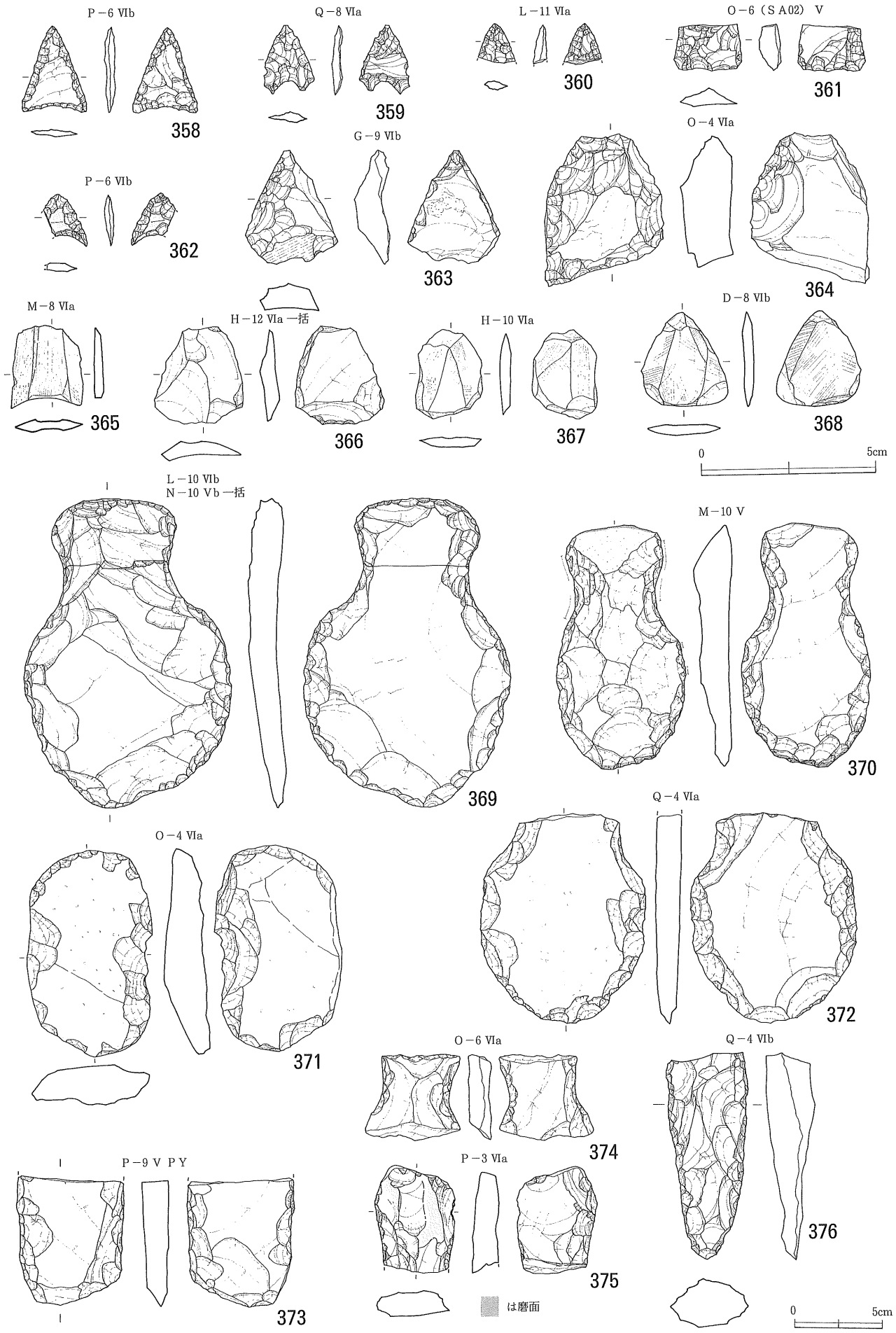
表 23　包含層出土石器一覧表

図版番号		出土区	出土層	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	備考
56	358	P-6	Ⅵb	打製石鏃	2.5	1.9	0.3	1.1	安山岩	
	359	Q-8	Ⅵa	打製石鏃	2	1.4	0.3	0.6	チャート	
	360	L-11	Ⅵa	打製石鏃	1.2	1.1	0.4	0.3	チャート	
	361	O-6	Ⅴ	打製石鏃未成品	1.4	2	0.6	1.6	チャート	
	362	P-6	Ⅵb	打製石鏃	1.5	1.3	0.3	0.3	頁岩	再加工
	363	G-9	Ⅵb	打製石鏃未製品	3.3	2.7	1	5.9	チャート	
	364	O-4	Ⅵa	打製石鏃未製品	4.3	3.4	1.5	27.4	チャート	
	365	M-8	Ⅵa	磨製石鏃	2.4	2.1	0.4	1.8	頁岩	
	366	H-12	Ⅵa	磨製石鏃未製品	2.9	2.6	0.6	3.1	頁岩	
	367	H-10	Ⅵa	磨製石鏃	2.6	1.9	0.3	2	頁岩	
	368	P-8	Ⅵb	磨製石鏃	2.7	2.5	0.3	2.4	頁岩	
	369	L-10 M-10	Ⅵb Ⅴb	打製石斧	17.9	11.9	2.1	440	ホルンフェルス	
	370	M-10	Ⅴ	打製石斧	13.8	7.4	2.2	250	安山岩	
	371	O-4	Ⅵa	打製石斧	11.8	7.2	2.5	280	輝石安山岩	
	372	Q-4	Ⅵa	打製石斧	12.1	9.5	1.5	250	輝石安山岩	
	373	P-9	Ⅴ	打製石斧	7.5	6.1	1.8	123.7	ホルンフェルス	
	374	O-6	Ⅵa	打製石斧	5	5.4	1.3	42.8	砂岩	
	375	P-3	Ⅵa	打製石斧	6.2	4.6	1.5	58.4	流紋岩	
	376	Q-4	Ⅵb	柄	6	2.3	1.4	19.3	ホルンフェルス	
57	377	N-7	Ⅶa	打製石斧	13.9	7.4	1.4	99.3	ホルンフェルス	
	378	P-7	Ⅵa	磨製石斧	8.6	6.5	2.2	168.2	ホルンフェルス	
	379	Q-6	Ⅵb	磨製石斧	5.3	2.6	1.3	9.9	砂岩	
	380	N-8	Ⅵa	鑿状石器	5.8	3.6	1.2	12.3	ホルンフェルス	
	381	M-10	Ⅶ	粗製剥片石器	12.5	10.9	1.7	205	輝石安山岩	
	382	－	－	粗製剥片石器	9.1	10	0.5	220	輝石安山岩	
	383	Q-5	Ⅴ	スクレイパー	6.5	14.2	1.6	106.9	砂岩	
	384	SA05	Ⅴ	スクレイパー	6.9	5.2	0.9	49	輝石安山岩	
	385	O-8	Ⅵb	スクレイパー	9	4.5	1.4	49.1	砂岩	
	386	P-8	Ⅵa	スクレイパー	7	2	0.8	9.4	ホルンフェルス	
	387	P-5	Ⅵa	スクレイパー	4.7	3.7	1.1	23	頁岩	
	388	L-9	Ⅶa	スクレイパー	6.8	4	0.7	20.1	砂岩	
	389	R-3	Ⅶa	スクレイパー	6.7	9.8	2.4	103.5	砂岩	
	390	O-5 SA02	Ⅴb Ⅵa	粗製剥片石器	12.1	16.7	1	250	輝石安山岩	
	391	R-3	Ⅵa	礫器	7.1	6	2.9	135.7	無斑晶流紋岩	
58	392	P-6	Ⅵa	土掘具	18.8	7.5	2.9	325	輝石安山岩	
	393	K-11	Ⅵa	磨石→	8.1	9.7	9	590	輝石安山岩	転用
	394	P-6	Ⅵa	石皿→	24	21.2	13.2	1,040.00	輝石安山岩	転用

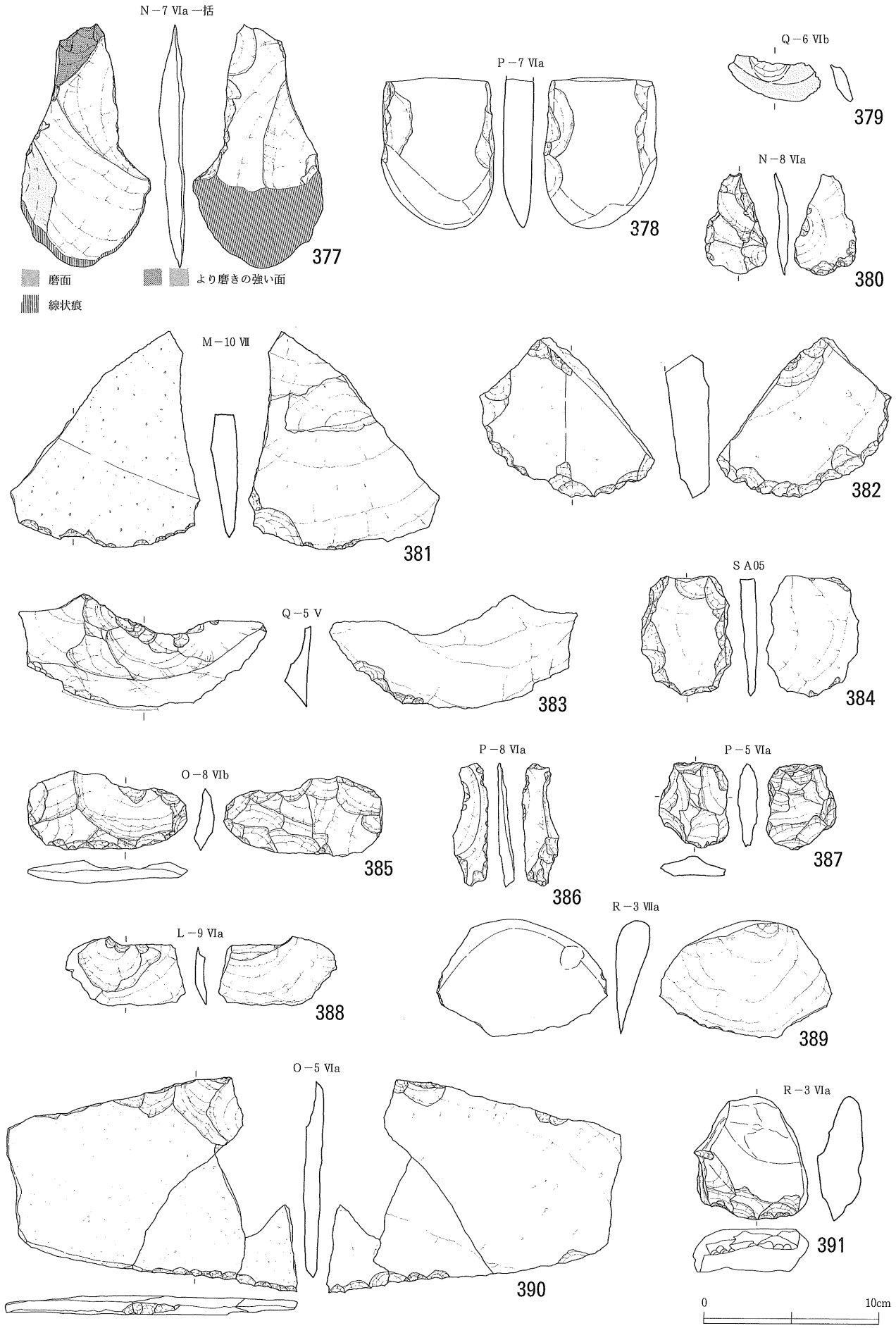
426 から 431 は軽石製品である。426 は表面を平坦にした後中央に大きく深い穴が開いている。下面は丸い。427 は 426 の小型のものである。428 は軽石を扁平な形に整えた後端部に穿孔が見られる。429 から 431 は平面円形の扁平な形に整えたものである。

表 24　包含層出土石器・軽石製品一覧表

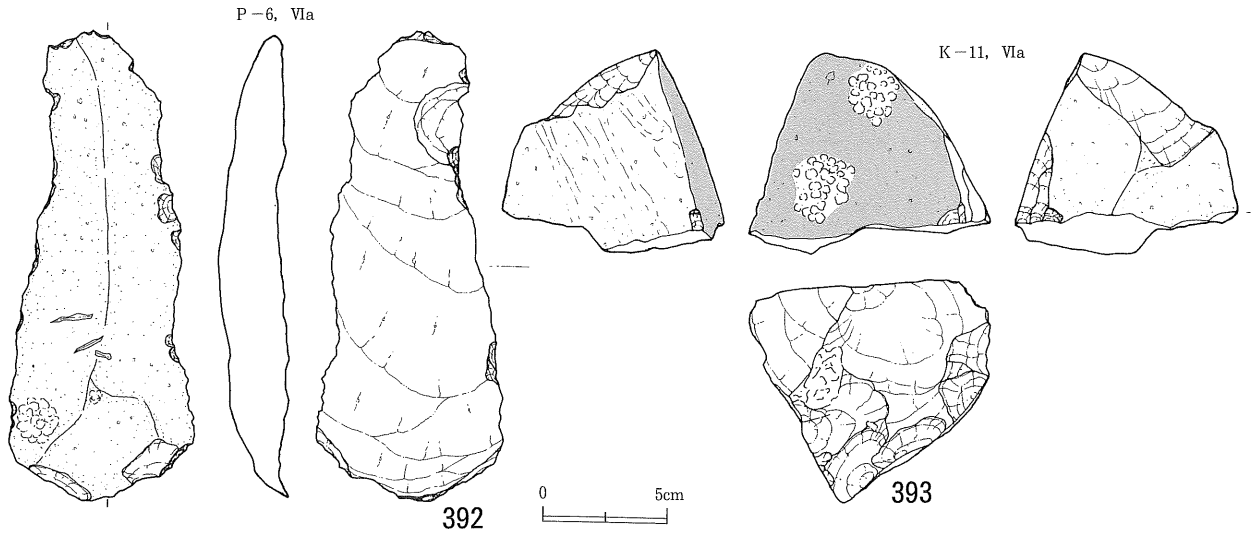
図版番号		出土区	出土層	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石材	備考
59	395	P-6	カクラン	磨石	2	1.9	1.1	7.2	砂岩	
	396	O-6	Ⅵb	磨・敲石	4.7	3.8	2.1	40	砂岩	
	397	O-7	Ⅵb	敲石	4.3	3.8	2.1	47.8	砂岩	
	398	M-10	Ⅵb	磨石	5.5	5.7	1.9	83.3	安山岩	
	399	R-3	Ⅶa	敲石	5.3	3.7	2.4	65.8	流紋岩	
	400	G-11	Ⅵb	敲石	5.1	4.4	3.9	130.3	安山岩	
	401	Q-4	Ⅵa	磨・敲石	9.8	10.2	3.3	315	砂岩	
	402	H-11	Ⅵa	磨・敲石	6.6	9.5	5.5	410	安山岩	
	403	I-11	Ⅶa	磨石	14	8.4	4.5	540	多孔質安山岩	
	404	Q-5	Ⅵa	磨石	13.7	12	4.8	1100	砂岩	
	405	P-4	Ⅵa	磨石	9.4	6.4	4.3	325	安山岩	
	406	N-8 N-4	Ⅵa	磨・敲石	14.2	11.7	5.5	860	多孔質安山岩	
	407	J-3	Ⅵa	磨・敲石	10.9	7.9	6.3	520	砂岩	
	408	N-8	Ⅵa	磨・敲石	13.4	10.4	7	1325	砂岩	
	409	N-9	Ⅵa	磨石	10.7	9.5	4.4	600	砂岩	
	410	O-5	Ⅵa	磨・敲石	8.8	7.6	4.5	390	砂岩	
	411	H-8	Ⅵa	磨・敲石	9.7	7.2	4.3	405	砂岩	
	412	O-4	Ⅶa	磨・敲石	8.4	6.8	1.9	162.5	砂岩	
	413	N-8	Ⅵb	砥・敲石	11.6	9	3.4	487.5	砂岩	
	414	K-11	Ⅶb	磨石	11.7	9.2	6.5	940	砂岩	
	415	O-8	Ⅴ	槌石	14.2	4.3	3	257.7	砂岩	
	416	M-8	Ⅵb	台石	10.2	8.9	7.3	635	砂岩	
	417	I-11	Ⅴ	槌石	10.8	5.7	4.2	387.5	砂岩	
60	418	P-9	Ⅵa	台石	26.3	20.2	10	8400	輝石安山岩	
	419	O-4	Ⅵa	石皿	11.5	17.7	6.7	1600	凝灰岩	
	420	M-10	Ⅵa	石皿	23.3	28.7	7.1	3895	凝灰岩	
	421	R-4	Ⅵa	石皿	19.6	10.9	7	1335	凝灰岩	
	422	P-9	Ⅵa	砥石	26.5	7.9	5.7	1435	砂岩	
	423	G-9	Ⅵb	槌石	20.1	8.5	4.1	1025	砂岩	
	424	M-8	Ⅵb	台石	10.2	8.9	7.3	635	砂岩	
	425	G-9	Ⅵb	砥石	12.5	8.1	6.8	1310	砂岩	
	426	L-9	Ⅵb	軽石製品	11.1	13.3	7.1	205	軽石	タール状炭化物付着
	427	H-12	Ⅵa	軽石製品	6.7	6.6	2.7	51.9	軽石	
	428	N-9	Ⅵa	軽石製品	10.6	8.1	2.7	105	軽石	
	429	M-9	Ⅵa	軽石製品	7.1	7.4	1.1	37.5	軽石	
	430	P-8	Ⅵa	軽石製品	5.2	4.5	2.8	18.7	軽石	
	431	N-9	Ⅵa	軽石製品	5.4	4	1.5	11.9	軽石	

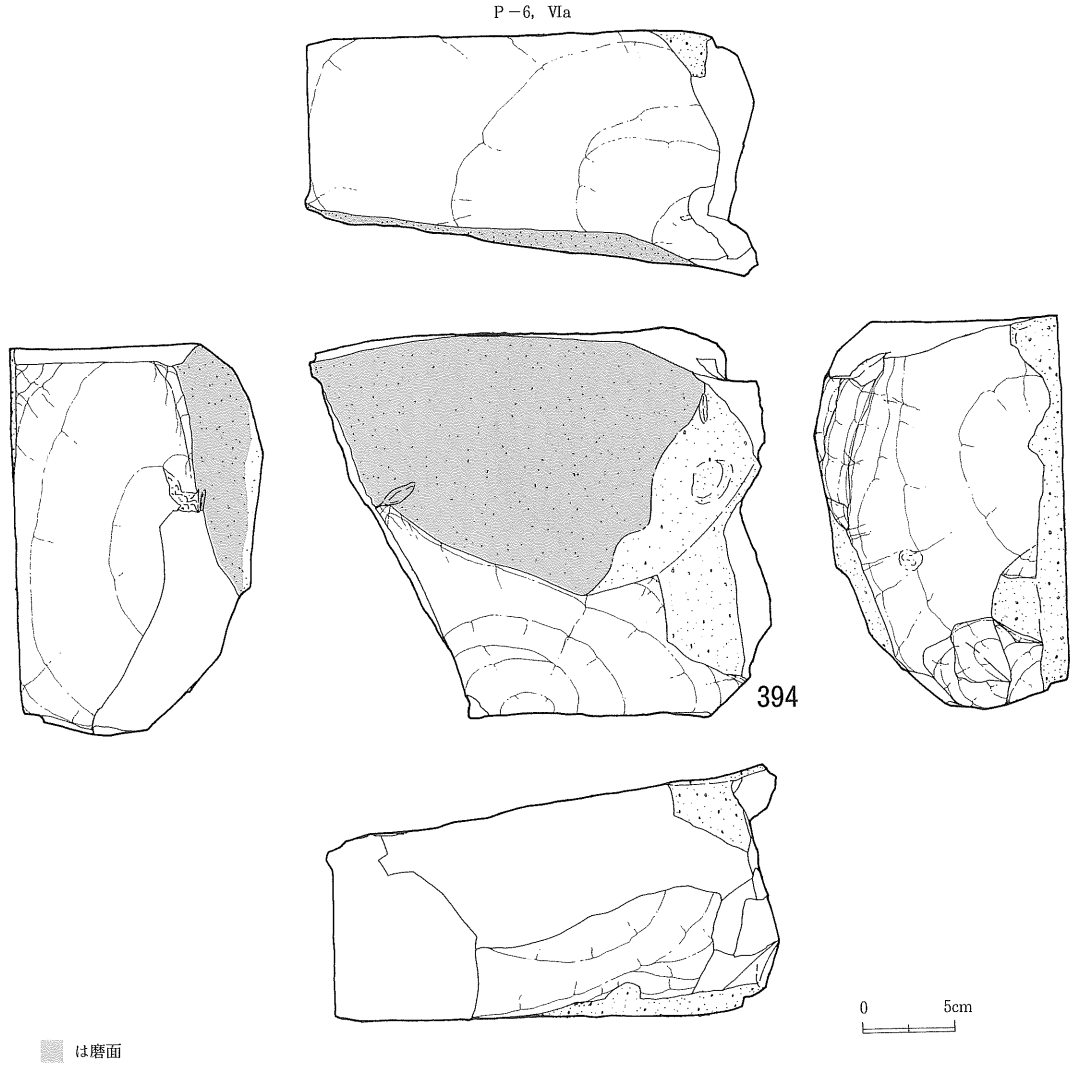


第56図　VI～VII層出土石器①

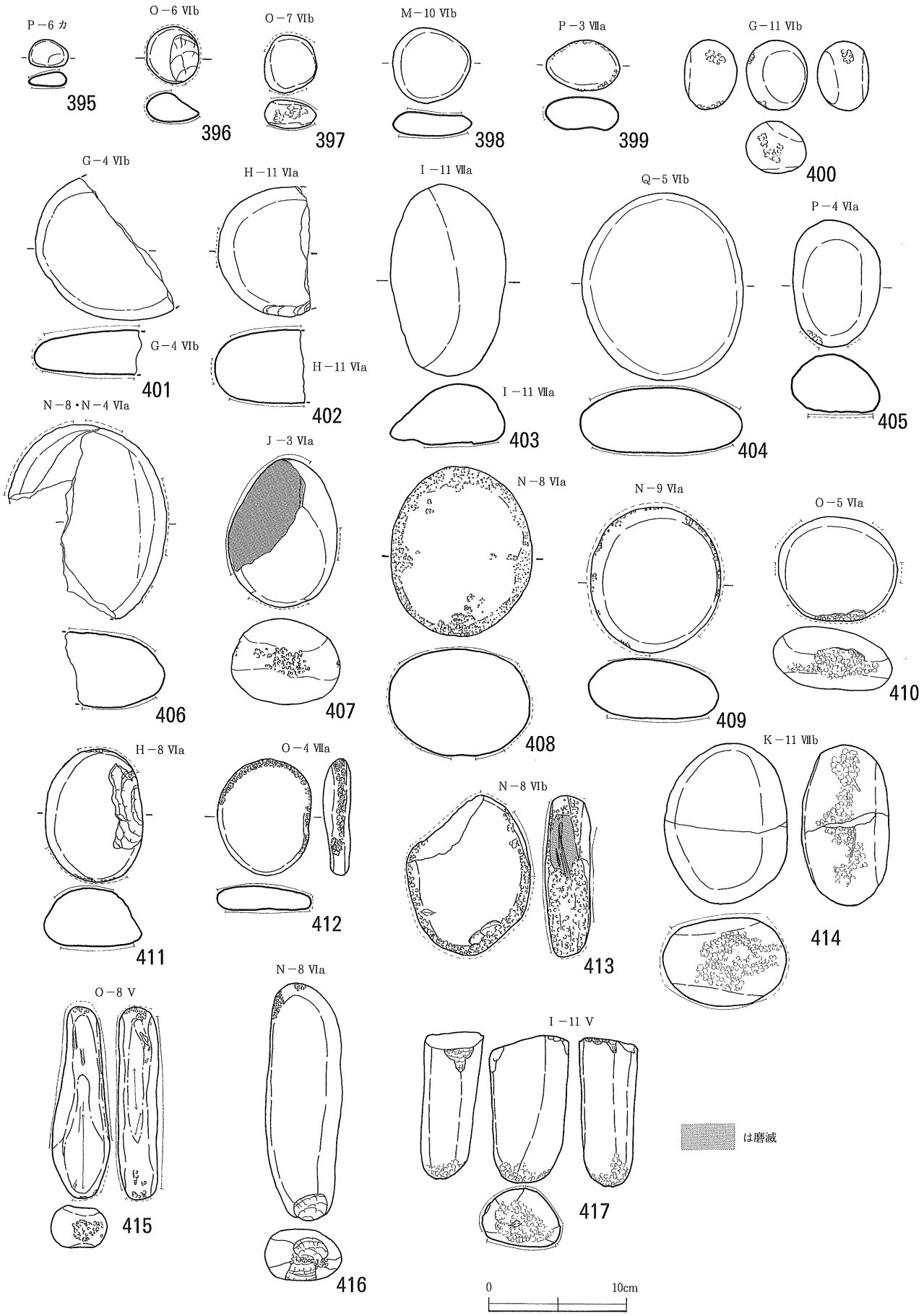


第57図　VI～VII層出土石器②

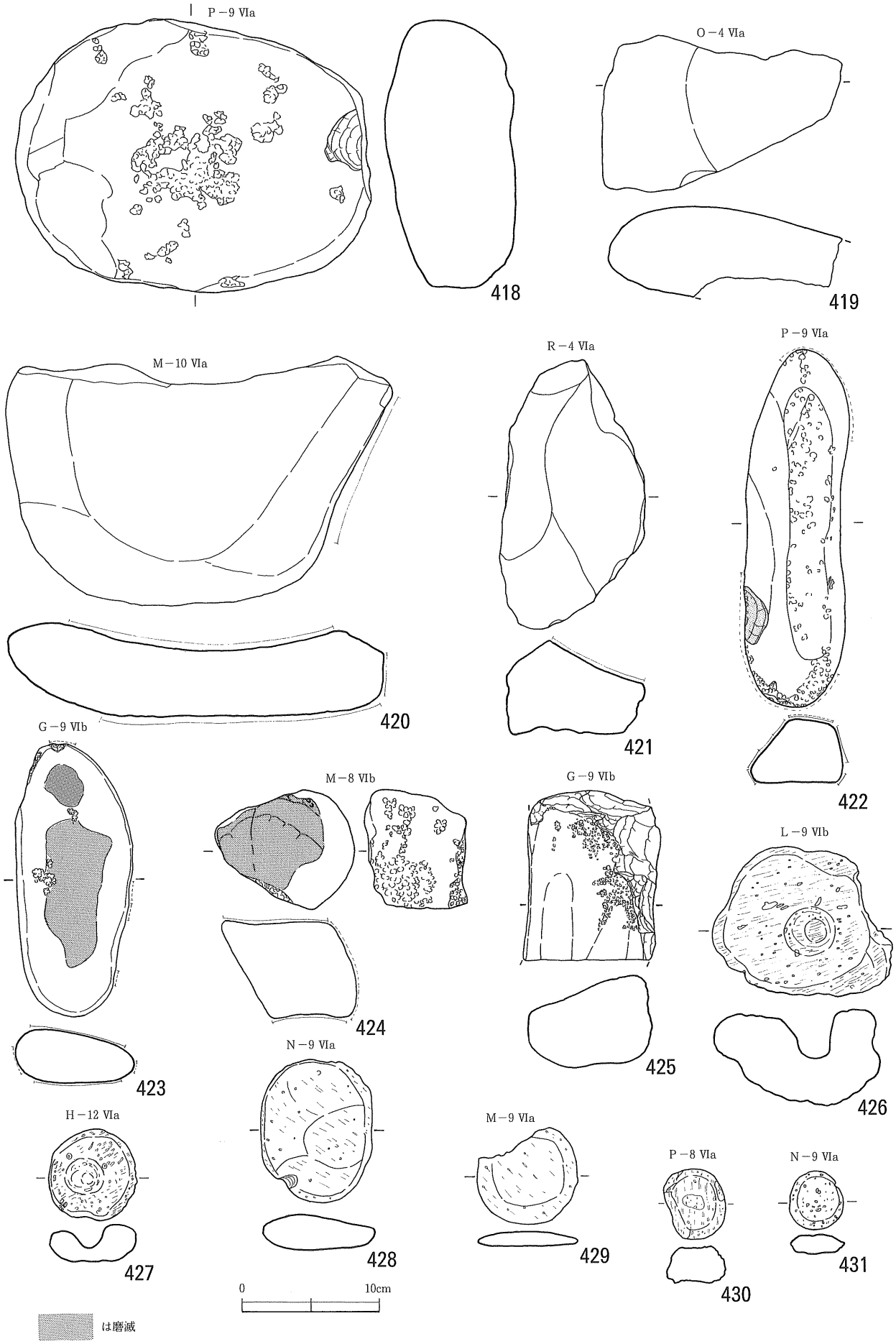




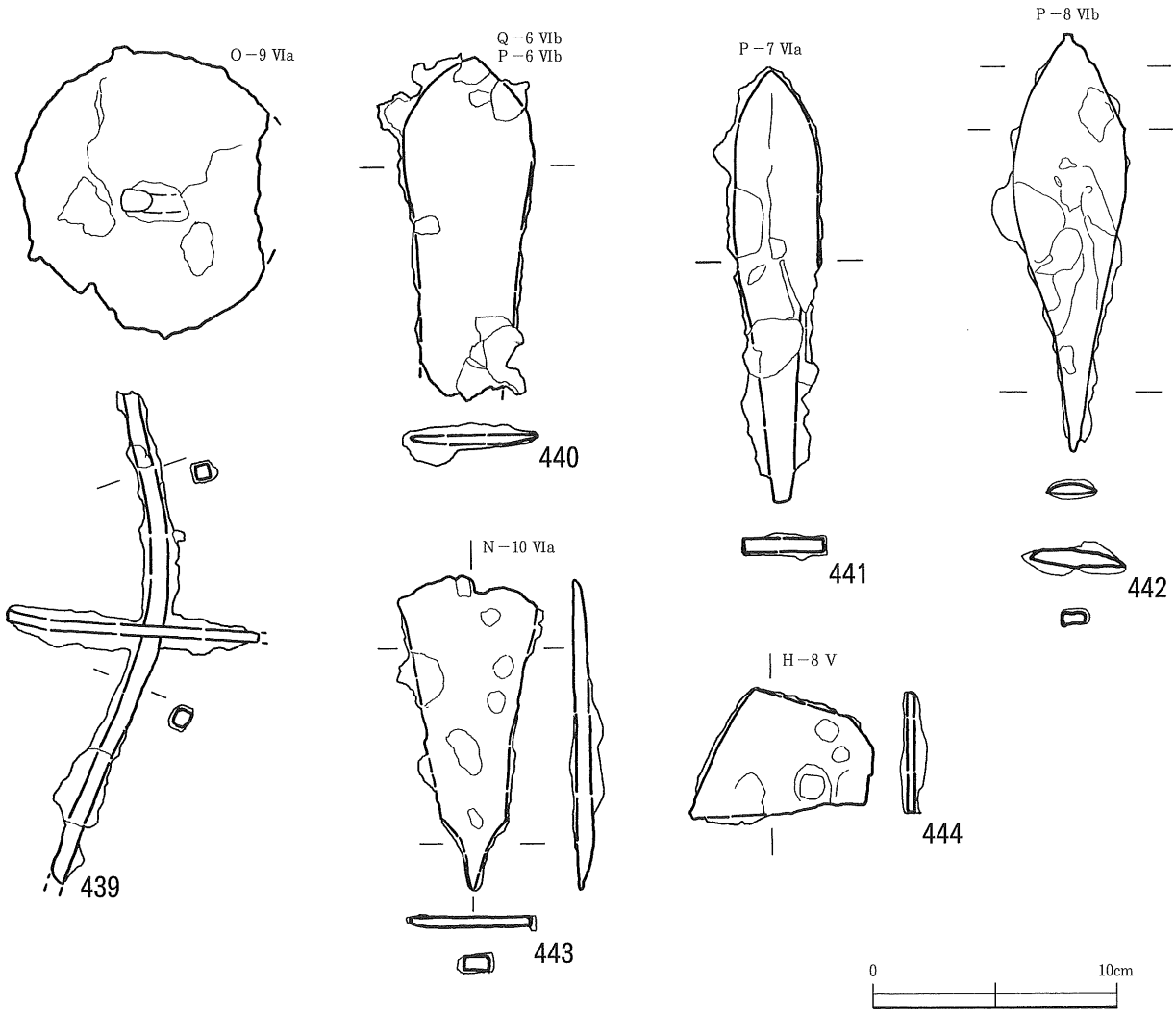
第58図　VI～VII層出土石器③



第59図　VI～VII層出土石器④



第 60 図　VI～VII層出土石器⑤



第 61 図　弥生・古墳時代包含層出土鉄器

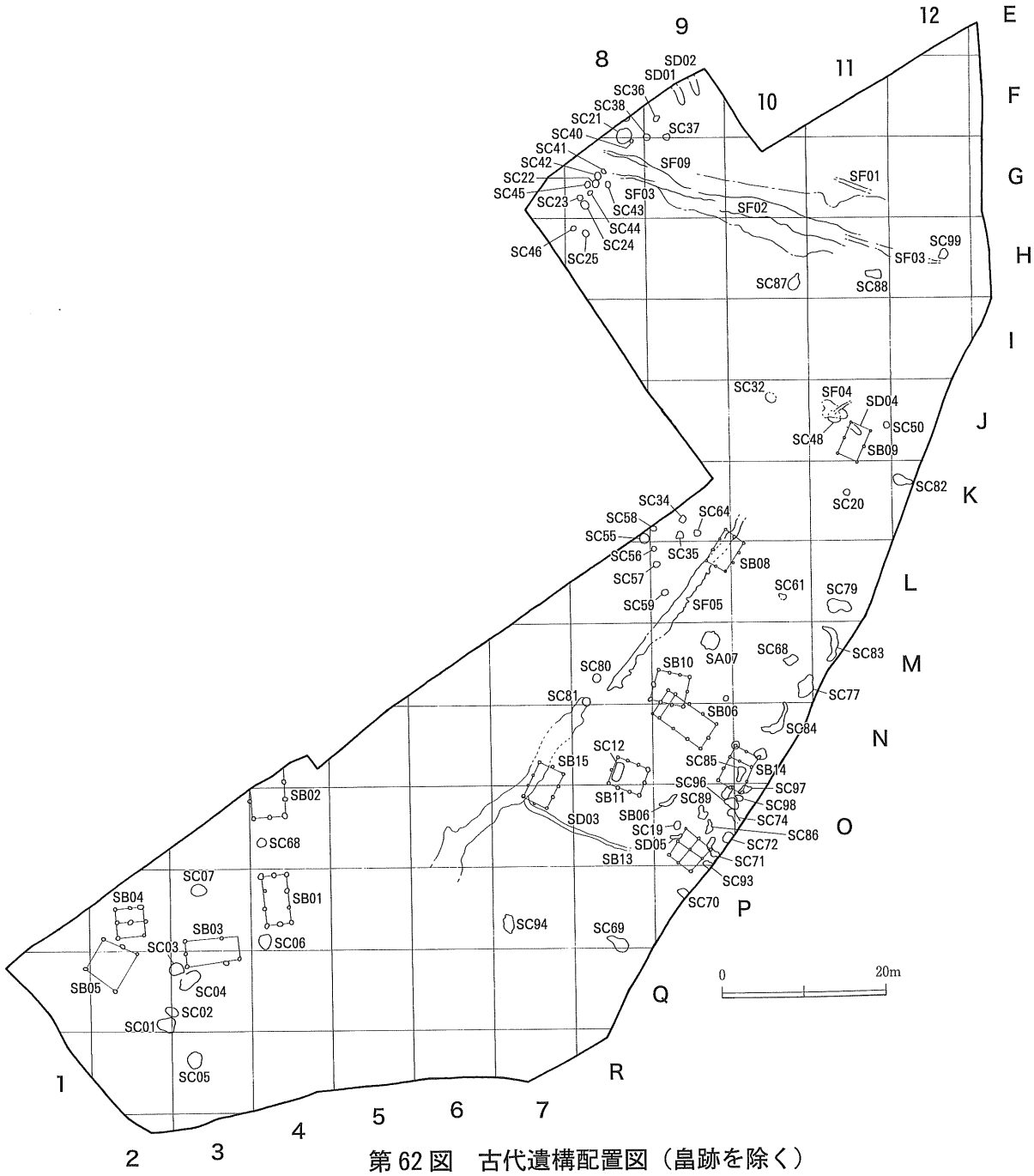
④鉄製品

439 は紡錘車で、紡茎まで入れた長さは 10.2cm で、紡輪の径は 5.2cm、紡輪の厚さは 0.2 ㎝である。紡輪の中央部に径約 0.6 ㎝の紡茎が上下につけられている。紡茎は端部に向かい上下とも反り返り、端は折れている。

440 ～ 443 は鉄鏃である。440 は茎部を欠損している。鏃身は残存で 7.1 ㎝、幅は 2.5 ㎝と、鏃身の幅に比べてやや細長い、細根系の柳葉形の鉄鏃である。441 は鏃身長が 5.0cm、鏃身幅が 1.9 ㎝、茎まで入れた長さが 9.0 ㎝である。径は下部で折れているため実長は不明である。やや小ぶりの細根系の柳葉形である。茎はやや丸味のある方形を呈す。442 は鏃身 6.4 ㎝、鏃身幅 2.3 ㎝と、やや幅広なもので、箆被を持たない。鏃身の断面はややレンズ状を呈すが稜は持たない。細根系の柳葉形である。443 は上部を欠損しているが、残存で鏃身 5.0cm を測る。鏃身幅は 2.8 ㎝とやや幅広で、茎との境に箆被を持つ。444 はⅤ層中からの出土であるため、古代の遺物である可能性が高いが、鉄の質感が 440 ～ 443 に似ているため取り上げた。器種は不明である。

表 25　包含層出土鉄器計測表

図版番号		出土区	出土層	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
61	439	O-9	VI a	紡錘車	10.2	5.2	－	31.6	
	440	Q-6 P-6	VI b	鉄鏃	7.1	2.5	0.2	13.7	
	441	P-7	VI a	鉄鏃	9	1.9	0.2	20.4	
	442	O-8	VI b	鉄鏃	8.6	2.3	0.3	19.2	
	443	N-10	VI a	鉄鏃	6.4	2.8	0.2	13	
	444	P-6	VI a	鉄鏃	2.7	3.7	0.2	8.7	

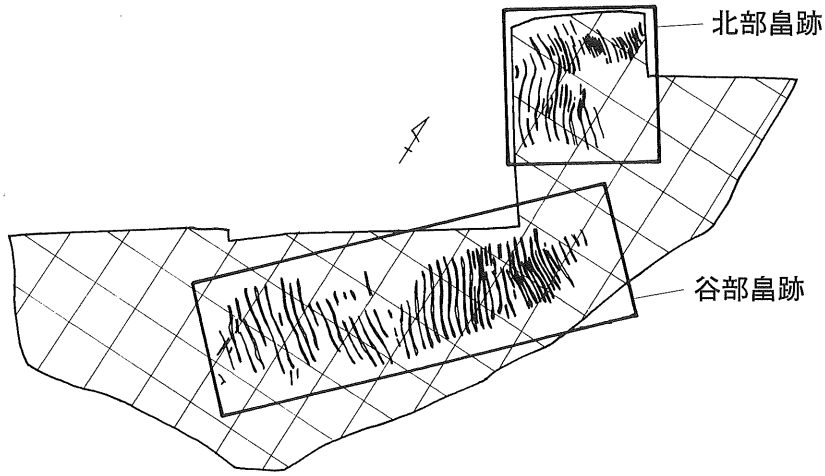


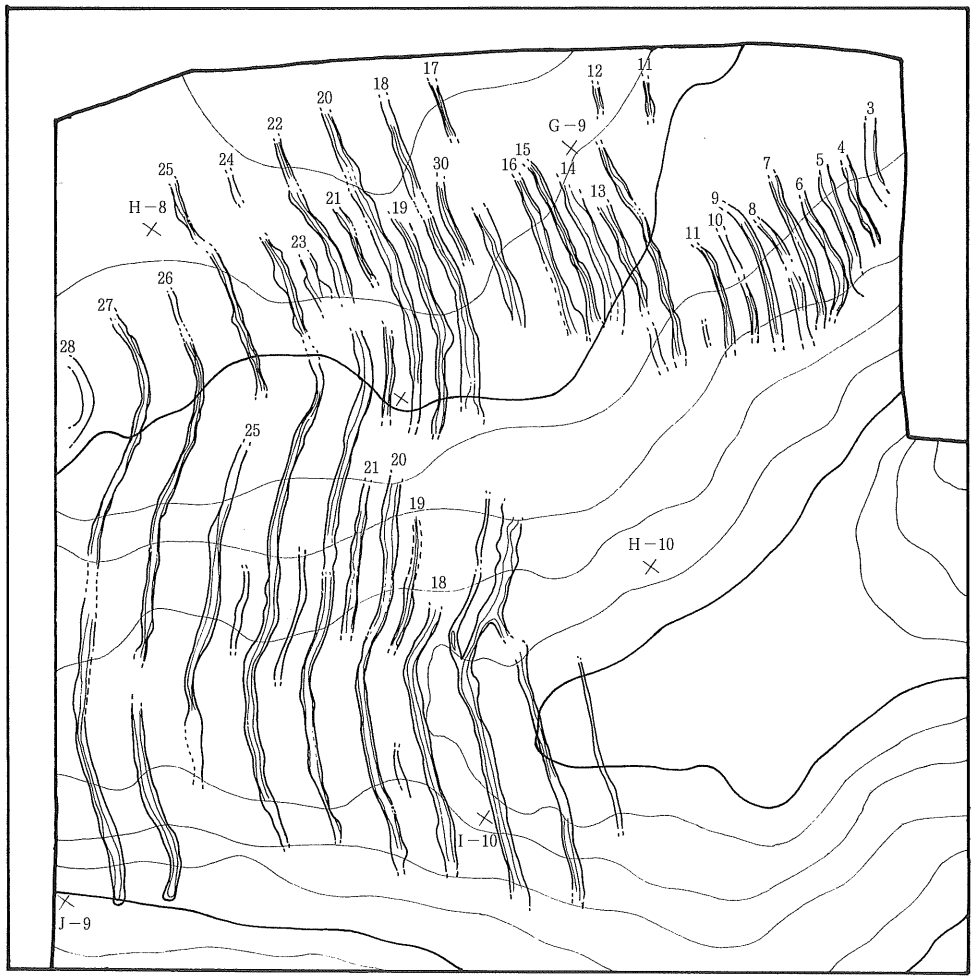
第62図　古代遺構配置図（畠跡を除く）

（3）古代

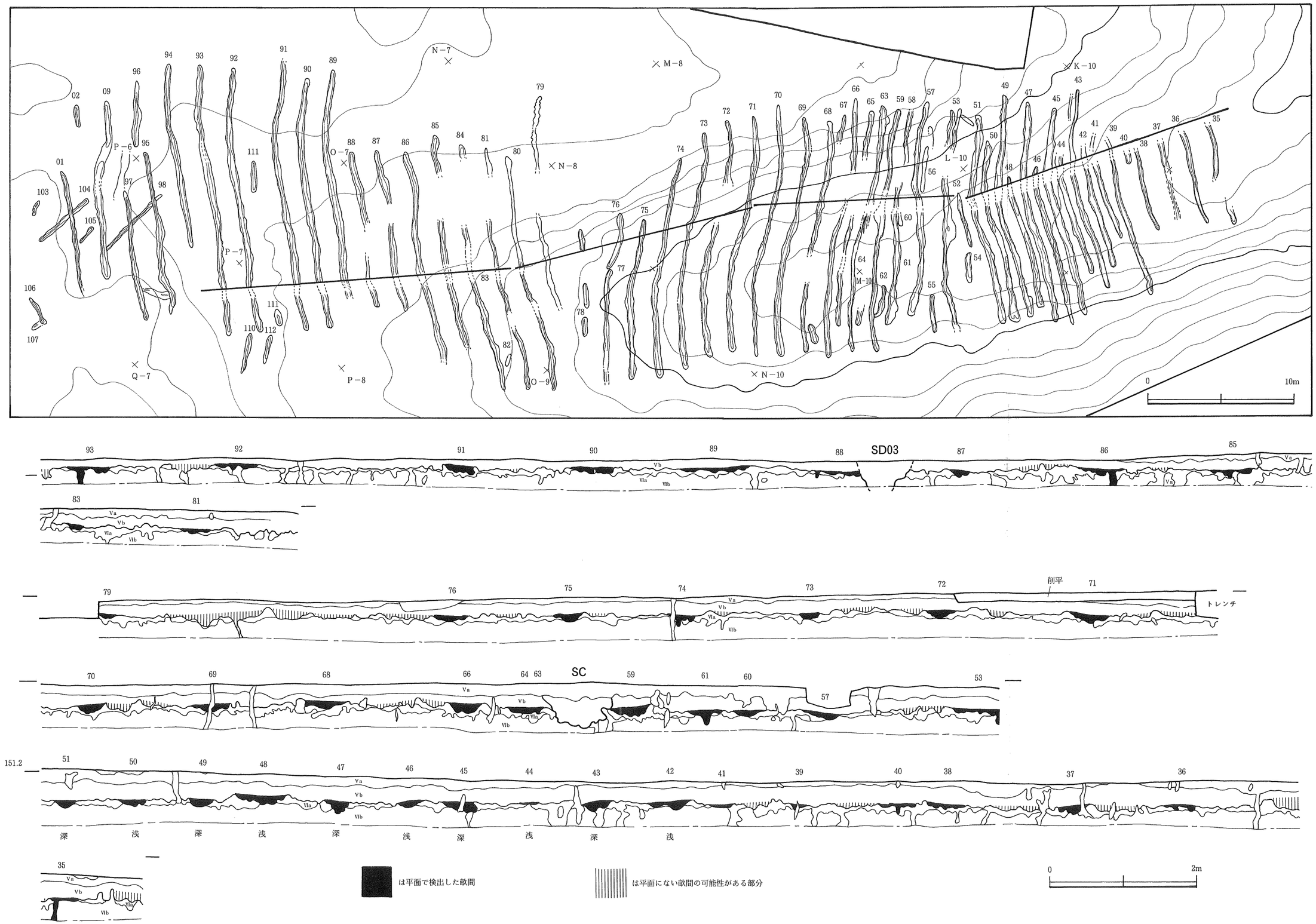
1．調査の概要

表土を剥いだ時点で、既に「か」区や「あ」区の一部では黒色土が削平されており、柱穴や土坑らしき黒色土の落ち込みが認められていた。そこで、まず谷中央に谷を横断するようにトレンチを入れたところ、Ⅵａ層上面に谷を横断するように多数の溝状の遺構が認められたため、土層観察の壁を残しながらⅥａ層まで掘り下げを行った。黒色土は一番厚いところで40㎝を越えるが、黒色土中で遺構を確認することはできず、古代の遺構検出はⅥａ層上面で行っている。この溝状遺構は谷部を中心に調査区の大半から検出され、それぞれの溝状遺構はほぼ平行していたことから畠の畝間であると想定された。また、表土を剥いだ段階と、黒色土を掘り下げる段階で硬化面も多数検出された。柱穴の多くは不規則に並ぶものが多かったが、調査区南西部や谷部では規則的に配置されるものも検出されている。この他にⅤ層黒色土及び、Ⅲ層文明ボラを埋土とする土坑が調査区北東隅、調査区東側の山際、調査区南西部に集中している。遺構内からの遺物の出土が少なく、大半がⅤ層黒色土中からの出土となっており、土師器・黒色土器・須恵器などが出土した。土師器は特に調査区中央に伸びる谷部からの出土が多く、須恵器は全体量が少ないものの J-11 区を中心に出土が認められた。また、この他に緑釉陶器や鉄製品なども出土している。





第63図　北部畠跡



第64図　谷部畠跡

2．遺構

①畝状遺構（第63・64図）

星原遺跡では調査区の南西部と、北東部を除いた区域で畝状遺構が検出されている。しかしながら検出されていない区域については、表土を剥いだ時点で、黒色土下まで削平を受けていた状態であるため、畝状遺構が調査区全域に構築されていた可能性は高いと考えられる。削平を受けていない部分の畝状遺構はⅥa層上面で検出している。検出された地点がやや離れているため、調査区の北西部から検出された畝状遺構を「北部畝状遺構」とし、調査区中央に広い範囲で見つかった畝状遺構を「谷部畝状遺構」としておく。

まず、畝状遺構を検出したⅥa層上面の地形について詳しく述べておく。遺跡中央に開析谷が伸びていることは先述しているが、この谷はP-6区辺りを起点にN-9区をとおりJ-11区付近からF-12区方向とI-8区方向へと分かれていく。ちょうど、I-10区からJ-9区J-10区にかけてが微高地となっており、この付近は表土を剥いだ時点でⅧ層まで削平を受けていた。分かれた谷はI-8からF-11に向かって低くなる。要するにF-12区付近から入ってくる谷がI-10区付近でI-8区方向とJ-11区方向の二股に分かれているのである。そして、この分かれた谷間に畝状遺構が造られているのである。

北部畝状遺構（第63図）

30条を越える畝間と思われる溝が、約30ｍ四方の範囲で見つかっている（第63図）。畝間の幅は10～50cmと狭く、また、深さも5～20cmで、断面は「U」字である。畝間18から西は谷を挟んで谷の両側まで延びており、谷底部で谷の方向に向かって緩やかにカーブを描き斜面へ続く。北東側で谷の北西部でしか畝間が検出されないのは谷が北西に向かって深くなっているためであると思われ、非常に浅いものであったが、F -11区で畝間と思われる浅い溝状のものを2条検出している。

畝間18～28を見てみると、幅35～50㎝のやや幅広なもの（畝間18･20･22･24･25～28）が約1.5ｍ間隔でほぼ平行して造られている。そして、その間に幅20cm前後の狭くて浅い畝間が平行に造られている。狭い畝間同士の間隔も1.5ｍである。幅広な畝間と狭い畝間の間隔は50㎝で、幅広な畝間の長さは直線で、20～25ｍを測り、狭い畝間は15ｍを測る。また、平面で確認はできなかったが、断面で、畝間26と27の間にも浅い畝間が存在する（第5図：9Ｔ断面図）。幅広の畝間と狭い畝間が重なるのは1箇所だけで、ちょうど幅広の畝間が二股に分かれていく地点である（畝間17と30）。谷間ではカーブを描くものの、北部畝状遺構の軸はＮ126～130°Ｗに収まる。

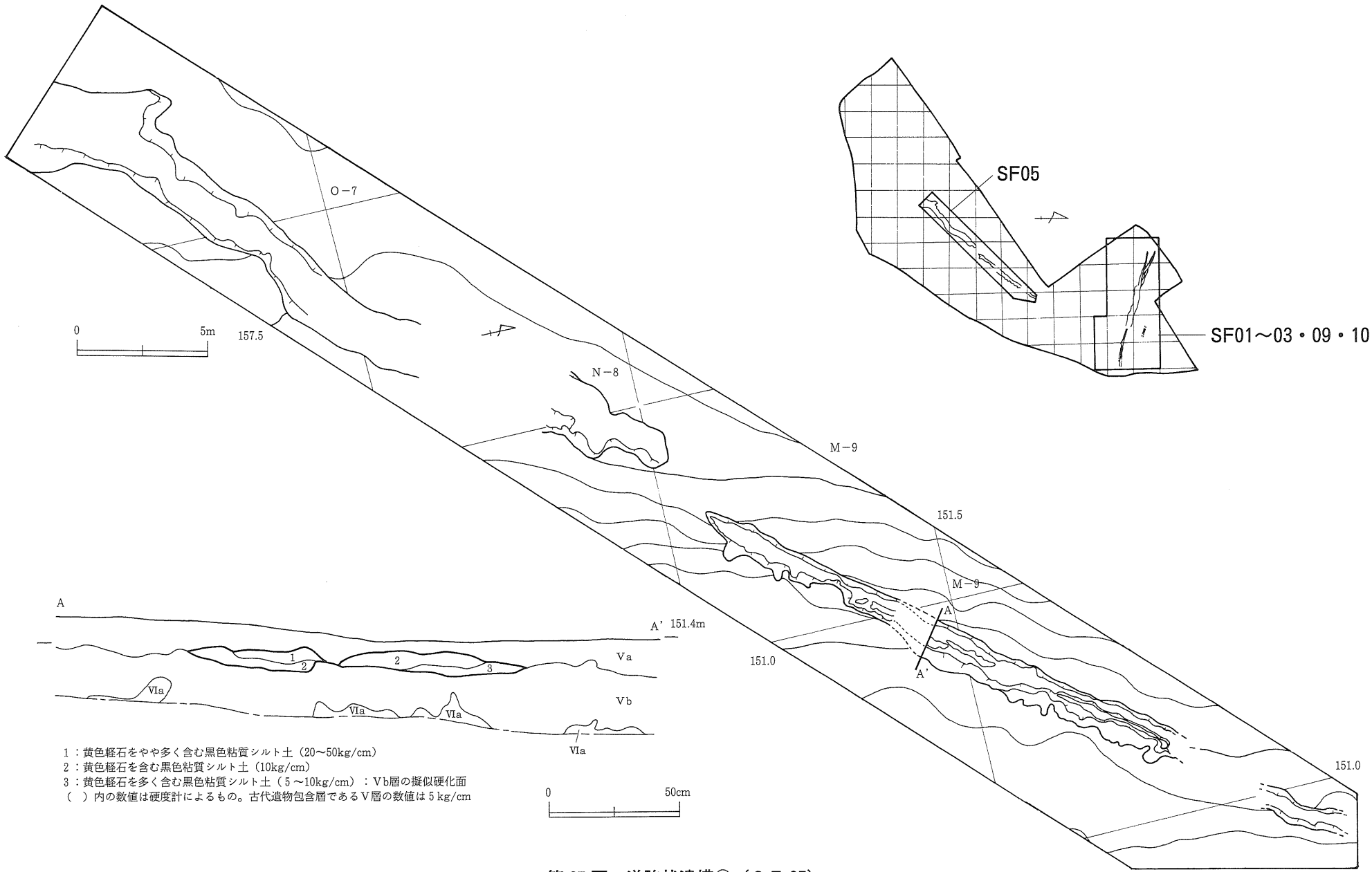
区画溝などは見つかっていないが、畝間20～26の西側には直径30㎝、深さ40㎝程の柱穴が畝間の切れたすぐ脇に認められた。ただし、畝状遺構自体がそれより西に続く可能性も十分考えられ、これが畝状遺構に伴うものであるかは不明である。

また、幅広の畝間と狭い畝間に時間差があるかは不明であるが、重なりもなく畝間方向も平行に造られていることを考え合わせれば同時と考えるのが妥当であろう。また、畝の部分（盛土）については確認することができなかった。詳しくは後述するが、畝間16～19の部分で、硬化面と硬化面の間に畝間が認められている。

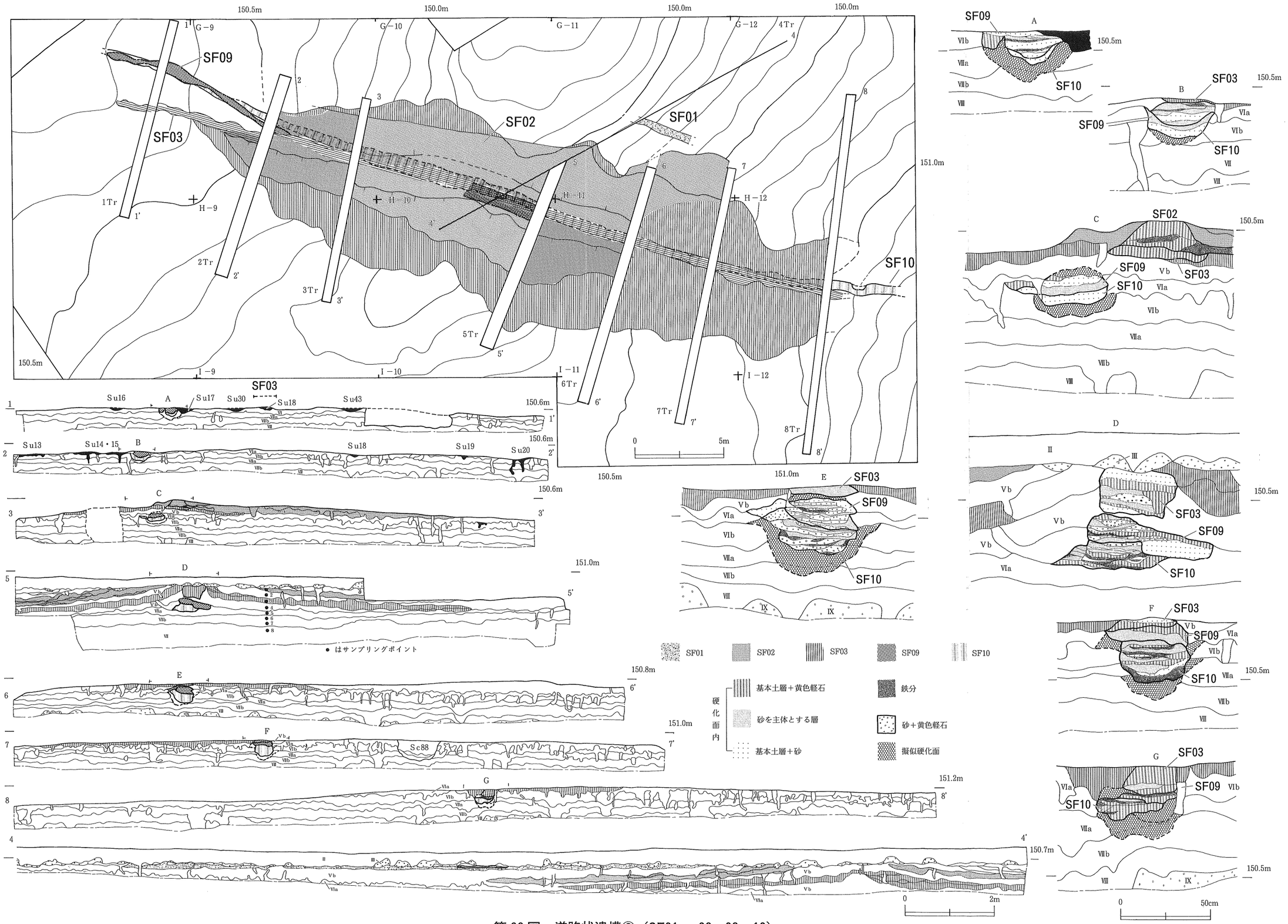
谷部畝所遺構（第64図）

全体で50条を超える畝間と思われる溝が、約25ｍ×83ｍの範囲で検出された。南西から北東に下る谷間を中心に、谷に直行するように造られており、これらの畝状遺構は10～15条前後のまとまりで畝間の軸が若干異なっている（第64図）。

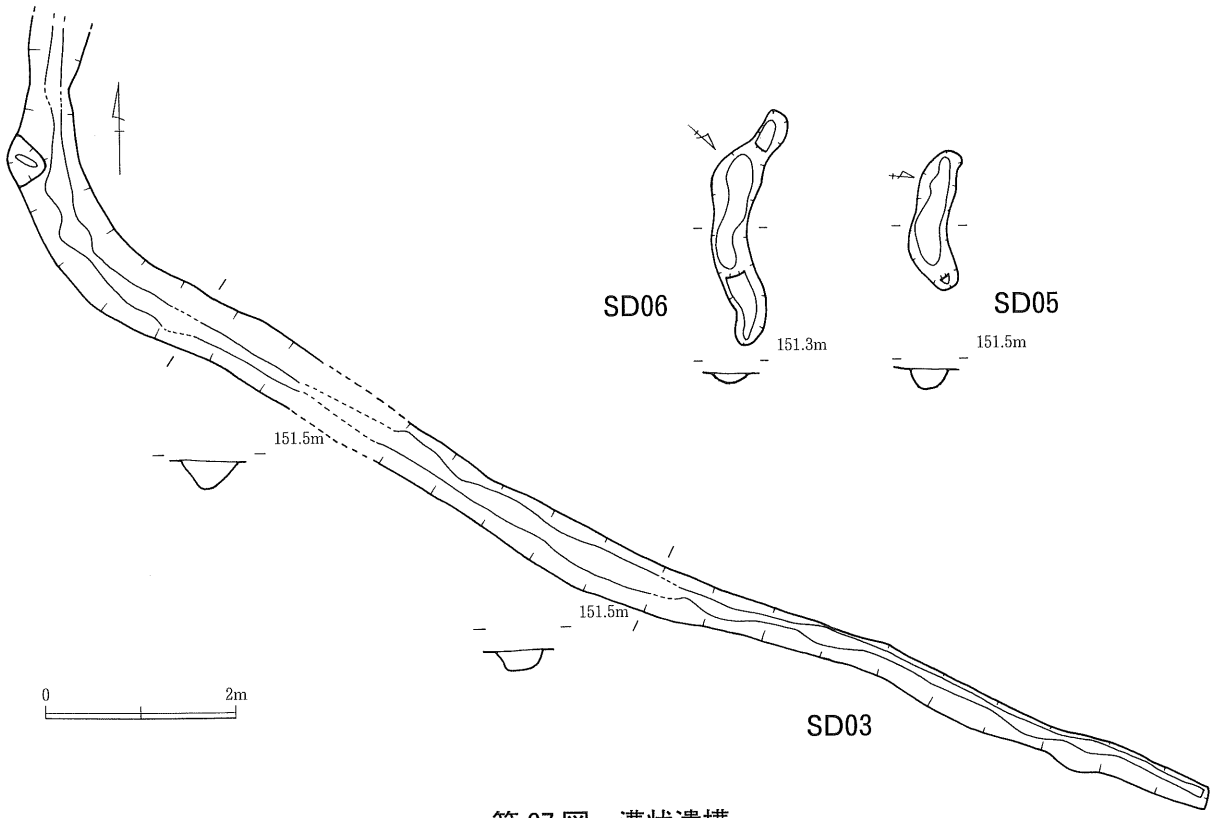
畝間35～40は畝間の軸がほぼＮ118°Ｗである。平面では6条検出された。畝間41より南西の畝間とほぼ平行しているようにも思えるが、畝間39の西端が南へカーブするのに対し畝間41は北へカーブする。畝間40を除けば、畝間の間隔は1.5ｍで、幅30～40㎝、深さ10㎝と幅に対し深さが浅いものである。畝間39と40は共に浅い畝間と思われまた、畝間40は他と比べ極端に短いもので、これが本来畠境に当たる区画の溝状のものとも考えられる。これらが、地形的に谷が分かれていく手前の部分であるためか残存状況が良いとは言えない。



第65図　道路状遺構①（ＳＦ05）



第 66 図　道路状遺構②（SF01 ～ 03・09・10）



第67図　溝状遺構

畝間41～51は畝間の軸がほぼN 127° Wである。平面で11条が検出された。ここでも谷底部で緩やかに逆S字にカーブを描く。北部畝状遺構と同様に、畝間の幅が広く深さが深いものと、比較的狭く浅いものが認められた。浅い畝間は42・44・46・48・50で、幅20～30㎝、深さ5～10cmで、長さは9m～13m程である。深い畝間は上記以外で、幅40～50㎝、深さ20～30㎝で、長さ15m前後である。深い畝間の間隔は約1.5mで、浅い畝間の間隔も1.5mである。

畝間51・52・54・55・56としたものは畝境と思われる。それに挟まれた畝間53について述べると、軸はN 135° Wである。幅30～1m、深さ10cm、長さは17mを超える。ちょうど中間地点にテラスを持っている。

畝間57～76は畝間の軸がN 140° Wである。平面では15条検出された。谷底部に沿うように緩やかにS字カーブを描く。やはり北部畝状遺構同様、畝間の浅いものと深いものが北東側で認められた。畝間58・62・63・65・67は狭く浅いもので、幅20㎝前後、深さ5㎝程度、長さ15mほどである。上記以外の畝間が深いもので、幅40～70㎝、深さ10～15㎝、長さ17m前後である。南西に行くに従い長さが短くなっている。畝間の間隔は深いものも浅いものも1.5mで、深い畝間と浅い畝間の間隔は0.5mである。

畝間78・111は畝境であると思われる。それに挟まれた畝間であるが、畝間79～88は軸がN 123° Wで、平面で8条検出された。幅30㎝前後、深さ10cm弱、長さ16m前後である。畝間の間隔は1.5mである。特に畝間79・81・84はSA05・04内に造られている。地形的には擂鉢状に周辺よりもかなり落ち窪んでいたと思われる。畝間89～71は軸がN 127° Wで3条検出されていて、111の南西の畝間92～101と平行している。

畝間92～101の軸は前述したとおりである。平面で7条検出された。非常に残存状態が悪く浅いものであった。しかしながらここでは他の区画とは違い、軸が異なる畝間と重なりを持っていた。軸はN 0° Wである。2条のみで、非常に短く浅いもので畝間とするには問題も残る。

これらの畝状遺構を畠跡とするならば、畝間と畝間の間に畝が存在するはずである。畝は畝間の土を盛り上げたものであるから、掘り込んだⅥａ層が混ざっていると考えられる。現に９トレンチや10トレンチではⅥａ層がブロック状にＶｂ層中に認められている。しかしながら、明確に畝と確認できる連続したものは認めることができなかった。畝間周辺の土壌を硬度計で計測したところ、畝部分が2.5 kg/cm^{2}で、その周辺は5 kg/cm^{2}であった。所々深く落ち込む部分は認められたものの、ほとんどの畝底部には耕作痕は認められなかった。また、畝間の黒色土を掘り上げたところ、畝部分や畝間底面に直径10～20 cm、深さ10～20 cmの円や楕円形の小さな黒色土のシミが多数検出された。樹根とも思われたが、栽培植物の痕跡とも思われ、土壌の分析を行っている。その結果、植物珪酸体分析では、かなり低い数値ではあるものの直上の層からは全く検出されていないイネが検出されている。また、花粉分析からはアブラナ科の花粉が検出されている。しかしながら、これらが畝状遺構で栽培されていたと断定することはできず、あくまでも可能性の一つとして取り上げておく。

②道路状遺構（第65・66図）

星原遺跡では道路状遺構と考えられる硬化面が検出されている。硬化面はその方位から大きく２グループに分けられた。１つ目は調査区北側でまとまって検出されたもので、方位がＮ106～111°Ｗである（SF01～03、08～10）。２つ目は方位がＮ34～52°Ｗである（SF04～07）。１つ目のクループではSF01を除く全てがほぼ同一線上に折り重なるように構築されていた。２つ目のグループはほぼ同一線上に重なることなく場所を隔てて検出されているため、本来は１つの道路状遺構として捉えるのが妥当であると思われる。

SF01（第66図）

G-11区で検出された（第66図）。断面で確認すると、Ⅳ層直下にあたり、幅1.2 m、長さ5.5 m、厚さ20 cmである。硬度計で測ると、直上のⅣ層が6 kg/cm^{2}で、硬化面は18 kg/cm^{2}である。また、SF01直下には後述するSF02に伴う御池軽石を多く含む層があり、この層の硬度は8 kg/cm^{2}である。また、SF01は調査区北壁端（第５図）に認められることから南東から北西に向かいほぼ直線的に伸びていると考えられる。硬化面の方位軸はＮ111°Ｗである。

SF02・03、08～10（第66図）

SF02・03、08～10は、G-8区からH-12区に向かいほぼ同一線上で検出されている。硬化面の軸はＮ109～114°Ｗである。検出した順に02、03、08、09、10としているので、構築された順番はSF10→09→03・08→02である。また、これらの道路状遺構は谷を横切り、東側の斜面へ向かって構築されている。

SF02はG-9区からH-11区にかけて検出された。硬化面の幅は1.1～2.0 m程で、長さ23 m程である。硬化面の断面は台形状で、最下層が幅広く、上層に行くほど狭くなっている（第66図：３トレンチ断面及び断面Ｃ）。厚さ約15 cmの硬化面は３層からなり、上下層はＶｂ層に御池軽石を大量に含み、また、砂混じりの層で、硬度計では最下層が10 kg/cm^2、最上層が20硬度であった。中間層は砂主体の鉄分が沈着した層で小さな御池軽石がまばらに含まれている。非常に硬く、20 kg/cm^{2}を超える。また、これに伴う御池軽石を極多く含む黒色土が硬化面の左右に認められ、その幅は硬化面を含め平面では最大８ m、断面では19 m程確認されている。特に谷部では厚く堆積していた。

SF03はSF02とほぼ真下にある。SF02よりも下にあるため残存状態がよく、中心の硬化面は幅約１ mで、長さは41 mを超える。厚さは一番厚いところで25 cmあり、最大８層からなる。Ｖｂ層黒色土に砂を多く含む層、砂と御池軽石を主体とする層、黒色土に御池軽石を多く含む層、砂を主体とする層からなっている。硬化面はＶｂ層中から掘り込まれており、東端ではⅥｂ層まで掘り込まれている。また、SF02同様硬化面の左右に御池軽石を極多く含む黒色土が認められ、その幅は硬化面を挟んで最大で20 mを超えるものである。SF02同様に、谷部では厚く堆積していた。

SF08としたものはSF03に伴う御池軽石を多く含む層に認められ、また、検出された範囲も狭かったため、SF03に伴うものであると思われる。また、この硬化面は畝状遺構による破壊を受けておらず、畝状遺構より後に構築されていると考えられる。

SF09は谷部から東ではSF03の真下に位置するが、西端でSF03の北を通る。方位軸はN 107° Wである。東側では一部SF03によって破壊を受けている。SF02・03と異なるのは硬化面の左右に御池軽石を多く含む層を持たないことである。硬化面の幅は0.7 m程で、長さは42 mほどである。断面を観察すると、Ｖｂ層中から掘り込まれ、上層は黒色土を基調とし御池軽石を多く含んでいるが、それ以外はⅥ層を掘り込んでいるためか、褐色土を基調に砂や御池軽石が多く含まれる層となっている。また、SF09としたものは数回に分けて構築した可能性が高い。硬化面の硬度は20～50 kg/cm^{2}となっている。第66図の１トレンチ断面および断面Ａのをみると、畝間17がSF09を破壊しているのがわかる。

SF10はSF09とほぼ同一線上の真下にある。硬化面の左右に御池軽石を含む層を持たず、硬化面の幅は１m程で、長さは45 mを超える。方位軸はN 107° WとSF09と同じである。東端をSC99によって一部破壊されている。やはりＶｂ層中からⅦ層まで掘り込まれている。断面で観察すると、鉄分が沈着する層が目立つが、褐色土を基調として砂や御池軽石を多く含んでいる。硬度は20～25 kg/cm^{2}である。

SF04～07（第65図）

Ｖ層黒色土掘り下げ段階で、L-9区付近に南西から北東に伸びる硬化面を検出した。硬化面はＶ層よりやや御池軽石を多く含むものであった。幅は0.4 m～1.6 m程であった。当初、長さは20 m程検出した時点で途切れていた。その後、北東に４mほどいった時点で再度長さ３m程を検出した。この途切れていた地点が、丁度SB08にあたるが、硬化面検出時にはSB08の柱穴は検出することができず、硬化面調査終了後に硬化面下より検出している。北東に行くにつれ包含層の残存状況も悪く、この北東でも硬化面は途切れている。また、南西端はM-8区で途切れていた。その後、O-6区で、SF05程しっかりした硬化面ではないものの、周辺よりやや硬い部分が検出され（SF07）、面的に調査を行ったところ途中で５m程途切れるが、SF05の南西2.5 m程のところまで伸びた（SF06）。しかしながら、断面で観察するとSF05のように黒色土に御池軽石を多く含み黒光りするような状態ではなかった。また、J-11区では長さ２m幅0.4 mの御池軽石を非常に多く含む硬化面が検出された（SF04）。これらは方位軸がN 34～52° Wの範囲に収まり、ほぼ同一線上に存在し、また、黒色土を基調とする硬化面であるため、同一のものとして捉え、状態の違いは残存状況の違いによるものと判断した。また、これらの硬化面は位置的に畝状遺構と重なるものの畝状遺構による破壊を受けていないため、畝状遺構が造られた後にこれらの硬化面が構築されたものと考えられる。

③溝状遺構（第67図）

星原遺跡では畝状遺構とは性質の違う溝状遺構を計６条検出している。何れも黒色土を埋土とし、遺構内からの遺物の出土はほとんどない。

SD01・02はF-9区で検出している。南東から北東に向かい、調査区外へと伸びている。南東端は急に立ち上がる。溝幅は0.8 m、深さ0.4 mである。断面はSD01が台形状で、SD02が「U」字状である。検出した長さは共に2.2 mで、ほぼ平行に走っている。詳細は不明である。

SD03はO-7区から0-8にかけて検出された。溝幅0.25～0.7 mで、深さは0.1～0.3 mほどの細く浅い溝状遺構である。東から西に13 mほど行った地点で北へほぼ90度曲がり、2.5 mほど行った地点で途切れている。また、丁度屈曲部分にSB15の南西端の柱穴がある。SB15との関係は埋土がほぼ同一であったため不明である。谷中央部に位置するため東端に向かい浅くなっている。遺構内からの遺物の出土は見られなかった。

SD04～06は溝状遺構とするには問題もあるが、前述の畝状遺構とするには規模や方位が異なりるため溝状遺構として取り扱っている。SD04は幅１m、長さ2.5 m、深さ0.1 mで、断面は浅い皿状を呈す。J-11で検出されている。丁度SB09の北西端の柱穴に向かって伸び、SB09内で途切れている。埋土はSB09と同じ黒色土を主体とするものであり、２つの遺構の関係性は不明である。SD05・06はO-9区で検出されている。SD05が長さ1.5 m、幅0.4 m、深さ0.25 mで、SD06が長さ2.5 m、幅0.5 m、深さ0.1 mである。埋土は黒色土を主体とし、遺物の出土は見られなかった。

④掘立柱建物跡（第68図～71図）

平安時代の掘立柱建物跡は調査区西側と調査区中央を中心に計13棟確認された。詳細な計測値は表26のとおりである。建物の主軸は南北方向7棟（ＳＢ01・02・04・05・06・13・14)、東西方向6棟（ＳＢ03・08・09・10・11・15）である。

また、主軸方位は大きく3つに別れ、一つ目が、Ｎ3～6°Ｅと、それに直行するもので4棟ある(SB01～04：第68図の青色の掘立柱建物跡)。これらは調査区南西部に集中し、「コ」の字状に建物が配置され、調査区外の北側へ延びている。

2つ目がＮ34～41°と、それに直行するもので4棟ある（SB05・06・08・13：第68図の赤色の掘立柱建物跡)。SB05が調査区南西端に位置しSB06・08・09・13は谷部に位置するがまとまりは見られない。

3つ目がＮ14～28°Ｗと、それに直行するもので5棟ある（SB09・10・11・14・15：第68図の緑色の掘立柱建物跡)。谷中央部の狭い範囲に集中しているが、配置に規則性は認められない。

掘立柱建物跡の主体となる平面プランは、2間×3間を基調とするものが8棟、2間×2間を基調とするものが4棟、2間×1間を基調とするものが1棟である。このうちSB06については北西に廂を持ち、また、総柱となるのはSB13である。

SB01（第69図）

主軸が南北方向（Ｎ6°Ｅ）で、身舎の規模は桁行3間（約6ｍ、柱間2ｍ)、梁間が2間（約3.16ｍ、柱間1.58ｍ）である。身舎の面積は18.96㎡で、柱穴は10本で、円形と楕円形である。直径が44～80㎝、深さが34～80㎝である。西側のピットで柱痕が認められた。柱痕は北西隅と西面の北から3番目の柱穴で認められている。

北西端の柱穴の柱痕は検出面では柱痕部分が御池軽石を多量に含む暗褐色土で、周辺が御池軽石を含む黒色土であった。断ち割ったところ、柱穴の北側は御池軽石を含む黒色土が縦に底まで認められ、南側では御池軽石を多く含む黒色土と御池軽石を主体とする層が層状になっていた。また、中心の柱痕部分は何度か建て直しが行われたような痕跡が認められた。

西面の北から3番目の柱痕は御池軽石を多く含む黒色度で、その周辺に御池軽石を多く含む暗褐色土、御池軽石主体で褐色を含むものが層状になっており、所々に御池軽石ブロックも認められた。また、黒色土が削平されているので、実際のピットの深さはより深いものである。四隅の柱穴は他に比べ大きく、深いものである。

SB02（第69図）

調査区外北側へ続くものと思われ、調査区内で確認できた範囲では、主軸が南北方向（Ｎ3°Ｅ)、身舎の規模は桁行2間（約4.2ｍ、柱間2.1ｍ)、梁間2間（約4ｍ、柱間2ｍ）である。調査区内で確認できた身舎の面積は16.8㎡である。柱穴は確認できたのが6本で円形である。直径が40～80㎝、深さが26～80㎝である。

四隅に当たる部分の規模が大きいことも考え合わせると、実際の身舎の規模は2間×3間になる可能性がある。2間×3間の建物であった場合、身舎の面積は25.2㎡であると想定される。柱痕等は認められなかった。SB01の6ｍ北に位置し、間にはSC08が位置する。

SB03（第69図）

北東隅の柱穴を欠いている。また、東側の1間については廂で、本来身舎は2間×1間あるいは2間×2間である可能性もある。ここでは1間×2間の1面廂の建物として取り扱うこととする。廂主軸が東西方向（Ｎ85°Ｗ）で、身舎の規模は桁行1間（約6.7ｍ)、梁間2間（約3.1ｍ、柱間1.5ｍ）である。身舎の面積は13.95で廂を含めた総面積は20.77㎡である。柱穴は廂を含め6本で円形である。直径が42～70㎝、深さが24～70㎝である。

南東と北西の柱穴が大きく深いものとなっている。柱痕等は認められなかった。SB01の南西3ｍに位置し、間にはSC06が位置する。

第 68 図　堀立柱建物跡配置図

SB04（第 69 図）

主軸が南北方向（N 6°　E）で、身舎の規模は桁行 2 間（約 3.6 m、柱間 1.8 m）、梁間 2 間（約 3.3 m、柱間 1.65 m）である。身舎の面積は 11.88 ㎡で、柱穴は 8 本で円形か楕円形である。直径が 30 ～ 74 ㎝、深さが 24 ～ 64 ㎝である。北東隅の柱穴が大きく深いものとなっている。南側の中間柱が無く、中央に柱穴が認められる。柱痕等は認められなかった。SB01 の東向かい 9 m に位置し、SB03 の北西 4 m に位置する。SB01 ～ 04 で囲まれた「コ」字状の空間は最低でも東西方向 9 m、南北方向 20 m の面積 180 ㎡を超えるものと思われる。

SB05（第 69 図）

SB04 のすぐ南西に位置する。主軸が南北方向（N 34°　W）で、身舎の規模は桁行 1 間（約 5.2 m）、梁間 2 間（約 4.6 m、柱間 2.3 m）である。身舎の面積は約 23.92 ㎡である。柱穴は 5 本で円形か楕円形である。直径が 40 ～ 62 ㎝、深さが 20 ～ 24 ㎝である。北面の中間柱が先細り気味である以外はほぼ台形の平底である。南面の中間柱は認められなかった。東に開く台形状を呈している。柱痕等は認められなかった。

SB06（第70図）

遺跡中央のM-9、N-9区に位置する。主軸が東西方向（N 127° W）で、身舎の規模は桁行3間（約6.3 m、柱間2.1 m）、梁間2間（約3.64 m、柱間1.82 m）である。西北に廂が1面あり、身舎の面積は22.93 ㎡で、廂を含めた面積は26.57 ㎡である。柱穴は廂を含め12本で、円形か楕円形である。直径が32～42 ㎝、深さが16～60 ㎝である。北西面の中間柱が認められず、廂の中間柱が一番深いものとなっているが、この柱穴はSB10と重なっているか、もしくはSB10の柱穴の可能性も考えられる。柱痕等は認められなかった。

SB08（第70図）

SB06の北西15 mに位置し、L -9、L -10区のSF05と直行するように硬化面を跨いでいる。SF05を検出した時点ではこの建物の柱穴は確認できなかったため、SB08はSF05が構築される以前の建物である可能性がある。しかしながら、建物内のみに硬化面が認められないと言う点も注意するべきであろう。建物の主軸は東西方向（N 123° W）で、身舎の規模は桁行3間（約4.6 m、柱間1.5 m）、梁間2間（約2.8 m、柱間1.4 m）である。身舎の面積は12.88 ㎡である。柱穴は10本で、円形か楕円形である。直径は20～38 ㎝で深さは20～42 ㎝である。径が小さいのに対し深さが深いものである。柱穴の底面は平底である。北西隅の柱穴を除く3隅が深い柱穴となっている。柱痕等は認められなかった。

SB13（第70図）

調査区東端の山際に位置する。建物の主軸は南北方向（N 41° W）で、身舎の規模は桁行2間（約4.0 m、柱間2.0 m）、梁間2間（約3.9 m、柱間1.95 m）である。身舎の面積は15.6 ㎡である。柱穴は9本で円形か楕円形である。直径は24～42 ㎝で、深さは24～76 ㎝である。総柱の建物である。急斜面に位置しているが、柱穴の底面のレベルはほぼ同じである。柱痕等は認められなかった。

SB09（第71図）

他の古代と思われる掘立柱建物跡と離れ、遺跡内で一番北東に位置する（J -11区）。SB08の南東15 m、SB06の北東36 mに位置する。建物の主軸は東西方向（N 114° W）で、身舎の規模は桁行2間（約4.2 m、柱間2.1 m）、梁間1間（約2.6 m）である。身舎の面積は10.92 ㎡である。柱穴は6本で、円形か楕円形である。直径は26～30 ㎝、深さは10～22 ㎝と非常に小さくて浅い柱穴で、柱痕等は認められなかった。

SB10（第70図）

調査区中央の谷部に位置し、SB06と一部重なっている。主軸は東西方向（N 104° W）で、身舎の規模は桁行3間（約4.2 m、柱間1.4 m）、梁間2間（約3.7 m、柱間1.85 m）である。身舎の面積は15.54 ㎡である。柱穴は10本で円形か楕円形である。直径は34～50 ㎝、深さは24～60 ㎝である。柱痕等は認められなかった。

SB11（第71図）

主軸を同じくするSB10の南西約8 mに位置する。建物の主軸は東西方向（N 112° W）で、身舎の規模は桁行3間（約4.06 m、柱間1.35 m）、梁間2間（約3.5 m、柱間1.75 m）である。身舎の面積は14.21 ㎡である。柱穴は10本で円形か楕円形である。直径は26～60 ㎝、深さは10～90 ㎝である。四隅の柱穴が他の柱穴に比べ大きく、かなり深いものである。柱痕は認められなかった。建物内部の西面脇にSC12がある。SC12（第71図）は平面隅丸の長方形で、長軸2.35 m、短軸1.05 m、深さ0.35 mの断面は平底の台形状である。このような形状の土坑は遺跡内からは他に検出されず、また、谷部に位置する土坑はほとんど無いため、用途は不明であるがSB11に付随する可能性が高いと考えられる。また古代の畝状遺構（畝間80）によって切られている。仮にSC12がSB11に伴う遺構であった場合、SB11畝状遺構より以前に構築されたものと考えられる。埋土は黒色土が主体で御池軽石を多く含んでいる。土坑内からは土師器甕の口縁部（第87図663）や土師器片が多数出土している。